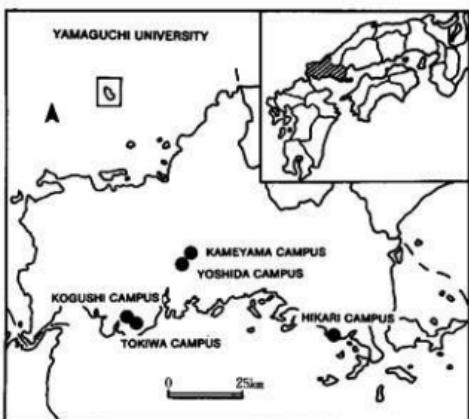


山口大学構内遺跡調査研究年報 XI

1993

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学構内遺跡調査研究年報 XI



1993

山口大学埋蔵文化財資料館

序 文

年報XII号を出版することが出来ることになった。4月から助手に着任した豆谷和之君を中心として資料館の職員ががんばってくれたおかげである。今回は付録として過去、小野忠熙氏を中心とする山口大学吉田遺跡調査団の第I地区調査資料の一部を整理し報告することにした。小野氏からいただいた原稿にも書かれているとおり、当時の調査体制とそれを援助する学内のとり組みは充分なものでなく、良好な資料が公開されないまま眠っている。整理する機会を得たのでこういった形で公にすることが出来た。過去の調査団の労が少しでもむくいられれば嬉しい。

私事になるが資料館長を次の方にバトンタッチさせていただくこととなった。この間、種々御協力をいただいた学長をはじめとする関係部局の方々、島歴史委員長をはじめとする埋蔵文化財資料館運営委員会の諸先生方に心から御礼を申しあげる。

1993年3月

山口大学埋蔵文化財資料館

館長 近藤喬一

例　　言

1. 本書は、山口大学埋蔵文化財資料館が埋蔵文化財資料館運営委員会の指示を受けて、平成3年度に山口大学構内で実施した調査の報告書である。また、付篇Ⅰとして『山口大学構内吉田遺跡の調査の経緯』を、付篇Ⅱとして『吉田遺跡第I地区A区の調査』『吉田遺跡第I地区B区の調査』を、付篇Ⅲとして『吉田遺跡第I地区X A区第4トレンチ出土の弥生時代中期後半の土器について』を掲載する。
2. 現地における調査・研究は、人文考古学研究室 新竹由美・安武千里の協力を得て、資料館員河村吉行・古賀真木子が担当した。また、出土遺物の整理は同館員則近和佳代が行った。吉田遺跡第I地区A・B区の遺物整理は同館員豆谷和之・吉富紀子・則近が行った。
3. 調査・研究における事務一般は、事務局庶務課学事係が統括し、実施面においては各関係部局の事務部があつた。
4. 現地における遺構等の実測は、河村・新竹・安武が行った。
5. 第3章の遺物実測は、石器を除いて古賀・新竹・安武が行い、石器は河村が行った。付篇Ⅱの遺物実測は土器を豆谷が行い、石器は広島大学文学部考古学研究室院生 村田祐一氏と豆谷が行った。製図は、河村・豆谷・則近が行った。
6. 本文の執筆は、第1章、第2章、第3章、第4章第1節2・3・4、第2節、第3節、第4節1、第5節2・3を河村が行い、第4章第1節1、第4節2、第5節1は古賀が行った。付篇Ⅰは小野忠燕氏より玉稿を頂き、付篇Ⅱ、付篇Ⅲは豆谷が執筆した。
7. 現地における写真撮影および遺物の写真撮影は、河村が行った。吉田遺跡第I地区A・B区の遺物写真は豆谷が行った。
8. 石器の石材鑑定は山口大学理学部教授 石田志郎氏、同教養部助教授 今岡照喜氏に助言を仰ぎ、懇切な御教示を得た。吉田遺跡第I地区A区出土土器について、福岡大学人文学部教授 小田富士雄氏、愛媛大学教養部助教授 田崎博之氏に実見していただき助言を得た。記して感謝の意を表したい。
9. 本書の編集は館員が協力して行った。
10. 調査・研究においてはカラースライドを作成しており、出土遺物とあわせ埋蔵文化財資料館が保管している。

11. 調査組織は下記のとおりである（平成3・4年度）。

調査主体	埋蔵文化財資料館	館長	近藤 喬一
	館員	河村 吉行	〔～平成4年3月31日〕
	同	豆谷 和之	〔平成4年4月1日～〕
	同	古賀真木子	〔～平成4年3月31日〕
	同	吉富 紀子	〔平成4年4月1日～〕
	同	則近和佳代	
事務局		事務局長	宗形 郁夫 〔～平成4年3月31日〕
			萱沼 一 〔平成4年4月1日～〕
本部庶務部		部長	菊地 洋男 〔～平成4年3月31日〕
		同	村上 昭生 〔平成4年4月1日～〕
庶務課		課長	久保 鉄男
		課長補佐	兵頭 欣二 〔～平成4年3月31日〕
		同	松本 正史 〔平成4年4月1日～〕
学事係		係長	池田 圭介
			宮崎 邦雄

12. 調査・研究にあたって下記の方々の多大な御協力と援助を受けた（官職は平成3年度）。

事務局庶務部	人事課長 高崎治夫、同課長補佐 有吉 明、同係長 柳 洋二、 同係 村田正義、高藤裕行、清廣哲之
経理部	部長 大塚陽雄、主計課長 本間 実、同課長補佐 林 宏行、経理 課長 小林政太郎、同課長補佐 森本茂雄、総務係長 長谷知之、予 算係長 上谷克弘、監査係長 野澤章三、管財係長 末次敏男、用度 係長 有近博成、同係 小室和輝、矢野 享
施設部	部長 伊達昭三、企画課長 長岡節也、建築課長 平峰英一、同課長 補佐 上田孝雄、設備課長 下村一成、総務係長 上田隼一、同係 伊藤哲雄、企画係長 三浦幸一、建築第一係長 川西智信、同係 中 谷幸一、武市佳人、建築第二係長 小川賀津夫、同係 濱谷弘美、電 気係長 吉永峯生、同係 松田清司、岡野友資、機械係長 鈴木輝美、 同係 鹿嶋正則、板垣健一
人文・理学部	事務長 宮原 輝、事務長補佐 増谷 泰、同 田中善人、会計係長 平川和孝、同係 田坂武男、有吉義和

教育学部 事務長 西野雅博、事務長補佐 藤川年章、会計係長 梅村 鶴、附
属光小学校校長 岸 光城、同副校長 古谷正明、附属光中学校校長
門前貞三、同副校長 末永博憲、光附属学校係長 林喜久雄、同係
樹野博之、寺西 智、川上けい子、藤本勇二、古迫芳己、南ヒロ子

医学部 事務部長 武田楨郎、同次長 金子作三、総務課長 今里憲生、同課
長補佐 野村宗成、管理課長 本田信一、同課長補佐 石崎啓介、亦
野高志、庶務係長 森田義富、管理係長 伊藤篤紀、経理係長 伊藤
敏穂、施設係長 河田徹也、同係 坂井貞彦、設備係長 山本安雄、
同係 吉野高己、前田祐史、橋本一範、弘中智則、永富 保、田中武
敏、田村悦夫、環境係長 三原秀脇

工学部 事務長 石川俊輔、事務長補佐 柳 等、庶務係長 宮部信之、経理
係長 山本隆嗣

人文学部考古学研究室

光市シルバー人材センター

作業員

<吉田構内農学部連合獣医学科棟新營に伴う試掘調査>

大谷京平、勝本徹夫、金子芳子、坂本菊江、桜井和子、光永清子、村上 知、山川省吾、
山村スミ子

凡例

1. 吉田構内における調査区および層位・遺構の位置は、国土座標を基準として北から南へ1~24、西から東へA~Zの番号を付して50m方眼に区画した、構内地区割のA-24区南西隅を起点（構内座標x=0, y=0）とする構内座標値で表示する。なお、平面直角座標系第Ⅲ系における座標値(X, Y)と構内座標値(x, y)とは下記の計算式で変換される。

$$x = X + 206,000$$

$$y = Y + 64,750$$

2. 各遺構は下記の記号で表記することがある。

土壌……SK, 溝状遺構……SD

3. 本書に使用した方位は、吉田構内では国土座標を基準とした真北、他の構内では磁北を示す。

4. 標高数値は海拔標高を示す。

5. 本文中の遺物番号は、挿図・図版・出土遺物観察表の番号と一致させた。

6. 遺物・土層の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。ただし、付録IIはこの表現方法をとらない。

7. 土器の実測図は、下記のように器種分類した。

断面黒ぬり……須恵器、断面白ぬり……縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器、断面網目……陶磁器

8. 土器の器面調整については、断面周囲に調整の境界を記し、境界間に下記の略記号により明示した。ただし、付録IIはこの表現方法をとらない。

【土器実測図の調整凡例】

【種類】

N…ナデ (Nhヘラナデ)

Y…横ナデ (Yhヘラ横ナデ)

H…刷毛目、M…ミガキ

K…ケズリ、T…タタキ

A…タタキ当て具痕、C…カキ目

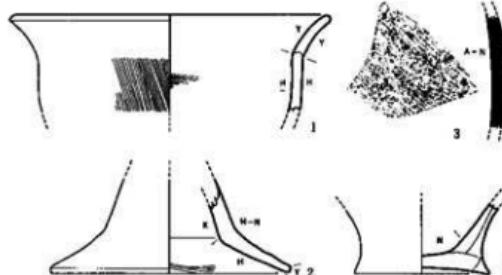
J…条痕、U…蘿痕、X…条線

HK…底部ヘラ切り、IK…底部条切り

I…板目痕、Oy…指おさえ

【先後関係】

H-N…刷毛目のちナデ



1 : 口縁部内外面横ナデ。胴部は外面縦刷毛目、内面は横刷毛目が一部にみられるが、調整不明。

2 : 外面刷毛目のちナデ。裾端部は横ナデする。内面は脚柱部ヘラケズリ、裾部横刷毛目。

3 : 外面平行タタキ、内面はのち當て具痕をナデ消す。

4 : 底部内面のみナデが観察できるが、その他は内外面とも調整不明。

本文目次

第1章 平成3年度山口大学構内遺跡調査の概要	(河村)	1
第2章 吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う試掘調査	(河村)	5
1 調査の経過		5
2 層位		6
3 遺構		6
4 小結		7
第3章 光構内教育学部附属光中学校武道館新営に伴う試掘調査	(河村)	9
1 調査の経過		9
2 層位		9
3 遺構		11
4 出土遺物		12
5 小結		13
第4章 平成3年度山口大学構内の立会調査	(河村・古賀)	15
第1節 吉田構内の立会調査		
1 農学部仮設プレハブ倉庫設置に伴う立会調査		15
2 農学部微生物実験室その他模様替機械設備改修に伴う立会調査		17
3 大学会館前庭部記念植樹に伴う立会調査		18
4 サークル棟新営に伴う立会調査		19
第2節 小串構内の立会調査		
医学部臨床実験施設新営電気工事に伴う立会調査		20
第3節 常盤構内の立会調査		
大学祭展示物設置に伴う立会調査		21
第4節 光構内の立会調査		
1 教育学部附属光小学校屋外施設設置に伴う立会調査		22
2 教育学部附属光中学校バックネット新設に伴う立会調査		23

第5節 その他構内の立会調査

1 湯田宿舎A棟給配水その他改修に伴う立会調査	24
2 経済学部6号職員宿舎電柱設置に伴う立会調査	25
3 人文・理学部職員宿舎公共下水道切替に伴う立会調査	26

付 篇

付篇 I

山口大学構内吉田遺跡の調査の経緯	(小野)	27
------------------	------	----

付篇 II

第1章 吉田遺跡第I地区A区の調査	(豆谷)	33
1 調査の概要		33
2 層位		34
3 出土遺物		36
4 小結		90
第2章 吉田遺跡第I地区B区の調査	(豆谷)	105
1 調査の概要		105
2 層位		105
3 出土遺物		106
4 小結		114

付篇 III

吉田遺跡第I地区A区出土の弥生時代中期後半の土器について (豆谷)	119
1 吉田遺跡第I地区A区出土の弥生時代中期後半の土器	119
2 吉田遺跡出土資料の整理方法	119
3 「不整形のピット」出土土器の判定	120
4 「不整形のピット」出土土器の縦年の位置	124
5 他地域との併行関係	128

山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則	137
山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則	138

山口大学構内の主な調査	140
Summary	149

図 版 目 次

<吉田構内農学部連合歯医学科棟新館に伴う試掘調査>

- P L. 1 吉田構内全景（北西から）
- P L. 2 (1) A トレント河川跡検出状況（西から）
 (2) A トレント河川跡完掘状況（西から）
 (3) C トレント河川跡検出状況（西から）
 (4) D トレント河川跡検出状況（西から）
- P L. 3 (1) A トレント西半部河川跡土層断面（南から）
 (2) A トレント中央部河川跡土層断面（南から）
 (3) A トレント東端部河川跡土層断面（南から）
 (4) B トレント南端部河川跡土層断面（東から）

<光構内教育学部附属光中学校武道館新館に伴う試掘調査>

- P L. 4 光構内（教育学部附属光小学校・同光中学校）全景（北東から）
- P L. 5 (1) 第4層上面遺構検出状況（北東から）
 (2) 第4層上面遺構完掘状況（北東から）
 (3) 第4層上面第1号土壤（西から）
 (4) 第4層上面第2号土壤（西から）
- P L. 6 (1) 第4層上面溝状遺構（南東から）
 (2) トレント中央部北壁土層断面（南東から）
 (3) 出土遺物

付篇 II

<吉田遺跡第I地区A区の調査>

- P L. 7 (1) 吉田遺跡第I地区A区の全景
 (2) A区の「弥生時代中期の土器が充填した不整形のピット」出土
 状況
- P L. 8 出土遺物 (1)
- P L. 9 出土遺物 (2)

- P L. 10 出土遺物 (3)
P L. 11 出土遺物 (4)
P L. 12 出土遺物 (5)
P L. 13 出土遺物 (6)
P L. 14 出土遺物 (7)
P L. 15 出土遺物 (8)
P L. 16 出土遺物 (9)
P L. 17 出土遺物 (10)
P L. 18 出土遺物 (11)
P L. 19 出土遺物 (12)
P L. 20 出土遺物 (13)
P L. 21 出土遺物 (14)
P L. 22 出土遺物 (15)
P L. 23 出土遺物 (16)
P L. 24 出土遺物 (17)
P L. 25 出土遺物 (18)
P L. 26 出土遺物 (19)
P L. 27 出土遺物 (20)
P L. 28 出土遺物 (21)
P L. 29 出土遺物 (22)
P L. 30 出土遺物 (23)
P L. 31 出土遺物 (24)
P L. 32 出土遺物 (25)
P L. 33 出土遺物 (26)
P L. 34 出土遺物 (27)
P L. 35 出土遺物 (28)
P L. 36 出土遺物 (29)
P L. 37 出土遺物 (30)
P L. 38 出土遺物 (31)
P L. 39 出土遺物 (32)
P L. 40 出土遺物 (33)

<吉田遺跡第I地区B区の調査>

- P L. 41 (1) 吉田遺跡第I地区B区の全景
(2) 柱穴検出状況
- P L. 42 出土遺物 (1)
- P L. 43 出土遺物 (2)
- P L. 44 出土遺物 (3)
- P L. 45 出土遺物 (4)

挿 図 目 次

<平成3年度山口大学構内遺跡調査の概要>

- Fig. 1 山口大学吉田・亀山両キャンパス位置図..... 2
Fig. 2 山口大学小串・常盤両キャンパス位置図..... 3
Fig. 3 山口大学光キャンパス位置図..... 4

<吉田構内農学部連合獣医学科棟新營に伴う試掘調査>

- Fig. 4 調査区位置図..... 5
Fig. 5 トレンチ設定図..... 6
Fig. 6 A・B トレンチ土層断面図..... 7
Fig. 7 A トレンチ河川跡実測図..... 8

<光構内教育学部附属光中学校武道館新營に伴う試掘調査>

- Fig. 8 調査区位置図..... 9
Fig. 9 土層断面図..... 10
Fig. 10 遺構配置図..... 11
Fig. 11 第1号土壤実測図..... 11
Fig. 12 第2号土壤実測図..... 11
Fig. 13 溝状遺構実測図..... 12
Fig. 14 柱穴状遺構実測図..... 12
Fig. 15 出土遺物実測図..... 13

<平成3年度山口大学構内の立会調査>

吉田構内の立会調査

Fig. 16 調査区位置図 15

Fig. 17 出土遺物実測図 16

Fig. 18 調査区位置図 17

Fig. 19 調査区位置図 18

Fig. 20 調査区位置図 19

小串構内の立会調査

Fig. 21 調査区位置図 20

常盤構内の立会調査

Fig. 22 調査区位置図 21

光構内の立会調査

Fig. 23 調査区位置図 22

Fig. 24 出土遺物実測図 22

Fig. 25 調査区位置図 23

Fig. 26 出土遺物実測図 23

その他構内の立会調査

Fig. 27 調査区位置図 24

Fig. 28 調査区位置図 25

Fig. 29 調査区位置図 26

付篇 I

<山口大学構内吉田遺跡の調査の経緯>

Fig. 30 山口大学構内吉田遺跡の調査地区分図 27

Fig. 31 第I地区A区の調査風景 29

Fig. 32 第III地区南北両区の調査風景 31

付篇 II

<吉田遺跡第I地区A区の調査>

Fig. 33 A区調査位置図 33

Fig. 34 A区基本層序模式図 34

Fig. 35	A区第4トレンチ西壁断面図	34
Fig. 36	吉田遺跡表採土器実測図	35
Fig. 37	A区弥生時代前期土器実測図 (1)	37
Fig. 38	A区弥生時代前期土器実測図 (2)	38
Fig. 39	A区弥生時代前期土器実測図 (3)	39
Fig. 40	A区弥生時代前期土器実測図 (4)	41
Fig. 41	A区弥生時代前期土器実測図 (5)	42
Fig. 42	A区弥生時代前期土器実測図 (6)	43
Fig. 43	A区弥生時代中期土器実測図 (1)	45
Fig. 44	A区弥生時代中期土器実測図 (2)	47
Fig. 45	A区弥生時代中期土器実測図 (3)	49
Fig. 46	A区弥生時代中期土器実測図 (4)	50
Fig. 47	A区弥生時代中期土器実測図 (5)	51
Fig. 48	A区弥生時代中期土器実測図 (6)	53
Fig. 49	A区弥生時代中期土器実測図 (7)	54
Fig. 50	A区弥生時代中期土器実測図 (8)	55
Fig. 51	A区弥生時代中期土器実測図 (9)	57
Fig. 52	A区弥生時代中期土器実測図 (10)	58
Fig. 53	A区弥生時代中期土器実測図 (11)	59
Fig. 54	A区弥生時代中期土器実測図 (12)	61
Fig. 55	A区弥生時代後期土器実測図	63
Fig. 56	A区古墳時代前期～中期土器実測図 (1)	65
Fig. 57	A区古墳時代前期～中期土器実測図 (2)	67
Fig. 58	A区古墳時代前期～中期土器実測図 (3)	69
Fig. 59	A区古墳時代前期～中期土器実測図 (4)	71
Fig. 60	A区古墳時代前期～中期土器実測図 (5)	73
Fig. 61	A区古墳時代前期～中期土器実測図 (6)	74
Fig. 62	A区古墳時代前期～中期土器実測図 (7)	75
Fig. 63	A区古墳時代後期土器実測図	77
Fig. 64	A区古代前半土器実測図	79
Fig. 65	A区古代後半～中世土器実測図 (1)	81

Fig. 66 A区古代後半～中世土器実測図 (2)	83
Fig. 67 A区石器実測図 (1)	85
Fig. 68 A区石器実測図 (2)	86
Fig. 69 A区石器実測図 (3)	87
Fig. 70 A区石器実測図 (4)	88
Fig. 71 A区石器実測図 (5)	89
<吉田遺跡第I地区B区の調査>	
Fig. 72 B区調査区位置図	105
Fig. 73 B区基本層序模式図	105
Fig. 74 B区縄文時代晚期後半～弥生時代前期土器実測図	107
Fig. 75 B区弥生時代中期土器実測図	109
Fig. 76 B区弥生時代土器底部実測図	110
Fig. 77 B区弥生時代後期～古墳時代中期土器実測図	111
Fig. 78 B区古墳時代後期～中世土器実測図	113

付篇 III

<吉田遺跡第I地区A区出土の弥生時代中期後半の土器について>

Fig. 79 「不整形のピット」出土状況および1次資料	121
Fig. 80 「不整形のピット」出土土器 2・3次資料	122
Fig. 81 「不整形のピット」出土土器 4・5次資料	123
Fig. 82 吉田遺跡の弥生時代後期初頭の土器	125
Fig. 83 吉田遺跡周辺の弥生時代中期後半の土器	127
Fig. 84 松山平野の弥生時代中期後半～後期初頭の土器	129
Fig. 85 松山平野の弥生時代後期初頭の土器	131
Fig. 86 山口大学吉田構内地区割および調査区位置図	151・152
Fig. 87 山口大学小串構内調査区位置図	153・154
Fig. 88 山口大学常盤構内調査区位置図	155・156
Fig. 89 山口大学亀山構内（幼稚園・小学校）調査区位置図	157・158
Fig. 90 山口大学亀山構内（中学校）調査区位置図	159・160
Fig. 91 山口大学光構内調査区位置図	161・162

表 目 次

< 平成 3 年度山口大学構内遺跡調査の概要 >

- Tab. 1 平成 3 年度山口大学構内遺跡調査一覧表 1

< 光構内教育学部附属光中学校武道館新館に伴う試掘調査 >

- Tab. 2 出土遺物観察表 14

付篇 II

< 吉田遺跡第 I 地区 A 区の調査 >

- Tab. 3 出土遺物観察表 93

< 吉田遺跡第 I 地区 B 区の調査 >

- Tab. 4 出土遺物観察表 117

付篇 III

< 吉田遺跡第 I 地区 A 区出土の弥生時代中期後半の土器について >

- Tab. 5 第 4 トレンチ出土土器の接合関係表 132

- Tab. 6 山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員 139

- Tab. 7 山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員 139

- Tab. 8 山口大学構内の主な調査一覧表 140

第1章 平成3年度山口大学構内遺跡調査の概要

山口大学の関連諸施設は、山口市（吉田・亀山構内）、宇部市（小串・常盤構内）、光市（光構内）の県内各市に分散している。各構内には、縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての複合集落遺跡として著名な吉田構内をはじめとして、旧石器時代のまとまった遺物が出土する小串構内など周知の遺跡が埋蔵している。山口大学埋蔵文化財資料館は学内共同利用施設として、これら各構内において現状変更を伴う諸工事に対し、埋蔵文化財保護の立場から調査・研究を行っている。埋蔵文化財の調査を必要とする場合は、工事地域周辺における既往の調査結果や工事の内容、埋蔵文化財に対する影響の度合などを勘案し、埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、事前・試掘・立会の三種の調査方法によって調査を実施している。

平成3年度は下記のように、試掘調査2件、立会調査11件の計13件の調査を実施した。

Tab. 1 平成3年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査名	構内地区	構内地区割	調査面積(m ²)	調査期間	掉図番号
試 掘	農学部連合歯医学科棟新営	吉田構内	O-P-17	76	7月22日～ 8月10日	Fig. 86-121
	教育学部附属光中学校 武道館新営	光構内		38	12月2日～ 12月13日	Fig. 91-10
立 会	農学部飯設プレハブ倉庫設置	吉田構内	P-Q-17	6	5月31日	Fig. 86-122
	農学部微生物実験室その他 模様替機械設備改修	吉田構内	P-16	8	11月13日	Fig. 86-123
	大学会館前庭部記念植樹	吉田構内	L-M-16	2	1月17日	Fig. 86-124
	サークル棟新営	吉田構内	E-F-14	1	2月7日	Fig. 86-125
	医学臨床実験施設新営 電気工事	小串構内		0.5	11月15日	Fig. 87-21
	大学祭展示物設置	常盤構内		7	11月12日	Fig. 88-10
	教育学部附属光小学校 屋外施設設置	光構内		18	11月22日	Fig. 91-11
	教育学部附属光中学校 バッカネット新設	光構内		0.5	2月21日	Fig. 91-12
	湯田宿舎A棟給配水 その他改修			27	8月26日	
	経済学部6号職員宿舎 柱設置			0.5	11月5日	
	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替			1	3月30日	

吉田構内の調査（本部、人文・教育・経済・理・農の各学部、教養部：山口市大字吉田877-1、教育学部附属養護学校：吉田800所附）

試掘調査1件、立会調査4件を実施した。

構内の中央部からやや東で実施した、農学部連合獣医学科棟新設予定地での試掘調査では縄文時代晚期の河川跡を検出した。幅約17m以上の規模をもち、ほぼ北から南へ走行する。河川の埋積土から新旧二時期の流路が認められるが、出土遺物からは大きな時期差は考えられない。吉田構内ではこれまで縄文時代の遺物は散発的に出土していたが、遺構



Fig. 1 山口大学吉田・亀山両キャンパス位置図

構内の南西端部に位置する教育学部附属養護学校敷地で土壌、ほぼ中央部に位置する教養部複合棟敷地や南西部の南門周辺で河川跡など、ごくわずかにその存在が知られているにすぎなかった。縄文時代の集落の調査事例は弥生時代以降の集落の調査例と比較して極めて少なく、不明瞭な点が多いが、検出した河川跡は縄文時代の集落の立地や規模の解明に基礎資料を提供した。

立会調査では、構内の中央部付近で実施した農学部仮設プレハブ倉庫設置に伴う調査で、構内造成土中からではあったが須恵器若干が出土した。また、調査と併行して調査地域のすぐ西に位置する農学部害虫学実験畠で須恵器の壺、甕、壺などを採集した。実験畠からは過去にも8世紀代を主体とする須恵器が採集されており、付近に遺構もしくは遺物包含層が存在する可能性が高い。吉田構内の中央部や西端部付近で行った他の立会調査では、顯著な遺構、遺物は認められなかった。

なお、大学会館前庭部での記念植樹にあたっては、擬制によって遺物包含層もしくは遺構に影響をおよぼす恐れが十分に考えられたが、関係部局の配慮を得て昭和60年度に実施した前庭部の試掘調査の所見をもとに、植樹地点を埋蔵文化財に影響のないと考えられる地点に変更することになった。

小串構内の調査（医学部、同附属病院、医歯大学部：宇都市大字小串1144所在）

構内の南西端部で電気ケーブルの埋設に伴い立会調査を行った。調査区内に小串構内で旧石器時代に属すると考えられる石器を含む堆積層を検出したが、調査面積が狭いことから今回の調査では遺物は認められなかった。

常盤構内の調査（工学部：宇都市常盤台2557、尾山宿舎：同上野中所在）

構内のほぼ中央部で、大学祭展示物設置に伴い立会調査を行った。表土直下が地山となっており、また、表土中に地山の削平土が客土されていることから、調査地域周辺の削平が激しいことが窺われた。常盤構内ではその他の構内と比較して過去の調査事例が少なく、また、点的調査が主体で調査地域も構内西半部が多い。したがって、必然的に埋蔵文化財の有無や分布状況を判断するための具体的な資料が欠如しているのが現状で、今後とも立会調査や試掘調査などの継続的な調査が必要である。

光構内の調査（教育学部附属光小学校、同光中学校：光市大字室積浦1-1所在）

「御手洗遺跡」として周知されており、試掘調査1件、立会調査2件を実施した。



Fig. 2 山口大学小串・常盤両キャンパス位置図

中学校武道館新宮に伴う試掘調査では、遺物包含層の下位に土壙2基、溝状遺構1条、柱穴状遺構1基を検出した。各遺構からの出土遺物はなく、また、その上位に堆積する遺物包含層からは大きく時期の隔たる遺物が出土している。遺構の時期はにわかに決定できないが、各遺構の埋積土の色調が平成2年度の調査で光構内の北西部に位置する小学校運動場敷地で検出した、6～7世紀の土壤群の埋積土の色調が異なること、および調査地域の北東に位置する光中学校体育館敷地で検出した遺物包含層からの出土遺物が奈良時代～平安時代を主体とすることなどから、古代に属する可能性が高い。

構内の西半部を占める小学校運動場の西縁部で行った屋外施設整備に伴う立会調査では、平成2年度に運動場敷地の東縁部および北縁部で検出した遺物包含層が認められた。出土遺物は少なく、土師器若干と石錘がある。構内の東端部付近で行った中学校バックネット新設に伴う立会調査では、遺物包含層と考えられる砂層から平安時代後期の土師器（台付皿）が出土した。台付皿は光構内の南東に位置する月待山遺跡から多量に出土しており、流れ込みの可能性がある。

その他構内の調査

山口市湯田温泉六丁目に所在する湯田職員宿舎敷地、同旭通二丁目に所在する経済学部職員宿舎、同天花に所在する人文・理学部職員宿舎敷地で立会調査を実施した。

湯田職員宿舎敷地では現地表面から最大約50cm下位まで掘削したが、顯著な遺構、遺物は認められなかった。経済学部職員宿舎敷地では電柱埋設に伴い調査を行い、現地表面から約2.4m掘削した。表土の下位に砂および砾の堆積がみられたが、堆積層から遺物は出土しなかった。堆積層の組成、調査地域が蛇行しながら構野川へ注ぐ一の坂川のすぐ右岸に位置することなどから一の坂川の氾濫原にあたると考えられる。一の坂川の形成する扇状地の扇頂部に立地する人文・理学部職員宿舎敷地の調査では、一部で埋め土、旧水田耕作土の下位に地山が認められたが、遺構は検出できなかった。



Fig. 3 山口大学光キャンパス位置図

第2章 吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う試掘調査

1 調査の経過

吉田構内の中央部からやや南東に位置する、農学部本館棟と講義棟間に連合獣医学科棟の新営が計画された。新営予定地内は昭和56年度に中庭環境整備に伴い立会調査を行っているが、工事に伴う掘削深度がわずかであったため、構内造成による埋め土の堆積を確認したにとどまった。したがって、当地域における埋蔵文化財の有無、分布状況などについてはほとんど把握できないのが現状であった。

連合獣医学科棟新営計画の具体化を受けて、埋蔵文化財資料館運営委員会はその取扱いを協議した。その結果、新営予定地内の埋蔵文化財の有無を明らかにするため、試掘調査を実施することが至当であると判断した。これを受けて埋蔵文化財資料館は新営予定地内の中央部に、東西に幅2m、長さ13mのトレンチ（Aトレンチ）、東端部に幅2m、長さ19.5mのトレンチ（Bトレンチ）の二本のトレンチを設定して試掘調査を実施した。

その結果、Aトレンチで南北方向に流れる河川跡を検出し、Bトレンチは擾乱が多いもののその全面が河川跡の埋積土で埋められていた。埋積土から縄文土器や石鏃などが出土し、縄文時代晩期の河川跡であることが明らかとなった。さらに、その規模、流路方向を確認するため、Aトレンチと平行して新営予定地の北側に幅1m、長さ9mのトレンチ（Cトレンチ）、および南側に幅1m、長さ8.5mのトレンチ（Dトレンチ）を設定して調査を行ったところ、Dトレンチでは擾乱によって河川跡の肩部が検出できなかったが、Cトレンチで肩部を確認したことから、ほぼ北から南へ走行する河川であることが判明した。

新営予定地は駐車場として活用されており、調査時期を関係部局と協議した結果、駐車場としての機能にあまり支障のない夏期休業時期に調査を行うこととなった。調査期間は平成3年7月22日から8月10日まで

で、調査面積は76m²である。



Fig. 4 調査区位置図

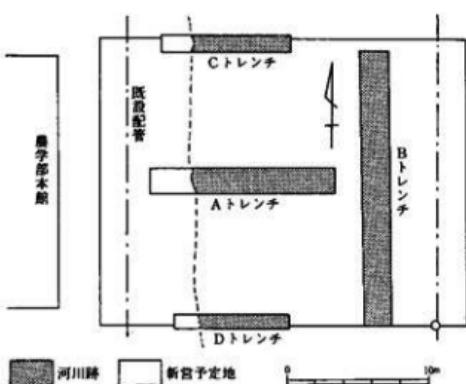


Fig. 5 トレンチ設定図

削を行った。河川跡の検出面に至る順番はA・C・Dトレンチ同様極めて単純で、約40~45cmの構内造成に伴う埋め土の直下が河川跡の埋積土である。

3 遺構

河川跡 (Fig. 7, PL.2)

縄文時代晩期の河川跡で、Aトレンチの西側から約3.3m、Cトレンチの西端から約2.3m東側で西側の川岸を検出した。検出面の標高は約21.1~21.2m。Dトレンチでは既設の配管によって河川跡の右端は検出できなかったが、立地、周辺地形、A・B両トレンチでの河川跡の底面の標高差からほぼ北から南への流路をもつと考えられる。その規模はBトレンチでは東側の川岸は検出できなかったが、今回の試掘調査地域のすぐ西側で実施した、第4章第1節で述べる農学部微生物実験室その他模様替機械設備改修に伴う立会調査では、河川跡の東側の川岸は検出されていないことから、幅約17m以上、25m以下と推定される。深さは最深部で検出面から約1.1mである。

河川跡はAトレンチのy=743.5付近での埋積土の立ち上がりにみられるように、新旧二時期に区分されるが、両河川跡とも縄文時代晩期の遺物を含んでいることから大きな時期差は考えられない。埋積土は砂および礫であるが、礫の占める割合が多く比較的急な流れをもつ河川であったことが想定できる。なお、Aトレンチの東側では埋積土の中位付近で植物遺体を含む粗砂層が検出されており、滲水状態に近い時期が存在したことが窺われる。

出土遺物には縄文土器深鉢、石鎌などがあるが、事前調査を待って一括して報告することにしたい。

2 層位 (Fig. 6, PL.3)

A・C・Dトレンチ

現地表面から約35~40cm下位まで、構内造成による埋め上げが水平に近く客土され、その直下が河川跡の検出面である黄褐色粘土 (10YR5/8) の地山である。

Bトレンチ

トレンチ全面が河川跡の埋積土である。そのため、河川跡の検出面を確認した後、南北両端部について河川跡の掘

層位・遺構・小結

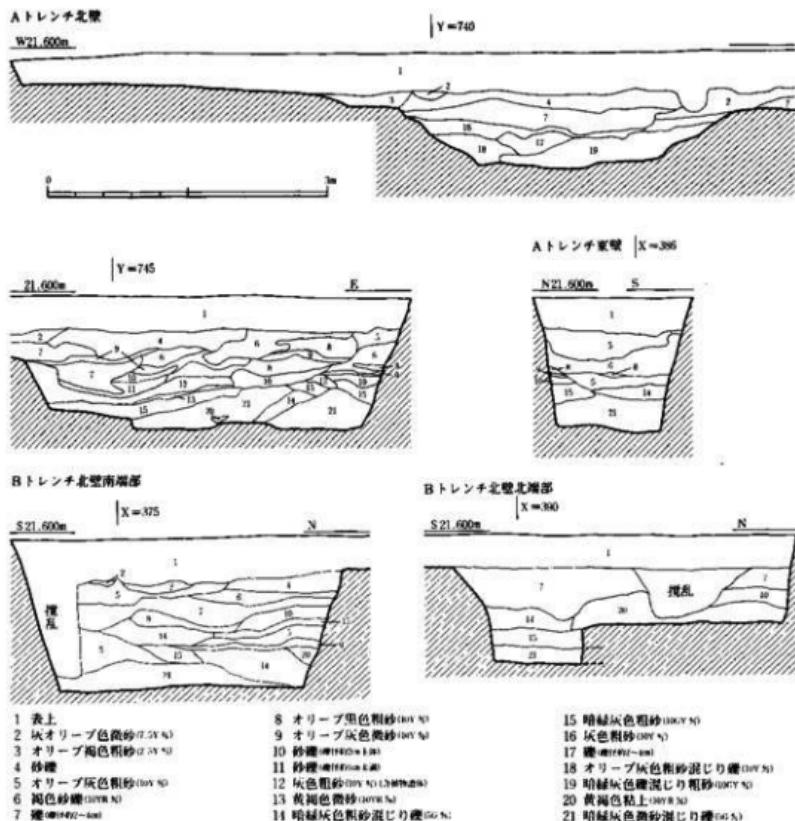


Fig. 6 A・B Trenches Soil Profile Sections

4 小結

吉田構内ではこれまで縄文時代の遺構の検出例は多くはない。わずかに教育学部附属養護学校敷地で土壌、構内の南西部に位置する南門の周辺や教養部複合棟敷地で河川跡などの存在が知られているにすぎず、構内における縄文時代の集落については弥生時代以降の集落の調査成果と比較してまだ不明確な部分が多い。その意味から、今回の調査で検出した河川跡は、吉田構内における縄文時代の集落立地やその規模の解明に基礎資料を提示

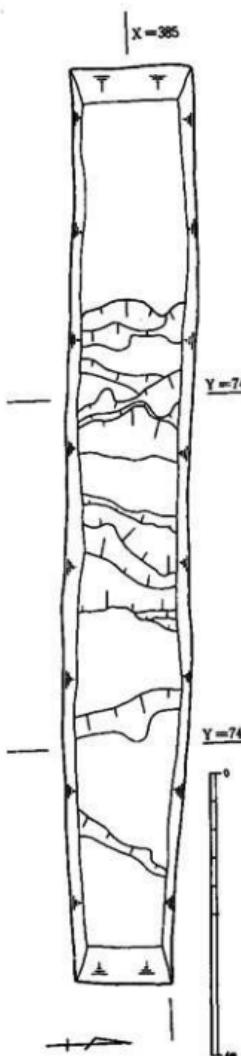


Fig. 7 Aトレンチ河川跡実測図

したといえる。今後、新營予定地内での事前調査や周辺での調査等でその詳細は明らかになると思われるが、今回の試掘調査の結果から想定できることについて若干述べておきたい。

まず、河川跡の流路は、今回の調査地の北東約80mに位置する第二学生食堂敷地周辺が洪積台地上に立地していること、調査地の北東に位置する実験水田が洪積台地の掘削によって形成されていることなどの周辺の諸地形から、今回の調査地の北東に存在する溜池を源として、その南に位置する北東から南西に開ける小規模な谷あいを貰流して今回の調査地域に至る流路が考えられる。また、調査地の北東約80mに位置する大学会館前底部の下段、北約150mに位置する大学会館敷地などからは、遺物包含層中より縄文土器が出土している。遺物包含層は第二学生食堂敷地周辺の洪積台地が北東および東に下降する丘陵斜面に堆積したもので、その供給源は台地上位の地域である。したがって、縄文時代の集落は第二学生食堂敷地周辺がそのひとつの立地場所と考えられる。なお、調査地の東に位置する果樹園も立地の候補地と考えられるが、その全面についての調査は行われておらず、今後の調査に期待したい。

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内教育学部附属養成学校新營に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅸ』、1991年)。
- 2) 山口大学吉田遺跡調査団(『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』、1976年)。
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内教養部複合棟新營に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』、1988年)。
- 4) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年)。
- 5) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新營に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年)。

第3章 光構内教育学部附属光中学校武道館新営に伴う試掘調査

1 調査の経過

光構内は山口県光市大字室積浦に所在する。同構内およびその周辺では遺物包含層から繩文時代から室町時代にかけての遺物が出土しており、「御手洗遺跡」として周知されていた。しかし、平成2年度に同構内の北部および北西部で実施した、光小学校運動場改修に伴う発掘調査で6～7世紀の土壙5基が検出され、光構内での遺構の存在が初めて確認されたとともに、砂層を検出面とする遺構が分布することが明らかとなった。

今回の調査は、光構内の南端部の地域に選定された光中学校武道館の新営計画に呼応するものである。新営予定地周辺では平成2年度に小学校運動場改修に伴い小規模な試掘調査を行っており、表土直下の暗褐色砂層から土師器、須恵器、歴史時代土師器、国産陶磁器、剥片などが出土している。しかし、調査地域が光構内の背後にせまる峨眉山の谷あいの延長部分にあたり、調査前の降水による激しい湧水のため、掘削を途中で断念せざるを得ない状況であった。したがって、当該地域の埋蔵文化財の内容、形態、分布状況や時期などについてこれまで十分な調査成果は得られていないのが現状であった。

調査は人文学部考古学研究室の協力を得て、新営予定地の中央部に新営建物の長軸に沿って、幅約1.5m、長さ約25mのトレンチを設定して行った。その結果、遺物包含層から歴史時代土師器、土師器質土器、国産陶磁器などが出土し、また、その下位の堆積層を検出面とする土壙2基、溝状遺構1条、柱

穴状遺構1基を検出した。各遺構からの出土遺物はなく、また、その上位に堆積する遺物包含層には大きく時期の隔たる遺物が混在していることから、遺構の時期は決め難い。

調査期間は、平成3年12月2日から13日までで、調査面積は約38m²である。

2 層位 (Fig.9, PL.6)

調査区の西側約5分の2は光中学校の前身である、旧山口県女子師範学校。当時擾乱によって大きく破壊を受けて



Fig. 8 調査区位置図

光岡内教育学部附属光中学校式道館新館に伴う試掘調査

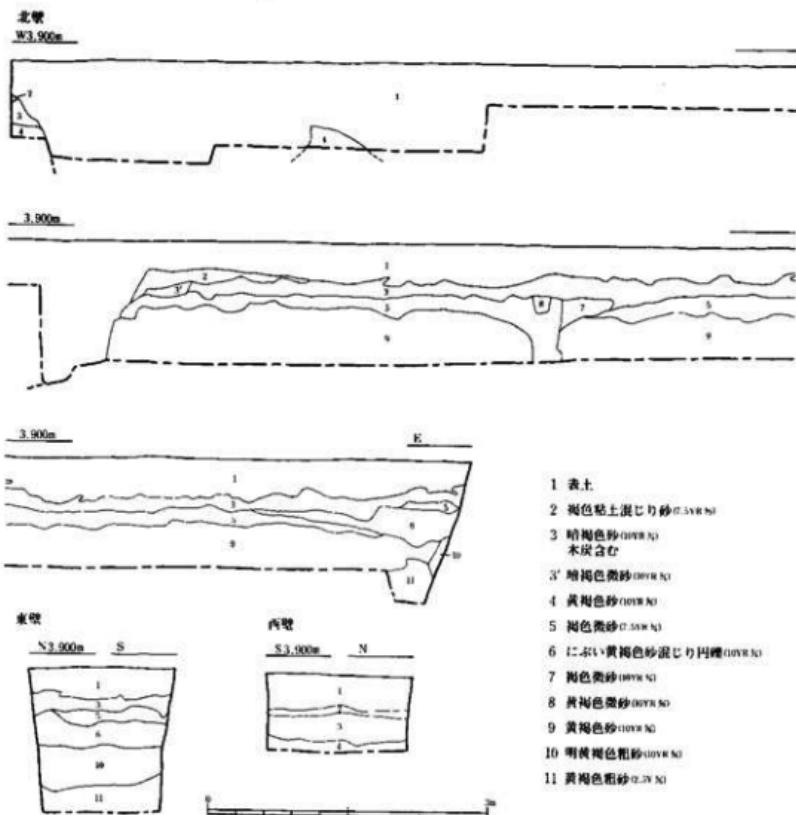


Fig. 9 上層断面図

いる。表土（構内造成による埋め土）は現地表面から約35~45cmの厚さに客土されており、その下位には、木炭を含む第3層：暗褐色砂が堆積している。同層は光小学校運動場改修に伴う試掘調査すでに確認している堆積層で、最大30cm、平均10~15cmの堆積厚をもつ。調査区西半部では局的に第3層上面には第2層：褐色粘土混じり砂が最大で約20cmの厚さに堆積している。その下には層厚約15~20cmの第5層：褐色微砂、第6層：にぶい黄褐色砂混じり礫がみられ、無遺物層である第9層：黄褐色砂や第10層：明黄褐色粗砂へと連

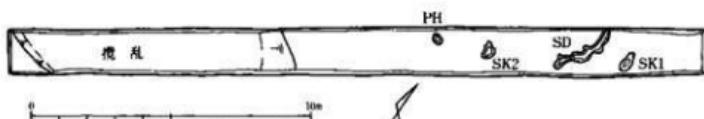


Fig. 10 遺構配置図

続する。第9層は土壤、溝状遺構、柱穴状遺構の検出面である。

なお、調査区中央部付近で第5層への第8層：黄褐色微砂の落ち込みがみられたが、平面では確認することができず、遺構かどうかわからなかった。遺物包含層は第2層、第3層で歴史時代土師器、土師器質土器、施釉陶器、磁器などが出土した。

3 遺構 (Fig. 11~14, PL.5·6)

第9層：黄褐色砂層を検出した土壤2基、溝状遺構1条、柱穴状遺構1基がある。

土壤

第1号土壤 (Fig. 11, PL.5)

調査区の東端部に位置する。平面形態は橢円形状を呈し、長軸79cm、短軸37cm、検出面からの深さ20cmの規模をもつ。断面形は擂鉢状で、壁面は底面からゆるやかに立ち上がる。北西部には底面から約10~15cm上位に二段の階段状の平坦面をもつ。検出面の標高は3.65~3.7mで、長軸方向はほぼ北~南。埋積土は黒色砂。

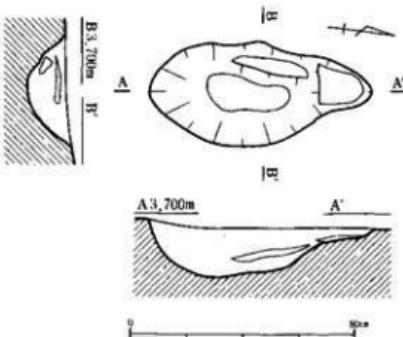


Fig. 11 第1号土壤実測図

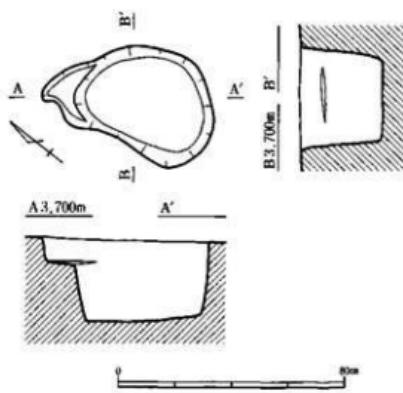


Fig. 12 第2号土壤実測図

出土遺物はない。

第2号土壤 (Fig.12, PL.5)

調査区の東部、第1号土壤の南西約4.5mに位置する。平面形態は橢円形状を呈し、長軸59cm、短軸36cm、検出面からの深さ25~30cmの規模をもつ。断面形は逆台形で、壁面は底面から急傾斜に立ち上がる。北西部には底面から約20cm上位に階段状のせまい平坦面をもつ。検出面の標高は約3.6mで、長軸方向はほぼ北西~南東。埋積土は黒色砂。出土遺物はない。

溝状遺構 (Fig.13, PL.6)

調査区の東部、第1号土壤と第2号土壤間に位置し、北東~南西に走行する溝である。北への延長部分は調査区外にあたるため検出していないが、検出長は約2.4m、幅約15~30cmの規模をもつ。断面形は逆台形に近く、検出面からの深さは約10cmと極めて浅い。検出面は標高は約3.6m。埋積土は黒色砂。出土遺物はない。

柱穴状遺構 (Fig.14)

調査区の中央部からやや東、第2号土壤の西約1.5mに位置する。平面形態は橢円形状を呈し、長軸35cm、短軸25cm、検出面からの深さ10~15cmの規模をもつ。断面形は逆台形で、壁面は底面から急傾斜に立ち上がる。検出面が砂層であることから、柱穴状遺構と呼ぶには問題があるかもしれない。検出面の標高は3.55~3.6mで、長軸方向は北西~南東。埋積土は黒色砂。出土遺物はない。

4 出土遺物 (Fig.15, PL.6)

歴史時代土師器の壺・皿・台付皿、土師質土器の鍋、施釉陶器の鉢、磁器の碗・皿などがあるが、量的には少ない。

1は歴史時代土師器の台付皿の底部で、側面は大きく外方に開く。2~5は磁器。2は内湾しながら直立する口縁部をもつ碗で、外面には2条の周線が巡り、その間に木の葉などの草木を染付する。3、4は同一個体と考えられる碗。5は内面に

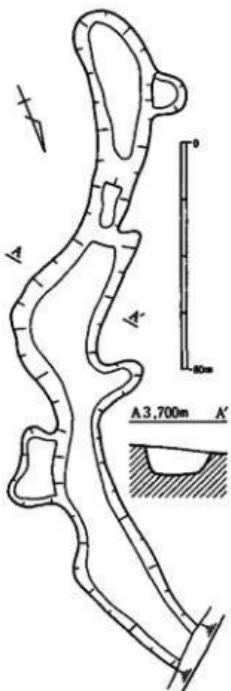


Fig. 13 溝状遺構実測図

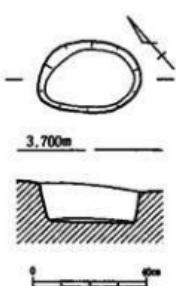


Fig. 14 柱穴状遺構実測図

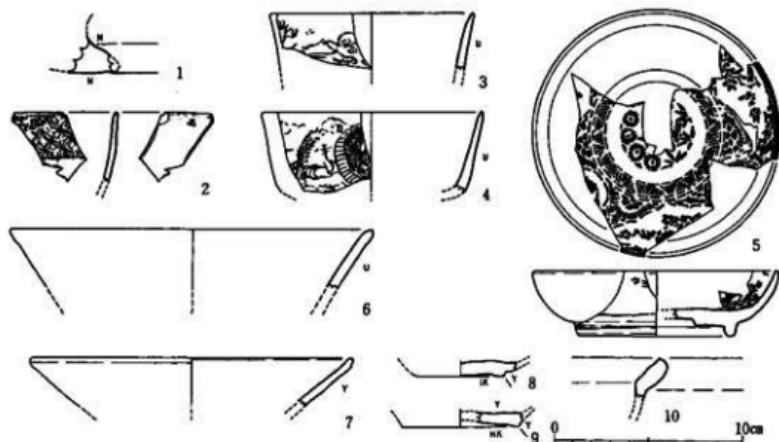


Fig. 15 出土遺物実測図

草花を染付する皿。6は口縁部が直線的に開く施釉陶器の鉢。7～9は土師器。7は壊で、体部が直線的に立ち上がる。口縁端部の外側はわずかに肥厚し、内面はヘラによる押圧によって部分的に面を作り出す。内外面とも丁寧に横ナデされる。8・9は糸切り底の皿の底部。10は土師質土器の鍋で、口縁部は短く斜外方へ折れ肥厚する。1～4・6は第2層、その他は第3層出土。

5 小結

今回の調査では、遺物包含層や土壤2基、溝状遺構1条、柱穴状遺構1基を検出した。各遺構からの出土遺物はなく、また、その上位に堆積する遺物包含層には大きく時期の隔たる遺物が混在していることから遺構の時期はにわかに決め難いが、これまでの光構内で調査結果をもとに考えてみたい。

検出した遺構の埋積土は黒色砂で、光構内の北西部に位置する運動場敷地で検出した、6～7世紀の5基の土壤の埋積土と比較してその色調に差異がみられる。また、今回の調査区の北東約130mに位置する中学校体育館敷地では、遺物包含層である黒褐色砂礫層から縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、歴史時代土師器、瓦質土器など、縄文時代晩期から鎌倉・室町時代にかけての遺物が出土している。出土遺物は須恵器、土師器が圧倒的多数を占めており、須恵器の壊蓋は口縁部にかえりをもつものや天井部に擬宝珠や低い円

光標内教育学部附属光中学校武道館新館に伴う試掘調査

Tab. 2 出土遺物觀察表

法量()は複数値

番号	器種	庄量(cm) (①口径×底径×高)	色 調 (②外觀③内面)	胎土	焼成	備考
1	土師器	古付器	にじみ、褐色 (7.5cmH×6)	良好	良好	
2	磁器	瓶	素地白色 胎調灰白色(5Y3/8)	良好	良好	
3	磁器	瓶	①(11.8)	素地白色 胎調灰白色(NB8/8)	良好	良好
4	磁器	瓶	①(10.8)	素地白色 胎調灰白色(NB8/8)	良好	良好
5	磁器	瓶	①(12.7)	素地白色 胎調灰白色(NB8/8)	良好	良好
6	陶器	器	①(19.2)	素地青(2.5YH7/6) 胎調灰白色(2.5Y7/1)	良好	良好 津浦系
7	土師器	环	①(17.1)	①从黄色(5YH4/6) ②明褐色(5YR5/6)	良好	良好
8	土師器	器	②(4.6)	①にじみ、褐色(5YR4/6) ②にじみ、褐色(5YR4/6)	良好	良好 糸切り底
9	土師器	器	②(6.2)	①褐色(5YR6/8) ②褐色(5YH7/6)	やや不良	良好 ハラ切り底
10	土師質	瓶	①にじみ、褐色(5YR7.5/3) ②淡青色(10YB8/4)	良好	良好	

盤状の搬みをもつものが含まれていることから、主体となる時期は古墳時代から平安時代頃までと考えられる。したがって、今回検出した遺構は光構内での主体となる時期、埋積土の色調などから奈良時代から平安時代頃のものとしておきたい。

遺物包含層からは歴史時代土師器の壺・皿、土師質土器の鍋、施釉陶器の鉢、磁器の碗・皿などが出土したが、量的には少ない。時期的にも中世～近世にかけての遺物が混在している。このうち、歴史時代土師器の皿は光構内の背後に位置する峨嵋山の山頂付近に立地する月待山遺跡から特徴的に出土していることから、中世の遺物は二次的な流れ込みによるものと考えられる。

[性]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報X』、1992年)。
 - 2) 福本幸夫編著「御手洗遺跡」(『先史時代の光市』、光地方史研究会、1966年)。
 - 3) 福本幸夫編著「月待山遺跡」(『先史時代の光市』、光地方史研究会、1966年)。

第4章 平成3年度山口大学構内の立会調査

第1節 吉田構内の立会調査

1 農学部仮設プレハブ倉庫設置に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 P・Q-17

調査期間 平成3年5月31日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約21m²

調査結果 仮設プレハブ倉庫設置に伴い、基礎部分の南北3.7m×東西5.7mの範囲を、幅30cm、深さ20cmの布掘りの掘削に立ち会った。掘削深度内はすべて校地造成時の埋め土であった。底面には客土と考えられる、地山と同質の赤褐色粘質土がブロック状に見られ、また底面に貼り付くようにビニール等が混入していた。工事による掘削が浅いために地山面は確認していない。

埋め土から2点の須恵器片を検出したが、小片で同化はできなかった。

また、併せて西隣の実験園で踏査を行い、土器器、須恵器片を11片表面採集し、内3点が同化できた。

出土遺物 (Fig.18)

いずれも仮設プレハブ設置地点の西隣の実験園で表面採集したものである。

1は須恵器の直口壺と考えられる。肩部の最大径は復原値で15.7cmである。肩部に2条の沈線を巡らせる。肩部は傾斜が大きく、胴部とはほぼ直角をなす。内外面とも回転ヨコナデで渦巻する。胎土は直径0.5mm以下の細かい砂を多く含む。焼成は堅緻で、内外面とも灰白色 (N7/0) を呈する。2は須恵器の壺と考えられる。高台は高く、外端面が跳ね上がり、内端面が接地すると考えられる。外面には高台を貼付けた時の粘



Fig. 16 調査区位置図

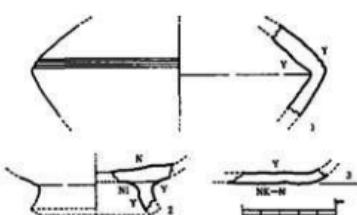


Fig. 17 出土遺物実測図

土の盛り上がりが見られる。内面はナデ、高台の外面は回転ヨコナデである。底部の切り離しははっきりしない。胎土は直径3 mm位の砂をやや多く含む。焼成は良好で、外面とも灰白色（N8/1）を呈する。3は須恵器の坏と考えられる。底部外面はヘラ切りの後粗いナデを施すが、凸凹が大きい。

内面は回転ヨコナデを施す。胎土は直径2 mmまでの砂を少量含む。焼成は堅緻で、外面とも灰白色（10YR8/1）を呈する。

これらの遺物は、いずれも7～8世紀代の可能性が強い。農学部農業環境観測実験施設敷地の発掘調査時にも、同時期の須恵器が第2層の客土から多く出土し、害虫学実験畑付近から流れ込んだと考えられた。今回の踏査地はその害虫学実験畑のすぐ下位に当たり、当該地にも流れ込んだ可能性は充分に考えられる。以上のように北東方向から延びる丘陵上には古代の集落関連遺構が分布している可能性が示唆できる。今後、この周辺地域での工事には慎重な対応が望まれる。

(古賀)

〔注〕

- 1) 山口大学蔵文化財資料館「吉田構内農学部農業環境観測実験施設新舎に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報X』、1992年）。
- 2) 山口大学蔵文化財資料館「汚水排水管等整改修に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1987年）。

2 農学部微生物実験室その他模様替機械設備改修に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 P-16

調査期間 平成3年11月13日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約8m²

調査結果 工事は吉田構内の中央部からやや南西に位置する微生物実験室（旧解剖実習棟）の北側に排水管を埋設するものである。調査地域は第2章で述べた農学部連合獣医学科棟新営予定地のすぐ西側に位置する。工事規模は微生物実験室に沿って長さ約14m、幅約60cmの範囲を現地表面から約70cm掘削するものである。堆積層順は極めて単純で、層厚約25～35cmの構内造成による埋め土の直下に地山である明黄褐色粘土（10YR6/8）が検出される。遺構、遺物は認められず、わずかに管路中央部付近で旧水田に伴う暗渠を検出したにすぎない。

大学統合移転前の旧水田耕作土、床土がみられないこと、旧水田暗渠の深さが吉田構内の既往の例と比較してかなり浅いこと、また、調査地域がそのすぐ東側に位置する果樹園と比べて約5m近く低位にあることながら、吉田構内で弥生時代以降の遺構検出面である明黄褐色粘土が構内造成によって大規模に削平されていることが窺われる。

なお、農学部連合獣医学科棟新営予定地で検出した、縄文時代晩期の河川跡の東岸は調査区内では検出できず、その規模を判断する資料が得られた。



Fig. 18 調査区位置図

3 大学会館前庭部記念植樹に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 L・M-16

調査期間 平成4年1月17日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約2m²

調査結果 植樹予定地は上下二段ある大学会館前庭部の下段部分の西側が選定された。

前庭部の下段部分では昭和60年度の試掘調査によって、弥生時代前期～中期初頭の袋状堅穴、弥生時代後期の整穴性居跡などが検出され、また、遺物包含層からは弥生時代から室町時代の多量の遺物が出土している¹⁾。特に、遺構は西半部を中心に濃密に分布しており、最も浅い地域では現地表面から約10～15cm下位で遺物包含層もしくは遺構が検出されている。

植樹は5本で、現地表面から約30cmの掘削を行うため、遺物包含層もしくは遺構に影響をおよぼす恐れが十分に考えられた。そこで、試掘調査の所見をもとに関係部局と協議した結果、植樹地点を埋蔵文化財に影響のないと考えられる位置に変更することで合意が得られた。しかし、昭和60年度の試掘調査では前庭部の下段部分のすべての範囲について調査を行ったわけではないため、西端部3本、東端部2本に変更した植樹地点についても念のため立会調査を実施した。その結果、西端部では遺物包含層、東端部では遺構面が検出

されたが埋蔵文化財に影響のない
地点に植樹が行われた。（河村）

〔注〕

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、1986年）。

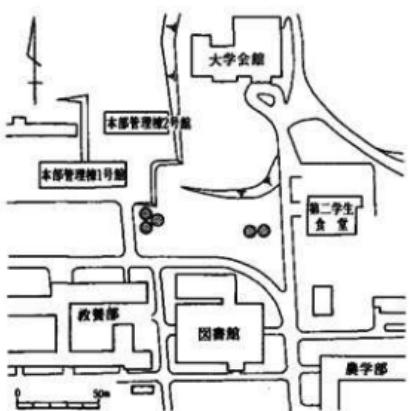


Fig. 19 調査区位置図

4 サークル棟新営に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 E・F-14

調査期間 平成4年2月7日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約1m²

調査結果 調査地域は吉田構内の西端部にあたり、同構内の西端部を北東から南西方向に流れる九田川の川岸付近に位置する。サークル棟は解体後、既存の位置に新営するものであったが、今回の調査地域周辺は過去に調査事例が少なく、埋蔵文化財の分布状況がよくわからない地域のひとつであるため立会調査を行った。

調査は撤去される基礎部分について行い、現地表面から約60cm下位までの地下の状況を観察した。その結果、工事範囲内はすべて構内造成による埋め土で、顯著な遺構、遺物は認められなかった。なお、サークル棟西側のプール部分では昭和61年度の立会調査で遺物包含層が検出されているが、検出面はかなり低位にあることから、当該地域周辺では大規模な掘削深度を伴う工事に際しては調査が必要と考えられる。
(河村)

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館
「吉田構内水泳プール改修等に
伴う立会調査」(『山口大学構内
遺跡調査研究年報』、1987年)。



Fig. 20 調査区位置図

第2節 小串構内の立会調査

医学部臨床実験施設新営電気工事に伴う立会調査

調査地区 小串構内

調査期間 平成3年11月15日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約0.5m²

調査結果 工事内容は小串構内の南西端部に位置する臨床実験施設への電気ケーブルその他の引き込み工事で、臨床実験施設から基礎実習棟間の西側を南北に走る道路部分の掘削と中央研究棟および実験実習棟北側への各1本の電柱埋設であった。道路部分は現地表面から約90~95cmの掘削であったが、既設の給排水管工事などによってすでに搅乱を受けていることが明らかであったため調査対象から除外し、電柱を埋設する二地点について立会調査を行った。

両地点とも現地表面から約220cm下位までの掘削である。中央研究棟北側（第1地点）では現地表面から約120cmまで構内造成時の埋め土で、その下には工事基底面まで浅黄色粘土（5Y8/4）が堆積する。実験実習棟北側（第2地点）では最上層の構内造成時の埋め土は層厚約75cmで、その下位に旧水田耕作土、床上が残存する。その下には第1地点同様、浅黄色粘土が堆積する。浅黄色粘土の検出面の深さは両地点ともほぼ同じである。同

層は色調、組成などから、小串構内で旧石器時代に属すると考えられる石器を含む堆積層の可能性があるが、今回の調査では遺物は出土しなかった。
(河村)



Fig. 21 調査区位図

第2節 小串構内の立会調査

医学部臨床実験施設新営電気工事に伴う立会調査

調査地区 小串構内

調査期間 平成3年11月15日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約0.5m²

調査結果 工事内容は小串構内の南西端部に位置する臨床実験施設への電気ケーブルその他の引き込み工事で、臨床実験施設から基礎実習棟間の西側を南北に走る道路部分の掘削と中央研究棟および実験実習棟北側への各1本の電柱埋設であった。道路部分は現地表面から約90~95cmの掘削であったが、既設の給排水管工事などによってすでに搅乱を受けていることが明らかであったため調査対象から除外し、電柱を埋設する二地点について立会調査を行った。

両地点とも現地表面から約220cm下位までの掘削である。中央研究棟北側（第1地点）では現地表面から約120cmまで構内造成時の埋め土で、その下には工事基底面まで浅黄色粘土（5Y8/4）が堆積する。実験実習棟北側（第2地点）では最上層の構内造成時の埋め土は層厚約75cmで、その下位に旧水田耕作土、床上が残存する。その下には第1地点同様、浅黄色粘土が堆積する。浅黄色粘土の検出面の深さは両地点ともほぼ同じである。同

層は色調、組成などから、小串構内で旧石器時代に属すると考えられる石器を含む堆積層の可能性があるが、今回の調査では遺物は出土しなかった。
(河村)



Fig. 21 調査区位図

常盤構内の立会調査

第3節 常盤構内の立会調査

大学祭展示物設置に伴う立会調査

調査地区 常盤構内

調査期間 平成3年11月12日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約7m²

調査結果 調査地域は常盤構内のほぼ中央部に位置する。大学祭に伴い堅穴住居を模擬的に製作するもので、現地表面から最大で約55cm削削した。その結果、現地表面から45~47cm下位までは構内造成による埋め土で、その下には基盤である蛇紋岩の岩盤が観察された。遺構、遺物は認められなかった。なお、構内造成土の下部には、層厚約25cmにわたって地山と考えられる明黄褐色礫混じり粘土(10YR6/8)が基盤上に客土されていた。

今回の調査地点の東方や南方では、昭和61年度に身体障害者用スロープ取設に伴い立会調査を実施しているが、構内造成土の直下が地山となっており、調査所見に大きな差異はみられない。構内造成土の直下が地山であること、また、地山の削平土が客土されていることなどから、今回の調査地点周辺は過去に大規模な削平を受けていることが推測される。

常盤構内ではその他の山口大学構内と比較して過去の調査事例が少なく、また、点的調査が主体で調査地域も構内西半部が多い。したがって、必然的に埋蔵文化財の有無や分布状況を判断するための具体的な資料が欠如しているのが現状で、今後とも立会調査や試掘調査などの継続的な調査の必要がある。

(河村)

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「工学部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1987年)。



Fig. 22 調査区位置図

第4節 光構内の立会調査

1 教育学部附属光小学校屋外施設設置に伴う立会調査

調査地区 光構内

調査期間 平成3年11月22日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約18m²

調査結果 調査地域は光構内の西半部を占める小学校運動場の西縁部に位置する。調査は比較的掘削規模の大きい二ヶ所について行った。

第1地点の基本層序は上位から、第1層：表土（構内造成による埋め土）、第2層：暗褐色細砂（10YR3/4）、第3層：褐色砂質土（10YR4/6）、第4層：黄暗褐色細砂（10YR7/8）である。第2層、第3層は過去に検出されている古墳時代の遺物包含層で、今回の調査では第3層からの出土遺物はなかったが、第2層から土師器若干が出土した。第2層は層厚約20cm前後で、現地表面から約20cm下位で検出される地域があり、今後の工事などによる掘削の際には注意を要する。第2地点では層厚約50cmの表土下に層厚約30cmの明黄褐色円礫混じり粗砂（10YR6/8）が堆積しており、土師器若干、石錘1点が出土した。

出土遺物 (Fig. 24)

大形の石錘で、転円礫を素材とし、長軸両端部に正裏両面からの敲打によって抉りを施す。

最大長10.6cm、最大幅7.3cm、最大厚1.75cm、抉りの深さ0.5cm、重量245.5g。緑色片岩製。（河村）

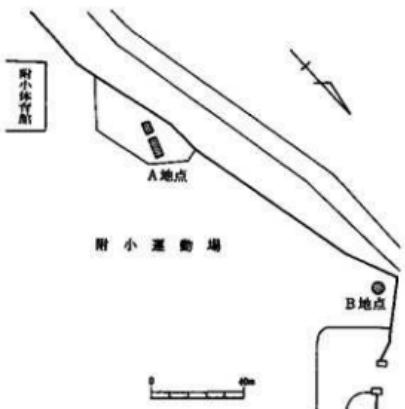


Fig. 23 調査区位置図

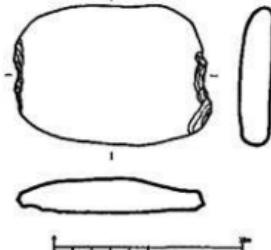


Fig. 24 出土遺物実測図

2 教育学部附属光中学校バックネット新設に伴う立会調査

調査地区 光橋内

調査期間 平成4年2月21日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約0.5m²

調査結果 運動場南側の松の木が台風被害で折れ、校地周囲を巡る自然歩道にポールが飛来するようになったため、新たにバックネットを新設することになった。バックネットは2本の支柱で支え、支柱埋設のため現地表層から2mまでを掘削した。北側（校舎側）掘削壌は4層の土の堆積がみられた。現地表面から47cmまでの第1層は運動場造成時の埋め土で、真砂・炭ガラの瓦層であった。85cmまでの第2層は遺物を少量含むオリーブ褐色砂礫土層、123cmまでの第3層は明黄褐色粗砂層、以下第4層は珪化木を含む黄褐色礫砂層であった。また、南側（岬側）の掘削壌は、3層の土の堆積がみられた。第1層の運動場造成土は40cmまで、北側掘削壌の第2層を欠如し、110cmまでが明黄褐色粗砂層、以下が珪化木を含む黄褐色礫砂層であった。北側掘削壌の第2層で土師器の台付壠の底部が1点出土したのみで、遺構は検出しなかった。

出土遺物 (Fig.26)

土師器の台付壠の底部。底部は厚い台形を呈する。摩耗の著しい部分が多いが、底部外側はナデ、底面は回転糸切りが確認できる。上部には壠部が剥離した痕が見られる。底径は(4.8)cm。胎土は、雲母及び直径1~3mmの砂を多く含む。焼成は良好で、外面はにぶい橙色(7.5YR7/3)、内面はにぶい橙色(7.5YR6/4)。11世紀代のものと考えられる。

(古賀)



Fig. 26 出土遺物実測図

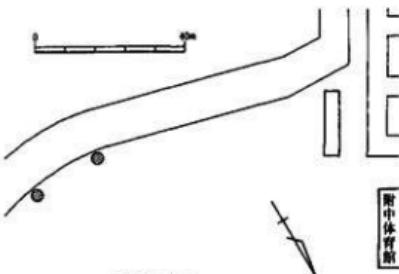


Fig. 25 調査区位置図

第5節 その他構内の立会調査

1 湯田宿舎A棟給配水その他改修に伴う立会調査

調査地区 山口市湯田温泉6丁目

調査期間 平成3年8月26日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約30m²

調査結果 A棟の屋外工事は既に終了し、当該年度は屋内工事のみであった。併せて、B棟・C棟の屋外工事が行なわれ、この2棟分について立会調査を実施した。

B棟北側は、長さ20m、幅0.5mの掘削を行った。現地表面から5cmまでは舗装面のコンクリート、13cmまでにぶい橙色の真砂土、23cmまでにぶい黄褐色の礫混じり粘質土、31cmまでが明黄褐色の礫混じり粘質土で、すべて埋め土の範囲内であった。遺構、遺物とも検出できなかった。

C棟北側の西寄りは、長さ20m、幅0.5mの掘削を行った。現地表面から9cmまでは砂混じりの表土、20cmまでは焼土、50cmまでは径5cmまでの礫を含む黄褐色粘質土で、すべて埋め土の範囲内であった。遺構、遺物とも検出できなかった。

C棟北側の東寄りは、長さ20m、幅0.5mの掘削を行った。現地表面から6cmまでは砂混じりの表土、28cmまでは礫混じりの粘質土で、黄褐色粘質土と灰褐色粘質土がブロック状に入る。すべて埋め土の範囲内であった。遺構、遺物とも検出できなかった。（古賀）

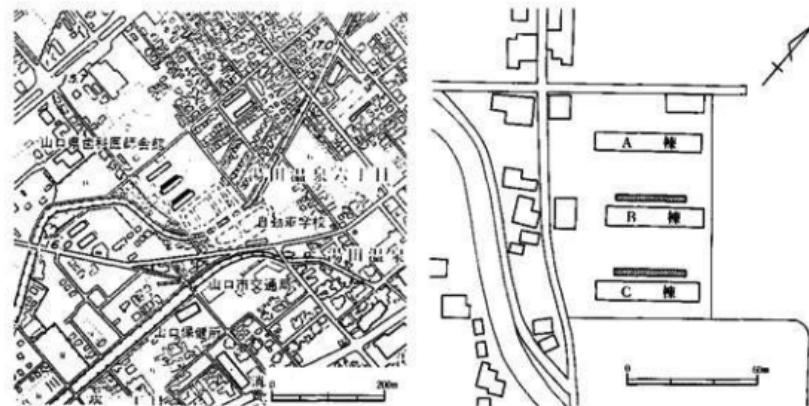


Fig. 27 調査区位図

2 経済学部6号職員宿舎電柱設置に伴う立会調査

調査地区 山口市旭通り二丁目1937-1

調査期間 平成3年11月5日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約0.5m²

調査結果 工事地域は山口盆地のほぼ中央部に位置し、一の坂川下流の沖積低地上に立地する。今回の調査地域周辺の畠地では、過去に中世の土師質土器や姫島産黒曜石製の剝片が採集されていることから、工事規模を勘案して立会調査を実施した。

工事による掘削は現地表面から約240cmまでで、基本層序は上位から第1層：表土、第2層：砂礫、第3層：粗砂である。第2層は現地表面から約50cm下位で検出され、層厚は約120cmとかなり厚い。調査地域内では第2、第3層とも遺物は包含していないかった。

調査地域は蛇行しながら櫛野川へ注ぐ一の坂川のすぐ右岸に位置していること、また、調査区内での堆積層が砂や礫であることなどから一の坂川の氾濫原にあたると考えられる。なお、今回の調査と併行してすぐ西側の住宅地で行われていた工事では、現地表面下約2mで地山と考えられる黄褐色粘土の堆積がみられたことから、当該地域一帯の地山面がかなりの起伏をもっていることが想定できる。

(河村)

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「経済学部職員宿舎下水管改修に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1987年)。



Fig. 28 調査区位置図

3 人文・理学部職員宿舎公共下水道切替に伴う立会調査

調査地区 山口市天花932-2

調査期間 平成4年3月30日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 約1m²

調査結果 工事地域は山口盆地の北東端部に位置し、一の坂川によって形成された扇状地の扇頂部付近に立地する。周辺ではこれまで遺跡は周知されていないため、工事に際して立会調査を実施した。

工事は6ヶ所の集水樹の設置とこれから分岐する宿舎北側と東側を巡る排水管の埋設であったが、擾乱の可能性が少なく、また、掘削深度の深い集水樹のうち2ヶ所を選定して調査を実施した。

第1地点では、層厚約50cmの構内造成土の直下に暗褐色角礫混じりの粘質土。(10YR3/4)の地山が検出され、他に顯著な堆積層は認められなかった。また、第2地点では、構内造成土の下位には旧耕作土が残存し、現地表下約65cmで地山に達する。なお、構内造成土中には後世の掘削による地山の削平上が客土されており、周辺地域の削平が比較的大規模に行われていることが窺われた。

両地点とも出土遺物はなく、遺構も検出されなかった。

(河村)

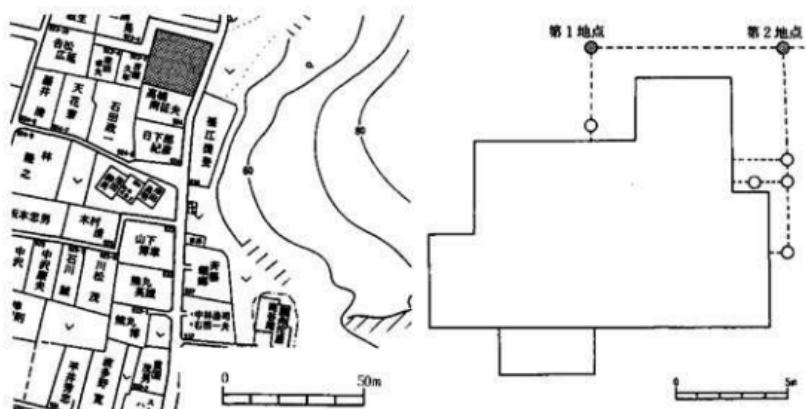


Fig. 29 調査区位置図

付篇 I

山口大学構内吉田遺跡の調査の経緯

小野忠義

吉田遺跡の遺跡名は、山口市大字吉田にある山口大学統合移転地の遺跡群の総称である。この地が、弥生時代から古墳時代の遺物散布地であることが知られるようになったのは、1952年からのことである。

発掘調査の端緒は、1966年6月、統合移転地の循環道路の工事中、弥生時代の遺物包含層に掘り当たったことに始まる。筆者が調査の要請をうけたときには既に農学部と教養部の学会が大部分建っており、他の土地は水田の畦畔が粗くブルドーザーで引きならされた程度の状態であった。

調査はキャンパス全域を対象に、地下に埋存する遺構や遺物包含層を組織的に地表から探査する予察調査と、工事中に掘り当たった循環道路と、その延長部分の側溝工事場の発掘調査から始めた。これについて、1967年の2月から3月にかけて約1ヵ月間、工事を急

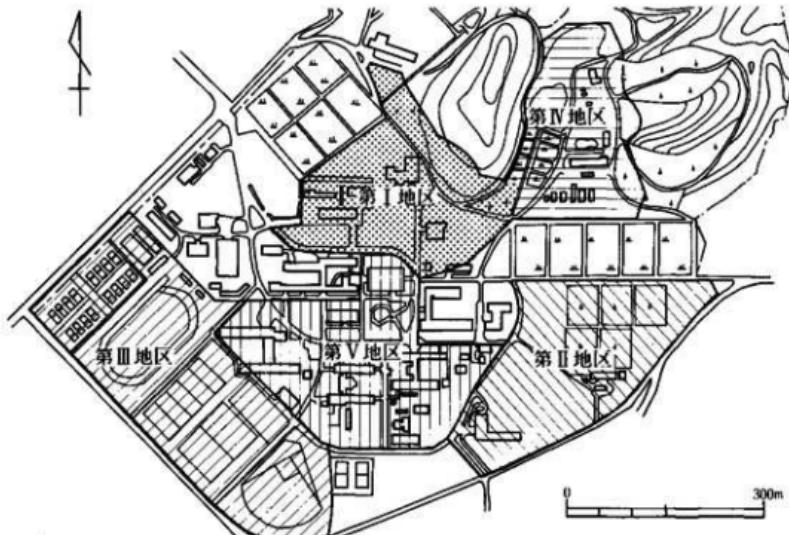


Fig. 30 山口大学構内吉田遺跡の調査地区分図

ぐ広いグランド予定地の発掘調査を行い、3カ所の村落跡と往時の小川跡を掘り出し、古代の条里遺構とみられる杭列なども調査した。ほぼ1カ年にわたる組織的地表探査と一部の発掘調査により、弥生・古墳の両時代を主とする遺跡がキャンパスの地下に点在することがわかったので、同年6月、市川頼治学長を団長とする山口大学吉田遺跡調査團を組織し、本格的に取り組むことになった。

調査團の組織は、適正な調査の遂行と調査後の報告書の作成を考慮に入れ、学術面で学外の顧問と特別調査員、学内から調査主任と各専門分野の調査員や、直接現地で作業する調査協力者とからなり、事務部面では、特別調査員と事務総括主任や幹事とで編成され、行政面で山口県教育委員会と山口市教育委員会の援助をうけ、学長が調査團長としてあたることになった。

調査に当たっては、予察調査の結果にもとづいて工事予定地を第I地区から第V地区の5地区に分け、直接土地が改変される校舎・運動場・農場・道路・水路と付設建築物の敷地について、遺跡の分布と工事の順序を考慮に入れ、緊急の度に応じ、1973年までの間順次発掘調査を実施した。

調査の結果、今山の麓にひろがる大学構内の洪積段丘と、一段低い低平な沖積段丘にかけて、縄文時代の晩期から弥生・古墳両時代の先原史時代と、古代・中世・近世にわたる有史時代の遺構の分布が明らかになった。その主体は、農耕社会が展開した原史時代に疎らに点在していた小村落の跡や、蛇行する小川の跡などで、内部から多くの土器と小量の石器や金属器とともに、木製の鎌や植生を示す樹木と種子などの植物遺体を検出し、往時の生活相と景観を復元することができる資料を得ることができた。

長期にわたる調査の間、調査團長に市川頼治・力武一郎・中村正二郎の各学長、顧問の東京大学教授齊藤忠・広島大学教授今村外二の両氏をはじめ、それぞれの専門分野にかかる京都大学教授福山敏男・學習院大学教授木越邦彦・早稲田大学教授直良信夫・東京大学教授亘理俊二・北九州市立大学助教授畠中健・の諸氏の助言を得、本学の関係分野の研究者浜田清吉・高橋英太郎・三坂圭治・徳光直・中田清・・山本武夫・河野通弘・三輪正房・高木恭介・佐藤史・堂面春雄・八木充・勝本謙の諸氏からなる調査員と、代々の事務局長や庶務・経理・施設の各部長と幹事の庶務課長ら諸氏の協力を得ながら、文化会考古学部員や地理学談話会員と地元民の助力を得て小野忠熙が現地の調査を担当した。なお調査協力者として、一時山口県教育委員会から森江直紹氏が派遣され、支援をうけることができた。



Fig. 31 第1地区八区の調査結果

1973年11月には統合移転が終ったことから、吉田遺跡調査用による調査は終り、爾後整備拡充に伴う遺跡調査に切り替えられることになった。

調査によって検出された遺跡のうち、高い視点からみて保存に値する遺構として、第一学生食堂の南に接した歴史時代の村落跡（第Ⅲ地区の北区）を指摘することができたので、協議のうえ現地で保存することになり、1976年8月史跡庭園として暫定的な整備が行われた。

当時、上記の村落跡の現地保存を考えたのは次のような理由からであった。すなわち、遺跡の示す特質が、日本の古代国家形成の前夜のころの、西日本の一般的な農村集落の標本的資料であり、建築様式が弥生時代の円形住居から古墳時代の方形プランへ、竪穴式から平地式をへて高床式へと推移する民家建築の変遷を知るうえの資料を提供していること。しかもその場所が大学の構内であることから、学問の府にふさわしい野外博物館として、原始家屋の復元と、吉田遺跡から出土した流木や、シイ・モモ・クルミなど植物遺体の樹種や種子から弥生の森の植生を再現し、四季折々、季節の移り変わりを直感できる教育資料として役立つとともに、学生たちの憩いの場として活用することができると思ったからであった。

統合移転が完了して大学の機能が円滑に営まれる時がおとずれ、環境整備の一環として活用される日まで埋置しておくことになったが、その後、1976年から1977年ごろ、一部に、埋蔵文化財を大学建設の障害物とみて保存地区の遺跡を撤去し、校舎の用地として利用せよとの強い議論が起きたが事なきを得た。1987年に至り、村落跡の保存措置を考慮した再発掘による調査が行われたことは、所期の目的の具体化であり有意義なことである。

現地調査の結果は年次ごとに発掘調査概要を提出する一方、調査の当初から終了後に作成する正式の調査報告書を念頭におき、予想される構造をえがいて調査篇と考察篇からなる目次の試案を作った。その後発掘調査が進むにつれて訂正を重ね、統合移転が終了した1975年の末、発掘現場に関係の少ない考察篇担当の調査員の方々に執筆が依頼せられた。

発掘調査に携わった考古班は、調査の前半ごろまで、経済学部の旧学舎の一部を借用していた山口大学古代遺跡調査室を本拠にし、鳥取川流域の遺跡調査以来の県内外の考古資料の収納と、吉田遺跡出土の遺物の収容と作業ができたのであったが、経済学部が吉田キャンパスへ移転した後は収納と作業の場所を失い、夥しい遺物は、臨時に中央図書館の一部と本部棟の地下の仮設物置場などに分散して収納されたため、作業を停止せざるを得ない状態に陥った。

このような事態の到来をかねてから想定し、文部省へ山口大学埋蔵文化財資料館の新設を申請し、1973年に200m²の許可を受けることができた。しかしこの年第一次オイルショックによる経済事情の激変にあい、建築が延期されることになった。1976年になって杉村敬喜事務局長の尽力により再度申請し、先回と同額の交付を受けたのであったが、その間に物価が上昇したため日減りし、1977年の3月現在の資料館の竣工を見ることができた。

資料館の建設を提言した当時、真理を探求し真実を究明する大学は、文献の殿堂としての図書館と、実物を直接観察することができる博物館の両者が機能してこそ眞の大学であり、その第一歩として、当面急を要する埋蔵文化財の資料館を建てねばならぬと考えた。小さな橋頭堡的存在ではあるが、ゆくゆくは人文・社会科学と自然科学の貴重な学術上の資料を収蔵展示して活用する大学博物館へと拡充増設し、全学共同の研究施設となる日を構想して、中央図書館と道一つ隔てた場所に建設することになったのである。

正式の報告書の出版に先きだち、キャンパス内の遺跡の理解を授ける一助として、1976年12月に小冊子の『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』を作成し、正式報告書の刊行が軌道にのったかにみえたのであったが、中村学長の再任が決まり年度末が迫った1977年の3月以降、報告書の刊行不要論が起こるという不測の事態に遭遇し、暗礁に乗りあげ見通



Fig. 32 実習地区南北両区の諸各層

しかつかなくなった。9月業者の配備替えによる転出が決まり、12月4日には調査団長の中村学長が急逝されるという不幸な事態が生じた。学長逝去後、調査団長の選定をうけた若菜崎彦事務局長の要請により、1977年の暮れから正式報告書の刊行を目指して作業計画を練りなおした。翌年の1月学外から考古学研究者の協力を得て再度作業にかかったのであったが、膨大な遺物と実測図のうえ、公務の傍らあたらねばならぬという極めて困難な条件下での作業であり、間もなく大学事務局からも連絡が途絶え、自然休眠に入り15年が経過した。

現地調査の間、わざわざ墓地の指導を賜った顧問の齊藤忠教授をはじめ、調査に直接関係専門の分野で関与された大学内外の調査員の方々、発掘調査に携わり、困難な事情のもとで遺物の整理にあたった学外からの協力者、文化会考古学部員や地理学談話会員の諸君の一方ならぬ労苦と、本部の事務局や山口県・山口市両教育委員会の配慮に対し、調査担当者の一人として心から謝意を表し、正式報告書の刊行ができなかつことへの遺憾の辞を述べねばならない。

1992年の春にいたり、埋蔵文化財資料館長の近藤高一教授から、吉田遺跡の遺物や実測図などの整理を行い、正式報告書の作成にかかりたい旨の連絡があり、1992年度には、館

長をはじめ豆谷和之氏ら館員の努力により、諸種の困難を克服して第Ⅰ地区の報告書が公刊される運びになった。その好意ある配意と、並々ならぬ労苦に衷心から敬意と謝意を表する次第である。

[注]

- 1) 1966年当時山口大学の学生であった村田益男と三浦肇（現本学名誉教授）の両氏により、山口盆地一帯の遺跡分布図の作成を目的とする地表探査が行われた際に発見された。
- 2) 小野忠熙「山口大学構内吉田遺跡」（『考古学ジャーナル』第9号、ニューサイエンス社、1967年）
小野忠熙「山口大学構内吉田遺跡の性格」（『学園だより』第6号、山口大学、1970年）
小野忠熙編『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』山口大学吉田遺跡調査団、1976年
- 3) 注2)
- 4) 河村吉行「山口大学構内遺跡保存地区的発掘調査（昭和57年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報V』山口大学蔵文化財資料館、1986年）
河村吉行「山口大学構内遺跡保存地区発掘調査（昭和59年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』山口大学蔵文化財資料館、1987年）
河村吉行「吉田構内遺跡保存地区的発掘調査（昭和60・61年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報VII』山口大学蔵文化財資料館、1990年）
- 5) 日本考古学協会編『日本考古学辞典』（東京堂、1962年）
- 6) 1950年から始まった松山基範学長を团长とする島田川流域の遺跡調査の遺物。
小野忠熙編『島田川一周防島田川流域の遺跡調査研究報告一』（山口大学島田川遺跡学術調査団、1953年）
1960年、田中児学長を团长として行われた山口大学と東京大学の合同調査による秋吉台観音洞遺跡出土の遺物も収蔵されている。
小野忠熙編『秋吉台観音洞—秋吉台観音洞遺跡学術調査報告一』（山口大学秋吉台観音洞遺跡学術調査団、1961年）
- 7) 山口県立山口博物館専門学芸員中野一人、山口県教育委員会指導主事森江直紹、同辻田耕次の3氏により資料の整理の協力をうけた。

第1章 吉田遺跡第I地区A区の調査

1 調査の概要

吉田遺跡の発掘調査は、1966年7月に第I地区A区から始まった。吉田遺跡調査団が発行したガリ版刷りの『山口大学構内吉田遺跡調査概報』によれば、「A区は昭和41年6月20日に構内循環道の工事中、台地の端を掘り下げた際多量の弥生式土器が出士したことから同月25日に予察を行ない、弥生中期と古墳後期の両遺物包含層が存在することを確認した。7月7日から20日まで緊急調査を実施（後略）」としている。また、当時の写真を保存したアルバムの註記には、「施設暗渠設置のため、臨時排水溝を掘さくした際弥生式土器の包含層と古墳時代の包含層に掘り当ったため、遺構の露出している個所とその付近の緊急調査を行なった。」と記述されている。これらのことより、第I地区A区が現在の大学本部事務局前及び大学会館前の構内循環道と、それに付随した北側排水路であることが想定される（Fig.33）。

上述した吉田遺跡調査団の概報、当時の記録写真（Fig.31）から吉田遺跡第I地区A区の調査が全面調査ではなく、排水溝掘削により露出した遺物包含層部分周辺を掘り広げる部分発掘であったことがわかる。当時の土層断面図や、土器に註記された「トレンチ」が部分発掘の地点を示すものと思われる。土層断面図は第5トレンチまであり、5カ所で部分発掘が行なわれたと思われるが、土器には第4トレンチまでの註記しかない。さらに、調査区の平面図が散逸している為、発掘地点を知ることは不可能である。

遺構は正式な『山口大学構内吉田遺跡調査概報』によれば、「台地の末端が南に低まる傾斜面では、弥生時代中期の土器が充填した不整形のピットを検出した。」との記述がある。これは、第4トレンチを示すものと思われ、当時の出土状況写真



Fig. 33 A区調査位置図

(PL-7) などが残されている。部分発掘であった為、遺構平面図は残されていない。

なお、Fig.36は第I地区A区出土土器と同じコンテナに収納されていた表面採集の土器(PL-8)である。「S41 6 24 平川(校内)」「S41 6 26 平川(校内)」の註記がなされている。6月25日に行われたという予察の前後であり、予察と併せて吉田遺跡の分布調査が行われていたことを、物語る資料である。

2 層位

現在、吉田遺跡第I地区A区の土層断面図は、第2トレンチから第5トレンチまで残存している。当時の土層断面図には標高の記載がなく地点も不明である為、基本層序を示すのみにとどめたい。ただし、第4トレンチとされる地点については、弥生時代中期後半の何らかの遺構であると考えられる為、西壁断面図(Fig.35)を掲載しておく。

吉田遺跡第I地区A区は、次のような基本層序(Fig.34)である。

第I層：耕土、厚さ20~30cm 第II層：茶褐色土、厚さ30~35cm、土師器や須恵器を包含する（包含層I）第III層：黒色粘質土、厚さ15~35cm、弥生土器を包含する（包含層II）第IV層：灰青色砂質土、厚さ20~25cm、弥生土器を包含する（包含層III）第V層：茶褐色砂礫（地山）

第2・3・5トレンチでは地表下110~140cmで地山となるが、第4トレンチは地表下50~70cmに地山面がある。標高が記入されていないため明らかではないが、弥生時代中期後半の遺構があることから、第4トレンチ部分が高まった地形の可能性がある。



Fig. 34 A区基本層序模式図

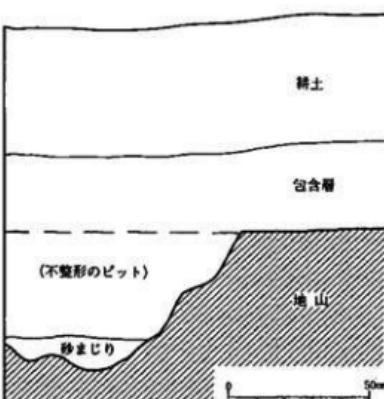


Fig. 35 A区第4トレンチ西壁断面図

層位

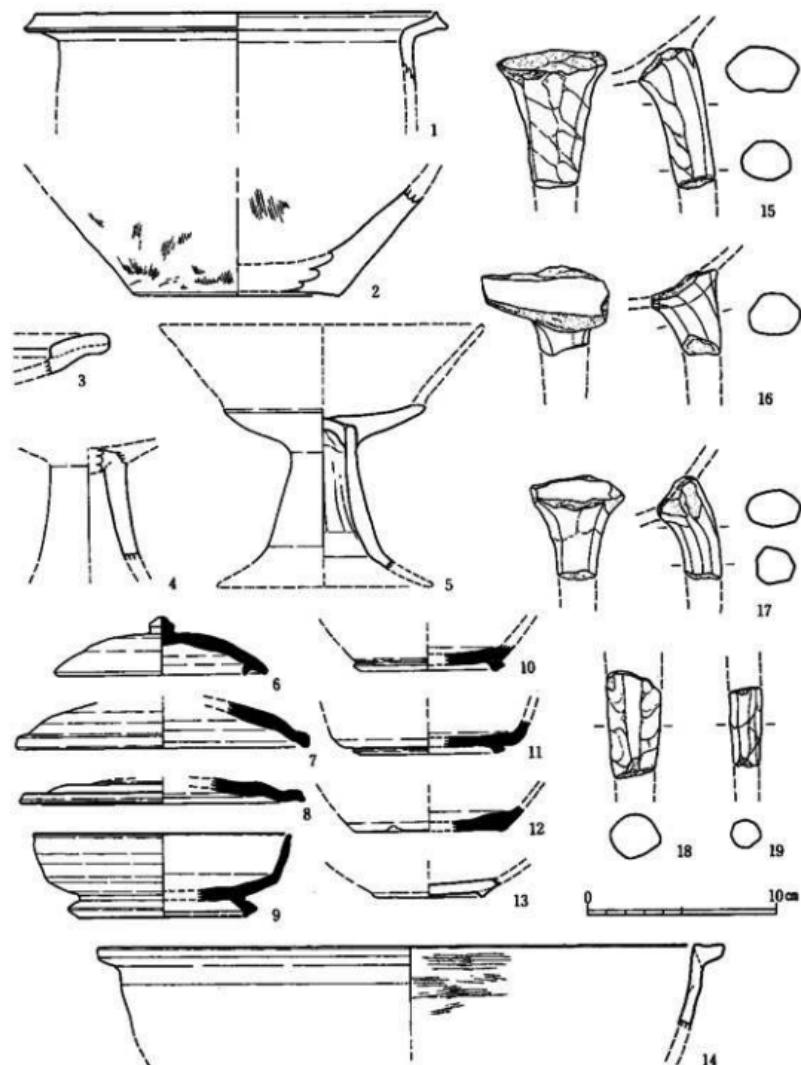


Fig. 36 吉田遺跡表探土器実測図

3 出土遺物

第Ⅰ地区A区からは、弥生時代中期後半・古墳時代前期を中心に、弥生時代前期から中世までの土器が出土している。また、帰属時期は明らかでないが、石器類も出土している。

本資料は1966年に発掘されてから、コンテナ内に各出土トレンチごと袋に仕分けられて保管されてきた。しかし、袋の註記と中の土器の註記があわないもの、異なった註記の土器が同じ袋に入っているなど、過去に混乱していることがうかがえた。註記のない資料も多数あり、各出土トレンチ別に掲載することは不可能であった為、各時期ごとに類別、掲載した。ただし、出土地点の註記があるものについては、観察表にまとめた。

なお、第4トレンチ出土の弥生時代中期後半土器については、遺構一括と考えられ出土状況写真もある為、付篇Ⅲで接合関係から遺構一括資料の復元を試みた。

弥生時代前期 (Fig.37~42, PL.8·9·10·11·12)

壺 (Fig.37-20~22·25·26, PL.9·10)

20~22は前期前半、25·26は前期後半の壺である。22は口縁部と頸部の境に段を有する。内外面にはミガキが施されるが、外面には一部ハケ痕を残す。21は精製小形壺である。風化が著しく色調は赤褐色を呈し、内外面の調整は残っていない。頸胴間の粘土紐接合による段、同じく口頸間の段、胴部が張る特徴は板付Ⅱa式小形壺に類似するものである。

25は長大化した頸部外面に、板状工具（無条線）による押圧沈線が11条以上施される。口縁部内面には1条の突帯がめぐる。内面の最終調整がミガキであるのに対し、外面はハケ調整を残す。26は頸部が長大化した無文の壺である。内面にはハケ工具痕が残される。

変形土器 (Fig.37-23·24, PL.10)

23は前期前半の壺であり、24は前期後半の壺である。23は口縁部と胴部の境に段を施す。口縁部には、強いヨコナデが施されるが、部分的にハケを残す。24は風化及び土中鉄分の付着が著しい。外面には横方向のハケ調整を施す。

鉢 (Fig.37-27, PL.9)

無頸壺とも呼べるような頸部のすぼまった球体の胴部をもつ。口縁部は欠失する。無文で、内外面にはハケ調整後にミガキが施される。

有文壺底部 (Fig.37-28~31, 41-110, PL.10)

28·29·110は、胴部側を低めることによって、胴底部間に段を作り出す壺底部である。30·31は底部側面に、貝による押圧沈線を施す壺底部である。30は鋸歯状圧痕のつかない、31は鋸歯状圧痕のつく貝殻が用いられている。

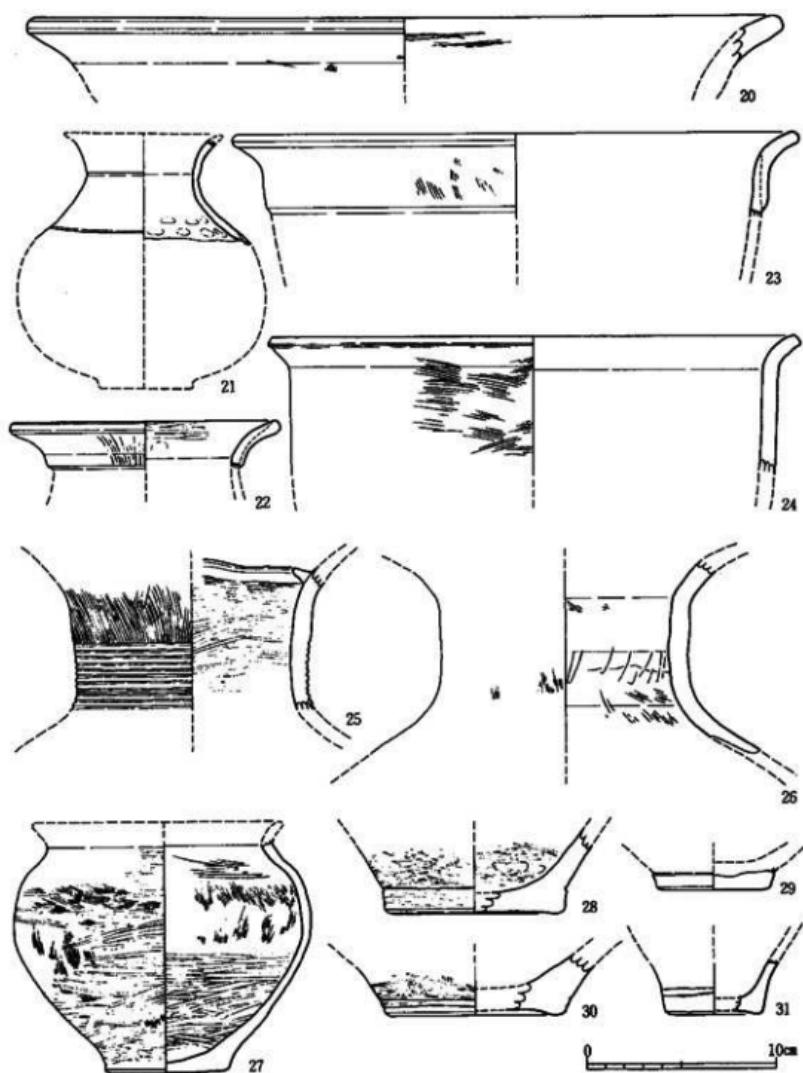


Fig. 37 A区弥生時代前期土器実面図 (1)

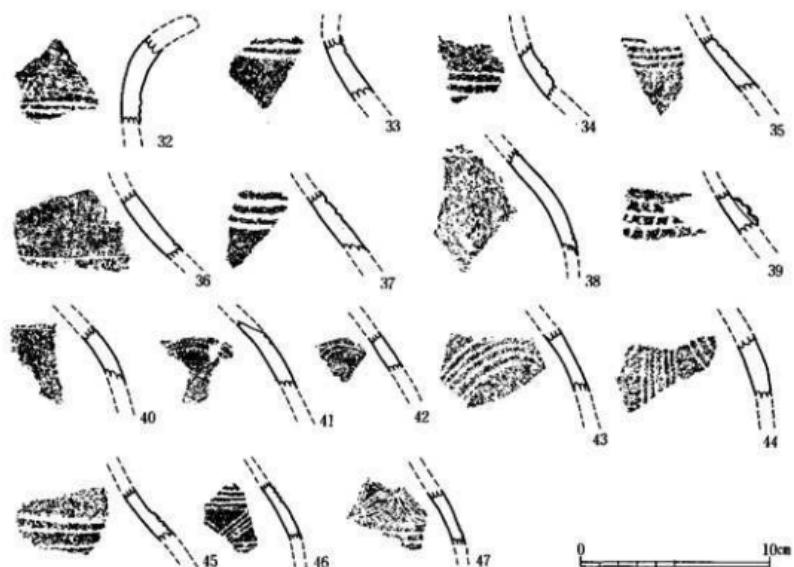


Fig. 38 A区弥生時代前期土器実測図 (2)

有文壺 (Fig. 38-32~47, 39-48~81, PL. 8-9)

文様をもつ破片を拓本によって表示する。32~38は沈線のみのものである。32~35は偏平で幅の広い削り出し突带上に、沈線を加えるものである。32は板状工具（条線有り）による押圧沈線である。33は風化のため沈線工具は不明である。34は板状工具（無条線）による押圧沈線である。35は鋸齒状圧痕のつかない貝殻による押圧沈線である。36・37はヘラ描き沈線である。36は最終調整のミガキ後に沈線が施される。38は鋸齒状圧痕のつく貝殻による押圧沈線である。

39は貼り付け突帶である。偏平で幅の広い突帶を貼り付けた後、2条の沈線を施し3段の突帶とする。突带上にはキザミを施す。

40~44は連弧文をもつものである。40・41は鋸齒状圧痕のつく貝殻、42・44は鋸齒状圧痕のつかない貝殻による施文である。43はヘラによる施文である。

45は沈線間に竹管の連続刺突文をもつ。46は鋸齒状圧痕のつく貝殻による山形文である。47は鋸齒状圧痕のつく貝殻による木葉文である。

出土遺物

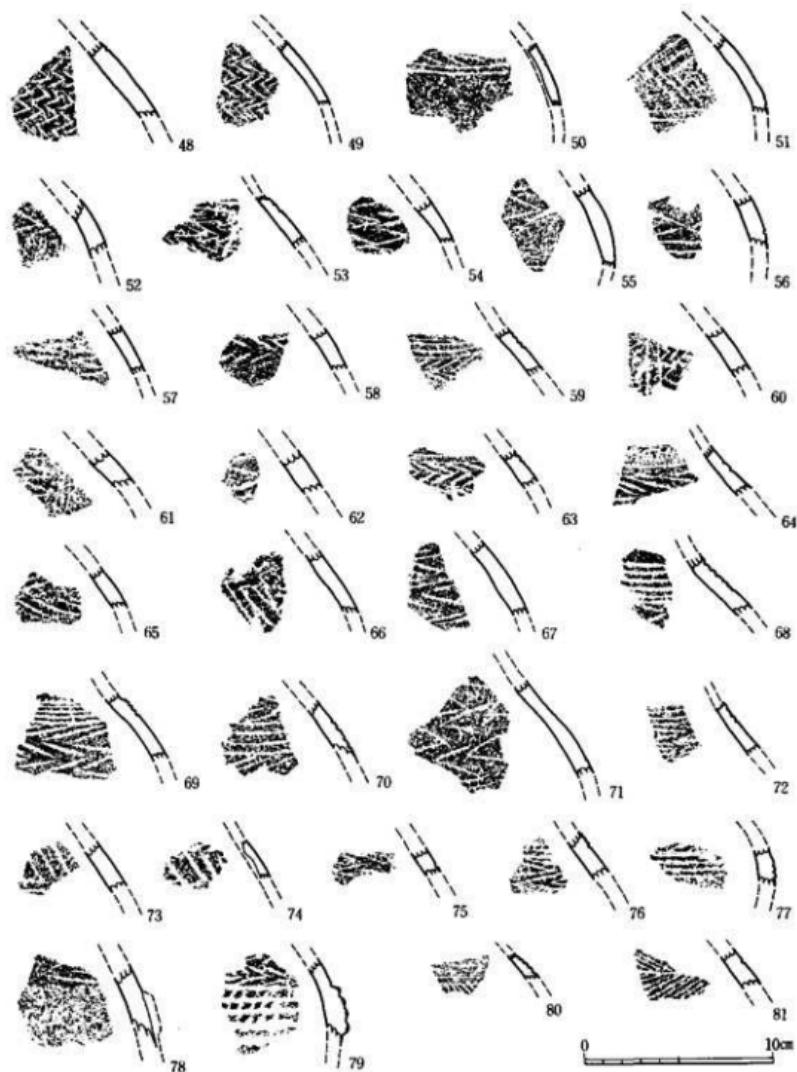


Fig. 39 A区弥生時代前期土器尖端圖 (3)

48~60は鋸歯状圧痕のつかない貝殻による羽状文である。48・49・60は貝殻押圧幅の一単位が短い。48は破片上端に胴部文様帯上部を区切る直線文がわずかに残る。なお、外面に赤色顔料の付着していた痕跡がある。60は文様帯に、2条の縦の仕切り線を入れるものである。

50~59は貝殻押圧幅の一単位が長いものである。50は2条の直線文によって、胴部文様帯下部を区切る。この直線文も、鋸歯状圧痕のつかない貝殻の押圧による。53は頸制間に段を有する。段の下に、胴部文様帯上部を区切る2条の直線文を施す。55は破片下端に文様帯下部を区切る直線文がわずかに残る。56は2条の直線文によって、胴部文様帯を区切る。この直線文も鋸歯状圧痕のつかない貝殻の押圧による。59は破片上端に胴部文様帯を区切る直線文が四条確認できる。

61~79は鋸歯状圧痕のつく貝殻による羽状文である。61は文様帯に3条の縦の仕切り線を入れるものである。63は破片上端に、胴部文様帯上部を区切る直線文が2条確認できる。直線文は鋸歯状圧痕のつかない貝殻の押圧による。64は2条の直線文によって、胴部文様帯上部を区切る。直線文は鋸歯状圧痕のつく貝殻の押圧による。68は6条の直線文によって、胴部文様帯上部を区切る。直線文は鋸歯状圧痕のつく貝殻の押圧による。69は頸制間に段を有する。段の下に胴部文様帯を区切る4条の直線を施す。直線文は鋸歯状圧痕のつく貝殻の押圧による。70は鋸歯状圧痕のつかない貝殻によって施された、4条の直線文の上下に羽状文を配置する。72は頸制間に段を有する。段の下に胴部文様帯上端を区切る3条の直線文を施す。直線文は鋸歯状圧痕のつかない貝殻の押圧による。75~77は削り出し突帯を有する。78~79は貼り付け突帯を有する。78は貼り付け突帯が剥離し、剥離面にハケ調整が残る。

80・81は綾杉文である。80は最終調整であるミガキが施された後に、ヘラによって文様が施される。外面には赤色顔料の痕跡が残る。小形有文精製壺の破片と思われる。81は鋸歯状圧痕のつく貝殻によるものである。

有文鉢 (Fig.40-82, PL.9)

口縁部は欠失するが、直口で塊形の形態と思われる。胴部上半に6条以上のヘラ描き沈線が施される。内外面は風化するが、ミガキ調整が残る。

有文壺 (Fig.40-83~109, PL.9)

83~101は文様が沈線のみのものである。口縁部が残存する83~92のうち、口縁下端部にキザミを施すものは、83・86・88・89・92である。91は口唇部全面にキザミを施す。沈

出土遺物

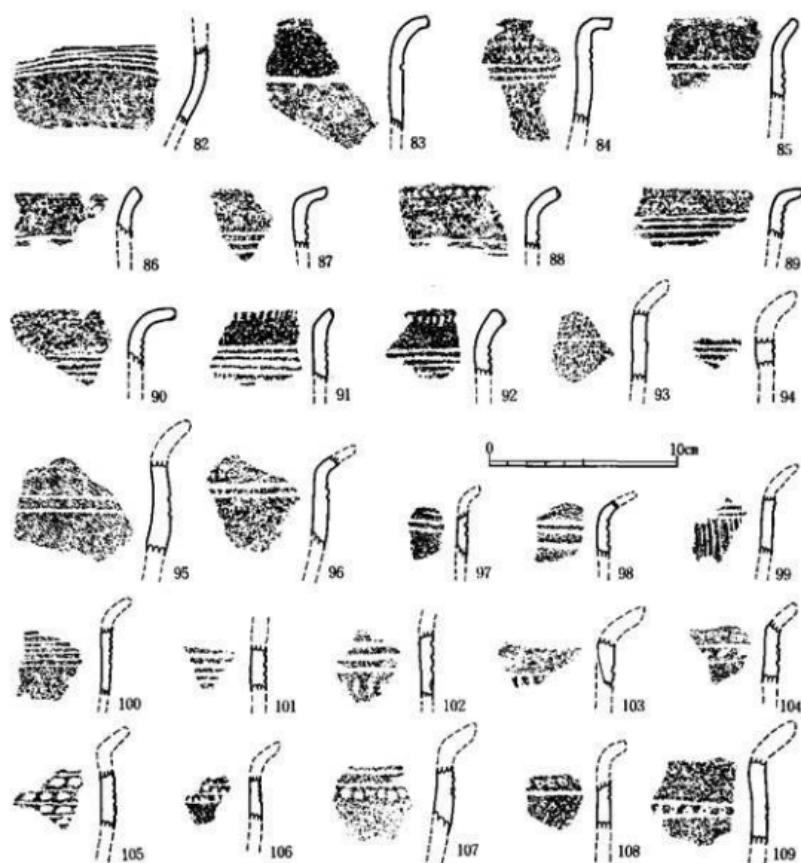


Fig. 40 A区弥生時代前期土器実測図 (4)

線は93・97が板状工具（無条線）の押圧によるもので、残りはヘラ描きである。89～92・100・101は沈線が5条以上の多条のものである。99は削り出し突带上に、沈線を1条施す。

102～106は列点文を施すものである。102は沈線下に、ハケ状工具を縦に使って列点文を施す。103～106は沈線間に列点文を施している。106は棒状工具の先端が尖った工具による施文と思われる。

107～109は、竹管状工具による刺突文をもつ。

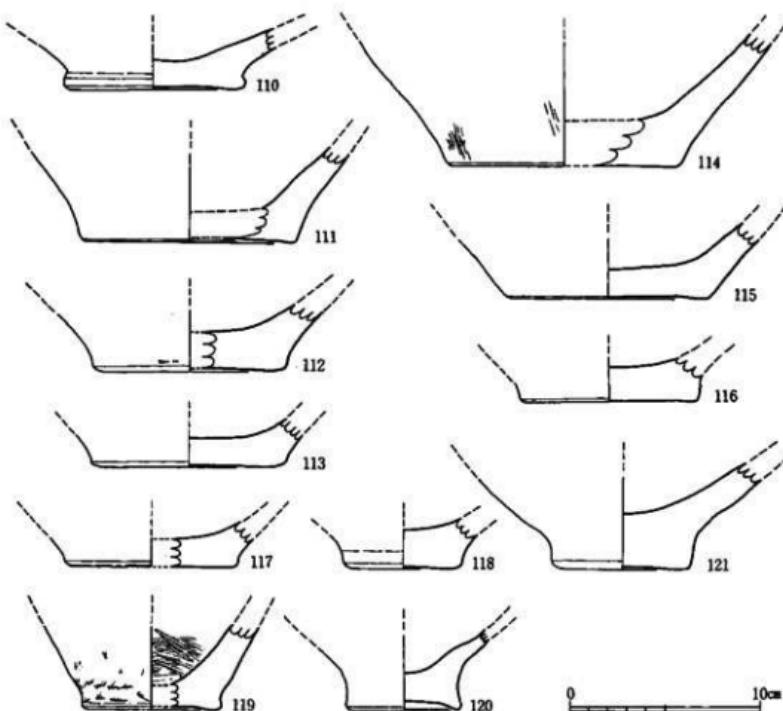


Fig. 41 A区弥生時代前期土器実測図 (5)

壺底部 (Fig.41-111~120, PL.11)

先述した有文の28~31・110に対して、無文の壺底部である。確実な前期弥生土器の特徴はなく、他時期の壺底部に対して若干の形態の違いや胎土の違いから区別したものである。他時期底部が含まれていない、とは言い切れない。

111~118は平底の底部である。いずれも風化が著しく器面調整がほとんど残っていない。わずか112と114に、ハケ痕が残る。119は底面にケズリが施されやや凹底になる。外面調整はハケ後ナデ、内面調整はミガキである。110~118とはやや形態が異なり、鉢の底部の可能性もある。120・121は突出する底部である。小砂粒が多量に混ぜられている。風化のために調整は残っていない。壺以外の底部の可能性や中期に降る可能性もある。

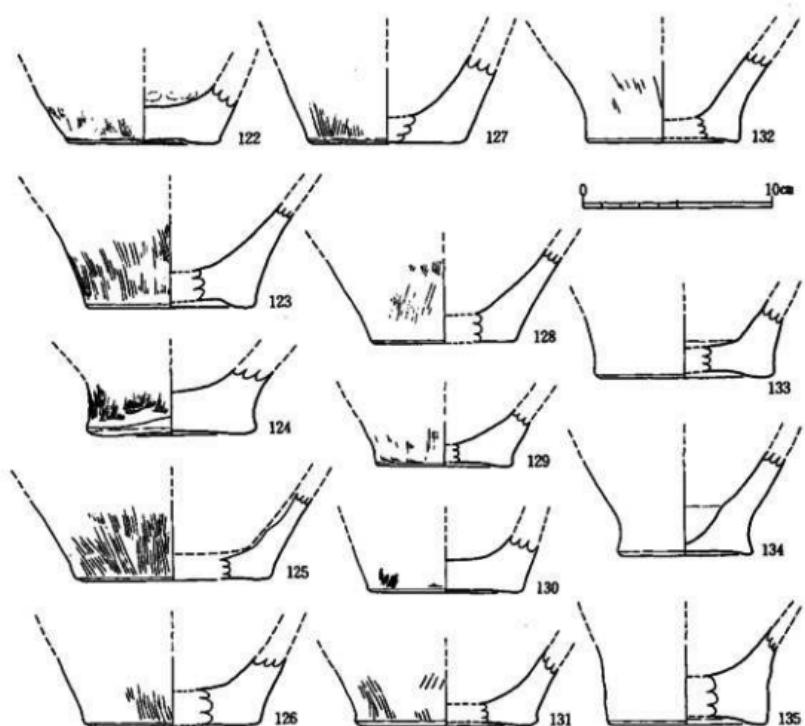


Fig. 42 A区弥生時代前期土器実測図 (6)

壺底部 (Fig. 42-122~135, PL.12)

壺底部に対して壺底部は、前期と中期の形態変化が激しく、他時期底部とのある程度までの識別は可能である。

全体的に風化は著しい。122~127は外面がハケ調整で、内面がナデ調整のものである。122・123は底面が低い高台状になる。弥生時代前期に特徴的な壺底部である。122の底面にはモミ汗痕がある。128~131は外面がハケ後ナデ調整、内面がナデ調整のものである。132~135は、前期と断定できないものをまとめた。132~133は、内外面ナデ調整である。134は2次焼成により器面の荒れが激しく調整が残っていない。135は円筒状に突出ぎみの底部で、中期に降る可能性がある。

弥生時代中期 (Fig.43~54, PL.13~22)

第Ⅰ地区A区出土土器の主体を占めるのが、中期弥生土器である。また、その大半が中期後半に属するものである。これは「弥生時代中期の土器が充填した不整形のピットを検出した」と概報にあるように、弥生時代中期後半の遺構を検出したことに起因するのであろう。これら弥生時代中期後半土器には、第4トレンチの註記をもつものが多い。前述したように第4トレンチは、「弥生時代中期の土器が充填した不整形のピット」に相当すると思われる。事実、この「不整形のピット」出土状況写真に写った土器片には、第4トレンチの註記がなされている。第4トレンチの註記をもつ土器には、垂下口縁壺や北部九州系土器があり、遺構共伴していた可能性がある。これについては、付篇Ⅲで検討を行ったので参照されたい。

なお、明らかに北部九州系の土器と識別できるものについては、その記述にあたって他の土器と区別した。同じく壺の中には、瀬戸内特有の特徴を有するものがある。これも区別して記述した。

北部九州系無頸壺 (Fig.43~136, PL.13)

球形の体部に水平に張り出した口縁部をもつ。口縁端部はやや肥厚する。底部は平底であるが、ややくぼんでいる。最大胴径は器高をしのぐ。器高41.9cm、最大胴径43.2cm、口径23.8cm、底径10.4cmを測る。ほぼ完形に復元できる。

胴部上半に3条の、胴部中央に5条の低い断面M字状突帯をもつ。胴部上半の突帯は上端、下端とも均等にナデられるが、胴部下半の突帯は上端だけに力が加わり、下端は接合痕を残したままとなる。器形に左右されたものと思われる。口縁端面は断面M字状突帯と同じく中央がややくぼむ。突帯が断面M字状をなすのは、北部九州系土器の特徴である。突帯貼り付け時のヨコナデ手法に起因するものであろう。

外面調整は、底部から胴部上半突帯の下まで横方向のミガキである。突帯及び突帯間にミガキが施されない。内面調整はハケ後ナデのようであるが、丁寧にナデられており、ハケの痕跡はほとんど残らない。底面付近に一部残る程度である。底部側面には、横約6.5cm、縦約1.8cmの穿孔が施される。この穿孔は焼成後の打ち欠きによるものである。廃棄時に行われたものであろうか、その特殊性が考えられる。

また、この無頸壺はその胴部突帯破片が、「弥生時代中期の土器が充填した不整形のピット」出土状況写真に写っている。第4トレンチ遺構出土土器として断定できる資料である。

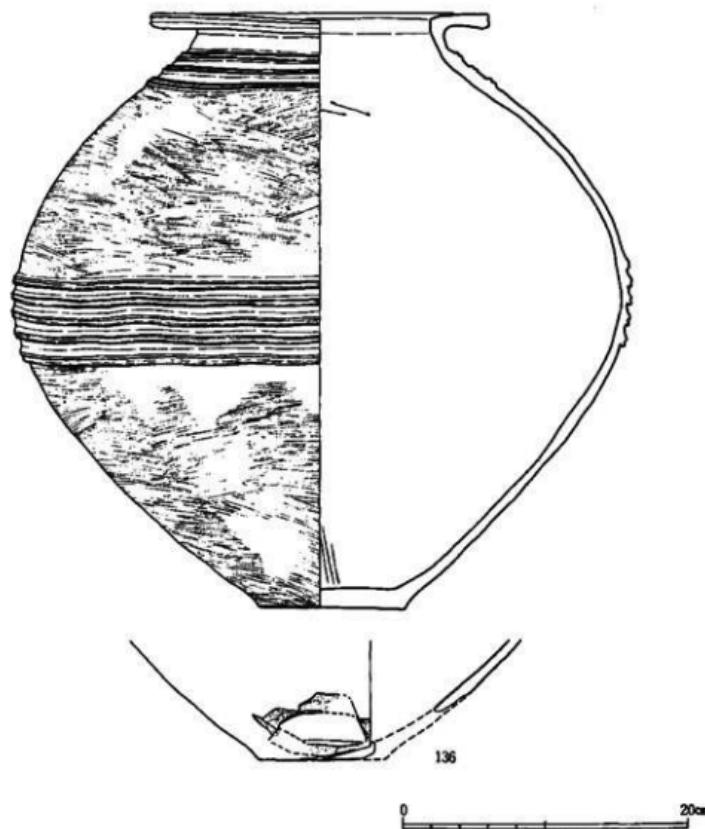


Fig. 43 A区弥生時代中期土器実測図 (1)

このタイプの無頸壺は「無頸壺Ⅱ類」と呼ばれ、北部九州でも遠賀川以東地域で盛行する。山口県では豊浦郡菊川町下七見遺跡第14地区・SK-98から上半部が出土している。山口県では全形を知りうる例はなく、この吉田遺跡第Ⅰ地区A区出土土器が初例となる。ただし、北部九州で出土するものとは若干異なる部分がある。北部九州の無頸壺が胴部中央から上半に、等間隔に離して一条ずつ突帯を貼り付けるのに対して、吉田遺跡のものは胴上半部と胴部中央に突帯を帶状にまとめて貼り付けている。一つの地方変容形であろうか。

北部九州系壺 (Fig.44-137~141, PL.13-16)

鋸形口縁をもつもの、断面M字状の突帯をもつものを一括した。137は長大化した頸部と、外に水平方向にのび内面を肥厚させた鋸形口縁をもつ。頸部は5条まで、断面M字状突帯が残存する。外面調整は風化しており、判読することができない。内面調整は、ナデである。山口県では奥正権寺遺跡第V区S D-1に類例がある。

138は137の壺と同じタイプの鋸形口縁の破片と思われる。139は外面にあまり口縁部が突出しないものである。140は、137の壺と同じタイプの頸部片と思われる。141は胴部に断面M字状の突帯を貼り付ける。

北部九州系広口壺 (Fig.44-142~144, 46-163, PL.13-14)

143は器壁が厚く、口縁端部に面をもつもので、142・144に比べ若干古手の様相がある。口縁部には強いヨコナデが施され、内面がややくぼむ。胴部外面調整はタテミガキ、頸部外面調整はタテミガキ、内面調整はナデである。142は球体の体部をもち、口縁部がラッパ状にひらく。口縁端部はヨコナデによって跳ね上げ状になる。内外面ともに上中の鉄分が付着し風化がはげしいが、頸部外面調整はタテハケ後タテミガキ、胴部外面調整はタテハケ後ヨコミガキである。内面は丁寧にナデされる。

144は胴部上面に張りをもち、口縁部がラッパ状にひらく。口縁端部はヨコナデが施され、端面が円錐状にくぼむ。胴部下半調整は、底部方向からのタテケズリ後タテミガキ、胴部上半調整は横方向のケズリ後ヨコミガキである。頸部にはミガキが施されず、ハケ調整が残る。内面は丁寧なナデ調整である。この広口壺の破片が「弥生時代中期の土器が充填した不整形のピット」出土状況写真に写っている。

163は胴部上半より上を欠くが、その器形より北部九州系広口壺胴部と判断した。他のものに比べやや大形である。外面調整は底部側面を左方向にヨコケズリする他は、タテハケ後にタテミガキが施される。内面調整はハケ後ナデである。

小形短頸壺 (Fig.44-145~148, PL.13-14)

145は胴部上半に張りをもち、口縁部が広く外反する。口縁端部は面をもつ。胴部外面調整はタテハケ後ナデである。内面はナデ。146は胴部中央よりもやや上に張りをもち、口縁部がラッパ状にひらく。口縁部はヨコナデによってやや跳ね上げ気味になる。外面調整はタテハケ後ナデ、内面調整は丁寧なナデである。147は長胴の胴部に短く直立した口縁部をもつ。外面はタテハケ後丁寧なナデが施される。内面も丁寧なナデである。148は下膨れの胴部に短く開いた口縁部がつく。体部外面調整はヨコミガキ、内面は丁寧なナデである。148は「不整形のピット」出土状況写真に写っている。

出土遺物

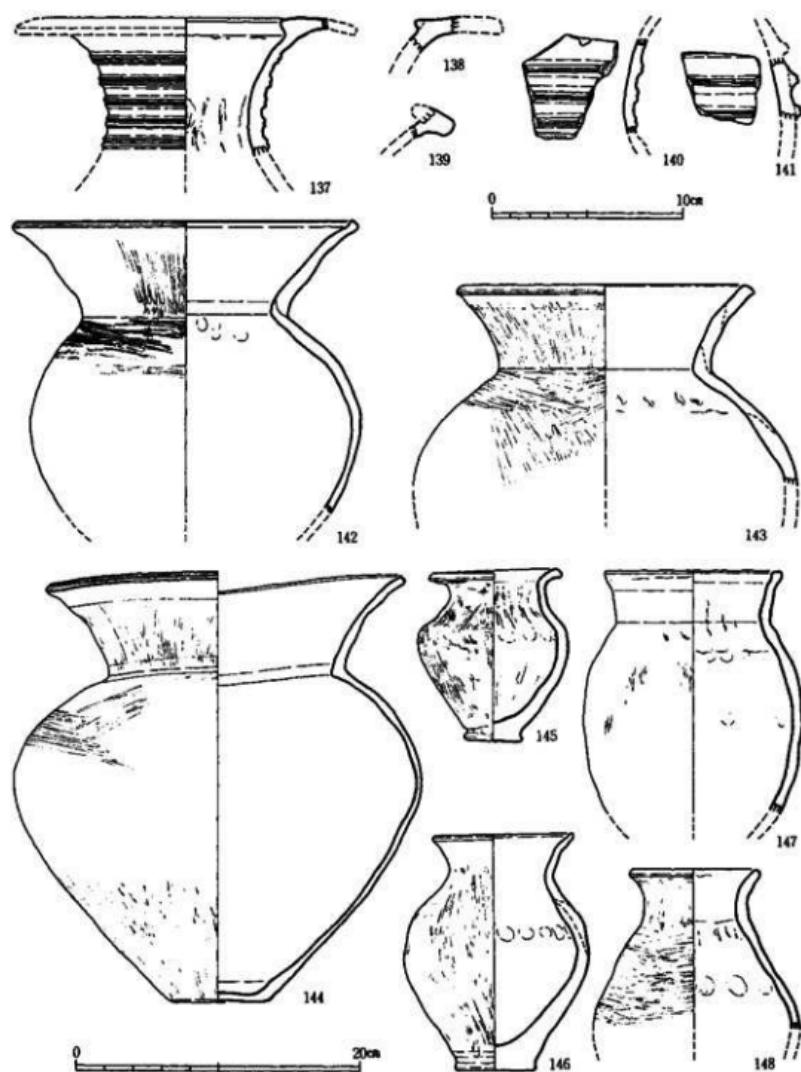


Fig. 44 A区弥生時代中期土器実測図 (2)

垂下口縁臺 (Fig.45-149~162, 46-164·165, 47-166~171, PL.14·15·16)

162は胴部下半を欠くが、口縁部から胴部上半までの器形を知ることができる。胴部は丸く、さほどすさまらない頸部にラッパ状に開いた頭部がつく。口縁垂下部は、垂下というよりは斜め下方向に突き出した形態となる。頭部には3条の細い断面三角突帯が施される。垂下部外面には板状工具先端の押圧による山形文が施される。胴部外面調整はハケ後ヨコミガキである。頭部にはミガキが施されず、タテハケ調整が残る。胴部内面調整はタテハケ後ナデである。口縁内面は風化が著しく調整が判読できない。頭部内面には、シボリ痕が明瞭に残る。

149~154・157・158は口縁部である。149は垂下部外面に文様を施さない。口縁内面には、ミガキ調整が施されるが粗く、下地のヨコハケ調整を明瞭に残す。150は風化が著しく、口縁部上面も欠損している。垂下部外面に一部山形文を確認することができる。151は口縁部と垂下部の屈曲部分に強いヨコナデが施され、やや外方に突出する。垂下部外面には半截竹管状の工具によって、2条1組の山形文を施す。口縁内面はヨコハケ調整のみである。152は垂下端部を欠く、口縁部と垂下部の屈曲部分が強いヨコナデによってつまみだされる。口縁外面には、板状工具の押圧によって山形文を施す。円形浮文が口縁内面に貼り付けられる。風化が著しい為、調整の判読ができないが、口縁内面はハケ調整をナデあるいはミガキによって消す。153は垂下部の大部分を欠く、残存部に山形文が残る。口縁外面は風化するが一部にタテハケを残す。口縁内面にはミガキ調整が施されるが粗く、下地のヨコハケ調整を明瞭に残す。154は垂下部外面に、板状工具の押圧による山形文を施す。外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整のみでミガキは施さない。157は口縁部と垂下部の屈曲部分に強いヨコナデが施され、やや外方に突出する。垂下部外面に、板状工具による山形文を施す。158は垂下部で剥離する。垂下部外面には、板状工具の押圧による2条1組の山形文が施される。

155・156・159~161は頸部である。155・156は2条の断面三角突帯をもつ。155が1条ずつ貼り付けるのに対して、156は1本の粘土紐の中央を強く、くぼませて2条の突帯をしている。共に風化が著しく、調整は判読できない。159・160は共に突帯途中で割れており突帯条数はわからない。160は外面にタテハケ調整を残し、ミガキは施されない。161は突帯よりも下の頸部破片であるが、突帯と直交するように貼り付けられていた2本の棒状浮文の痕跡が残っている。外面の調整は、風化のため判読できないが一部にタテハケ調整が残る。内面にはシボリ痕がある。

出土遺物

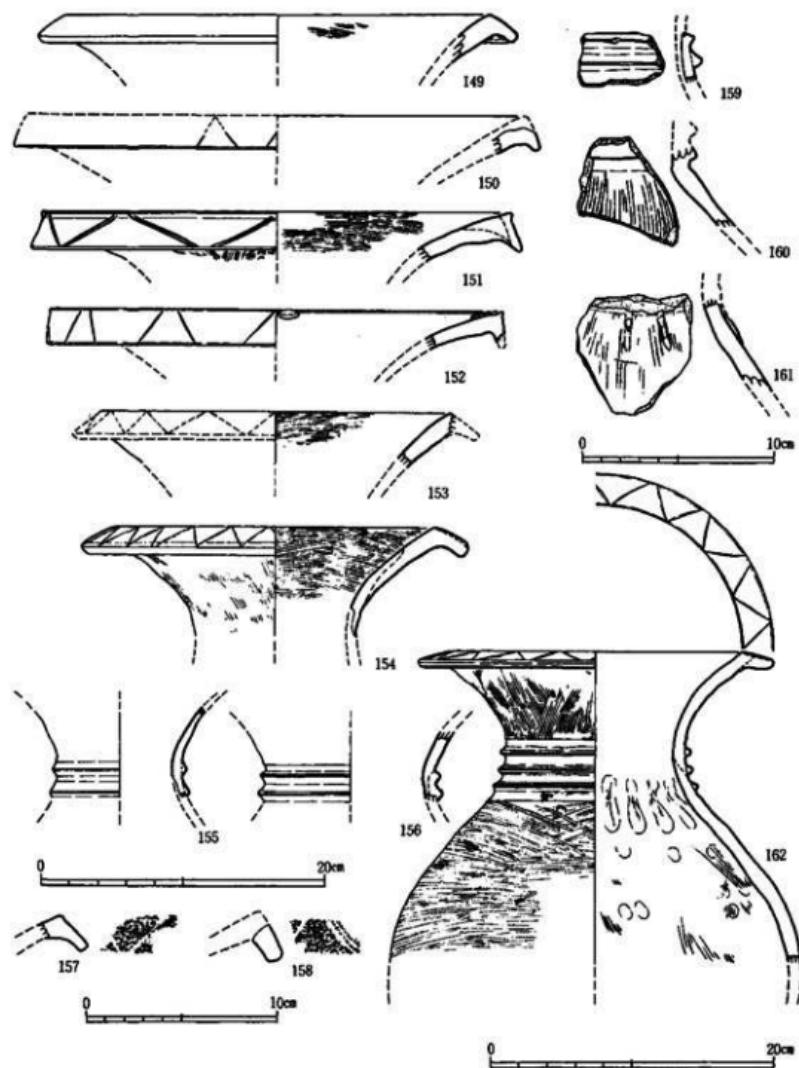


Fig. 45 A区弥生時代中期土器実測図 (3)

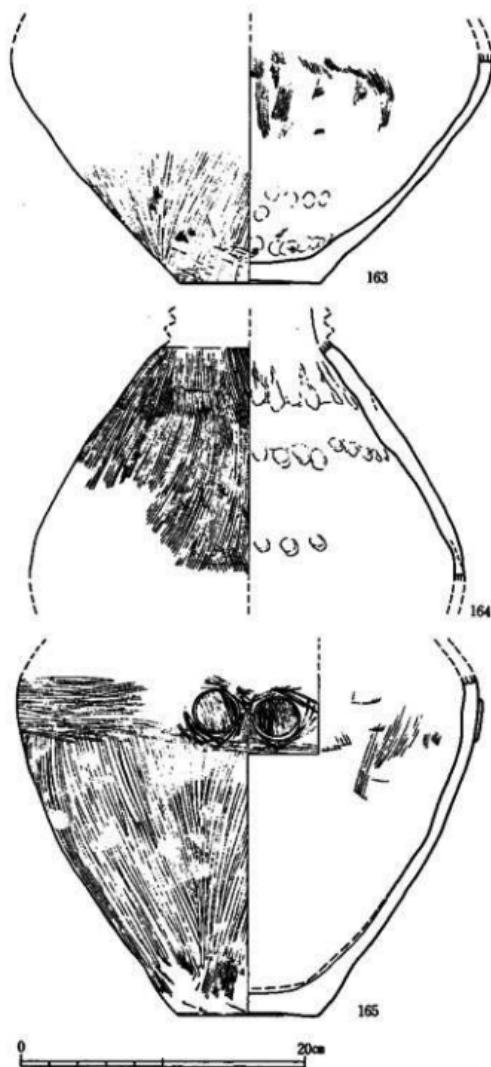


Fig. 46 A区弥生時代中期土器実測図 (4)

164～171は胴部である。
164・165・171は胴部に突
帯を持たないものである。
164は外面にミガキを施さ
ず、ハケ調整を残す。内面
には多くの指頭圧痕と、シ
ボリ痕を残す。破片上端、
頸部下は強いヨコナデによっ
て器面がくぼんでおり、頸
部には突帶が貼り付けられ
ていたと想定される。165
は胴上半部の最も肩が張っ
た部分に2個1組の円形浮
文を貼り付ける。胴部外面
下半はタテハケ後、タテミ
ガキを施す。胴部の最も張っ
た部分には、ヨコミガキが
施される。円形浮文、その
周囲も丁寧にミガキが施さ
れる。内面調整は、タテハ
ケ後にナデを施す。底面を
削る。171は胴部上半を欠
く為、異なる器形の可能性
もある。しかし、内面がナ
デ調整だけであることから
壺形土器の底部と判断し、
その立ち上がりぎみの胴下
半部から垂下口縁壺と判断
した。外面の最終調整はタ
テミガキである。

出土遺物

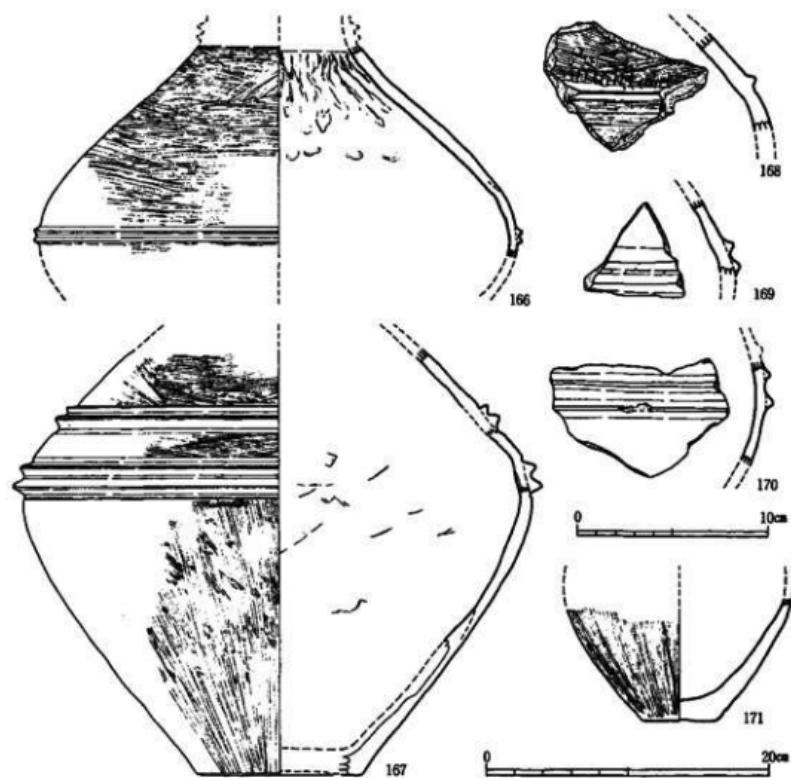


Fig. 47 A区弥生時代中期土器実測図 (5)

166～170は胴部に突帯をもつものである。166は胴部最大径に、1本の粘土紐から作出された2条の突帯を貼り付ける。外面にはヨコミガキ調整が施される。167は胴部中央よりやや上に最大径がある。1本の粘土紐から作出された2条の突帯を、胴上半部に2段に貼り付ける。外面調整はタテハケ後タテミガキを施す。168は1条の断面三角突帯を貼り付ける。

169・170は、突帯部分で破片になっており突帯数がわからない。なお、169・170は突帯断面が三角であることから、M字状突帯をもつ北部九州系壺とは分離して、垂下口縁壺に含めた。ただし、北部九州系壺に断面三角の突帯がないわけではない。169・170の胎土は、他の垂下口縁壺に比べ精良で、北部九州系壺の可能性がある。

北部九州系壺 (Fig.48-172~177, 49-179, PL.16-17)

173~176は口縁部と胴部の境に突帯を有し、確実な北部九州系の特徴をもつものである。175は断面M字状の突帯が貼り付けられる。内外面の風化が著しい。173・174・176は断面三角の鋭い突帯を貼り付ける。突帯上には、キザミを施さない。173・174は同じタイプの大形品、中形品とも言うべきもので器形、調整ともに似ている。胴部には張りをもち、内面に稜をもって口縁部が外反する。口縁端部はヨコナデによって上方につまみ出され、口縁端面はやや中くぼみになる。ともに胴部外面にはタテハケ調整が施され、胴部内面にはナデ調整がおこなわれる。また、胴部突帯下は突帯貼り付け時の幅広いヨコナデによって、タテハケ調整が部分的に消される。これらは、北部九州須玖Ⅱ式併行とされる特徴である。

172・179は、北部九州系壺の地方変形と考えられるものである。179は肉厚の口縁部が、胴部にたいして直角につく。胴部には粗いタテハケが施される。動形口縁壺の変形と思われる。172は口縁部と胴部の境より、わずかに下がった位置に無キザミの断面三角突帯を貼り付けるものである。口縁端部は面をもつ。

瀬戸内系壺 (Fig.48-178, 49-180~183, PL.16-18)

180は逆L字状の口縁をもつものである。胴部のやや張った部分に棒状工具による三角刺突が施される。口縁端部にはキザミを施す。外面調整はタテハケ、内面調整はヨコミガキである。178・181・182は、口縁部下の断面三角突帯にキザミを施す。このうち、181は突帯の突出が高く、キザミも細かい。183は突帯が剥落するが、上述のものと同じ突帯を有すると考えられる。

壺 (Fig.49-184~195, 50-196~206, PL.17-18-19)

明確な北部九州系・瀬戸内系の要素を示さないものをまとめた。184~186は口縁端部をヨコナデによってつまみあげるが、跳ね上げ状口縁とまでは言えないものである。これらの調整は外面に板ナデ状の擦痕があり、内面はナデである。

188~194は跳ね上げ口縁をもつものである。188・189・190・191は外面調整が、擦痕状のものである。これらは、器壁が極めて薄い。187も口縁が跳ね上げ状になるが、若干器形が異質である。

195~199・202・203は、口縁端部に面をもつものである。200・201は、口縁端部を丸くおさめる。204~206は、口縁端部が凹線状にくぼむものである。206は胴部が張り、新しい様相が見られる。なお、203はその破片が、「弥生時代中期の土器が充填した不整形のピット」出土状況写真に写っている。

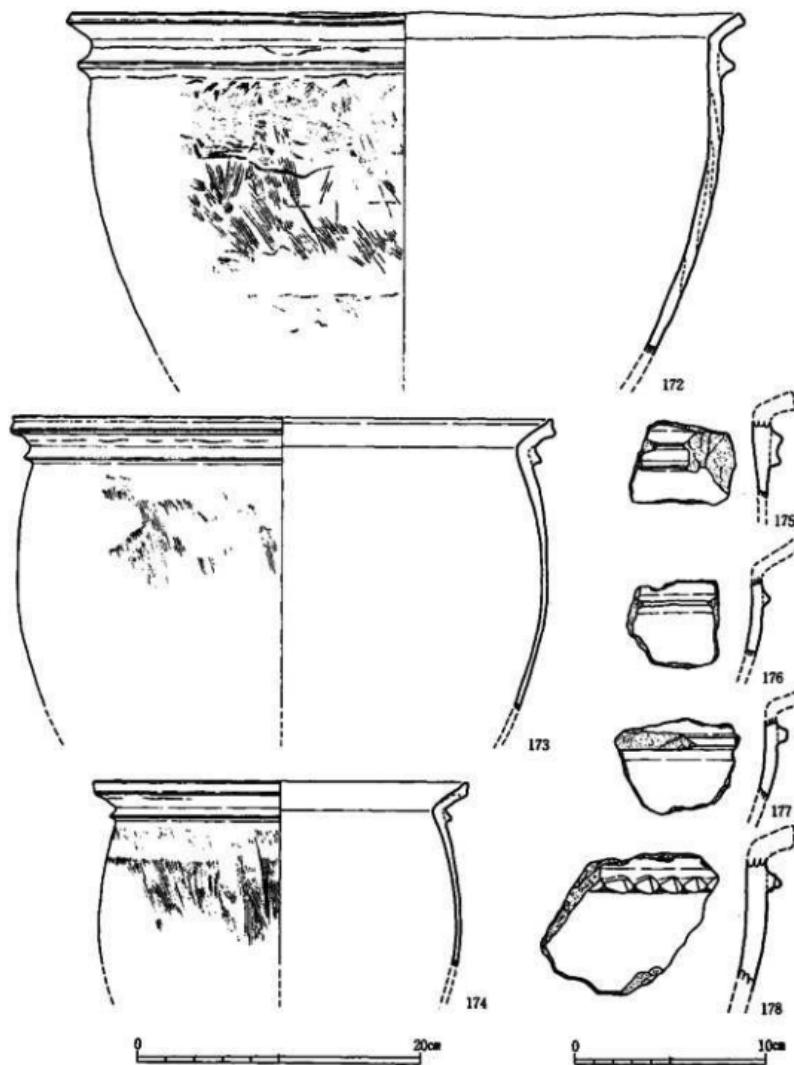


Fig. 48 A区弥生時代中期土器実測図 (6)

吉田遺跡第Ⅰ地区A区の調査

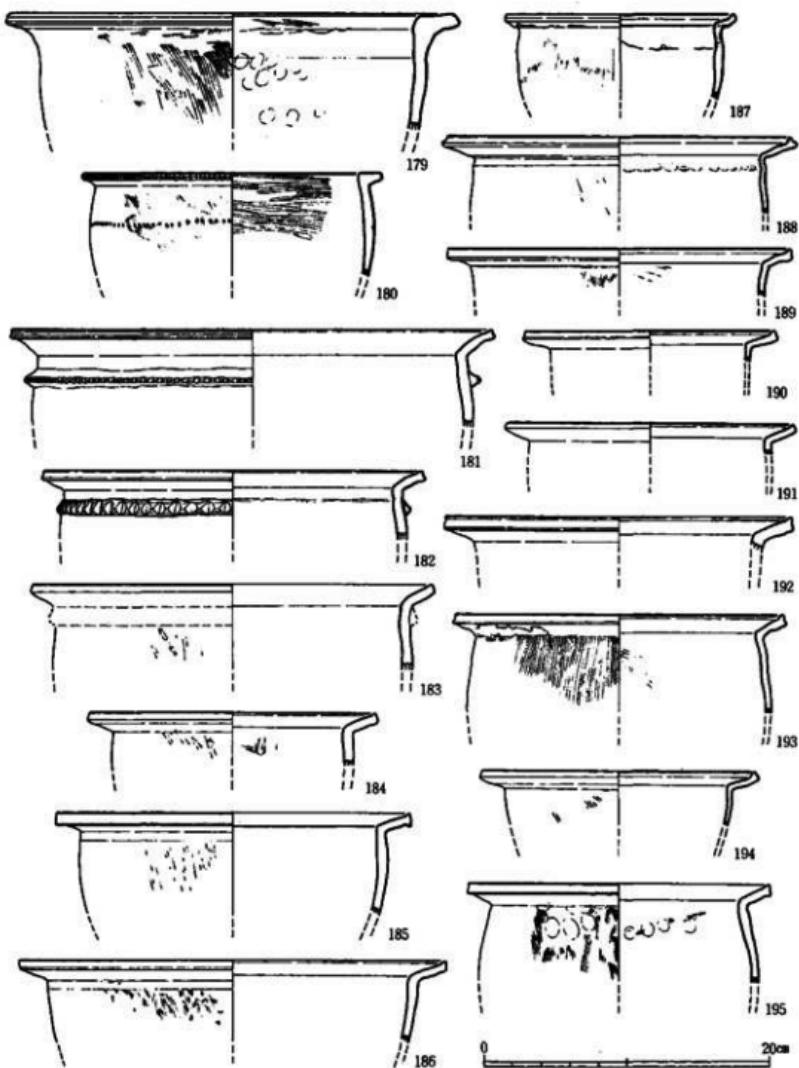


Fig. 49 A区弥生時代中期土器実測図 (7)

出土遺物

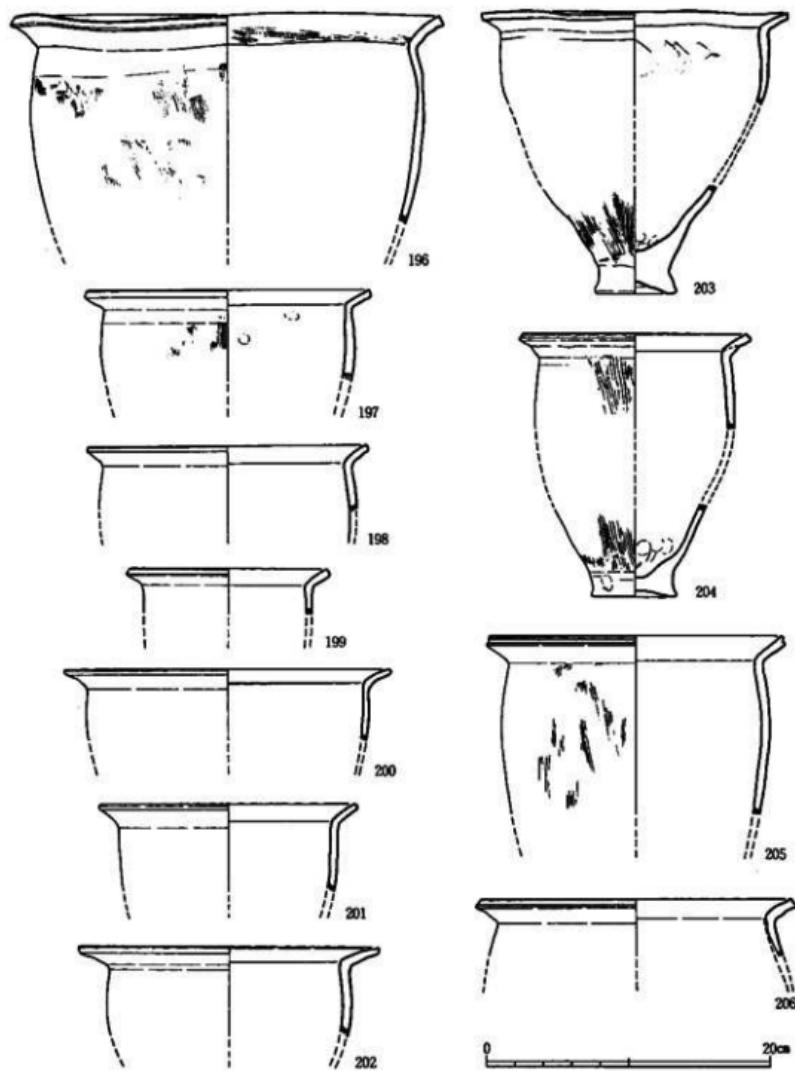


Fig. 50 A区弥生時代中期土器実測図 (8)

高坏 (Fig.51-207~215, PL.20)

207は瀬戸内系高坏の坏部である。口縁部は短く立ち上がり、上端部には面をもつ。外面の口縁部と坏部の境は口縁部がやや内側から立ち上がり、さらにこの境にヨコナデを施すため外面坏部端が突出する。外面口縁部中央やや口縁端部よりもヨコナデによって軽く凹線状にくぼむ。風化が著しいため、内外面の調整は判読できない。

211は口縁部を欠いた坏部である。やや坏部は深い。脚部とは接合部ではずれ、脚部との接合面が円錐状に突出する。接合痕から観察する限りにおいて、円板充填技法というよりは、ソケット状に作った坏部を別に作った脚部に組み合わせたものと思われる。内外面の風化が著しい。

208は脚部である。坏部を欠くが、脚部上端外面の坏部との接合痕は明瞭である。脚部高が11.5cmに対して、裾部径は22.8cmと裾部がかなり広がる。また、柱状部の径が7cmあり、脚部高に対して太い。裾部径や柱状部径に対して、脚部高が低くややアンバランスである。器壁が薄く脚部は筒状になるが、円板充填技法が用いられていたと考えられる。裾端部には面をもつ。外面調整は風化が著しいため残らない。内面も風化が著しいが、右から左方向のケズリ調整が残る。また、裾部には内外面ともに、幅約3cm程にわたってヨコナデが施され、これにかかった内面のケズリ調整が消される。

212~215は、脚柱状部片である。213・215は坏部円板充填技法の良好な資料である。212は柱状部上部の破片である。一部に坏基部を残す。円板充填部分は欠損する。外面は風化が著しく調整は残らない。内面にはシボリ痕がある。213は保存状態が良好で調整が残る。外面調整はタテミガキである。また、外面にある坏部との剥離面には、接合部を密着させるためラセン状のタキ調整が施されている。内面には放射状に縦のシボリ痕がはいる。215は脚部と坏部の接合痕及び、円板充填が明瞭に残る。この接合痕によれば、その成形技法は筒状の柱状部をつくり、その上に開いた坏基部を積み上げ、円板を充填している。内外面の風化は著しく、調整は残らない。214は柱状部から脚裾部の破片である。裾端部を欠く。筒状の柱状部から、裾部がゆるやかに広がる。内外面の風化は著しい。外面には調整が残らない。内面にはシボリ痕が残る。

209・210は脚裾部片である。209は裾部があまり広がらず、端部は丸く收める。内外面ともに風化が著しいが、外面にはミガキ調整の痕跡が残る。210は裾部がハの字状に広がるもの。裾端部をヨコナデによって下方につまみだす。外面調整はハケ後ナデ、内面調整は左上がりのヨコハケを残す。

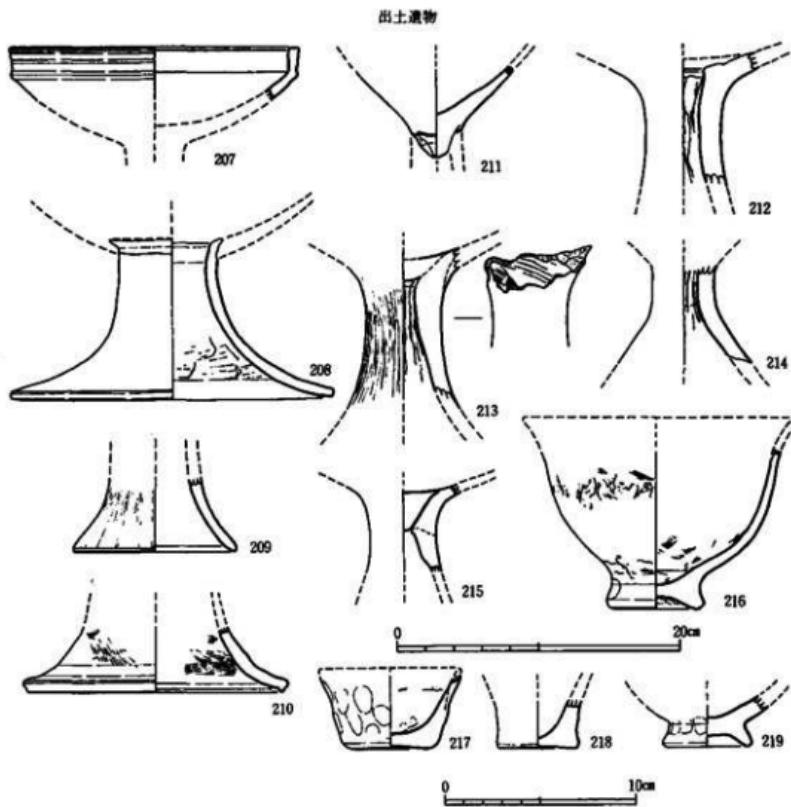


Fig. 51 A区弥生時代中期実測図 (9)

鉢 (Fig.51-216, PL.20)

ポール状の丸い胴部に高台上の底部をもつ。口縁部は欠く。外面調整はタテハケ後ナデ、内面調整はハケ後ナデである。内面・外面にラセン状のツメ痕が確認できる。なお、この資料は「S41.7 第I-A」の註記をもつが、出土状況写真があり、その写真には第I地区とは違った第III地区の註記がなされている。他地区のものが混入した可能性もある。

ミニチュア土器 (Fig.51-217~219, PL.20)

217は鉢形を呈する。外面にはユビヅくねの指痕痕を残す。風化が著しい。218・219は底部のみで器形はわからない。また、風化が著しい。218は平底である。219は高台状の底部をもつ。

吉田遺跡第Ⅰ地区A区の調査

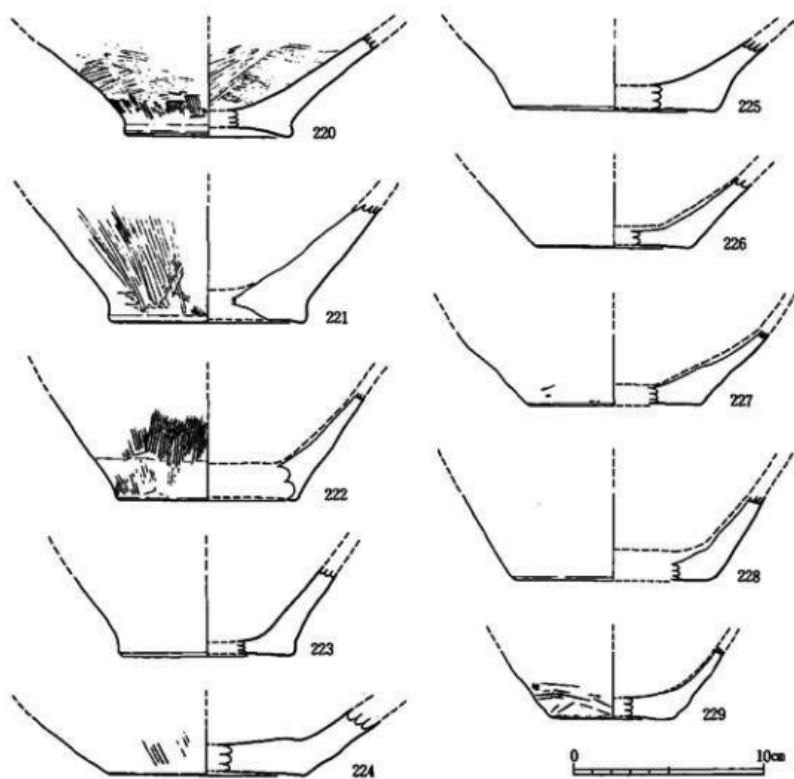


Fig. 62 A区弥生時代中期上器実測図 00

壺底部 (Fig. 52-220~229, 53-230~237, PL. 21)

前期壺底部の説明でも断わったが、他時期との混同の可能性があるかもしれない。特に前期壺と垂下口縁壺の胎土には明瞭な差がなく、微妙な形態の差から識別している。

224・226~229・232・233・235・236は、胴部から底部へと徐々にすぼまり、その境が明瞭ではないもの。226~228・235・236は、調整の判断ができないほど風化している。224は底面を削る。外面はハケ痕を残し、内面調整がナデである。227は風化しているが、底部側面に右方向への横ケズリの痕跡がみえる。内面は器面が剥離しており、調整はわからない。229は底部側面に左方向への横ハケ後ナデが施される。内面は器面が剥離する。231は外面タテハケ後タテミガキ調整、内面調整はハケ後ナデである。232は外面にヨコミ

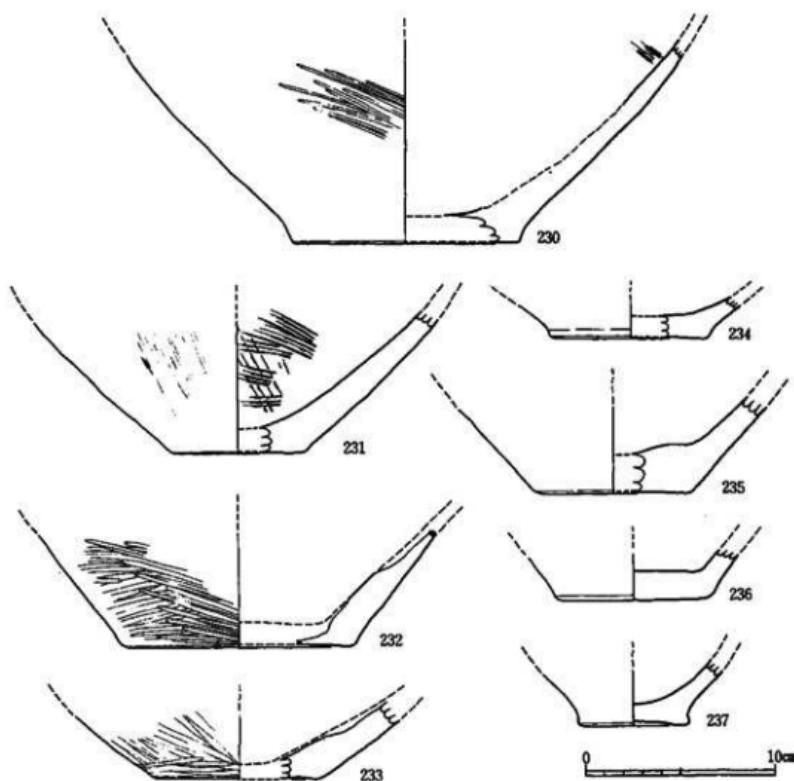


Fig. 53 A区弥生時代中期土器実測図 (1)

ガキが施される。内面は器面が剥離する。233は外面右上がりのミガキが施され、底部側面はヨコミガキ調整である。内面調整は風化のため残らない。

220～223・225・230・234・237は底部と胴部の傾きが異なり、胴部と底部の境が明瞭であるもの。223・225・234・237は風化が著しい。220の外面調整はタテハケ後ヨコミガキ。内面調整はヨコミガキである。221の外面調整はタテハケ後ヨコミガキ。内面は器面が剥離する。222の外面はミガキが施されず、タテハケ調整を残す。内面は器面が剥離する。230は風化しているが、外面に一部ヨコミガキ調整が残る。

また、221・227・232・236・237は、底面から底部側面にかけて黒斑をもつ。

壺底部 (Fig.54-238~254, PL.22)

前期壺底部の記述でも断わったように、中期壺底部は明らかに前期のものとは異なった特徴をもつ。上げ底状の底面と外方に突出した底部側端部をもつ、239~250・253・254をその典型例とする。なお、山口県東部、島田川流域には胴下半部に外面調整としてタテミガキを施す中期後半の壺があるが、本資料では見あたらなかった。本資料の胴下半部の外面調整は、ハケ・ケズリ・ナデである。

239~244は、底部側端部が外方に突出するが、底面はややくぼむ程度である。239は外面の風化が著しいが、一部タテハケ調整が残る。内側の器面は剥離によって残っていない。240は外面がタテハケ調整である。突出した底部側端部には強いヨコナデが施される。内面はナデ調整である。241は外面がタテハケ調整である。内面はナデ調整である。外面の底面中央には、円板状の接合痕が残る。242は外面がタテハケ調整である。底部側面及び、底面にはヨコナデが施される。内面はナデ調整である。内面の底面中央には、円板状の接合痕が残る。243は外面がナデ調整である。外面には一部ハケ工具痕が残る。244は外面の風化が著しく、調整が残らない。

245~250・253・254は上げ底状になり、底部側端部が外方に突出する。245は外面調整がハケ後ナデ。内面調整はナデである。底部側面にヨコナデを施す。底面には、大量の砂粒が付着する。246は風化が著しく調整が残っていない。247は内外面の風化が著しいが、底部側面及び底面にヨコナデ調整が残る。248は内外面ともナデ調整である。底部と胴部が接合痕で剥離する。249は外面調整がハケ後ナデである。内面はナデ調整である。底部と胴部が接合痕で剥離する。250は風化が著しく、内外面の調整が残らない。底部側面は接合痕で剥離する。底面にユビのくぼみが残る。253は外面に擦痕状の板ナデ痕がある。底部側面にヨコナデを施す。内面はナデ調整である。254は外面調整がケズリ後ナデ。底部側面にヨコナデを施す。内面はナデ調整である。

238・252は他の中期壺底部に比べて、時期的に遅る可能性がある。238は上げ底状であるが、底部側端部は突出しない。内外面の風化は著しく、調整は判読できない。252は極端な上げ底状にもならず、底部側端部も外方に突出しないものである。器壁は他のものに比べ若干厚く、器面の凹凸が激しい。外面調整はタテハケである。内面調整はナデ。強い2次焼成によって器面がある。

251は鉢底部の可能性もある。底部側端の突出部にはヨコナデが施される。底面にユビのくぼみが残る。

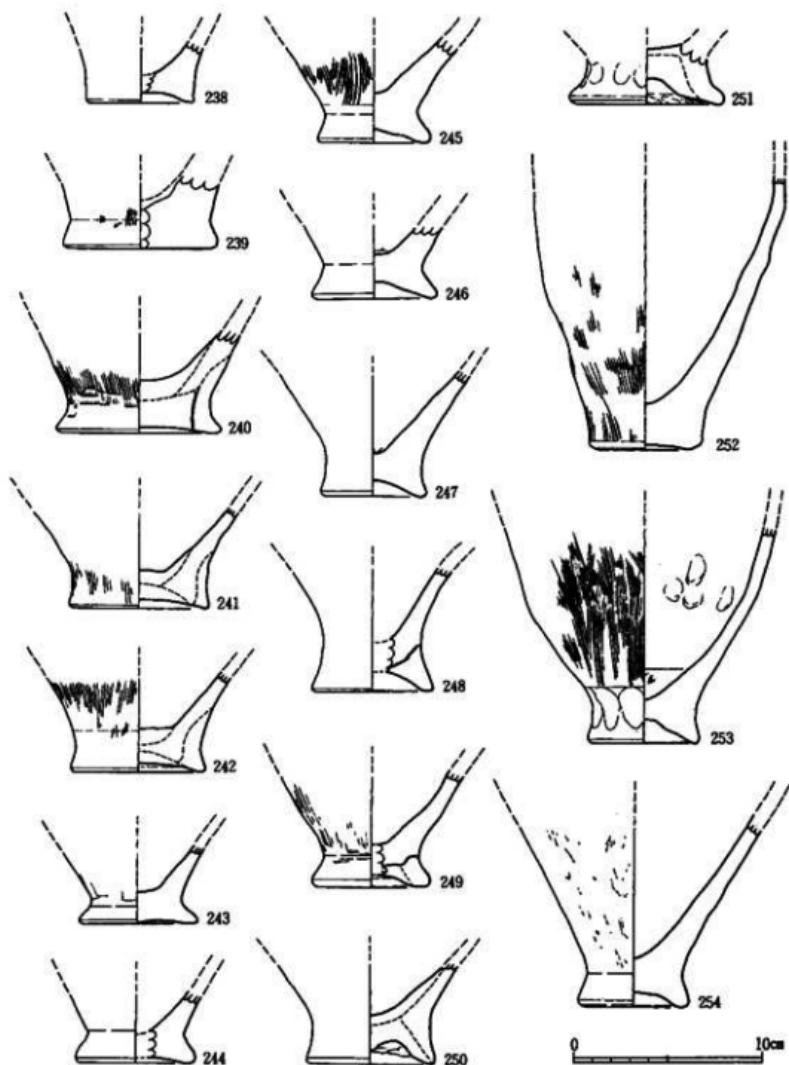


Fig. 54 A区弥生時代中期土器実測図 02

弥生時代後期 (Fig.55, PL.23)

第Ⅰ地区A区では、弥生時代後期の特徴をもつ土器は少ない。

複合口縁壺 (Fig.55-255~259, PL.23)

255は下方に外反する口縁部に、外反方向とは反対に粘土を貼りたし複合口縁壺とする。口縁部は上端、下端とともに面をもつが甘い。口縁部外面には、鋭さを欠いた櫛描き波状文が施される。櫛原体は7条1単位である。頸部外面はハケ後タテミガキ調整、内面はナデ調整である。

256はその器形から、立ち上がりを欠損した複合口縁壺として復元した。しかし、風化が著しく口縁部立ち上がりの接合痕は確認できず、広口壺の可能性もある。257は外反した口縁部を受け口状に屈曲させ、更にその内面に粘土を貼りたし複合口縁とするものである。立ち上がり部は残っていないが、接合痕の痕跡が残っている。内外面の風化が著しく、調整は残っていない。

258・259は頸胴部の境に突帯をもつ。258は立ち上がり部を欠くが、接合痕が明瞭に残る。頸胴間の扁平な突帯上に、斜格子のキザミをもつ。風化及び破片のためヘラの施文順序はわからない。また、施文時に工具の先端が突帯下の胴部にあたり、刺痕を残す。内外面の風化が著しいが、外面には一部ハケ調整が残る。259は立ち上がり基部がわずかに残る。胴部と頸部の屈曲は鋭く、内面に稜線がつく。頸胴間に断面三角の突帯を貼り付けた。内外面風化の為、調整は残らない。

壺 (Fig.55-260-261, PL.23)

いずれも胴部の張る器形である。260は口縁端部にヨコナデを施し、やや跳ね上げぎみになる。内外面の風化が著しく、調整は残らない。261は頸部に強いヨコナデが施され、胴部との間に棱を有する。口縁端部は面をもつが甘い。内外面はナデ調整である。

高坏 (Fig.55-262~265, PL.23)

262は坏部が浅く、口縁部がかなり外側に外反する。風化が激しいが、坏部外面にはハケ痕の上にかすかにタテミガキが確認できる。内面は坏部にタテミガキ調整の痕跡がある。

263~265は脚部である。いずれも、脚裾部がひろがる器形である。263は脚上端部が中空にならない。外面調整は、タテハケ後タテミガキである。内面にはシボリ痕がある。264は部分的に坏基部が残存する。坏部は脚上端の脚部に貼り付けられる。内外面は風化が著しく、調整は残らない。265は3方向に縱2列の円孔をあける。中空で筒状の脚部である。外面は風化しており、調整が残っていない。内面調整はケズリである。

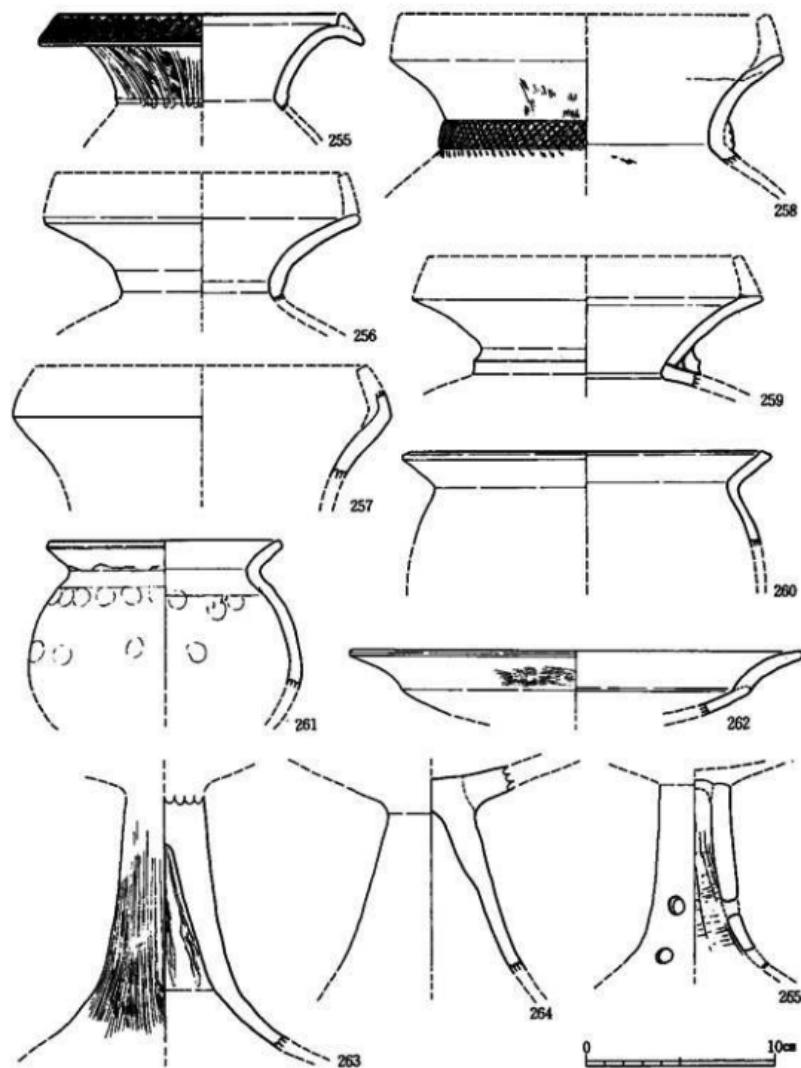


Fig. 55 A区弥生時代後期土器実測図

古墳時代前期～中期 (Fig.56～62, PL.24～31)

吉田遺跡第I地区A区出土土器で、弥生時代中期後半土器について出土量の多いのがこの古墳時代前期～中期の土器である。識別が困難なため、古墳時代前期～中期としたが、大半は古墳時代前期の前半に属するものである。

二重口縁壺 (Fig.56-266-267, PL.25)

266は口縁部の破片である。口縁部の屈曲は鋭く、口縁端部には面をもつ。風化のため調整が残らない。267は胴部上半から頸部までの破片である。口縁部を欠くが、器形の特徴から二重口縁壺の胴部と判断した。球体状に張った胴部にすばまって直立した頸部がつく。胴部外面調整は、ヨコミガキである。胴部内面には、接合痕とシボリ痕を明瞭に残す。

直口壺 (Fig.56-268～273, 57-274, PL.24・25)

268は頸胴間に突帯をもつものである。偏平な突帯を貼り付け、その突帯上をハケ工具で右上がりの刻み目を付ける。風化が著しいが、胴部外面調整はタテハケである。一部に左上がりのタタキ痕が残る。内面は風化のため調整が残らない。

269は胴部上半から頸部までの破片である。口縁部を欠くが、頸胴間にまでヨコナデが及ぶことから、口縁部の短い直口壺に含めた。胴部外面には細いハケが施される。内面はナデ調整で、シボリ痕を残す。中期弥生土器の可能性もある。

270は球体状に張った胴部に、やや外方にひらく口縁部をもつものである。胴部外面には、タテハケを残すが、胴上半部及び頸部は、丁寧にナデ調整が施される。口縁部には、端部より幅2.5cmのヨコナデが施される。胴部内面調整は、タテハケである。ハケ調整が及ばない胴部内面上部には、明瞭に接合痕を残す。

271・272は胴部内面にケズリ調整をもつものである。271は長胴の胴部に、短い口縁部がつく。口縁端面は、丸くおさめる。胴部外面には、左上がりのハケ調整後、頸部よりやや下がった位置にタテハケを施す。272は長胴の胴部に、やや外方に開いた口縁部がつく。口縁部はヨコナデ。胴部には、底部方向からの左上がりのハケを施す。頸胴部の境は、頸部方向からのタテハケ調整である。内面胴部上半には、明瞭な接合痕が残る。

273は口縁部を欠くのみで、体部が完存する。底部は丸底であるが、やや底面がくぼむ。外面調整はタテハケ後ナデ。内面はナデ調整である。古墳時代前期でも、やや時期の遅る可能性がある。

274は胴部上半の破片である。口縁部を欠く。外面は風化が著しい。胴部外面にタテハケ調整を一部残す。胴部内面には、左上がりのハケが施される。

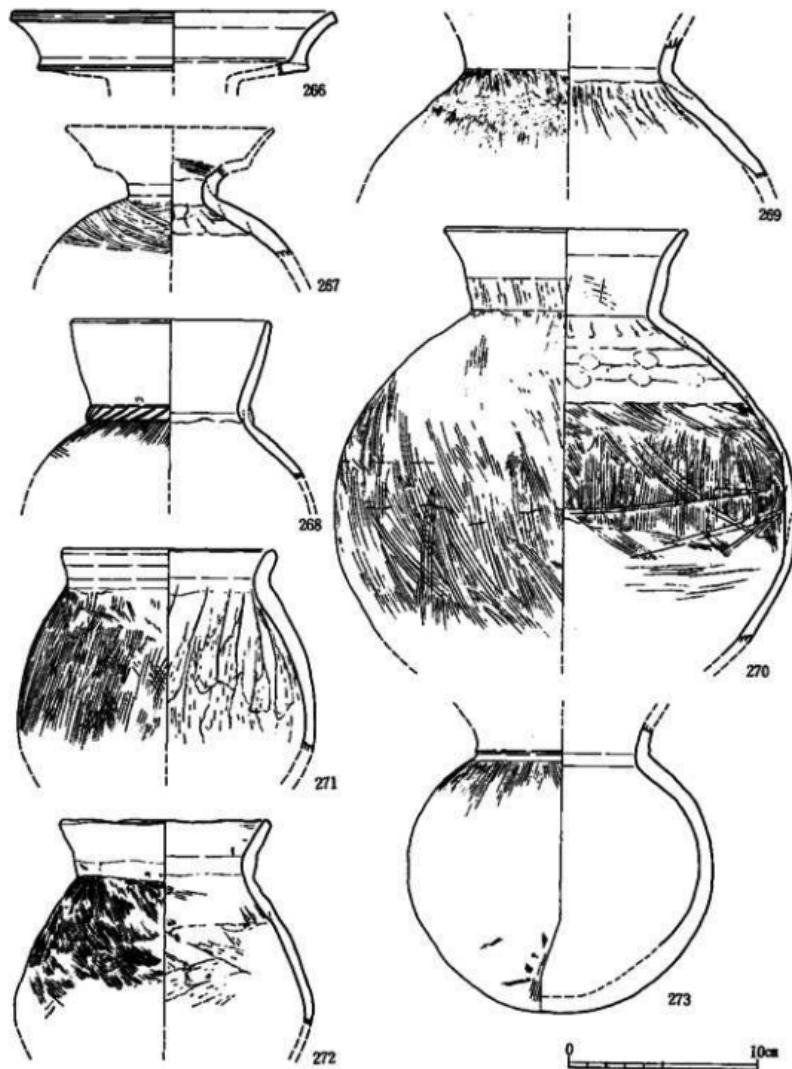


Fig. 56 A区古墳時代前期～中期土器実測図 (1)

山陰系壺 (Fig.57-275, PL.25)

胴部以下を欠くが、口縁が二重口縁であり山陰系壺の特徴を示している。口縁部の外面屈曲部がヨコナデによって突起状に張り出す。外面口縁端部下は、強いヨコナデによって、四線状にくぼむ。口縁端部は、外反気味に丸くおさめる。

山陰系壺 (Fig.57-276-283, PL.25)

276は口径が27cmの大形の壺である。口縁外面の屈曲部は、ヨコナデが施され鋭く突出する。口縁部端面は外反気味に丸くおさめる。胴部は張る。風化が著しいが、胴部外面にヨコ方向のハケ調整が一部残る。胴部内面は、左から右方向へのケズリが施される。ケズリ調整は内面の頸部屈曲部より、やや下がった位置まで達する。内面ケズリは非常に滑らかで、銳利な調整工具によるものと考えられる。

277は口縁部の破片である。口縁外面の屈曲部は鋭い。口縁端部は丸く収める。風化が著しく、調整の判読ができない。

278・279・280は、口縁端部を欠く。278はわずかに胴上半部が残存する。口縁外面の屈曲部は鋭い。風化が著しく、内外面とも調整が残らない。279は胴部上半が残存する。口縁外面の屈曲部はやや甘い。頸部に施されたヨコナデは強く、頸胴間にかすかな稜線ができる。胴部外面にはヨコハケ調整が残る。胴部内面には、左から右方向へのケズリが施される。280はわずかに胴上半部が残存する。風化が著しく、胴部外面には調整が残らない。胴部内面にはケズリ痕が残るが、風化のためケズリ方向がわからない。なお、頸部外面には、煤の付着が残る。

281は口縁部の外面屈曲部がヨコナデによって鋭く突出する。口縁端部は面をもつが甘い。口縁部上端がヨコナデによってつまみだされる。風化が著しく、外面調整は残らない。胴部内面調整は、右から左へのケズリである。ケズリは、頸部屈曲部よりやや下がった位置まで達する。282は口縁部のみの破片である。口縁の外面屈曲部が、ヨコナデによって突起状に張り出す。口縁端部は面をもつ。口縁部上端が、ヨコナデによってつまみだされる。比較的保存状況が良好であり、内外面にヨコナデの条線が明瞭に残る。外面には煤が付着する。283は口縁部から胴部上半まで残存する。胴部はあまり張らない。口縁部の外面屈曲部はやや甘い。口縁端部は丸くおさめる。頸部のヨコナデは強く、頸部が若干くぼむ。内外面はかなり風化するが、外面には細いハケ痕を残す。また、ハケの下地としてタタキ調整の圧痕が確認できる。胴部内面調整は、左から右へのケズリである。ケズリは頸部屈曲部より、やや下がった位置まで達する。

出土遺物

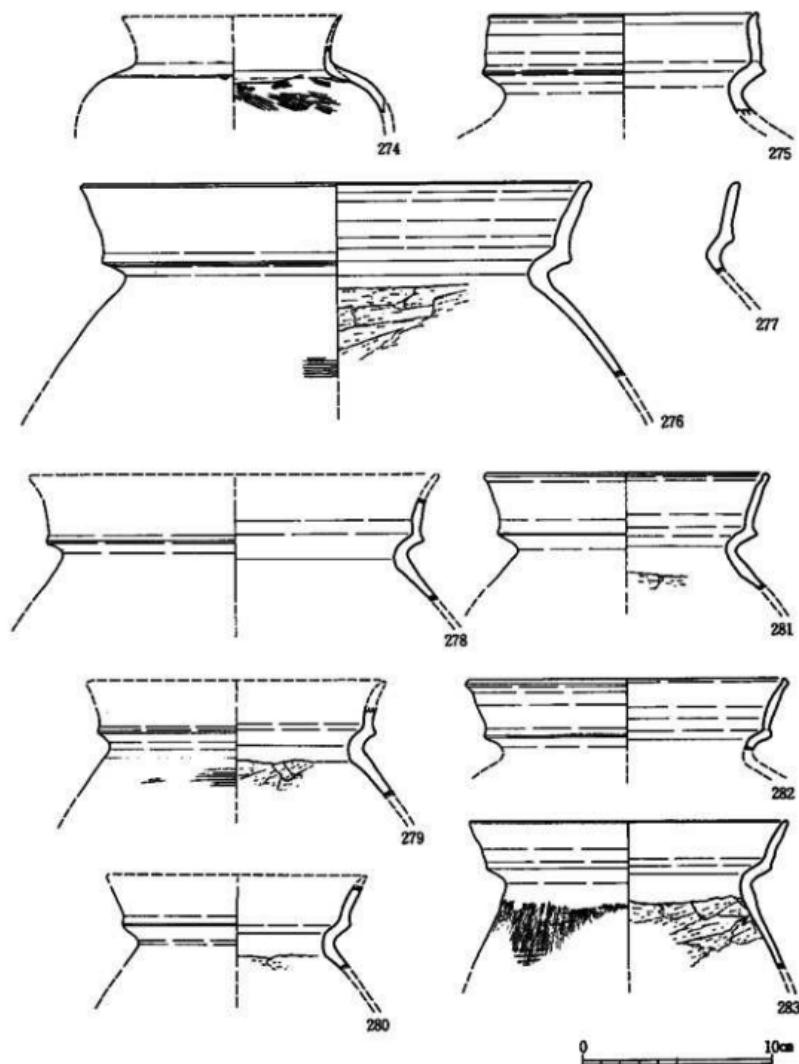


Fig. 57 A区古墳時代前期～中期土器実測図 (2)

タタキ壺 (Fig.58-284~298, 59-299~302, PL.26-27)

タタキ調整を有する壺をまとめた。タタキ調整の記述表現として、原体幅を確実におさえることは不可能なので、タタキ1条のくぼみ幅と3条の幅を1単位として記述する。

284は口縁部がくの字に外反する。口縁端部は丸くおさめる。口縁部には左上がりのハケが施されるが、口縁端から幅2cmはヨコナデによって消される。胴部外面には、水平にタタキ調整が施される（タタキ1条・1.5mm 5mm/3本）。胴部内面は左から右へのケズリ調整である。285はやや外反ぎみで、肉厚の口縁部をもつ。口縁部はヨコナデが施される。口縁端部は、丸くおさめる。胴部外面調整は、やや左に傾いた継のタタキ調整である（タタキ1条・1.5mm 7mm/3本）。胴部内面には左から右方向へのケズリ調整である。口縁部内面には、一部ハケ調整が残る。286は口縁部を欠いた、頸部から胴部にかけての破片である。胴部外面には右上がりのタタキ調整が施される（タタキ1条・1.5mm 7mm/3本）。内面は左上がりのハケ調整である。

287は頸部から胴部の小破片である。頸部内面の屈曲は鋭い。胴部外面に右上がりのタタキ調整が施される（タタキ1条・1mm 5.5mm/3本）。小片のため、内面調整はよくわからない。288は胴上半部の破片である。外面には右上がりのタタキ調整が施される（タタキ1条・2mm 7mm/3本）。また、胴部の最も張った部位には、タタキ後にタテハケが施される。内面の最終調整はナデである。外面胴下半部には煤が付着する。289は胴上半部の破片である。外面には右上がりのタタキ調整が施される（タタキ1条・2mm 1cm/3本）。風化が著しいため内面の調整はわからない。290は胴上半部の破片である。胴部外面には、右上がりのタタキ調整が施される（タタキ1条・2mm 8.5mm/3本）。胴部内面には、右上がりのケズリが施される。291は胴部上半部の破片である。やや風化した胴部外面には右上がりのタタキ調整が施される（タタキ1条・2mm 1.05cm/3本）。内面には左上がりのハケ調整が施される。外面には煤が付着する。

292は胴部の破片である。風化が著しい。右上がりのタタキ調整の痕跡が見える（タタキ1条・2mm 7.5mm/3本）。内面調整は、器面が剥離するため残らない。293は胴部の破片である。風化が著しい。胴部外面に右上がりのタタキ調整が施される（タタキ1条・3mm 1.1cm/3本）。内面調整は左上がりのケズリ調整である。294は胴部の破片である。胴部外面には右上がりのタタキ調整が施される（タタキ1条・3mm 1.1cm/3本）。胴部内面には左上がりのハケ調整が施される。外面には煤が付着する。なお、この破片の上下は内面のハケ調整によって決定した。上下を誤っている可能性もある。295は胴部中央の

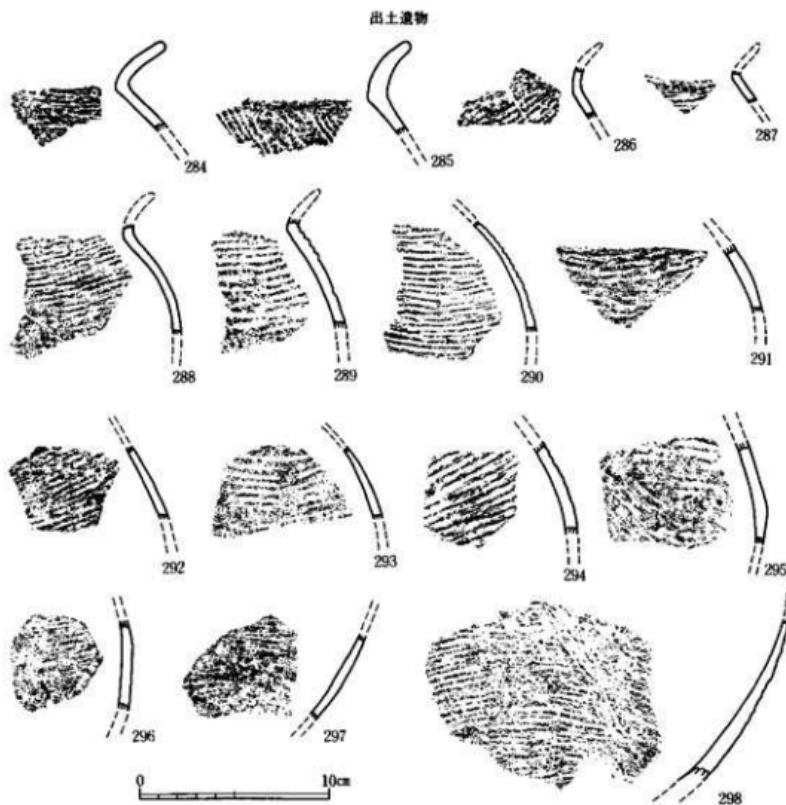


Fig. 58 A区古墳時代前期～中期土器実測図 (3)

破片である。外面には水平方向のタタキ調整（タタキ 1 条・4 mm 1.5cm／3 本）とタタキ上に左上がりの乱雑なハケが施される。内面は縦方向のケズリ調整である。296は胴部中央の破片である。内外面が風化する。胴部外面には右上がりのタタキが施されるが、破片下部にはタタキが確認できない。ナデ消されているものと思われる。内面はタテハケ調整である。

297は胴下半部の破片である。外面の風化が著しい。外面には水平方向のタタキ調整が施される（タタキ 1 条・1 mm 7.5mm／3 本）。破片内面は左上がりのハケが施されている。外面に煤が一部残る。298は胴下半部の破片である。胴部外面には水平方向にタタキ調整が施される（タタキ 1 条・2 mm 9 mm／3 本）。内面は風化していて調整はわからない。

299は口縁部及び胴上半部が、胴下半部と直接接合しなかつたが、その色調・胎土・調整から同一個体として図上復元した。胴はあまり張らず、短く外反する口縁部が付く。胴部中央よりやや下がった位置に胴下半と上半の接合痕をもつ。胴中央部には水平方向のタタキが、胴上半部には右上がりのタタキ調整が施される（タタキ1条・2.5mm 1.1cm／3本）。胴下半部はナデ調整とハケ調整で、タタキが消される。胴部内面は左上がりのハケである。外面下半部は、2次焼成によって赤く変色する。胴中央部には煤が付着する。

300は胴上半部から口縁部の破片である。口縁部は胴部から強く外反する。口縁端部は丸くおさめる。頸部外面には貼りたした粘土紐の痕跡が確認できる。胴部外面には、右上がりのタタキ調整が施される（タタキ1条・1.5mm 1cm／3本）。口縁部外面には、左上がりのハケ調整が施される。胴部内面は、左上がりのハケ調整である。口縁内面は、ヨコナデ調整である。

301は胴部があまり張らず、口縁部が外反する。口縁部には頸部との境まで強いヨコナデが施され、それによって頸部と胴部の境に段が生じる。胴部外面調整は、左上がりの太いタタキである（タタキ1条・5.5mm 1.8cm／3本）。胴部内面の最終調整はナデである。

302は胴部はあまり張らず、ヨコナデによって外反した口縁部がつく。胴部外面には右上がりのタタキ調整が施される（タタキ1条・1mm 5.5mm／3本）が、胴上半部は左上がりのハケ調整によって消される。また、この左上がりのハケ調整を切って、水平方向に連なったハケが施される。胴部内面は、タテケズリ後左上がりのハケ調整が施される。

甕 (Fig.59-303~308, PL.27)

山陰系の特徴を持たず、またタタキ調整のないものをまとめた。しかし、303~305は口縁部のみの破片であって、胴部にタタキが施されていた可能性がないとはいえない。303は口縁端面を丸くおさめる。304は口縁端部に面をもつがやや甘い。頸部と口縁部の接合技法は、300と同じく頸部粘土紐接合技法を用いる。305は口縁端部に面をもつがやや甘い。

306は肩の張った胴部に、外反する口縁部が付く。胴部上半は、左へ傾いたタテハケ調整である。胴部内面はハケ調整後、右から左方向へのケズリ調整である。

307は張った胴部に、直口の口縁部がつくものである。胴部外面には多数の指頭圧痕がつく。胴部内面には、かすかに左上がりのハケ痕が残る。時期が中期に降る可能性がある。

308は胴部が張らず、外反した口縁部がつく。口縁端部は面をもつ。頸部内面には、明瞭な接合痕を残す。胴部外面調整は左上がりのハケ後ナデである。胴部内面調整はタテケズリである。307と同様に時期が降る可能性がある。

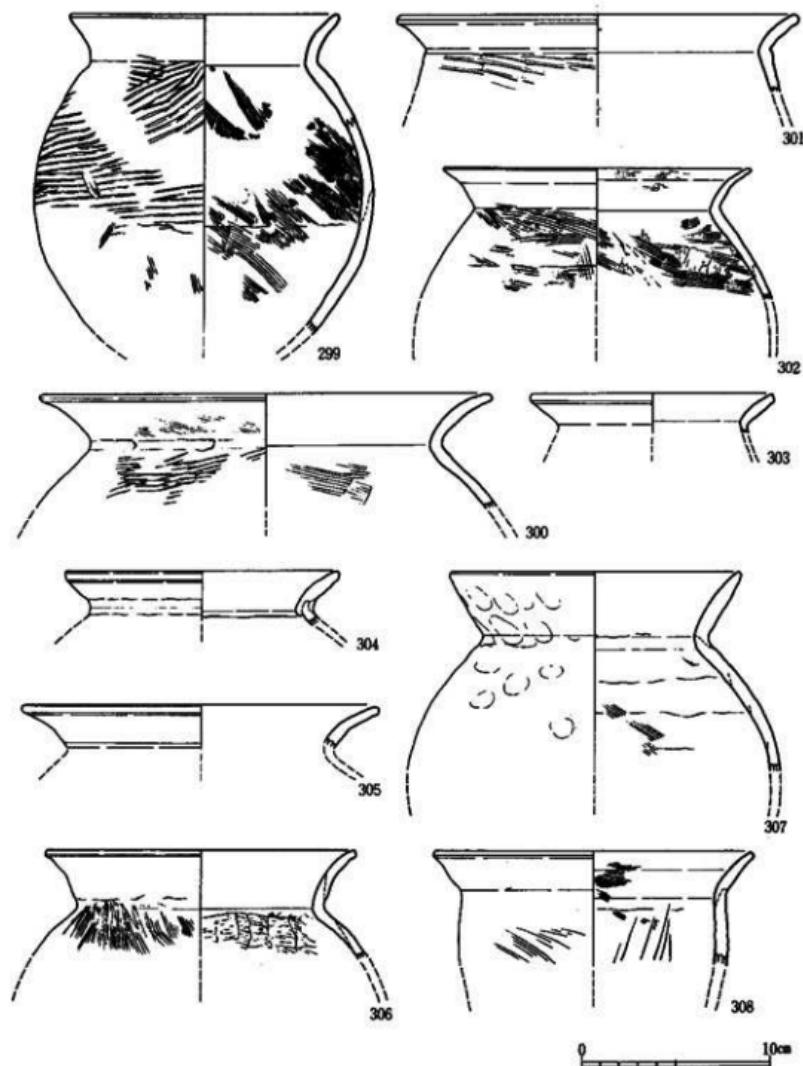


Fig. 59 A区古墳時代前期～中期土器実測図 (4)

高坏 (Fig.60-309~326, PL.28-29)

309は特殊高坏である。口縁部は大きく開く。口縁端部の上下をつまみだし、幅広い面をつくる。口縁部内外面には、幅の細いタテミガキが丁寧に施される。外面には、一部ミガキ調整の下にハケ痕が残る。

310~317は坏部である。310・311は坏部に接合した口縁部の余分な粘土を、下方に突出させて処理するものである。310は口縁部が、ラッパ状に大きく開く。口縁端部は丸くおさめる。内外面共に風化が著しいが、口縁部内面に一部タテミガキ痕が残る。311も口縁部がラッパ状に大きく開く。口縁端部は丸くおさめる。ヨコナデによって、口縁端部のわずかにさがった部分が凹線状にくぼむ。口縁外面はナデ調整のみである。口縁内面はタテミガキが施される。312は口縁部のみの破片であるが、坏部との接合痕で剥離している。坏部と口縁の内面接合部分には、粘土紐を貼りたし補強する。口縁外面はタテミガキ調整である。口縁内面はヨコミガキ調整である。313は坏部と口縁部の屈曲部が、横方向に張り出す。口縁端部を欠く。口縁部はあまり開かない。脚部との接合痕は明瞭である。内外面の風化は著しく、調整は判読できない。

314は口縁部と坏部の屈曲部が付く、丸い。口縁端部は丸くおさめる。内外面の風化は著しいが、外面に一部タテミガキ調整が残る。315は口縁部と坏部の屈曲部が不明瞭で、沈線状になっている。坏部外面調整は、放射状にタテケズリ後ヨコミガキである。口縁部調整はヨコミガキが施される。口縁部内面調整はヨコハケ後タテミガキ、口縁部内面はヨコハケ後タテミガキ調整が施される。なお、成形技法上注目すべき点として、坏部分の脚部接合痕の中心に、棒状工具による刺突痕が見られる。314と315は古墳時代中期まで降るものと思われる。316は坏部に2段の屈曲をもつ高坏である。風化が著しいため、調整は見えない。317は坏部片であるが、風化が著しい。

318~326は、脚部である。318~321・323は、中空のものである。318・321は、脚部の上端で中空部分がつまる。318は裾部が脚部より屈曲し開く。三方に透かしをもつと考えられる。321は脚部よりゆるやかに裾部が開く。風化が著しく、調整が判読できない。319・320・323は、脚部上端に到っても中空のままで筒状になるもの。319は脚部内面に右から左方向のケズリ調整が施される。320は脚部内面に、左から右方向のケズリ調整が施される。324は中空脚の裾部である。裾端部は丸くおさめる。裾部内面は、右から左方向へのケズリ調整である。322・325・326は中実の脚部である。322は脚裾部が大きく開く。326は坏部との接合痕を明瞭に残す。中実の脚上端周囲に坏部を貼り付けている。脚部外面には、ハケ痕を残す。

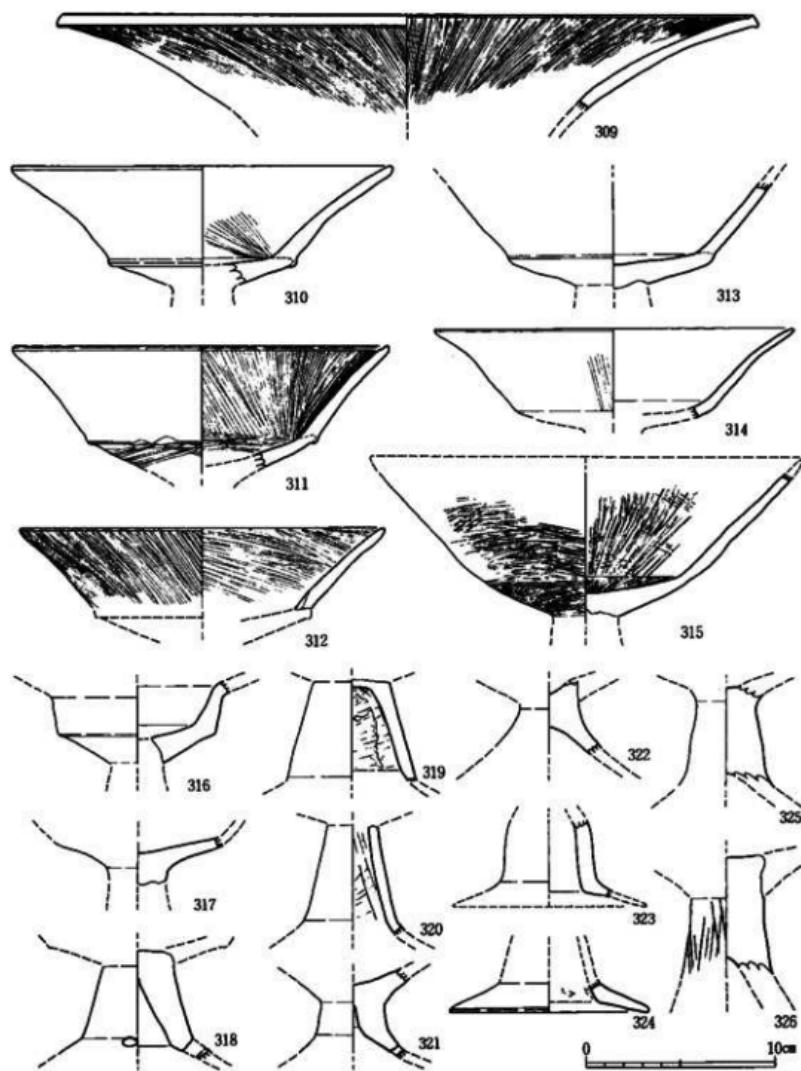


Fig. 60 A区古墳時代前期～中期土器実測図 (5)

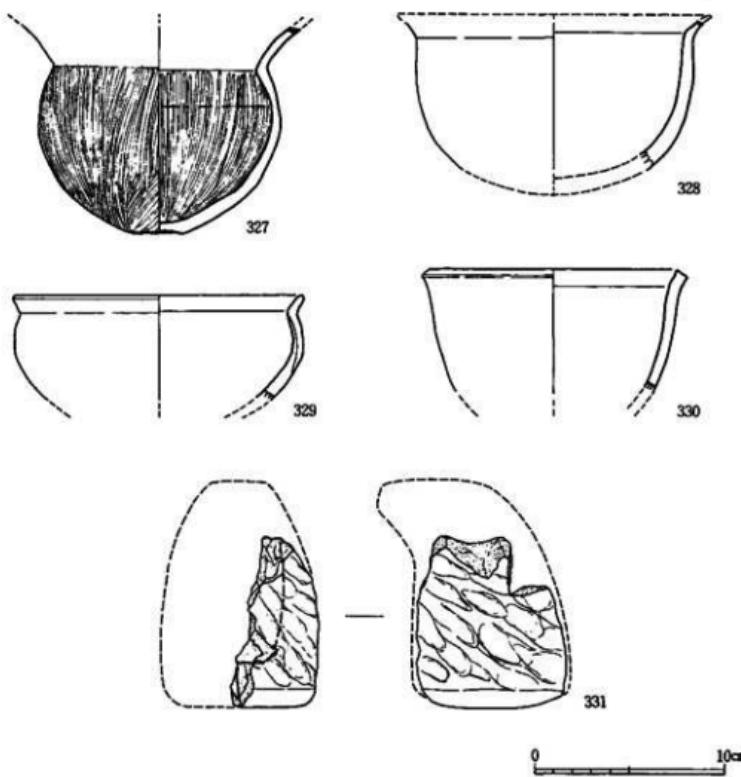


Fig. 61 A区古墳時代前期～中期土器実測図 (6)

鉢 (Fig.61-327～330, PL.24・30)

327は球体状の胴部に大きく開く口縁部をもつ。口縁端部を欠く。底部は小さく、ややくぼむ。胴部は内外面共にタテミガキ調整である。328は風化が著しい。329は頸部がすばまり、短い口縁部をもつ。330は張りのない胴部に、ヨコナデでわずかに屈曲させた口縁部をもつ。口縁端部は面をもつ。329・330は弥生時代中期高坏坏部の可能性もある。

土製支脚 (Fig.61-331, PL.30)

331は鳥帽子形の土製支脚である。外面には多くの指頭圧痕を残す。内部は中空である。

出土遺物

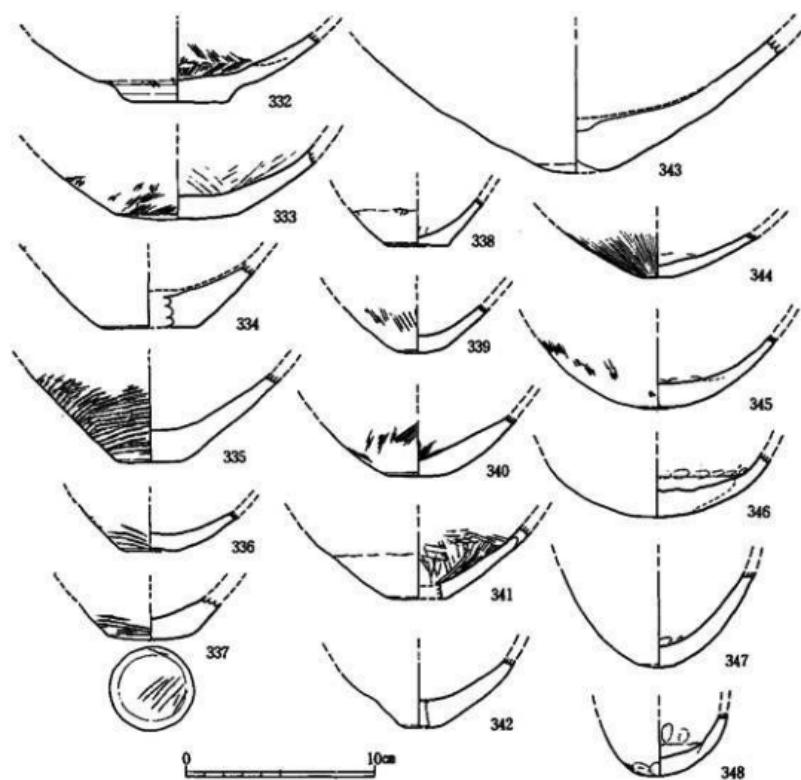


Fig. 62 A区古墳時代前期～中期土器実測図 (7)

底部 (Fig. 62-332~348, PL. 30・31)

丸底化、或は丸底化の傾向がある壺・甕・鉢の底部である。弥生時代後期の底部も丸底化を示すものがあるが、識別できないため、上記の特徴をもつ底部を全て古墳時代前期～中期の底部に含めて記述する。332は球体の胴部から突出し、しっかりとした底部をもつが、胎土・色調・形態から古墳時代前期のものとした。333～340は底部の端がやや丸くなりかけるもの。335～337は外面にタタキ調整をもつ。甕底部と思われる。343・344は、底部が極めて小さくなるもの。345～348は、丸底になっているもの。342は底部に孔をもち鉢の底部と思われる。341も破片のため確認はできないが、孔有する可能性は高い。

古墳時代後期 (Fig.63-349~355, PL.32)

6世紀末から7世紀初頭の特徴をもつ須恵器をまとめた。349・353・354は「第Ⅲ地点擅乱」の同一註記をもつ。これらの土器は、同一時期にまとまると思われる。このことから、第Ⅰ地区A区の第Ⅲ地点に何らかの須恵器集中区があったことが予想される。なお、土師器でこの時期の特徴を示すものは見あたらなかった。

横瓶 (Fig.63-349, PL.32)

349は横瓶の胴部である。口頸部を欠く。側部内面には胴部成形時の円孔と、それをふさいだ粘土円板の接合痕が明瞭に残っている。外面は平行タタキを消して、カキ目が施される。内面には同心円のタタキが施される。特に粘土円板周辺には、接合のための同心円タタキが密に施される。

坏蓋 (Fig.63-350, PL.32)

350は坏蓋天井部の破片である。口縁部を欠く為、全形を知ることはできないが、天井部は扁平である。天井部には、回転ヘラケズリが施される。ヘラケズリは坏蓋正位の位置で、時計方向の回転である。

壺蓋 (Fig.63-351, PL.32)

351は内面のかえりが、蓋の口縁部よりもかなり下方にのびており、その端面もするどい。また口径も8.1cmとやや小形である。擬宝珠様のつまみをもつ坏蓋と考えるには異様であり、台付壺の蓋と考えた。

壺 (Fig.63-352-353, PL.32)

352は壺の口縁部片である。口縁端部下端をヨコナデによって下方に突出させる。その際、口縁端面下部にはヨコナデによる1条の凹線がはいる。口縁端部上面もヨコナデによってややつまみあげられる。内外面に自然釉の付着が激しい。353は胴部下半の破片である。外面には平行タタキと、その上にカキ目が施される。内面は同心円タタキが施される。ユビナデによって、同心円タタキが一部消される。

高坏 (Fig.63-354-355, PL.32)

354は長脚高坏の脚部である。透かしは持たない。脚部中央に1条の凹線をもつ。脚部と裾部の屈曲は著しく、屈曲部が下方に突出する。裾端部下端はヨコナデによって下方に突出する。その際、端面には1条の凹線がはいる。その特徴から無蓋と思われる。355は口縁部・脚部を欠き、どのような形態であるかはわからない。おそらく無蓋と思われる。脚部は大きく開く。354と胎土・色調が似る。

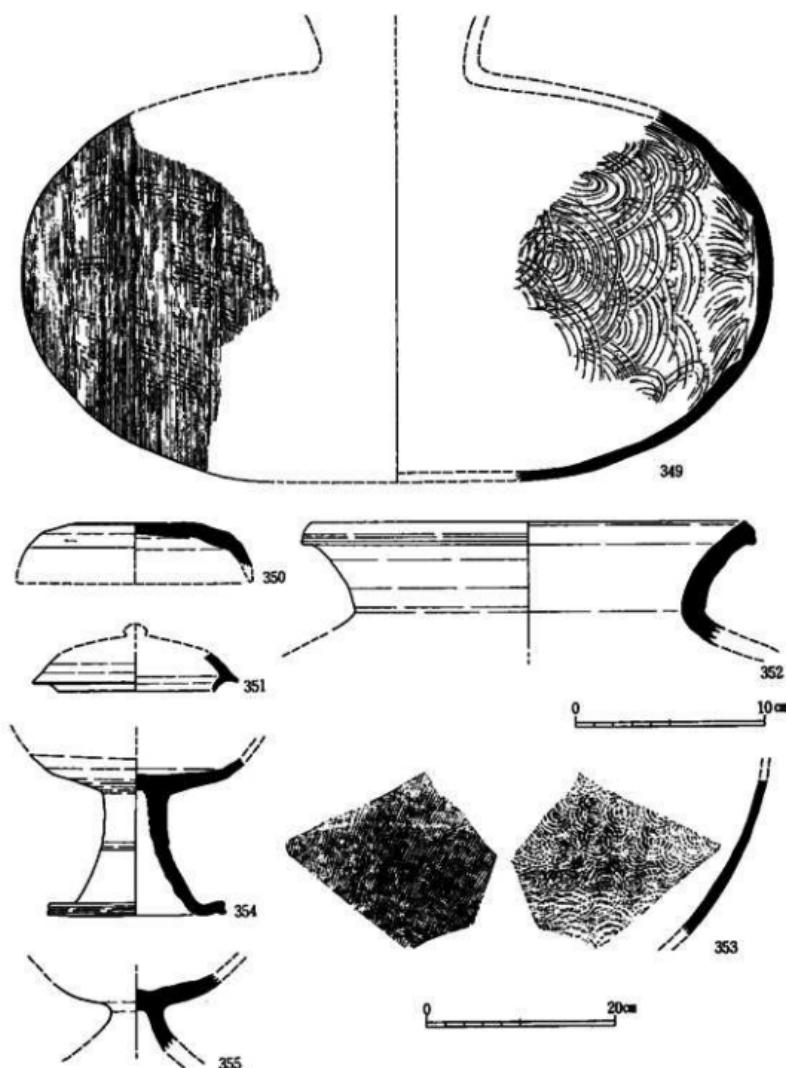


Fig. 63 A区古墳時代後期土器実測図

古代前半 (Fig.64-356~373, PL.33)

ここで古代前半と分類したのは、8世紀～9世紀の特徴を有する須恵器とそれに伴うと考えられる土師器である。中世を中心とする土師器壇や瓦質土器の一類に対しての便宜的な区分であって、歴史的な区分に必ずしも対応しない。

須恵器坏蓋 (Fig.64-356-357, PL.33)

356は擬宝珠様のつまみが付くと思われるが、その部分を欠くため明かではない。天井部は平坦である。端部は下方への突出が丸く甘い。357は全体的に膨らみをもつようである。裾部が屈曲し、天井部と境をつくる。端部は下方への突出が丸く甘い。外面に自然釉が付着する。

須恵器坏 (Fig.64-358~368, PL.33)

358は高台を持たない坏である。胴部が斜め直線に立ち上がる。口縁部を欠く。底部は回転ヘラ切りの痕跡を残す。

359・360は高台を持つもので、やや底径の大きいものである。359は胴部が斜め直線に立ち上がり、口縁部端部は丸い。高台は底部中心よりに貼り付けられる。高台内端が下方に突出し接地面となる。復元底径は9.3cmである。360は胴部を欠く。底面にはヘラ切りが一部残る。高台は内端があり下方に突出せず、広い接地面を有する。高台が底部中心よりに貼り付けられる。復元底径は10.5cmである。

361～368は高台をもつもので、底径の小さいものである。高台には2種類の形態がある。361～364は高台内端が下方に突出し、接地面となるものである。高台は底部中心よりに貼り付けられる。361は高台内端が高く突出する。復元底径は6cmである。362は底面にヘラ切りの痕跡を残す。復元底径は7.2cmである。363の復元底径は7.2cmである。364は焼成が不良で、風化する。復元底径は8.7cmとやや大きい。

365～368は高台が内端・外端とも接地、あるいは外端だけが接地するものである。これらは、359～364の高台が底部中心よりに貼り付けられるものとは異なり、胴部と底部の屈曲部に接して高台が貼り付けられる。365は高台外端が突出気味になる。高台の貼り付けも若干内側に入るようである。底径は8.4cmである。366は高台が細く、突出する。高台がややつぶれて、粘土が外端にはみ出す。外面には高台の接合痕が明瞭に残る。底径は7.2cmである。367は焼成が不良で、風化する。外面には高台の接合痕が明瞭に残る。底径は8.4cmである。368は底部にヘラ切りの痕跡が残る。外面には高台の接合痕が明瞭に残る。底径は6.9cmである。365～368は、359～364の坏に対して時期が降ると考えられる。

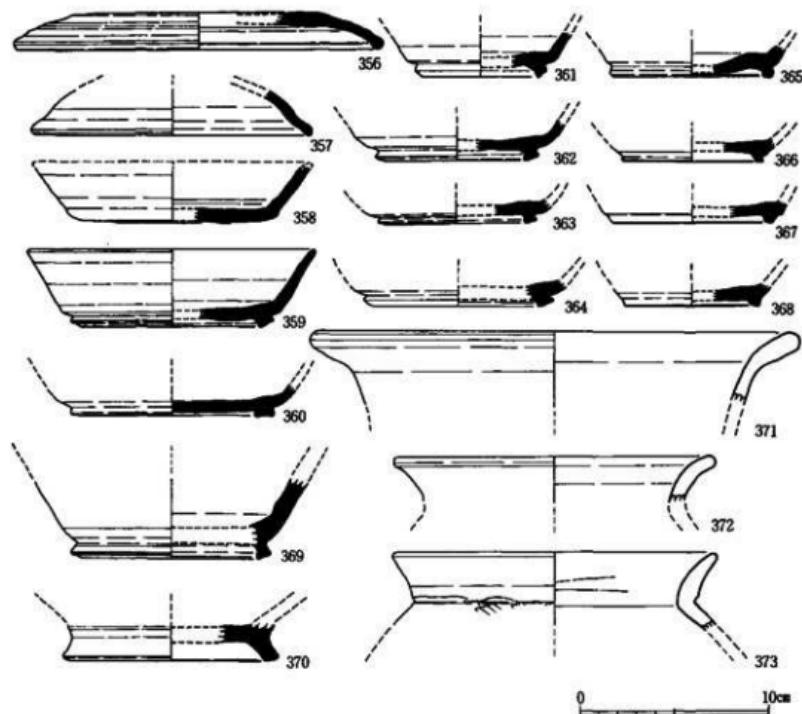


Fig. 64 A区古代前半土器実測図

須恵器壺 (Fig.64-369-370, PL.33)

369は長頸壺の底部と考えられる。高台内端が下方に突出し、接地面をなす。高台内端は鋭く横方向に突出する。370は胴部を欠失し、底部と高台のみの為、壺以外の器形の可能性もある。高台はやや外側に張り出しが、内端はさほど突出しない。

土師器壺 (Fig.64-371~373, PL.33)

371は口縁部が外反し、口縁端面が丸く肥厚する。風化が著しい。胴部が欠失する為、器形は不明であるが、長壺になると思われる。372は口縁部が外反する。口縁端面は丸くおさめる。胴部は欠失する為不明である。373は肩が張り、短い口縁部が付く。口縁端面は丸くおさめる。胴部にはハケが施される。373は古墳時代後期の可能性もある。

古代後半～中世 (Fig.65-374～407, 66-408～417, PL.34～36)

ここで扱う古代後半～中世の名称は、古代前半でも記述したように歴史区分ではなく、須恵器を中心とした一群と、土師器塊・瓦質土器を中心とした一群を分別する為の便宜的なものである。吉田遺跡第Ⅰ地区A区から出土した土師器塊や瓦質土器はさほど多くない。埋滅したもの除去して、ほとんど固化している。

土師器塊 (Fig.65-374～398, PL.34～35)

374は数少ない口縁部の破片である。胴部外面にはロクロ成形による凹凸を残す。口縁端部は丸くおさめる。376～380は高く突出した高台をもち、高台端部が面をもつもの。376～379の高台の横断面が細いのに対して、380は肉厚である。376は高台の剥離面に、糸切りの痕跡が残る。

375・381～383は高台が高く突出するが、先端が尖るもの。375は土師器塊のなかで、唯一全形を知ることができるものである。口縁端部は丸い。外面には、ロクロ成形による凹凸を残す。内面は丁寧にミガキ調整が行われ、炭素が吸着する。383も同じく内面に、炭素が吸着する。381は底部に、糸切りの痕跡が残る。

384～390は、やや低い高台が付くもの。高台端面は丸い。384は高台が肉厚である。内面には炭素が吸着する。385も高台が肉厚である。外面に煤が付着する。389・390は高台の接合が粗く、接合痕が明瞭に見える。

391～394は低い断面カマボコ状の高台が付くもの。いずれも胎土は精製で、色調は淡黄色を呈する。また、風化も著しい。

395～398は高台が底面ではなく、胴部側に貼り付けられる。397・398は高台が機能を果たさず、底面が地についてしまうもの。396～398は内面に炭素を吸着させる。この胴部側面に高台を貼り付ける塊は、内面の底部中心がくぼむという特徴をもつ。

土師器塊 (Fig.65-399, PL.35)

399は破片のため明らかにしないが、高台がなく平底であったと思われる。器高が高く、皿と呼ぶよりは塊と呼ぶべきものである。内外面の風化が著しい。

土師器皿 (Fig.65-400～407, PL.35)

400～407は土師器の小皿である。402は器壁が薄く、胴部が直線的に開く。403～407は糸切り痕をもつものである。403は風化が著しく、拓本を示すことができなかった。406は口縁端部を欠くが、ほぼ器形を推測することができる。外面の凹凸は、粘土紐の接合によるものである。407は糸切りによって、底面が突出する。

出土遺物

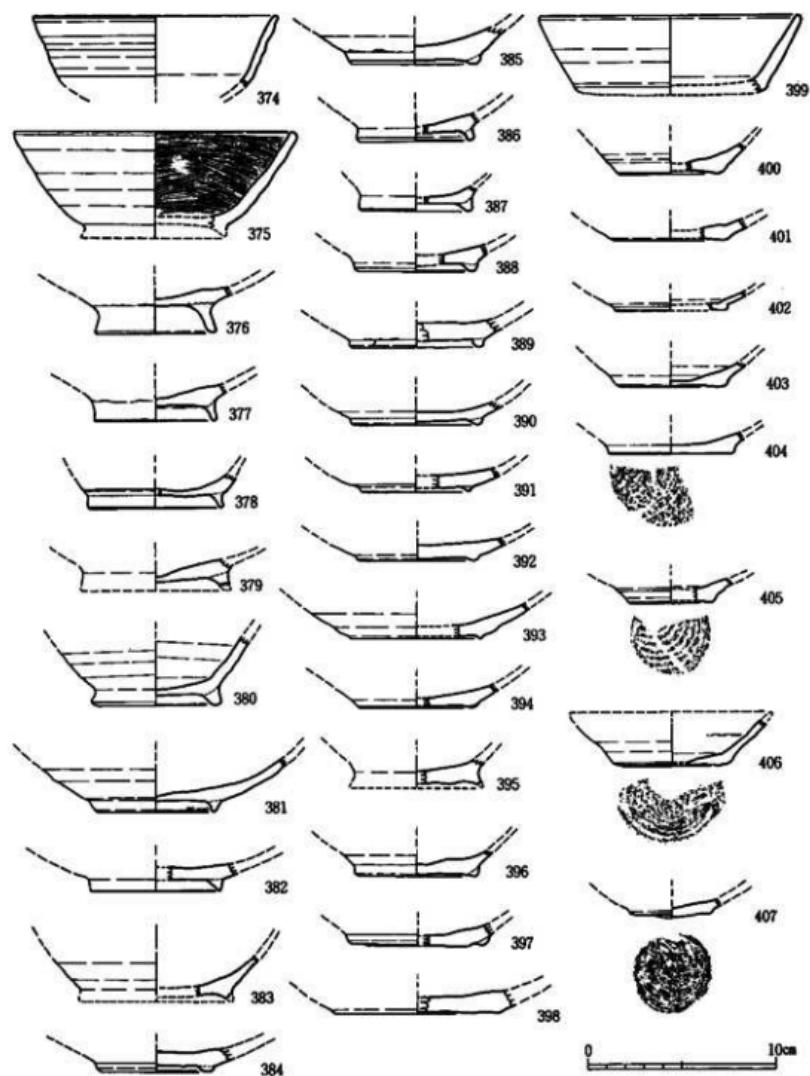


Fig. 65 A区古代後半～中世土器実測図 (1)

瓦質足鍋 (Fig.66-408~414, PL.36)

408・409は足鍋のI.I縁部から、胴部上半までの破片である。408は直立気味の胴部から、口縁部がヨコナデによって水平方向に屈曲する。頸部内面には稜がつく。口縁端部は面を持つ。外面には煤の付着が著しく、調整が判読できない。器面の凹凸が激しい。内面には右から左方向へのハケが施される。

409はやや弯曲した胴部に、上方へ伸びた口縁部がつく。口縁外面が2段状に屈曲する。口縁内面端部が、やや跳ね上がる。外面頸部は強いヨコナデによってくぼむ。内面には稜がつく。外面には煤の付着が著しく、調整が判読できない。内面には横方向のハケが施されるが、ナデ消される。

410~414は足鍋の脚部片である。410は脚基部の破片である。風化が著しいが、ケズリ調整と思われる凹凸が基部に残る。411は脚基部の破片であるが、胴部との接合部分で剥離している。脚部には手のにぎりしめ成形による凹凸が残る。412は脚部の破片である。摩耗が激しく、調整は残らない。413・414は脚端部である。413は摩耗が激しく調整は残らない。かすかに先端が指によって屈曲する。414は手のにぎりしめ成形による凹凸が残る。先端を指でつまんで屈曲させ獸脚状にする。

408は岩崎足鍋編年のⅡ型式の特徴をもつ。409は岩崎編年のⅢ型式の特徴をもつ。414の獸脚状の脚端部はⅠ~Ⅲ型式の特徴である。しかし、Ⅰ型式は土師質のため、瓦質の414はⅡ式以降のものである。第Ⅰ地区A区出土の足鍋は、Ⅱ~Ⅲ型式の時期幅でおさまり、足鍋の中では比較的古いものである。

瓦質鉢 (Fig.66-415, PL.36)

胴部上半を欠くため全形はわからない。広口で胴上半部に肩をもった壺になる可能性もある。ただし、底径は10.2cmと小さい。底部から斜直線的に胴部が立ち上がる。胴上部にヨコナデによるくぼみがあるが、これより上部を欠損する。底部側面はケズリによって面取りを行う。

須恵質鉢 (Fig.66-416, PL.36)

底部の破片である。平底から斜直線的に胴部が立ち上がるが、上部を欠くため全形は不明である。底面には棒状の圧痕がある。底面から上約2.5cmの胴側部外面に、ハケ調整の始点が横一列に並ぶ。ハケ施文個の器面が、一段下がる。底部側面には2カ所に指頭痕が認められ、生乾き状態での作業台からの移動が考えられる。内側の器面は使用痕により、平滑になっている。底面を用いて何かをすりつぶすような行為がおこなわれたのであろう。

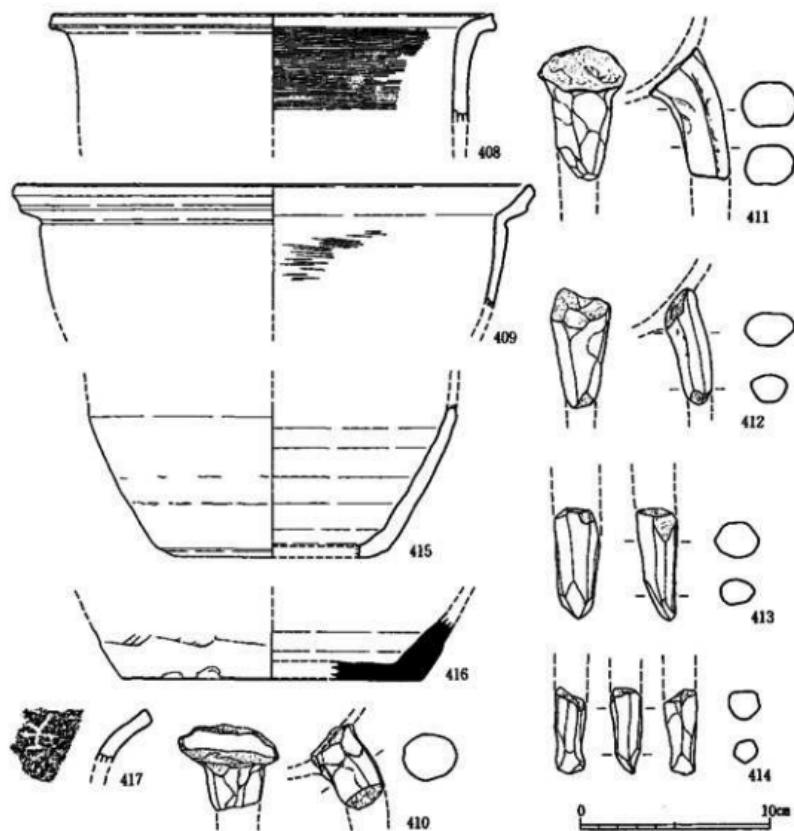


Fig. 66 A区古代後半～中世上器実測図 (2)

文字入り土器片 (Fig.66-417, PL.36)

口縁部の破片である。器形としては、甕のようなものが想定される。口縁端部は面をもつ。風化のため摩耗が激しい。瓦質土器と考えられる。

この土器片は内面に、「天」の字状の線刻が施されている。この線刻は、焼成前にヘラ状の工具によって印刻されたとかんがえられる。これが「天」の字であるとすれば、口縁端部方向を下にして字が書かれていることになる。

石器 (Fig.67~71, PL.37~40)

第Ⅰ地区A区出土の石器類は、その出土状況が不明なため、時期を限定することができない。おそらくは、その大半が弥生時代に属するのであろうと思われる。

出土石器類の主要な石材は、凝灰岩、サスカイト、黒曜石、姫島産黒曜石の4種類であるが、いずれも製品がほとんどなく、剥片が大半を占める。よって、上述のものは、石材ごとにまとめて記述を行う。これらとは異なり、製品の打製石斧、磨製石斧、凹石、敲石、石庖丁、扁平片刃石斧、不明磨製石器、砥石は石材に関係なく、器種ごとに記述を行った。

凝灰岩 (Fig.67~418~426, 68~427, PL.37)

418は錐状石器である。不定形の剥片の両側縁の下半部に、腹面側より急傾斜の二次加工を加えて、錐状に先端を尖らせる。背面には大きく自然面を残す。419は刃器である。剥片の先端に、腹面側から鈍い角度の調整を行い、厚みのある刃部を作り出している。

420~426はいずれも剥片である。420は左側縁に二次加工のある剥片である。422は使用痕のある剥片である。背面には上下両方向からの剥片剥離の面がみられる。この後、頭部調整を施し、打点を確保した上で、当剥片の剥離を行っている。左側縁部に、微細な剥離面がみられ、使用痕と思われる。427は石核である。様々な方向より剥片剥離作業を行い、現状では三角柱状を呈す。正面中央部の稜には敲打によるつぶれがあり、石核としての機能終了後に転用されたことがわかる。裏面は1つの面より成るが、意図的な打撃ではなく、アクシデント的な剥落により生じたと思われる。

サスカイト (Fig.68~428~436, PL.37)

428~436はいずれも、剥片あるいは碎片である。428は先端縁辺に、使用痕がある。430は2次加工のある剥片である。剥片の上部を切断、または欠損した後に左上端部に調整を加えている。剥片下部は欠損している。431は他のサスカイトに比べ、石質がやや異なる。金山産のサスカイトの可能性がある。

黒曜石 (Fig.69~437~442, PL.38)

姫島産の灰色を呈する黒曜石と区別して、漆黒色のものをまとめた。産地は同定を行っていないのでわからない。

437は石核である。様々な方向から、剥片剥離を行っている。正面と裏面には小さな連続した剥離面がみられ、頭部調整を行いながら剥片剥離作業を行ったことがわかる。438~442は剥片である。438の腹面は背面から腹面の3回の調整剥離により、素材剥片の打点付近を大きく抉り取っている。抉りはバルバスカーに達している。

出土遺物

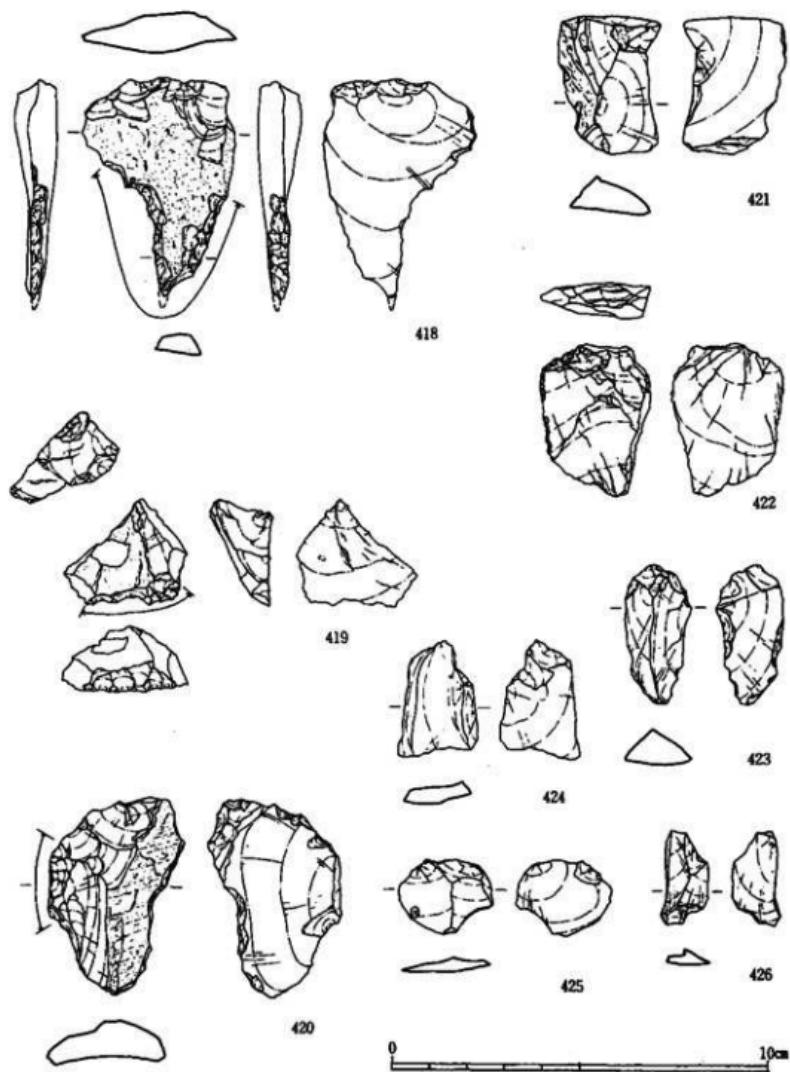


Fig. 67 A区石器実測図 (1)

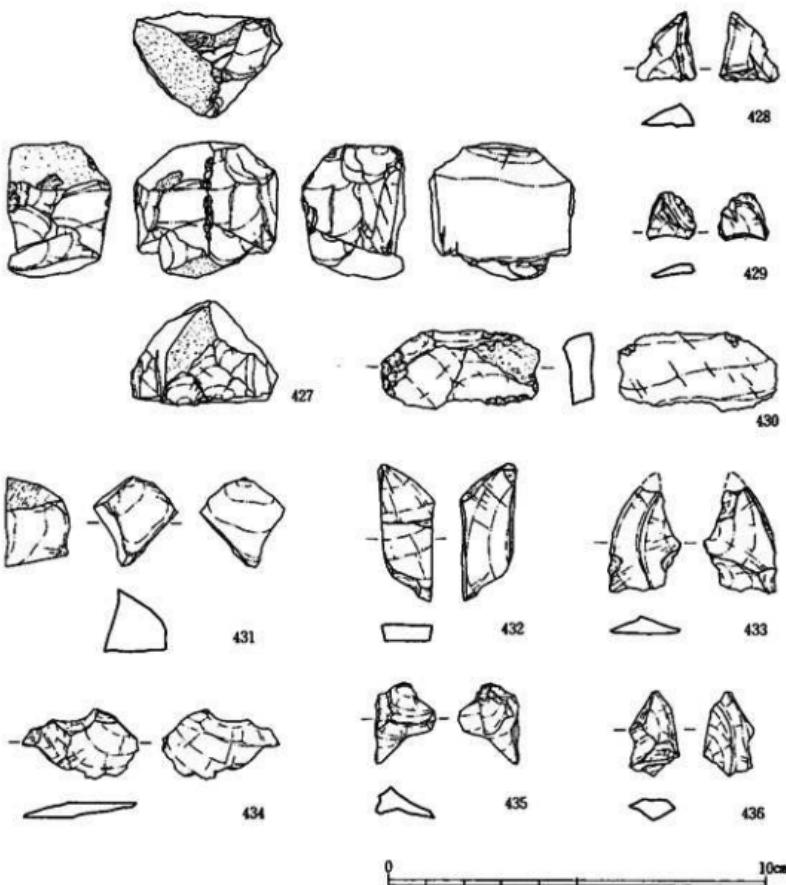


Fig. 68 A区石器実測図 (2)

姫島産黒曜石 (Fig.69-443~447, PL.38)

灰色を呈する、不純物の多い黒曜石である。443~447はいずれも剥片であるが、自然面を残すものが多く、石器製作において、小形の転石が使用されたと推定される。

443は断面三角形を呈する。左側縁部はクサビ状になるが、縁辺にそって小さな階段状の剥離面がみられ、使用による刃部のつぶれの可能性がある。自然面を2面残す。

出土遺物

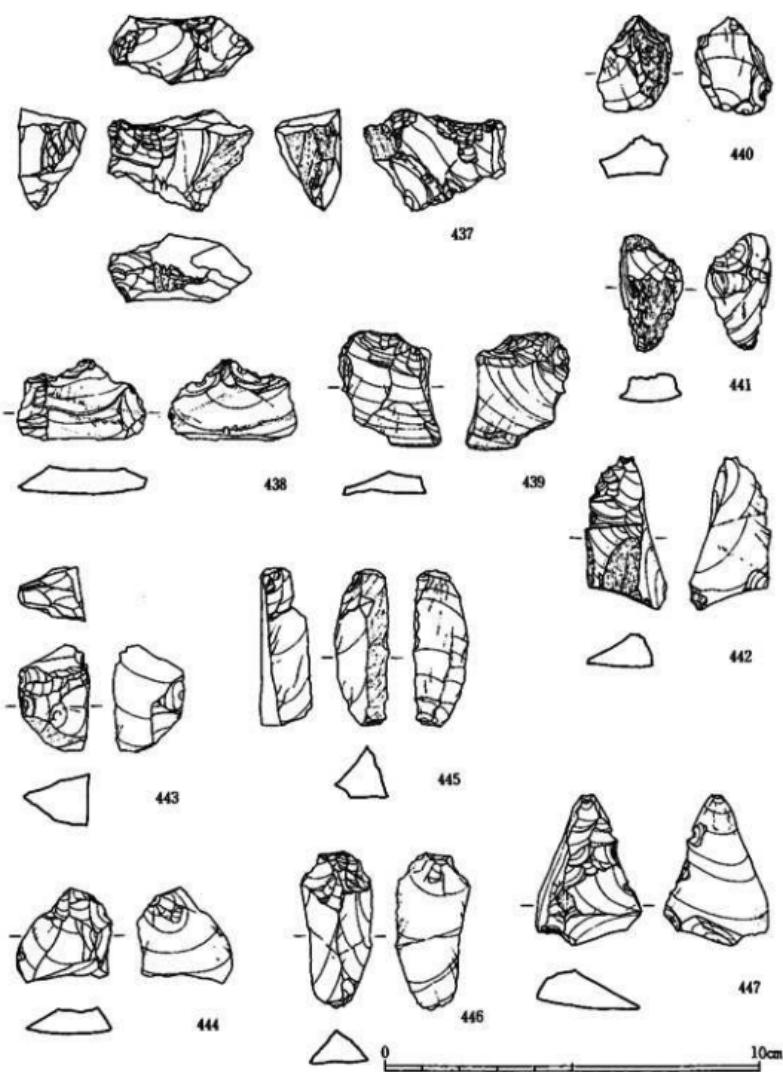


Fig. 69 A区石器実測図 (3)

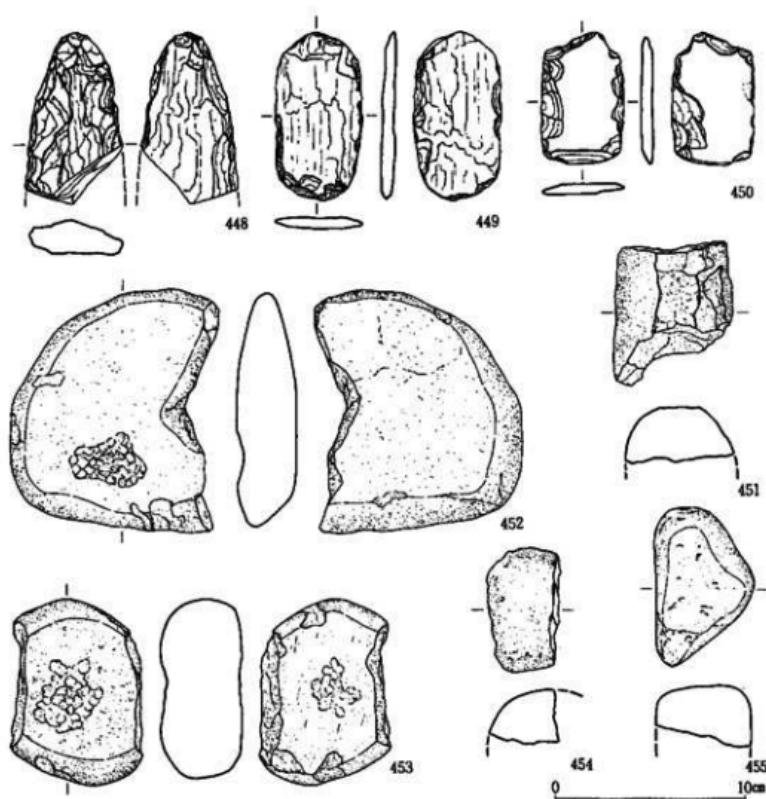


Fig. 70 A区石器実測図 (4)

打製石斧 (Fig.70-448~450, PL.39)

448・449の石材は結晶片岩、450の石材は頁岩である。

磨製石斧 (Fig.70-451, PL.39)

太形蛤刃石斧の破片と推定される。石材は凝灰岩である。

凹石 (Fig.70-452-453, PL.39)

453は両側縁を打ち欠き、正背両面に敲打によるくぼみをもつ。

敲石 (Fig.70-454-455, PL.39)

455は風化のために使用痕が確認できなかったが、石材・形状から判断した。

出土遺物

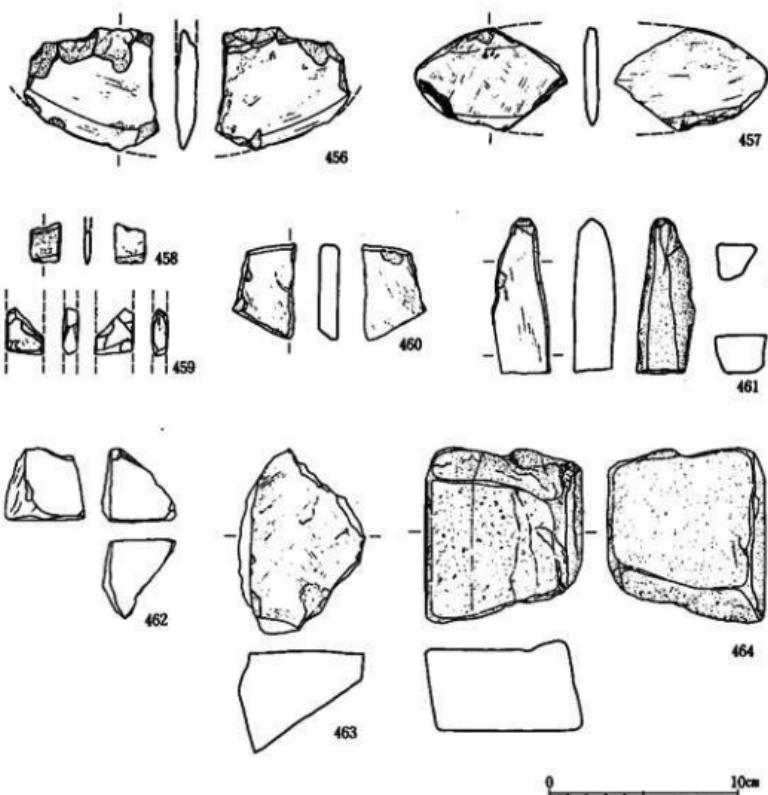


Fig. 71 A区石器実測図 (5)

石庵丁 (Fig. 71-456~458, PL.40)

456の石材はカクセン石安山岩、457・458の石材は頁岩である。いずれも両刃である。

扁平片刃石斧 (Fig. 71-459, PL.40)

459の石材は頁岩である。上部・下部ともに欠損する。

不明磨製石器 (Fig. 71-460, PL.40)

460の石材は、カクセン石安山岩である。

砥石 (Fig. 71-461~464, PL.40)

いずれも破片である。464は中世以降のものであろう。

4 小結

本章は、昭和41年に発掘された吉田遺跡第I地区A区の報告をおこなった。しかし、既に25年以上の歳月が過ぎ、発掘調査時の図面も散逸しており、遺物が中心の報告とならざるを得なかった。

遺構

本調査は、吉田遺跡調査団発足以前の緊急調査である。工事で露出した遺物包含層を掘り広げるもので、相当困難な状況下での調査であったと推察される。

第4トレンチの「弥生時代中期の土器が充填した不整形のピット」以外、遺構の有無は不明である。ただ、古墳時代前期前半の土器が比較的まとまりをもち、器形もある程度まで復元できることから、遺構に伴っていた可能性がある。

出土遺物

弥生時代前期

第I地区A区は、弥生時代前期よりも以前の遺物は出土していない。弥生時代前期の土器はいずれも小破片で風化するものが多く、二次堆積によってこの地区にもたらされたものと考えられる。その中にあって、21の小形精製壺は特筆できるものである。その器形は、板付IIa式小形壺の特徴を有する。板付IIa式の小形精製壺は、北部九州においても遠賀川以東にはほとんど分布しない。

ただし、その風化が他の第I地区A区出土土器に比べて著しく、「吉田第I-A-1の2」の註記も他の土器には見られない。風化が著しいのは精製土器によるためかもしれないが、第I地区A区以外の遺物である可能性も捨てきれない。この21の土器のみが、第I地区A区出土前期弥生土器において異質であり、特殊なものである。その出土状況が明かでないことが惜しまれる。

この他、前期弥生土器に関して、直線文の問題が挙げられる。35のように一見ヘラ描きのようにみえるが、鋸歯状圧痕のつかない貝殻の押圧によって直線文が施されるものがある。また、70のように羽状文は鋸歯状圧痕のつく貝殻によるが、直線文は鋸歯状圧痕のつかない貝殻によるものがある。この特殊文様と直線文で貝殻を使い分ける例は、他遺跡にもかなりある。¹⁹⁾また、25のように木目がつかない板状工具の押圧直線文がある。

弥生時代中期

第I地区A区出土土器の主体を占める。量及び中期後半という時期的なまとまりは「弥生時代中期の土器が充填した不整形のピットを検出した」ことに起因する。復元できるも

のも多数あり、出土状況を確定できれば良好な一括資料となる。これらの土器のなかには北部九州系の特徴をもった土器が含まれており、その器種内容も豊富である。「不整形のピット」出土土器は、山口県弥生時代中期後半の編年作業において、重要な位置を占めることになる。また、北部九州との併行関係を考えいく上でも重要な資料である。

弥生時代後期

出土量は極めて少い、風化も著しく二次的な堆積によってもたらされたものであろう。

古墳時代前期～中期

弥生時代中期後半の土器について出土量が多い。時期的にも古墳時代前期前半にまとまり復元できることから、遺構に伴った可能性が高い。

二重口縁壺（266・267）、直口壺（268・270～272）、山陰系土器（275～283）、タタキ壺（284～302）、壺（303～306）、高坏（309～313・316）、鉢（327）、土製支脚（331）などが古墳時代前期前半土器のセットとなるのである。湯田楠木町遺跡第Ⅰ地区土器捨て場出土の土器が同時期と考えられる。¹²⁾ 墓内布留¹³⁾式併行である。

古墳時代後期

量は少ないが、破片が大きく時期的にまとまり出土地点も「第Ⅲ地点」に集中する。何らかの須恵器集中区があった可能性がある。

古代前半

8世紀から9世紀の幅をもってとらえたが、8世紀代の土器が多い。これは調査区が近接した中央図書館増築予定地M-16¹⁴⁾でも同様な現象が見られた。概報にあるA区の「崖下の低湿地では、土師器と須恵器の破片と木製品を含む黒色のシルト層が広がり（以下略）が、中央図書館増築予定地M-16で検出された第4層黒褐色粘質土遺物包含層か旧河川跡と対応する可能性は高い。

古代後半～中世

A区から出土した土師器塊は挿図配置で示したように、376～380の一群、375・381～383の一群、384～390の一群、391～394の一群の順に変遷していくものと考えられる。河村吉行氏の編年によれば、A区出土の土師器塊には10世紀初頭～13世紀後半の時間幅が与えられる。なお、395～398はあまり類例を見ないものである。胸部側に貼り付けられた高台を退化と見るか、高台ではないものと見るかによって、その位置づけは異なる。内面に炭素を吸着させるものが多く、黒色土器として古く位置づけることも可能である。今後の検討が必要である。

[注]

- 1) 山口大学吉田遺跡調査団「山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報」(山口大学、1976年)
- 2) 1992年12月19日に田崎博之氏に実見していただき、ご教示を得た。
- 3) 武末純一「須玖式土器」(『弥生文化の研究』4、1987年)
- 4) 菊川町教育委員会「下七見遺跡Ⅰ」(1989年)
- 5) 山口県教育委員会「奥正椿寺遺跡Ⅱ」(『南国大崎ニュータウン 奥正椿寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡』、1985年)
- 6) 河池遺跡出土の甕は、胴部外面下半調整がミガキである。周東町教育委員会『河池遺跡』(1982年)
- 7) 岩崎仁志「防長地域の足鍋について」(『山口考古』第17号、1988年)
- 8) 伊東照雄「貝殻紋」(『弥生文化の研究』3、1986年)において、ハマグリなどの縦齒状痕を残さない貝殻工具の使用を想定した施文実験が行われている。
- 9) 金開忠・佐原真『弥生土器』Ⅱ(『弥生文化の研究』3、1986年)のPL.11上段の解説として、「施描紋と組合せて使うこともある(上段は縦齒板のみ貝殻紋)」と記述されているが、直線文も無縦齒の貝殻文である。このように、無縦齒の貝殻による押圧沈織は、認識されてないことが多い。
- 10) 山口市教育委員会『湯田楠木町遺跡第Ⅰ地区発掘調査概報』(1975年)
- 11) 奈良県立橿原考古学研究所『矢部遺跡』(1986年)
- 12) 山口大学埋蔵文化財資料館「中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅱ、1985年)
- 13) 河村吉行「防長における古代～中世の土器」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅱ、1985年)

注

Tab. 3 出土遺物観察表

法量()は復原値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③高さ)	色 (④外面⑤内面)	胎土	詳記	備考
A区 埋 級						
1	漆生土器	甕 ①(21.4)	淡青褐色	1mm前後の砂粒をわずかに含む	吉田表面採集	
2	漆生土器	壺底部 ②(10.8)	黒灰色	1mm前後の砂粒を多量に含む	吉田表面採集	底面にモミ圧痕
3	漆生土器	高环	黄灰色	1~2mmの砂粒を含む		内外面風化
4	土器器	高环	淡赤褐色	精製粘土		内外面風化
5	土器器	高环	赤褐色	精製粘土	剥離不可能	風化著しい
6	漆生器	壺蓋 ①(8.6)	灰青色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	吉田表面採集	天井部に自然剥離層
7	漆生器	壺蓋 ①(15.2)	青灰色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	S41.6.24 平川(校内)	
8	漆生器	壺蓋 ①(14.8)	灰青色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		
9	漆生器	壺 ①(13.4)②8.8③4.5	灰青色	精製粘土	吉田表面採集	外面に自然剥離層
10	漆生器	壺 ②(7.2)	暗青灰色	微砂粒を含む	S41.6.24 平川(校内)	底面ヘラ切り痕
11	漆生器	壺 ②(7.2)	暗青灰色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	S41.6.24 平川(校内)	
12	漆生器	壺 ③(7.8)	灰青色	微砂粒を含む	S41.6.24 平川(校内)	
13	上部器	壺 ③(5.6)	淡灰青色	精製粘土		内外面の風化著しい
14	瓦質土器	鍋 ①(30.0)	灰白色	精製粘土		外面に一部剥離層
15	瓦質土器	足頭	白灰色	1~2mmの砂粒を含む	S41.6.24 平川(校内)	
16	瓦質土器	足頭	淡白灰色	2~3mmの砂粒を多量に含む	1966.6.26 平川⑥	風化著しい
17	瓦質土器	足頭	明黄色	1mm前後の砂粒を多量に含む	S41.6.24 平川(校内)	部分の付着により変色
18	瓦質土器	足頭	淡灰赤色	1mmの砂粒をわずかに含む		風化著しい
19	瓦質土器	足頭	青灰色	微砂粒を含む	S41.6.24 平川(校内)	
前期弥生土器						
20	大形壺	口縁 ①(38.8)	黑色	2~3mmの石英粒を含む		
21	小形壺		赤褐色	精製粘土、1~3mmの砂粒をわずかに含む	吉田I-A 1472	風化著しい
22	中形壺	口縁 ①(13.5)	淡褐色	1~2mmの石英粒を含む		
23	甕	①(29.4)	淡褐色	2~3mmの石英粒を含む 砂粒多く含む	S41.7.8 第四擾乱層	内面の風化著しい
24	甕	①(27.8)	灰白色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.15 平川排水管 廻向管包含層	風化著しい
25	壺		淡褐色	1~2mmの石英粒を含む	吉田I-A 4トレンチ	板状工具による押圧沈縮
26	壺		乳白色	1~2mmの石英粒、赤色鐵鉄粉を含む	1966.7.8 吉田第II地 台成瓦層 表層	
27	壺	②(6.4)	暗褐色	1~2mmの砂粒を含む が、胎土に鐵鉄粉を含む	1966.7.13 平川吉田 第2-3トレンチ層	板状工具による押圧 沈縮
28	壺	底部 ②(9.2)	淡褐色	2~3mmの石英粒を多量に含む	判別不可能	板状工具による押圧 沈縮のおさま
29	壺	底部 ②(5.6)	①暗褐色 ②暗褐色	1~2mmの石英粒を多量に含む	吉田I-A 第4トレンチ	板状工具による押圧 沈縮のおさま
30	壺	底部 ②(9.0)	乳白色	2~3mmの石英粒を含む	吉田I-A S41.7 第三トレンチ	微細鉄正直のつづかない 板状工具による押圧沈縮
31	壺	底部 ②(5.0)	明褐色	1mmの砂粒を含む	吉田I-A 第1トレンチ	微細鉄正直のつづかない 板状工具による押圧沈縮
32	壺		黃灰色	1~2mmの砂粒を含む		板状工具による押圧 沈縮
33	壺		灰白色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田I-A	沈縮工具不明
34	壺		淡青灰色	1~2mmの砂粒を含む		板状工具による押圧 沈縮
35	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.15 吉田第I.A カクラン	微細鉄正直のつかない 板状工具による押圧沈縮
36	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.18 4トレンチ	ヘラ括き沈縮
37	壺		赤褐色	1mmの砂粒を含む		ヘラ括き沈縮

吉田遺跡第Ⅰ地区A区の調査

法量()は復原量

番号	器種	直 径(cm) (①口幅②底径③唇高)	色 調 (①外面②内面)	胎 土	註記	備 考
38	壺		淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	S41.7.16 4トレンチ	縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
39	壺		淡黃灰色	2~3mmの砂粒を含む		貼り付け突起
40	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
41	壺		①淡褐色 ②灰白色	1~2mmの砂粒を少々含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
42	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
43	壺		淡褐色	無砂粒を多量に含む		ヘラ端き透鑿文
44	壺		淡灰褐色	無砂粒と赤色斑を含む	S41.7.13 吉田I-A 第1トレンチ砂層中 S41.7.16 第1トレンチ砂層中	縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
45	壺		①暗褐色 ②灰白色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田I-A 第1トレンチ砂層中 41.7.16	北造園に竹苞状の刺文
46	壺		淡灰褐色	1~2mmの砂粒を少し含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
47	壺		淡褐色	1~3mmの砂粒をわずかに含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
48	壺		淡褐色	2~3mmの砂粒をわずかに含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
49	壺		暗灰褐色	2~3mmの砂粒をわずかに含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
50	壺		淡褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
51	壺		淡赤褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
52	壺		淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	S41.7.15 吉田I-A カクラン	縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
53	壺		淡褐色	2~3mmの砂粒を含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
54	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
55	壺		淡赤褐色	2~3mmの砂粒をわずかに含む	S41.7.14 第4トレンチ サンド坑場	縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
56	壺		明褐色	1~2mmの砂粒を含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
57	壺		暗灰色	2~3mmの砂粒を含む	S41.7.15 カクラン	縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
58	壺		①暗褐色 ②灰白色	無砂粒を含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
59	壺		淡赤褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
60	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
61	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	吉田I-A 第4トレンチ S41.7.10	縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
62	壺		暗赤褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
63	壺		①暗褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
64	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
65	壺		淡灰褐色	1~2mmの砂粒を含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
66	壺		①暗褐色 ②灰褐色	2~3mmの砂粒を含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
67	壺		暗灰色	無砂粒を多量に含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
68	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
69	壺		明褐色	1~2mmの砂粒を含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
70	壺		①赤褐色 ②暗褐色	2~3mmの砂粒をわずかに含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
71	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
72	壺		淡灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.10 第1トレンチ	縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
73	壺		淡褐色	無砂粒を含む	S41.7.16 第1トレンチ	縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
74	壺		赤褐色	1~2mmの砂粒を含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
75	壺		淡赤褐色	1~2mmの砂粒を含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
76	壺		暗赤褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕
77	壺		①淡褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を含む		縦條状斑痕のつく貝殻による押捺凹痕

出土遺物観察表

法量()は復原値

番号	器種	注意(①外側②内側③高さ)	色調 (①外側②内側)	胎土	註記	備考
78	壺		暗赤褐色	2~3mmの砂粒を含む		網目状圧痕のつく貝殻による押圧状文化
79	壺		淡灰白色	2~3mmの砂粒を含む	S41.7.14 第1トレ 第2層	網目状圧痕のつく貝殻による押圧状文化
80	壺		灰褐色	赤色斑紋を多量に含む		外衝赤色織物地帯
81	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		網目状圧痕のつく貝殻による押圧状文化
82	鉢		赤褐色	1~2mmの砂粒を含む		ヘラ抹き比縫
83	壺		暗褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む		ヘラ抹き比縫 口縫部にキザミ
84	壺	①暗褐色 ②淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	S41.7.14 古田I~A	3条のヘラ抹き比縫	
85	壺		暗褐色	2~3mmの砂粒を含む	古田I~A A面	2条のヘラ抹き比縫
86	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		3条以上のヘラ抹き比縫 鏡口縫部にキザミ
87	壺	①暗褐色 ②淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	古田I~A 第4トレ	3条のヘラ抹き比縫	
88	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	古田I~A 4トレン チ S41.7.18	2条以上のヘラ抹き比縫 鏡口縫部にキザミ
89	壺		淡褐色	1~3mmの砂粒を含む	古田I~A 第4トレ チ 包含層	5条以上のヘラ抹き比縫 鏡口縫部にキザミ
90	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		5条以上のヘラ抹き比縫
91	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.12 古田Iトレ チ 包含層下90cm	6条以上のヘラ抹き比縫 鏡口縫部にキザミ
92	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	古田I~A 66.7.18 清水溝南区	6条以上のヘラ抹き比縫 鏡口縫部にキザミ
93	壺	①黒色 ②暗褐色	1~2mmの砂粒を含む			板工具による押圧
94	壺	①黒褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む			3条以上の沈縫
95	壺	①暗褐色 ②淡褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む	古田I~A A面	2条のヘラ抹き比縫	
96	壺	①暗褐色 ②淡褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む		2条のヘラ抹き比縫	
97	壺		赤褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7.13 第1トレ チ 砂の中	3条以上の板工具による押圧
98	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		3条の比縫
99	壺	①黒褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を含む			削り出し実縫
100	壺	①黒褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を含む			7条以上のヘラ抹き比縫
101	壺	①黒灰色 ②赤褐色	1~2mmの砂粒、赤色 斑紋を含む			6条以上のヘラ抹き比縫
102	壺	①黒褐色 ②淡褐色	2~3mmの砂粒を含む			沈縫下に列点文
103	壺		淡灰褐色	1~2mmの砂粒を含む		沈縫間に列点文
104	壺	①黒褐色 ②淡褐色	微砂粒を多量に含む	古田I区A区 4トレ チ 包含層	沈縫間にハケ工具による列点文	
105	壺		淡灰褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む		沈縫間に列点文
106	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		3条の比縫、沈縫間に列点文
107	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		沈縫下に竹管状の網文
108	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	第1トレシナA 1966.7.12	沈縫下に竹管状の網文
109	壺		黒灰色	1~2mmの砂粒を含む		沈縫下に竹管状の網文
110	壺	底部 ①9.0	淡赤褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	1966.7.12 古田I場区 A区 第1トレシナ	板工具による崩剥 層のおさえ
111	壺	底部 ②(11.0)	①深褐色 ②淡赤褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	古田I 壊乱層 S41.7.15	風化著しい 外側に一部ハケ痕
112	壺	底部 ②(10.4)	淡褐色	2~3mmの砂粒を少し含む	S41.7.14 第4トレ チ 捨出層	風化の為調査見えず
113	壺	底部 ②(10.4)	淡赤褐色	2~3mmの砂粒を含む	S41.7.15 古田I 第I	風化の為調査見えず A区からん層
114	壺	底部 ②(12.0)	①淡赤褐色 ②淡褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	S41.7.4 第4トレシナ	風化著しいが、一部 にハケを残す
115	壺	底部 ②(10.4)	淡褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	S41.7.16 第4トレ	風化著しい
116	壺	底部 ②(9.2)	①深褐色 ②淡褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	S41.7.18 第I~A A面	土中の鉄分が付着する
117	壺	底部 ②(8.8)	①深赤褐色 ②黑色	1~2mmの砂粒を少し含む	第4トレシナ包含層	風化著しい

吉田遺跡第Ⅰ地区A区の調査

法量()は復原値

番号	器種	生長量(cm) (①(1)②(2)③(3)④(4))	色調 (①外向色調面)	胎土	生紀	備考
118	壺 底部	③(6.0)	淡黄灰色	2~3mmの砂粒を多量に含む	第Ⅰ地区A区 第4トレンチ 古谷場	鉄分の付着著しい
119	壺 底部	②(7.4)	淡褐色	2~3mmの砂粒を少し含む	吉田 I-A 横手下 L S41.7.17	例面ハケ後ナデ 内面ミガニ
120	壺 底部	②(5.6)	①淡褐色 ②黑色	1cm以下のお砂粒を多量に含む	S41.7.15 平川原	外表面風化 内面ナデ
121	壺 底部	②(7.0)	淡褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む	S41.7.15 拝木瀬南ヘキ	内外面風化
122	壺 底部	②(8.0)	褐色	3~4mmの砂粒を含む	1966.7.17 第4トレンチ 古谷場	外表面ハケ、内面ナデ、底部に土色斑
123	壺 底部	②(8.4)	①赤褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を含む 黒斑模を含む	S41.7 吉田 第4トレンチ	外表面ハケ 内面ナデ
124	壺 底部	②(8.6)	①赤褐色 ②淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	1966.7.17 平川 カタラン場	外表面ハケ 内面ナデ
125	壺 底部	②(10.2)	①灰褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.15 第4トレンチ	外表面ハケ 内面ハクモ
126	壺 底部	②(8.8)	①淡褐色 ②淡褐色	3~4mmの砂粒を含む	1966.7.16 4トレンチ	外表面ハケ 内面ナデ
127	壺 底部	②(8.0)	①淡褐色 ②淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	—	外表面ハケ 内面風化
128	壺 底部	②(7.4)	①赤褐色 ②淡褐色	1~3mmの砂粒を含む	S41.7.15 第4トレンチ 2号-2 古谷場	外表面ハケ後ナデ 内面風化
129	壺 底部	②(7.0)	①赤褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	—	外表面ハケ後ナデ 内面風化
130	壺 底部	②(8.0)	①赤褐色 ②黑色	2~3mmの砂粒を多量に含む	第4トレンチ 41.7.17	外表面ハケ後ナデ 2%焼成
131	壺 底部	②(9.0)	①赤褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.10 1トレンチ 包含層(下)	外表面ハケ後ナデ 内面ナデ
132	壺 底部	②(7.8)	灰褐色	2~3mmの砂粒を少し含む	古田 第I-A	外表面ナデ(かすかにハケ面)
133	壺 底部	②(9.4)	褐色	1~2mmの砂粒を少し含む	吉田 第I-A 古谷場	内外面ナデ
134	壺 底部	②(6.8)	①黑色 ②淡褐色	1~3mmの砂粒を少し含む	吉田 第I-A S41.7.15 10号-1 古谷場(上)	2%焼成により器面のハクモが著しい
135	壺 底部	②(8.4)	淡褐色	2~3mmの砂粒を少し含む	S41.7.15 第4トレンチ	内外面の風化著しい
傳生時代中期						
136	北部九州系無把器	①(4.6)②(10.2)③(42.0)	①淡褐色 主黑色	カドの先いチャート 粒を含む	S41.7.13 平川 吉田	底部穿孔、出土状況写真あり
137	北部九州系壺	①(13.2)	淡褐色	1cm前後の砂粒を多量に含む	1966.7.13 平川遺跡	彫形口縁
138	北部九州系壺		淡赤褐色	1mmの砂粒を含む	—	内外面の風化著しい
139	北部九州系壺		淡赤褐色	1mmの砂粒を含む	S41.7.17 吉田 第I A 古谷場	内外面の風化著しい
140	北部九州系壺		淡褐色	1cm前後の砂粒をわずかに含む	S41.7.15 吉田 第I A 横手場	内外面風化
141	北部九州系壺		淡褐色	精製粘土	—	—
142	北部九州系広口壺	①(23.6)	明褐色	精製粘土に1mm前後の 砂粒を含む	S41.7 吉田 第I A	内外面の風化著しい
143	北部九州系広口壺	①(19.8)	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.15 吉田第I-A 古谷場	—
144	北部九州系広口壺	①(24.6)②(20.2)	透明褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む	S41.7.15 吉田 第I A 4トレンチ③	出土状況写真あり
145	小形短縦縫	①(8.8)②(4.0)③(12.3)	①淡褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7 吉田 第I A 4トレンチ	内外面の風化著しい
146	小形短縦縫	①(10.0)②(5.4)③(16.7)	①暗白色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	—	器面のハクモ著しい
147	小形短縦縫	①(12.2)	暗褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	—	—
148	小形短縦縫	①(8.8)	黑色	1cm前後の砂粒を多量に含む	—	出土状況写真あり
149	垂下口縦縫	①(30.0)	褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7.10 吉田第I-A トレンチ 包含層(上)	垂下部は瓦文である
150	垂下口縦縫		淡赤褐色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 第I-A区 第4トレンチ 包含層	風化著しい
151	垂下口縦縫	①(33.0)	暗灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.15 平川排水溝	垂下部に竹籠質による山形文
152	垂下口縦縫	①(31.8)	淡褐色	1~2mmの砂粒と赤色 鐵粒を含む	S41.7.15 平川原	11種内面に凹削浮文をもつ
153	垂下口縦縫	①(24.6)	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	—	—
154	垂下口縦縫	①(22.2)	淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	41.7.12 体生包合層 深さ31cm	—
155	垂下口縦縫		①黑色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	—	—
156	垂下口縦縫		淡褐色	1~2mmの石英粒を含む	S41.7.15 吉田 第I A カクラン	風化著しい

出土遺物観察表

法量()は復原値

番号	器種	重量(g) (①口横②底径③高さ)	色調 (①外面②内面)	胎土	註記	備考
157	壺下口縁壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		
158	壺下口縁壺		灰白色	2~3mmの砂粒を含む		
159	壺下口縁壺		淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	S41.7.17 古田 第1A 第4トレンチ 基-ホ	共生砂質包含層
160	壺下口縁壺		淡褐色	1mm前後の砂粒をわずかに含む		
161	壺下口縁壺		明褐色	1mm前後の砂粒を含む	S41.7.18 古田 第1 A	棒状文
162	壺下口縁壺	①20.4	①淡褐色 ②灰白色	1~2mmの砂粒を多量に含む	平川 古田 焼けトレンチ S41.7.13	
163	北部九州系甕	②40.0	①淡黄色 ②暗灰色	1~2mmの砂粒を含む	平川 古田 第1地区	
164	壺下口縁壺		①暗灰色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	1966.7.15 古田 第1A 第4トレンチ	
165	壺下口縁壺	②40.0	①淡褐色 ②灰白色	1~2mmの砂粒を多量に含む	1966.7.15 平川 第N トレンチ	側部最大幅に2個II級の円形突起
166	壺下口縁壺		黑灰色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7.10 古田 第1 A 1トレンチ 包含層(?)	
167	壺下口縁壺	②(11.7)	①淡褐色 ②灰白色	1mm前後の砂粒を多量に含む	S41.7 古田 第1 A 4トレンチ(?)	
168	壺下口縁壺		明褐色	2~3mmの砂粒を含む		判読不可能
169	壺		①淡褐色 ②灰白色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.15 古田 第1 A 4トレンチ	
170	壺		淡灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.8 古田 第1 A クラン	
171	壺下口縁壺	②6.2	①淡褐色 ②灰白色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7.15 平川裏	
172	北部九州系甕	①47.0	①暗褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒と赤色 鐵錆を多量に含む	1966.7.13 古田 第N 最高点のトレンチ	外側に2種類のハケ が使用される
173	北部九州系甕	①(37.6)	乳白色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.15 平川 沪水 焼附包含層	外側ハケ 内面ナダ
174	北部九州系甕	①(26.2)	黑色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.13 古田 第1 A 伸長層南側	外側ハケ 内面ナダ
175	北部九州系甕		淡灰褐色	1mmの砂粒と赤色鐵 錆を含む	1966.7.13 古田 1トレン チ(?) 170cm	風化著しい
176	北部九州系甕		①黑色 ②淡褐色	微砂粒を含む		内外面ナダ
177	壺		①淡褐色 ②灰白色	1~2mmの砂粒を含む	古田 第1地区A区 S41.7 第三トレンチ	風化著しい
178	窓口内系甕		淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	古田 第1Aトレン チ 7.16	突堤上押圧
179	北部九州系甕	①(30.8)	褐色	微砂粒を多量に含む	41.7.14 平川 1トレン チ	外側ハケ 内面ナダ
180	窓口内系甕	①(20.6)	①暗褐色 ②褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.12 古田 1トレン チ(?) 170cm	外側ハケ 内面ミガキ
181	窓口内系甕	①(33.8)	明褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.12 古田 1トレン チ(?) 170cm	外側ナダ
182	窓口内系甕	①(26.6)	淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	1966 平川 古田	風化著しい
183	窓口内系甕	①(28.2)	黄褐色	1~2mmの砂粒を含む	古田 I A	外側ケズリ痕 内面ナダ
184	壺	①(20.2)	褐灰色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.8 古田 第1 A クラン	外側ケズリ 内面ケズリ後ナダ
185	壺	①(25.0)	褐灰色	微砂粒を含む	古田 第1地区 S41.7 第三トレンチ	外側ケズリ 内面ナダ
186	壺	①(30.0)	明褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.13 古田 第1 A 伸長層	外側ケズリ 内面ナダ
187	壺	①(18.0)	①暗褐色 ②淡褐色	微砂粒を含む	S41.7.15 古田 第1 A 伸長層	外側ハケ 内面ナダ
188	壺	①(24.0)	明褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7 古田 第1 A 4トレンチ	外側擦痕 内面ナダ
189	壺	①(24.0)	褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7.17 古田 第1 A 伸長層	外側擦痕 内面ナダ
190	壺	①(17.4)	淡褐色	微砂粒をわずかに含む	S41.7 古田 第1 A 沪水邊	判読不可能
191	壺	①(20.0)	黑灰色	1~2mmの砂粒を多量に含む		風化著しい
192	壺	①(24.4)	黄白色	1~2mmの砂粒を含む		風化著しい
193	壺	①(22.8)	明褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.18 平川 第1 A 伸長層	外側ハケ 内面ケズリ後ナダ
194	壺	①(19.2)	淡灰褐色	微砂粒をわずかに含む	S41.7.34 古田 第1 A	風化著しい
195	壺	①(21.0)	淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	古田 I -A	外側ハケ 内面ナダ
196	壺	①(30.0)	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.15 古田 I A 4トレンチ	外側ハケ 内面ナダ

吉田遺跡第I地区A区の調査

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③高さ)	色調 (①外面②内面)	胎土	註記	法量 () は復原体		
						表面	裏面	
197	甕	①(20.0)	淡灰褐色	1mm前後の砂粒を含む	S41.7.13 古田 第1 A 地区	外表面ハケ 内面ナゲ		
198	甕	①(19.6)	黒褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.13 古田 第1-A	外表面のハク離が激しい		
199	甕	①(13.8)	暗褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	古田 第1地区A区 第4トレンチ	風化著しい		
200	甕	①(23.0)	淡赤褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	古田 第1-A S41 第4トレンチ	風化著しい		
201	甕	①(18.0)	①淡赤褐色 ②黒褐色	2~3mmの砂粒を含む	古田 第1地区A区 第4トレンチ	風化著しい		
202	甕	①(21.2)	①暗褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	古田 第1-A	風化著しい		
203	甕	①(21.6)	暗褐色	2~3mmの砂粒を含む	S41.7 古田 第1 B 地区 第4トレンチ	出土状況写真あり		
204	甕	①(15.8)	①褐色 ②灰褐色	微砂粒を多量に含む	古田 第1トレンチ	外表面ハケ 内面ナゲ		
205	甕	①(20.6)	淡青灰色	1~2mmの砂粒を多量に含む	古田 第1地区A区	外表面風化 外表面ハケ		
206	甕	①(21.8)	淡青色	1~2mmの砂粒を含む	古田 第1-A	風化著しい		
207	高环 坏部	①(22.6)	淡褐色	微砂粒を多量に含む				
208	高环 脚部	②(22.6)	淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	1966.7 千川 古田遺 跡	内外面風化		
209	高环 脚部	②(11.2)	①淡赤褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む				
210	高环 脚部	②(17.8)	暗褐色	1mm前後の砂粒を含む	古田 第1-A 地区 S41.7 第3トレンチ			
211	高环 脚部	②(17.8)	①淡褐色 ②黒褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	1966.7.12 平川 古田 第1 B 地区 第4トレンチ	風化著しい		
212	高环 脚部		淡青灰色	1~2mmの砂粒を含む	1966 古田 残瓦屑	風化著しい		
213	高环 脚部		淡青褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む	1966.7.12 古田 第1 トレンチ	内面のシボリ痕明顯		
214	高环 脚部		淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	古田 第1地区A区 第4トレンチ	風化著しい		
215	高环 脚部		淡褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	古田 第1地区A区 第4トレンチ	風化著しい		
216	斧	①(6.5)	①褐灰色 ②黒褐色	2~3mmの砂粒を含む	41.7 第1A			
217	ミニチュア土器体	③(4.5)	乳白色	1mm前後の砂粒をわずかに含む		風化著しい		
218	ミニチュア土器 底部	④(4.2)	①黒褐色 ②暗褐色	1~2mmの砂粒を含む	古田 第1地区A区 第4トレンチ 第3層	風化著しい		
219	ミニチュア土器 底部	④(4.2)	暗褐色	1~3mmの砂粒を含む	古田 第1地区A区 第4トレンチ	風化著しい		
220	壺	底部	⑤(8.4)	淡灰褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	外表面ハケ後ミコギ 内面ミコギ		
221	壺	底部	⑤(10.2)	淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	外表面タテミコギ		
222	壺	底部	⑤(9.4)	淡褐色	1~2mmの砂粒を少し含む	外表面にハケ残す		
223	壺	底部	⑤(9.0)	淡青灰色	1~2mmの砂粒多し	S41 古田 T-A 1トレンチ	内外面風化	
224	壺	底部	⑤(10.2)	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.14 古田 T-A	外表面ハケ痕 内面ナゲ	
225	壺	底部	⑤(10.6)	①淡赤褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7 第1-A 地区 第3トレンチ	風化著しい	
226	壺	底部	⑤(8.4)	①淡赤褐色 ②淡褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む	古田 第1-A 地区 S41.7 第3トレンチ	風化著しい	
227	壺	底部	⑤(9.0)	黒褐色	2mm前後の砂粒を含む	古田 第1-A 地区 第3トレンチ	底面標面右方向への ケズリ	
228	壺	底部	⑤(10.8)	淡青白色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.16 排水溝北 側から人骨	風化著しい	
229	壺	底部	⑤(6.4)	褐灰色	1~2mmの砂粒を含む	古田 第1地区	底面ケズリ後ナダ	
230	壺	底部	⑤(12.0)	①灰褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7.15 第4トレンチ	外表面風化 一端ミコギ痕	
231	壺	底部	⑤(7.0)	淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.7.15 古田 第1地区 A区 第4トレンチ-2	外表面ハケ後ミコギ 内面ナゲ	
232	壺	底部	⑤(12.0)	明褐色	4mm前後の砂粒を含む	S41.7.16 古田 第1A 1トレンチ (底面解剖)	外表面ヨミコギ	
233	壺	底部	⑤(8.4)	褐灰色	2~3mmの砂粒を含む	S41.7.17 第3トレンチ 東ハイヤ発生砂質地盤	外表面ヨミコギ	
234	壺	底部	⑤(8.4)	①淡褐色 ②暗褐色	1~2mmの砂粒を含む		外表面風化	
235	壺	底部	⑤(8.4)	淡青灰色	2~3mmの砂粒を含む		外表面風化	
236	壺	底部	⑤(7.6)	①淡褐色 ②黑色	2~3mmの砂粒を多量に含む	古田 第1-A 第4 トレンチ S41.7.16	外表面風化	

出土遺物観察表

括弧()は復原値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③高さ)	色調 (①外面②内面)	粘土	記述	備考
237	甕	底部 ②(5.8)	①赤褐色 ②白色	1mm前後の砂粒を多量に含む	吉田 第Ⅰ-A地区 SA17. 第三トレ	内外面風化
238	甕	底部 ②(5.5)	赤褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	吉田 第Ⅰ-A地区 日付?	内外面風化
239	甕	底部 ②(8.2)	赤褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	吉田 第Ⅰ-A地区 SA1.7. 第一トレ	風化著しい 外面にケズ
240	甕	底部 ②(8.6)	赤褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	宇田 古田第Ⅰ-A SA1.7. 第一トレ	外面ケズ後ヨコナダ
241	甕	底部 ②(7.2)	①赤褐色 ②暗灰色	1mm前後の砂粒を含む	SA1.7.15. 吉田 Ⅰ-A SA4.4トレントナ	内面ナダ
242	甕	底部 ②(6.8)	①赤褐色 ②赤褐色	1mm前後の砂粒、赤褐色を含む	1966.7.12 幸田 第一トレ ナカイサト 7.6m	外面ハケ後ヨコナダ 内面ナダ
243	甕	底部 ②(6.0)	淡褐色	赤褐色斑を含む	SATIS 幸田第Ⅰ-A SA8. 第4トレントナ	外面ナダ
244	甕	底部 ②(5.0)	赤褐色	1mmの砂粒をわずかに含む		内外面風化
245	甕	底部 ②(5.8)	淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	1966.7.15 幸田 排水 溝排水沟	外面ハケ 排水沟干渉
246	甕	底部 ②(6.2)	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	SA1.7.14. 吉田 第Ⅰ-A 排水溝と内面の境界	内外面風化
247	甕	底部 ②(5.2)	淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	1966.7.15 幸田 第Ⅰ-A トレントナ	内外面風化
248	甕	底部 ②(6.2)	赤褐色	1mm前後の砂粒を含む	吉田 Ⅰ-A 1トレ SA1.7.12	内外面ナダ
249	甕	底部 ②(6.0)	①淡赤褐色 ②赤褐色	1~2mmの砂粒を含む	SA1.7.13. 合合谷下 3 古 田 Ⅰ-A 1トレントナ	外面ハケ後ヨコナダ 内面ナダ
250	甕	底部 ②(6.6)	灰褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	SA1.7.14. 吉田 第Ⅰ-A 第4トレントナ	外面ハケ後ナダ 内面エリナダ
251	甕	底部 ②(8.0)	乳白色	2~3mmの砂粒を含む	吉田 第Ⅰ-A地区 A区 第4トレントナカイサト	底面ユビケズ
252	甕	底部 ②(6.6)	暗褐色	1~2mmの砂粒を含む	第4トレントナ	外曲ハケ 内面ナダ
253	甕	底部 ②(5.5)	暗褐色	1~2mmの砂粒を含む	4トレントナ SA1.7.16	外曲ナダ
254	甕	底部 ②(5.0)	①淡赤褐色 ②黑色	1mm前後の砂粒を多量に含む	1966.7.17 第4トレ ントナ	外曲ケズ後ナダ 内面ナダ
弥生時代後期						
255	複合口縁甕	①(15.0)	淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	SA1.7.8 幸田 第Ⅰ-A 排水溝	
256	複合口縁甕		淡黃白色	1~2mmの砂粒を含む		風化著しい
257	複合口縁甕		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	SA1.7.8 吉田 第Ⅰ-A 排水溝	風化著しい
258	複合口縁甕		淡褐色	微細粒を含む	古田 第Ⅰ-A 1トレ ントナ	風化著しい
259	複合口縁甕		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.8 幸田 第Ⅰ-A カクラン層	風化著しい
260	甕	①(18.4)	淡褐色	1mm前後の砂粒を含む	吉田 Ⅰ-A	風化著しい
261	甕	①(12.0)	淡褐色	1mm前後の砂粒を含む	SA1.7 吉田 第Ⅰ-A 排水溝	
262	高坏	①(23.8)	淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	吉田 Ⅰ-A	
263	高坏		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.8 幸田 第Ⅰ-A カクラン層	外曲ハケ後ミガキ
264	高坏		淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	SA1.7.8 吉田 第Ⅰ-A 排水溝	風化著しい
265	高坏		淡褐色	微細粒を含む	1966.7.13 幸田 吉田 排水溝	内面ケズリ
古墳時代前期 - 中期						
266	二重口縁甕	①(16.8)	暗褐色	1~2mmの砂粒を含む	SA1.7 吉田 第Ⅰ-A 排水溝下	風化著しい
267	二重口縁甕		淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	1966.7.15 排水溝溝 排水溝	
268	直口甕	①(10.2)	赤褐色	2~3mmの砂粒を少し含む	SA1.7.10 吉田 Ⅰ-A 1トレントナ(下)	風化著しい
269	直口甕		灰褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	SA1.7.13 吉田 第Ⅰ-A 排水溝溝	外曲ある
270	直口甕	①(12.6)	乳白色	1~2mmの砂粒を少し含む	1966.7.13 排水溝溝 排水溝	内面ハケ
271	直口甕	①(11.6)	①淡褐色 ②暗褐色	1~3mmの砂粒を含む	SA1.7.10 1トレントナ 排水溝上	内面ケズリ 排水溝上
272	直口甕	①(1.0)	①黑色 ②暗褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.10 吉田 第Ⅱ トレントナ	外曲ハケ 内面ケズリ
273	直口甕	②(1.8)	淡褐色	1~3mmの砂粒を多量に含む	1966.7.15 排水溝北 排水溝	12.12.20
274	直口甕		赤褐色	繊維粘土を微細粒を含む	吉田 第Ⅰ地区 A区 排水溝ト	

吉田遺跡第I地区A区の調査

法量()は復原値

番号	器種	法量(cm) (①②③④⑤⑥⑦⑧)	色調 (⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮)	形状 (⑯⑰⑱⑲⑳)	胎土	註記	備考
275	山腹系盤	①14.0	⑨淡褐色 ⑩灰褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田 I-A		
276	山腹系盤	①(26.8)	淡赤褐色	微砂粒、赤色斑紋を多量に含む	1966.7.13 平川 淀水 淀南側	風化著しい	
277	山腹系盤		淡赤褐色	微砂粒を多量に含む	S41.7.8 吉田 第Ⅱ 淀乱層	風化著しい	
278	山腹系盤		淡黄灰色	微砂粒を多量に含む		風化著しい	
279	山腹系盤		⑨淡褐色 ⑩灰褐色	微砂粒を多量に含む	S41.7.12 吉田 第Ⅱ 淀水淀南側包帯層		
280	山腹系盤		淡赤褐色	微砂粒を多量に含む	S41.7.17 日トレン 子南側	外面に一部塗付層	
281	山腹系盤	①(14.6)	淡黄灰色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.12 吉田 I-T レン包帯層下80cm		
282	山腹系盤	①(16.5)	淡褐色	微砂粒を含む		外面に一部塗付層	
283	山腹系盤	①(16.5)	淡褐色	微砂粒を含む	41.7.8 吉田 第Ⅱ 淀層	外面タキツヅハケ	
284	タキツヅ		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.16 吉田 淀水 淀北面中からん層		
285	タキツヅ		淡褐色	微砂粒を含む			
286	タキツヅ		淡褐色	赤色斑紋を含む			
287	タキツヅ		淡褐色	1mm前後の砂粒を含む			
288	タキツヅ		淡黄灰色	赤色斑紋を含む			
289	タキツヅ		淡褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	S41.7.8 吉田 第Ⅱ 淀乱層	風化著しい	
290	タキツヅ		暗褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.13 吉田 第Ⅱ A 淀水淀南側		
291	タキツヅ		淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	S41.7.13 吉田 第Ⅱ A		
292	タキツヅ		⑨乳白色 ⑩灰白色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.13 吉田 第Ⅱ 淀水淀南側包帯層	風化著しい	
293	タキツヅ		淡褐色	1~3mmの砂粒を含む	S41.7.13 吉田 第Ⅱ A		
294	タキツヅ		暗褐色	2~3mmの石英粒を含む	吉田 I-A 第I	外面に一部塗付層	
295	タキツヅ		⑨暗褐色 ⑩灰白色	1~3mmの砂粒、赤色斑紋を含む			
296	タキツヅ		⑨赤茶褐色 ⑩暗褐色	1~3mmの砂粒と泥質母を含む		風化著しい	
297	タキツヅ		⑨赤褐色 ⑩灰褐色	1~2mmの砂粒と赤色斑紋を含む	S41.7.13 吉田 第Ⅱ A 淀水淀南側	外面に一部塗付層	
298	タキツヅ		⑨赤褐色 ⑩灰褐色	カドの丸く2~3mmのチャート粒を含む	吉田 I-A S41.7.14 第Ⅱトレンナ 淀層		
299	甕	①(14.0)	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.12 吉田 I-T レンナ包帯層下30cm	外面に塗付層	
300	甕	①(22.4)	淡赤褐色	1~3mmの砂粒と赤色斑紋を含む	S41.7.13 吉田 I-T A 淀水淀南側	外面タキツヅ 内面ハケ	
301	甕	①(20.8)	暗褐色	1~2mmの砂粒と黒雲母を含む	1966.7.15 平川 淀水 淀南側包帯層	外面に塗付層	
302	甕	①(16.0)	淡黄灰色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 第Ⅱ A 地区	外面タキツヅ後ハケ 内面ケツヅ後ハケ	
303	甕	①(12.6)	乳白色	1~2mmの砂粒を含む			
304	甕	①(14.4)	淡黄灰色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 I-A 南側 淀水包帯層	風化著しい	
305	甕	①(18.6)	暗褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.10 吉田 第Ⅱ A 淀水淀南側	外面に塗付層	
306	甕	①(18.2)	暗褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.13 吉田 第Ⅱ A		
307	甕	①(15.0)	乳白色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.13 吉田 第Ⅱ A 淀水淀南側		
308	甕	①(18.6)	暗褐色	微砂粒を多量に含む	S41.7.14 平川 家側 第Ⅱトレンナ 先生2		
309	高坏	环部 ①(36.4)	明褐色	1mmの砂粒を少し含む	66.7.10 吉田 第Ⅱ A トレンチ1		
310	高坏	环部 ①(20.0)	淡褐褐色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 I-A 第Ⅱ A 淀水淀南側 S41.7.14		
311	高坏	环部 ①(19.6)	黄褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	1966.7.13 平川 吉田 古田		
312	高坏	环部 ①(19.2)	淡赤褐色	微砂粒とわずかに2~3mmの砂粒を含む	S41.7.8 第Ⅱ 淀乱層		
313	高坏	环部	淡黄灰色	微砂粒を含む	S41.7.16 淀水淀南 側	風化著しい	
314	高坏	环部 ①(18.8)	淡赤褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	S41.7.8 吉田 第Ⅱ 淀乱層	風化著しい	

出土遺物観察表

法番()は復原品

番号	器種	底面 (①口付②底径③高さ)	色調 (①外面②内面)	胎土	註記	備考	
315	壺	環部	明褐色	繊維粒を含む	1966.7.13 吉田遺跡 排水溝底部包帯層		
316	壺	環部	淡赤褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	S41.7.13 吉田 第1A トレンチ(当舎上)	風化著しい	
317	壺	環部	淡赤褐色	繊維粒を含む	1966.7.13 平川 吉田遺跡 排水溝底部包帯層	風化著しい	
318	壺	脚部	淡黃灰色	繊維粘土に1mmの砂粒をわずかに含む	排水溝底部包帯層		
319	壺	脚部	淡黃灰色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.13 吉田 第1A 排水溝底部包帯層	風化著しい	
320	壺	脚部	明褐色	1~2mmの砂粒と赤色 泥粒を含む	1966.7.13 平川 吉田遺跡 排水溝底部包帯層	風化著しい	
321	壺	脚部	淡赤褐色	繊維粘土	1966.7.13 平川 排水 溝底部包帯層	風化著しい	
322	壺	脚部	赤褐色	1~2mmの砂粒を多量 に含む		風化著しい	
323	壺	脚部	①淡赤褐色 ②朱灰色	1~2mmの砂粒を含む		風化著しい	
324	壺	脚部	①淡赤褐色 ②朱灰色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 第1-A 露天面下 レ印位置 41.7.10		
325	壺	脚部	淡青灰色	1~2mmの砂粒を少し 含む	S41.7.13 吉田 第1A 排水溝底部	風化著しい	
326	壺	脚部	黒褐色	1~2mmの砂粒を含む	第1-A かく塗		
327	鉢	②(2.6)	暗灰色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 第1-A ②トレン チより2.6cm深		
328	鉢		淡赤褐色	1~2mmの砂粒を多量 に含む	吉田 第1-A地区 S41.7.第3トレン	風化著しい	
329	鉢	①(15.0)	淡褐色	1~2mmの砂粒を多量 に含む	吉田 第1-A S41.7 第3トレン	風化著しい	
330	鉢	①(13.0)	淡褐色	1~2mmの砂粒を多量 に含む	S41.7.10 吉田 第1 A 掘立層	風化著しい	
331	上製支脚	③(7.4)	淡褐色	繊維粒を含む	第4トレンチ③		
332	壺	底部	①淡褐色 ②朱灰色	1~3mmの砂粒を多量 に含む	S41.7.8 吉田 第2層 複合層		
333	壺	底部	②朱灰色 ③朱紅色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.15 平川 排水 溝溝壁		
334	壺	底部	②(5.2)	淡白色	1~2mmの石英粒を含む	判別不可能	外外面の風化著しい
335	壺	底部	②(3.4)	淡褐色	1~2mmの砂粒をわず かに含む	1966.7.15 平川 基盤 複合層	
336	壺	底部	②(3.4)	淡褐色	1~2mmの砂粒を多量 に含む	吉田 第1A 第1ト レンチ全層 41.7.12	風化著しい
337	壺	底部	②(4.3)	①青色 ②朱灰色	1~2mmの砂粒と瓦片 を含む		底面にタタキ痕
338	鉢	底部	②(3.4)	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		外外面ナマ
339	壺	底部	②(2.4)	暗灰褐色	5mmの石英粒を含む	吉田 66.7.15 排水溝 溝底	
340	壺	底部	②(3.2)	淡灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 66.7.13 排水溝 溝底	
341	鉢	底部	②(3.0)	灰白色	1mm前後の砂粒を含 む	吉田 第1A 第1トレン チ 41.7.12	
342	鉢	底部	②(1.6)	①灰白色 ②淡褐色	繊維粒を含む	S41.7.16 吉田排水 溝北面中央から層	底部焼成前の母孔
343	壺	底部	②(4.4)	乳白色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 66.7.18 排水溝 溝底	
344	壺	底部	②朱灰色 ③朱褐色	1~2mmの砂粒を多量 に含む	吉田 66.7.18 排水溝 溝底		
345	壺	底部	②(1.6)	①淡褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.7.13 吉田 第1 A 排水溝底	外外面一部糊付層
346	壺	底部	②(丸底)	淡白褐色	1mm前後の砂粒を含 む	S41.7.12 吉田 第1 A 排水溝底	外外面微分の付着が 激しい
347	壺	底部	②(2.0)	淡灰褐色	1~2mmの砂粒を多量 に含む	S41.7.13 吉田 第1A 排水溝底部包帯層	
348	鉢	底部	②(1.0)	淡灰褐色	1~2mmの砂粒を含む		風化著しい

古墳時代後期

349	縹瓶		青灰色	1~2mmの砂粒を含む	平川 番地点横埋層	
350	耳壺		青灰色	繊維粒を含む	S41.7.12 吉田 第1 地区A区 第1トレン	
351	盃	①(8.2)	淡青灰色	繊維粘土	吉田 第1地区A区 第2トレンチ底カベ	
352	盃	①(22.8)	灰青色	1mmの砂粒を含む	S41.7.9 吉田 第1 A区	自然釉付層
353	盃		灰青色	2~3mmの砂粒をわず かに含む	1966.7.8 平川 第2層 カクラン	

吉田遺跡第Ⅰ地区A区の調査

法書()は復原値

番号	器種	底面(高)	色調(外表面内面)	胎土	記号	備考
354	高環	(1)(9.4)	淡灰青色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	S41.7.8 平川 第3層 立	
355	高環		淡灰青色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	吉田 第ⅠA 日付?	
古代前半						
356	环	(1)(19.6)	灰青色	1mmの砂粒をわずかに含む	S41.7.12 吉田 第Ⅰ 地区A区 第1トレ	
357	环	(1)(14.4)	青灰色	微砂粒を含む	吉田 第Ⅰ地区A区	外面に自然触付層
358	环	(2)(9.4)	灰青色	1mm前後の砂粒を多量に含む	吉田 第Ⅰ-A 第一	
359	环	(1)(15.0)(2)(9.3)(3)4.2	青灰色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.8 平川 第3 層点検立場	
360	环	(2)(10.5)	灰青色	1mm前後の砂粒を含む	1966.7.12 吉田 1ト レンチ	
361	环	(2)(6.0)	灰青色	微砂粒を含む	吉田 第Ⅰ-A 地区 S41.7.10 第1トレ	
362	环	(2)(7.2)	暗青灰褐色	微砂粒を多量に含む	吉田 第Ⅰ-A 地区 S41. 7.10 第1トレ 包含層	
363	环	(2)(7.2)	暗青灰褐色	微砂粒を含む	吉田 第Ⅰ-A 地区	
364	环	(2)(8.7)	灰白色	微砂粒を含む	S41.7.12 第Ⅰ-A 第1トレ	風化著しい
365	环	(2)(8.4)	淡青灰褐色	1mm前後の砂粒をわずかに含む	吉田 第Ⅰ-A 地区	
366	环	(2)(7.2)	青灰色	1mm前後の砂粒を含む	吉田 第Ⅰ-A 地区 S41.7.10 第1トレ	
367	环	(2)(8.4)	淡灰褐色	微砂粒を含む	吉田 第Ⅰ-A 地区 S41.7.10 第1トレ	
368	环	(2)(6.9)	暗青灰褐色	微砂粒を含む	吉田 第Ⅰ-A 地区 S41.7.10 第1トレ	
369	壺	底部(2)(9.2)	①青灰色 ②灰青色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	S41.7 吉田 第Ⅰ-A 立	
370	壺	底部(2)(10.4)	暗青灰褐色	微砂粒を含む	S41.7 吉田 第Ⅰ-A 立	
371	壺	(1)(25.0)	淡青灰褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	吉田 第Ⅰ-A 地区 S41.7.12 吉田 第3層 立	
372	壺	(1)(16.5)	淡青灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 第Ⅰ-A 地区 S41.7.12 吉田 第3層 立	風化著しい
373	壺	(1)(16.5)	明褐色	多量の1~2mmの砂粒と泥質を含む	吉田 第Ⅰ-A 地区 S41.7.12 吉田 第3層 立	
古代後半~中世						
374	壺	(1)(12.8)	灰白色	微砂粒を含む	S41.7.12 吉田 第Ⅰ-A 地区 A区 第1トレ	
375	壺	(1)(14.8)	①淡褐色 ②墨色	微砂粒を多量に含む	1966.7.13 手水清溝 内面に炭素吸着	
376	壺	(2)(6.2)	淡灰褐色	微砂粒を多量に含む		
377	壺	(2)(6.2)	青灰色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	1966.7.15 平川 吉田清 溝 烟草トレンチ立	
378	壺	(2)(7.0)	灰白色	微砂粒を多量に含む	S41.7 吉田 第Ⅰ-A 立 全層	
379	壺		淡赤褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む	吉田 第Ⅰ-A 地区 A	
380	壺	(2)(6.4)	淡褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む	S41.7.12 吉田 第Ⅰ-A 立	
381	壺	(2)(6.0)	暗褐色	微砂粒を含む	S41.7.10 第1トレ シナ 包含層 41.7.10	
382	壺	(2)(6.8)	淡青灰褐色	精製粘土		
383	壺		①淡褐色 ②墨色	微砂粒を含む	吉田 第Ⅰ-A 第2トレ シナ 包含層 41.7.10	内面に炭素吸着
384	壺	(2)(5.6)	淡赤褐色	微砂粒をわずかに含む		内面に炭素吸着
385	壺	(2)(6.4)	乳白色	1~2mmの砂粒を含む	吉田 第Ⅰ-A	
386	壺	(2)(6.0)	淡灰褐色	微砂粒を多量に含む		
387	壺	(2)(5.8)	淡赤褐色	精製粘土	1966.7.12 吉田 1ト レンチ	
388	壺	(2)(6.0)	淡青灰褐色	わずかに1mmの砂粒を含む	S41.7.10 吉田 第Ⅰ A区立	
389	壺	(2)(6.8)	乳白色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	吉田 第Ⅰ-A	風化著しい
390	壺	(2)(6.8)	淡青灰褐色	精製粘土	S41.7.8 平川 第3 層立	
391	壺	(2)(5.6)	淡青灰褐色	精製粘土		

出土遺物観察表

法量()は復原値

番号	器種	歩量(cm) (①口幅②底深③高さ)	色調 (①外觀②内面)	胎土	鉢記	備考
392	壺	②(6.0)	淡黃灰色	精製粘土		
393	壺	②(6.8)	淡黃灰色	精製粘土	古田 第ⅠA地区 A S41.7.18	
394	壺	②(6.0)	淡黃灰色	精製粘土	古田 第ⅠA地区	
395	壺		乳白色	陶砂粉を多量に含む	古田 第ⅠA地区	
396	壺	②(6.4)	①淡黃灰色 ②淡褐色	陶砂粉をわずかに含む	古田 第ⅠA地区 S41.7. 13 第Ⅱトレ 備考	内面に炭素被着
397	壺	②(6.8)	①淡黃灰色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		内面に炭素被着
398	壺	②(6.8)	①淡黃灰色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む		内面に炭素被着
399	壺	①(13.8)	乳白色	1mmの砂粒を多量に含む	S41.7 古田 第ⅠA 13(含層)	風化著しい
400	皿	②(5.2)	明褐色	精製粘土		
401	皿	①(5.8)	①淡赤褐色 ②明褐色	陶砂粉を多量に含む	S41.7.8 古田 第ⅠA 13 地点	内外面風化
402	皿	②(5.8)	淡黃灰色	精製粘土	S41.7.9 古田 第ⅠA 13 地区 塵3トレンチ①	
403	皿	②(5.0)	淡黃灰色	陶砂粉を多量に含む	古田 第ⅠA地区 S41.7.13 3トレンチ層 1966.7.13	赤切り底
404	皿	②(6.4)	暗褐色	精製粘土	古田 第ⅠA地区	赤切り底
405	皿	②(4.2)	赤褐色	陶砂粉を多量に含む	古田 第ⅠA地区 A 13トレンチ S41.8	赤切り底
406	皿	②(5.2)	灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	1966.7.12 古田 1ト レンチ層含層下30cm	赤切り底
407	皿	②(4.2)	赤褐色	1~2mmの砂粒を含む	古田 第Ⅰ地区 A	赤切り底
408	瓦質足綱	①(23.2)	淡灰青色	1~2mmの砂粒を含む	古田 T-A	外面に漆付着
409	瓦質足綱	①(27.2)	淡褐色	陶砂粉を含む	古田 T-A かく乱	外面に漆付着
410	瓦質足綱		明褐色	1~2mmの砂粒を含む		
411	瓦質足綱		淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む		
412	瓦質足綱		黃灰色	陶砂粉をわずかに含む		鉄分の付着により変色
413	瓦質足綱		淡褐色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	古田 T-A	
414	瓦質足綱		暗褐色	1mmの砂粒を多量に含む		
415	瓦質体	②(10.2)	①暗青灰色 ②淡灰褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	古田 第Ⅰ地区 A区 第2 13トレンチ層 S41.13	
416	須磨器	②(15.6)	青灰色	陶砂粉を含む		内面に光沢をもつ
417	文字入り土器片		淡灰褐色	1mmの砂粒を含む		「火」の字状の鉛別

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
418	錐状石器	5.8	4.1	1.0	20.38	礫状岩	
419	刀器	2.8	3.1	1.8	11.17	礫状岩	
420	剥片	5.1	3.4	1.0	18.23	礫状岩	2次加工あり
421	剥片	3.6	2.7	0.9	11.76	礫状岩	
422	剥片	4.1	3.0	1.0	12.53	礫状岩	使用痕あり
423	剥片	3.7	1.9	0.9	5.30	礫状岩	
424	剥片	2.9	2.1	0.5	3.67	礫状岩	
425	剥片	2.0	2.5	0.4	1.87	礫状岩	
426	剥片	2.5	1.2	0.4	1.24	礫状岩	
427	石椎	3.6	3.9	2.7	44.90	礫状岩	
428	剥片	1.8	1.6	0.6	1.03	サスカイト	使用痕あり
429	剥片	1.2	1.3	0.3	0.53	サスカイト	

吉田遺跡第Ⅰ地区A区の調査

法量()は復原量

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)	石 質	備 考
430	剥 片	2.2	4.2	0.8	8.91	サスカイト	2次加工あり
431	剥 片	2.5	1.7	1.7	7.14	サスカイト	金山産か?
432	剥 片	3.0	1.4	0.5	3.34	サスカイト	
433	剥 片	2.8	1.9	0.5	2.15	サスカイト	
434	剥 片	1.9	3.2	0.4	2.20	サスカイト	
435	剥 片	1.9	1.7	0.6	1.53	サスカイト	
436	剥 片	2.3	1.2	0.5	1.27	サスカイト	
437	石 核	2.7	4.0	1.8	14.48	玉曜石	
438	剥 片	2.1	3.4	0.7	5.62	玉曜石	
439	剥 片	3.0	2.3	0.6	5.36	玉曜石	
440	剥 片	2.5	2.0	1.0	4.50	玉曜石	
441	剥 片	3.1	1.7	0.7	2.96	玉曜石	
442	剥 片	3.7	2.1	0.9	6.76	玉曜石	
443	剥 片	2.9	1.9	1.7	7.23	藍色玉曜石	
444	剥 片	2.3	2.4	0.6	4.27	藍色玉曜石	
445	剥 片	4.2	1.4	1.4	6.98	藍色玉曜石	
446	剥 片	4.3	1.9	0.9	6.28	藍色玉曜石	
447	剥 片	4.0	2.9	1.0	7.60	藍色玉曜石	
448	打製石斧	9.0	5.0	1.8	96.93	結晶片岩	
449	打製石斧	8.9	4.7	0.7	48.38	結晶片岩	
450	打製石斧	6.9	4.4	0.6	32.85	砂質片岩	
451	磨製石斧	7.4	6.2	2.7	185.27	礫灰岩	
452	石 石	12.9	10.2	3.2	846.5	礫灰岩	
453	石 石	9.5	5.4	4.3	556.66	塊状閃綠岩	
454	石 石	6.5	3.8	2.8	58.27	礫灰岩	
455	石 石	8.4	5.2	3.1	171.75	礫灰岩	
456	石磨丁	6.5	6.5	1.0	60.19	カクセン石安山岩	
457	石磨丁	8.0	5.4	0.7	43.91	砂質片岩	
458	石磨丁	1.6	1.8	0.3	1.93	頁 岩	
459	扁平片刃石斧	9.4	2.0	0.8	5.09	頁 岩	
460	不明磨製石器	5.1	3.2	1.0	25.57	カクセン石安山岩	
461	砾 石	8.3	2.8	2.1	75.34	アブライト	
462	砾 石	5.9	4.2	4.8	47.40	カクセン石安山岩	風化悪い
463	砾 石	9.6	6.7	5.2	314.87	礫灰岩	
464	砾 石	9.2	7.7	4.8	575.07	珪長石	中世以前か?

第2章 吉田遺跡第I地区B区の調査

1 調査の概要

「B区は、A区の北東側に側溝が設けられるため、工事で削り取られる幅2m、長さ10mの範囲を調査して、多くの弥生中期の土器類と柱穴群を検出し、台地の南斜面に弥生村落が埋存していることを知ることができた。また、土器類や須恵器を含む包含層を検出したが、これは二次的な堆積物で、その供給源の段丘上に当時の村落跡が存在することを察知した。」と、吉田遺跡調査団の『吉田遺跡発掘調査概報』には報告される。A区と同様に、調査区の位置図及び、遺構平面図は散逸している。わずかに残された写真(PL-41)が、当時の調査状況を断片的に伝えるのみである。

調査期間は、昭和41年10月15日から同月30日までである。

2 層位

A区と同様に基本層序(Fig.73)を示すのみにとどめたい。なお、表土層(耕土)は構内造成によって削平され、調査時には包含層が露出する状態であったらしい。

第I層：茶褐色土、厚さ30~40cm、上師器が多く、弥生土器をわずかに包含する(包含層I)
第II層：黒色土、厚さ10~20cm、弥生土器のみ包含する(包含層II)
第III層：色調不明、この面で柱穴を検出する(地山)



Fig. 73 B区基本層序模式図

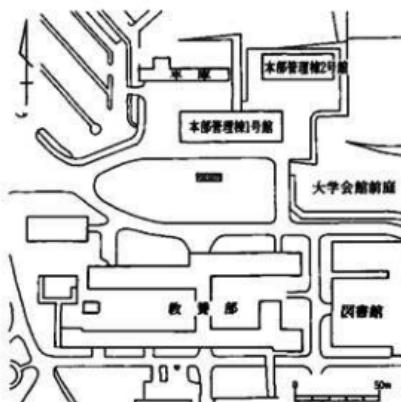


Fig. 72 B区調査区位置図

3 出土遺物

吉田遺跡第I地区B区からは、縄文時代晚期後半から中世までの土器が出土している。人工的な加工を施した石器・剣片は整理時には確認できなかった。

縄文時代晚期後半 (Fig.74-1~3, PL.42)

わずか3片ではあるが、縄文時代晚期後半の特徴を示す上器片が出土している。

深鉢 (Fig.74-1, PL.42)

口縁部片である。口縁端部を欠く。口縁端部よりわずかに下がった位置に、低い断面カマボコ状の突帯を貼り付ける。突带上は左から右へO字状に、キザミが施される。

浅鉢 (Fig.74-2~3, PL.42)

2は直口の浅鉢である。口縁端部内面は丸く肥厚させる。内外面風化著しい。3は内面にミガキが施され、屈曲部をもつ破片であることから、「く」字状口縁部浅鉢の胸部片と判断した。胸部外面には条痕を施す。内面は口縁接合部分のところがくぼむ。

弥生時代初期 (Fig.74-4~5, PL.42)

4は壺形土器の口縁部片である。口頭間に段を有する。内外面にはミガキ調整が施される。外面には丹状の付着物が認められる。5は胸部に段を有する壺の胸部片である。段には、右から左へのキザミが施される。

5の特徴を有する壺は、山口県下では下関市延行条里遺跡、山口市小路遺跡から出土している。山口県弥生時代初期に位置づけられるものである。4は胎土・丹状の付着物など小路遺跡の壺に似ており、5の壺と共に弥生時代初期に位置づけられると思われる。

弥生時代前期 (Fig.74-6~32, PL.42~43)

壺 (Fig.74-6~23, PL.42~43)

6は口縁部に段を有するもの。口縁端部に面をもち、下端にキザミを施す。7~10は装飾が沈線のみのものである。いずれも文様帶の下端と上端が低められ、削り出し突帯となる。7~9はヘラによる沈線。10は鋸歯状圧痕のつかない貝殻による施文である。11~15は鋸歯状圧痕のつかない貝殻による羽状文である。11~12は頸胴間に段を有する。16~20は鋸歯状圧痕のつく貝殻による羽状文である。21~22は綾杉文である。21は鋸歯状圧痕のつかない、22は鋸歯状圧痕のつく貝殻による施文である。23は鋸歯状圧痕のつく貝殻による木葉文である。

壺 (Fig.74-24~32, PL.43)

24は突帯を有する壺である。27~30はヘラによる沈線である。25~26~28~32は板状工具の押圧による沈線である。31は沈線間に列点文を配する。

出土遺物

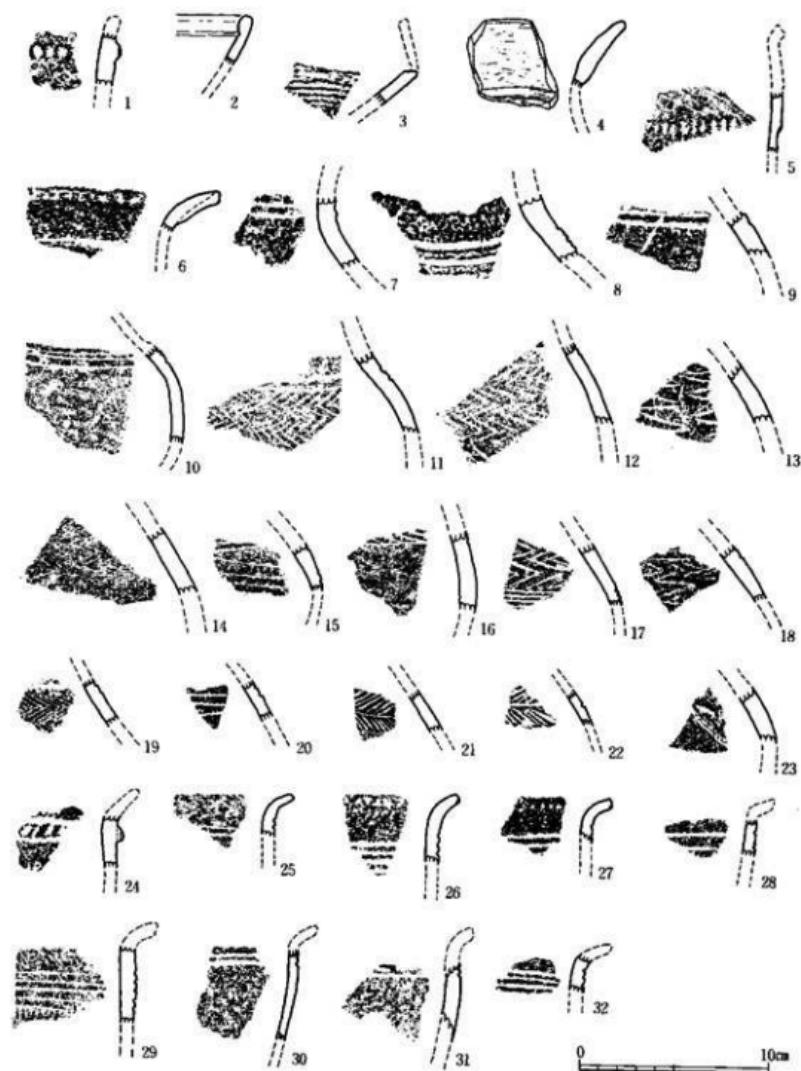


Fig. 74 B区縄文時代後半～弥生時代前期土器実測図

弥生時代中期 (Fig.75, PL.44)

第1地区B区は、「多くの弥生時代中期の土器類と柱穴群を検出し台地の南斜面に弥生村落が埋存していることをしることができた」と概報に記述される。

垂下口縁壺 (Fig.75-33~36, PL.44)

33・34は同一個体の口縁部と胴部であると考えられる。垂下する口縁外面には、先端の鋭い板状工具の押圧による山形文が施される。口縁部内面には2条1組の突帯が貼り付けられる。胴部の最も張った部位よりもやや上部に、2条1組の断面三角形突帯を貼り付ける。外面調整にはタテハケ後ヨコミガキが施される。内面には左上がりのハケ調整が施される。

35は口縁が垂下する屈曲部の上面が、ヨコナデによってつまみ上げられ突出する。垂下する口縁外面には山形文が施される。器面の風化が著しい。36は頭部の破片である。頭部に2条1組の断面三角形突帯が貼り付けられる。口縁内面に断面三角形突帯を貼り付ける。

北部九州系長頸壺 (Fig.75-37, PL.44)

37は口頭部の破片である。頭部はやや外反気味に直立する。口縁端部はヨコナデによって面をもち、内側に肥厚する。口縁端部より下がった位置に断面三角形の突帯を貼り付ける。外面はミガキ調整、内面にはシボリ痕を残す。

北部九州系壺胴部 (Fig.75-41~43, PL.44)

41・42は断面M字状の突帯をもつ。41は最も張った位置に、突帯を1条貼り付ける。42は突帯を、2条以上貼り付けている。43は断面カマボコ状の突帯を、2条以上貼り付ける。

壺蓋 (Fig.75-38, PL.44)

ボタン状のつまみをもつ。破片のため全形はわからない。外面には、ハケ調整を残す。

突帯壺 (Fig.75-44-45, PL.44)

44は口縁端部を欠く。如意状の口縁よりやや下がった位置に、断面三角の鋭い突帯が貼り付けられる。風化が著しいが、突帯上にかすかにキザミが残る。45は口縁部を欠く。屈曲部よりやや下がった位置に、断面三角の突帯が貼り付けられる。突帯上にはキザミが施される。

高坏 (Fig.75-39, PL.44)

39は高坏脚部の基部である。外面には丹が塗られる。

異形土器底部 (Fig.75-40, PL.44)

40は底面に高台状の低い脚を貼り付ける。外面はミガキ調整。内面はナデ調整。一部にツメ跡を残す。

出土遺物

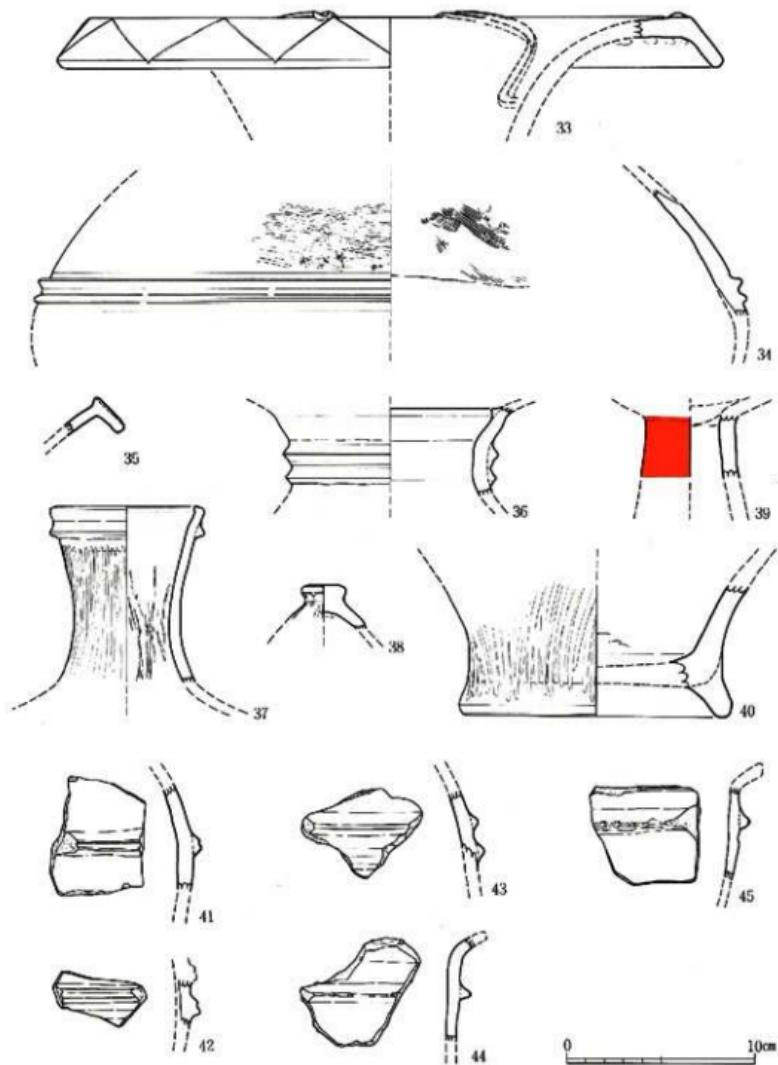


Fig. 75 B区弥生時代中期土器実測図

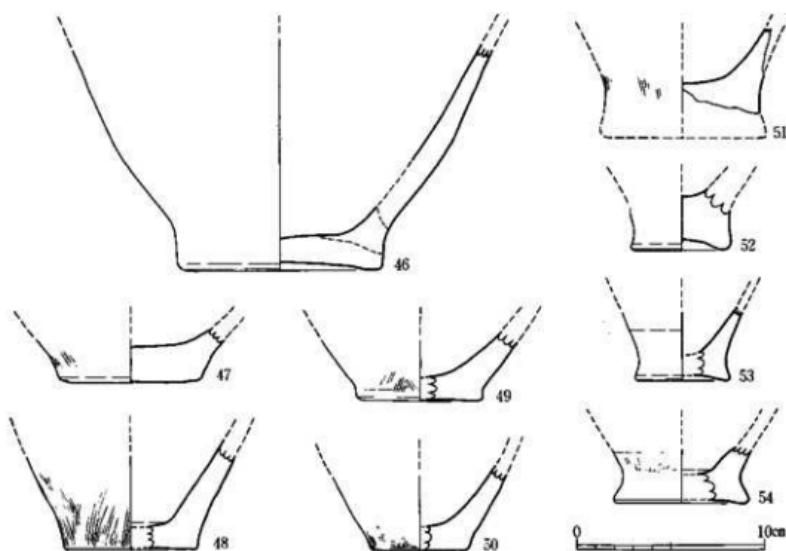


Fig. 76 B区弥生時代土器底部実測図

弥生時代前期土器底部 (Fig.76-46~50, PL.43·44)

46・47は壺の底部である。46は底面端部が高台状に盛り上がる。胴部はかなり立ち上がる。内外面の風化が著しく、調整は見えない。接合痕にそって剥離する。外面には、植物種子の圧痕がある。47は底面を削る。内外面の風化は著しいが、外面に一部ハケ痕を残す。

48~50は甕の底部である。48は外面調整にタテハケを施す。内面はナデ調整である。49は内外面の風化が著しい。外面に一部タテハケ調整が残る。50は内外面が風化する。外面には一部タテハケ調整が残る。やや小形で、胎土・ハケ調整が48-49とは若干異なる。鉢底部の可能性もある。

弥生時代中期土器底部 (Fig.76-51~54, PL.44)

51は底面が残っていない。内外面の風化が著しい。外面には一部ハケが残る。52は底部が円筒状に突出するもの。底面はくぼむ。強い二次焼成をうけ、器面に調整は残らない。53は底部端が外方に突出する。外面底部側面にはヨコナデが施される。内面はナデ調整である。54は底部端が外方に突出する。外面底部側面にはヨコナデが施される。胴部外面には一部ハケが残る。内面は風化のため調整が残らない。

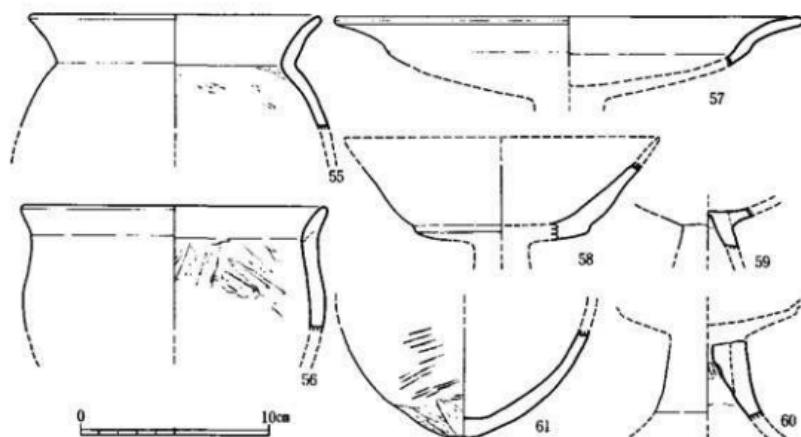


Fig. 77 B区弥生時代後期～古墳時代中期土器実測図

弥生時代後期～古墳時代中期 (Fig.77, PL.45)

弥生時代後期～古墳時代中期の特徴をもつ土器をまとめた。

甕 (Fig.77-55-56, PL.45)

55は張った胴部に、外反した口縁部をもつ。内外面の風化が著しく、外面の調整は判読できない。内面は右から左方向へのケズリ調整である。所属時期は古墳時代前期と考えられる。56は張りのない胴部に、やや外反した短い口縁部をもつ。内外面の風化は著しい。内面にはケズリ調整が施される。所属時期は古墳時代中期と考えられる。

甕底部 (Fig.77-61, PL.45)

61は丸底化した甕底部である。胴部にはタタキ痕が残る。底部側面は、底面から胴部側に向かってケズリが施される。内面はナデ調整である。底面は二次焼成により、赤褐色を呈する。所属時期は、古墳時代前期と考えられる。

高坏 (Fig.77-57～60, PL.45)

57は坏部片である。胴部は浅く、口縁部は大きく外反する。内外面の風化は著しい。所属時期は弥生時代後期と考えられる。58は口縁端部を欠く。胴部と口縁部の境は、明瞭な段をなす。内外面が風化する。所属時期は古墳時代前期と考えられる。59・60は脚部片である。ともに裾部を欠く。59は小形器台の可能性もある。60は脚中心部に、棒状工具の抜きとり痕がある。59・60の所属時期は、古墳時代前期と考えられる。

古墳時代後期～中世 (Fig.78, PL.45)

古墳時代後期から中世の特徴をもつ、土器・石鍋をまとめた。

須恵器蓋 (Fig.78-62～64, PL.45)

62は壺蓋である。破片のため、つまみの有無は不明である。天井部は扁平である。端部を離れ、中心によった部分に直立した立ち上がりをもつ。立ち上がり端部は丸い。所属時期は古墳時代後期と思われる。63は壺蓋とするには径が小さく、短頸壺の蓋と考えられる。天井部と口縁部の境には稜をもつ。口縁端部は丸い。所属時期は古墳時代後期と思われる。64は壺蓋つまみの破片である。つまみは扁平で中央が凸形をなすものである。所属時期は奈良時代と思われる。

須恵器壺 (Fig.78-65, PL.45)

65は壺口縁部片である。口縁端部がすばまり、端部よりやや下がった位置が膨らみをもつ。内面には自然釉が付着する。所属時期は不明である。

須恵器高坏 (Fig.78-66, PL.45)

66は高坏脚部の基部破片である。脚裾部は大きく開く。所属時期は不明である。

土師器壺 (Fig.78-67-68, PL.45)

67は肩の張った長胴の体部に、わずかに外反する口縁部がつく。口縁部は短く肉厚である。口縁部端部は丸くおさめる。外面の最終調整はナデであるが、やや左に傾いたタテハケが残る。内面はナデ調整である。内面底部近くに指頭痕が残る。所属時期は古墳時代後期から奈良時代と思われる。68は張らない胴部に、短いや外反した口縁部がつく。口縁端面は丸い。風化が著しいが、外面調整はタテハケ、内面調整は右から左方向のヨコハケが残る。所属時期は、古墳時代後期と考えられる。

土師器瓶把手 (Fig.78-73, PL.45)

73は把手のみの破片である。わずかに残った胴部に、ハケ痕が残る。把手だけのため、所属時期は不明である。

須恵器坏 (Fig.78-69, PL.45)

69は底面と体部の屈曲部に接して高台がつく。高台は内端・外端とも接地するものである。外面には高台接合痕が明瞭に残る。

土師器碗 (Fig.78-70-71, PL.45)

70は高台を底部側面に貼り付けるもの。内外面の風化が著しい。71は胴部より突出した底部をもつもの。風化が著しいが、底面には糸切りの痕跡が残る。

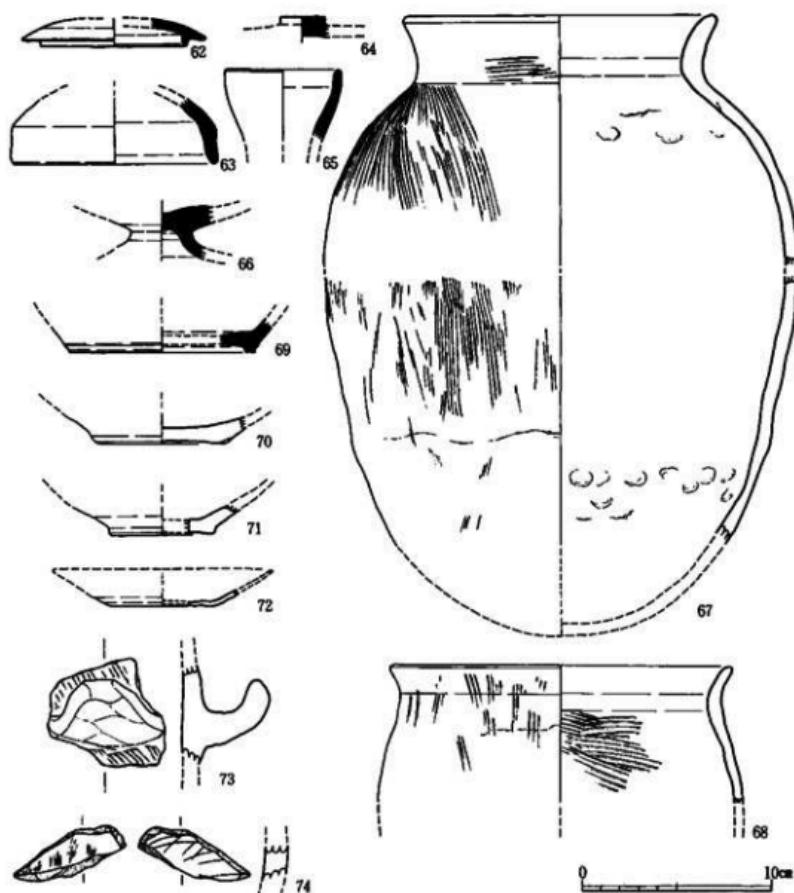


Fig. 78 B区古墳時代後期～中世土器実測図

土器皿 (Fig.78-72, PL.45)

器盤の薄い土器器小皿の底部である。体部が直線的に開きながら立ち上がる。底面には敷物の圧痕をもつ。

石鍋 (Fig.78-74, PL.45)

滑石製の石鍋である。内面にノミ跡が残る。外面には煤が付着する。

4 小結

B区はA区と同様に遺構平面図は散逸し、土層断面図が残るのみであった。他の当時の記録としては、写真が埋蔵文化財資料館に収蔵されている。その写真（PL-41）によれば幅2m、長さ10mの細長いトレンチにアゼを3本残し、発掘を行っている。土器には1~4区までの註記があり、この発掘方法を示すのであろう。

また、昭和41年当時、第Ⅰ地区内は区分けされておらず、本調査区の出土土器の註記は第Ⅰ遺跡のみである。第Ⅰ地区内が区分けされたのは、昭和42年大学本部建設予定地（現C区）の調査かららしく、大学本部建設予定地（現C区）出土土器には、B区の註記がなされている。このB区の註記は、昭和41年の第Ⅰ地区的調査（現A・B区）に対してのものと思われる。本章のB区と、土器註記のB区（現C区）は異なるものである。吉田調査団発行の概報は現在の地区名通りになっており、概報刊行以前に地区の改定が行われたと推察される。本章では概報以降の地区名通りに、第Ⅰ地区B区として報告した。

遺構

概報に「多くの弥生中期の土器類と柱穴群を検出し、台地の南斜面に弥生村落が埋存していることを知ることができた。」とあるように、当時の写真には多数の柱穴が写っている。ただし、今回の遺物整理では、柱穴出土の註記をもつ弥生時代中期の上器ではなく、柱穴群が弥生時代中期のものであると確認はできなかった。

出土遺物

縄文時代後期半

吉田遺跡からは、大学会館敷地、前庭部、本部2号館、教育学部実習棟、遺跡保存地区、教養部複合棟、農学部連合大学校舎敷地、の7地点から縄文土器が出土している。第Ⅰ地区B区出土縄文土器は、それに加えるべき新資料である。2は所属時期が不明であるが、1・3は縄文後期後半、刻み目凸帯文土器段階の土器である。吉田遺跡における刻み目凸帯文深鉢の出土地は、教育学部構内J-19・20区、本部2号館、教養部複合棟である。河村吉行氏が推定するように、第Ⅰ地区B区の背後に広がる大学会館前庭部から第二学生食堂付近の洪積段丘上に、縄文時代後期中頃以降の集落が展開する公算は高い。

弥生時代初期

B区からは、特筆すべき弥生時代初期の土器が出土している。5は壺胴部片であるが、その特徴は胴段端部に施された刻み目である。胴段端部への刻み目といった特徴は、全段階である縄文時代後期半の二条突帯深鉢をほうふつさせる。二条突帯深鉢が弥生化して、如意状口縁壺へと変化していく過渡的な形態と言えよう。

この特徴をもった壺は、前述したように山口県下では小路遺跡と延行条里遺跡から出土している。近年、北九州市でも、畠山遺跡C地点¹¹¹、石田遺跡¹¹²、寺内遺跡¹¹³、南方・上ヶ田遺跡第9地点¹¹⁴から類似した壺が出土している。遠賀川以東に分布する初期弥生壺である。

4の壺形土器は、段の境が不明瞭で、胎土に多量の微砂粒を混ぜている。これは、貝殻による施文が発達した弥生時代前期中葉の壺がもつ、整形された明瞭な段、精製粘土に1~2mmの粒が揃った砂粒を混ぜる特徴とは明らかに異なっている。この特徴をもつ壺は小路遺跡で、5の特徴をもつ壺と共に出土している。よって、4の壺形土器も弥生時代初期に位置づけられるものであろう。

吉田遺跡より南西約1.5kmには小路遺跡があり、山口盆地の南西部山麓に弥生時代初期の生活圏が展開していたものと思われる。また、B区で二次堆積とはいえ、弥生時代初期の土器と縄文晩期突堤文土器が出土していることは単なる偶然とは考えられない。今後の調査によって、縄文時代から弥生時代への変遷を示す資料が出土する可能性がある。

弥生時代前期

B区からは比較的保存状況の良い、前期中葉の土器が出土している。A区の前期中葉の土器も併せて考えるならば、付近（背後の洪積段丘上か）に吉田遺跡では未だ検出されない前期中葉の遺構が存在する可能性は高い。

弥生時代中期

B区出土の中期弥生土器もその大半が、A区と同じく後半に属する。37の北部九州系長頸壺は、類例が宇部市北迫貝塚¹¹⁵で多く出土している。この長頸壺もA区無頸壺（Fig.43-136）と同様に遠賀川以東で盛行する。この他、39の丹を塗った高壺も北部九州系であろう。

概報には、多くの中期弥生土器が出土したとされるが、さほど際だった量ではない。また、柱穴群が弥生中期のものか明らかにできる資料はなく、「台地の南斜面に弥生村落」の一文は注意が必要である。

弥生時代後期～古墳時代中期

B区出土土器中、唯一柱穴からの出土を示す註記がなされるのが61である。61は古墳時代前期前半の壺底部であるが、これによって柱穴群の一部が古墳時代前期のものを含んでいることが推察される。

古墳時代後期～中世

A区に比べて、古代～中世の土器が極めて少ない。中世の遺物として、滑石製石鍋片が出土している。

青山遺跡第I地区B区の調査

[注]

- 1) 山口大学吉田遺跡調査団「山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報」(山口大学、1976年)
- 2) 下関市教育委員会「綾羅木川下流域の地域開発史 山口県下関市大字綾羅木・延行有富地内延行条里 遺跡はか発掘調査報告書」(1990年)
- 3) 山口市教育委員会「小路遺跡」(1986年)
- 4) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新宮に伴う発掘調査」(『山口大学構内道路調査研究年報』Ⅲ、1985年)
- 5) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』V、1986年)
- 6) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内本部2号館新宮に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅵ、1990年)
- 7) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内教育学部附属教育実践研究指導センター新宮に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅷ、1988年)
- 8) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内遺跡保存地区的発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅸ、1990年)
- 9) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内教養学部複合棟新宮に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅹ、1988年)
- 10) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内農学部連合獣医学科棟新宮に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅺ、1990年)
- 11) 河村吉行「山口大学構内の埋蔵文化財の分布」(『山口大学埋蔵文化財資料館』X、1992年)
- 12) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室「島山遺跡C地点」(1990年)
- 13) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室「石田遺跡」(1990年)
- 14) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室「寺内遺跡第3・4・5・6・7地点」(1991年)
- 15) 梅崎恵司「7. 徳力上地区面整理事業用地内の遺跡」(北九州教育文化事業団埋蔵文化財調査室「埋蔵文化財調査年報」7、1991年)
- 16) 宇都市教育委員会「北迫遺跡」(『宇都の遺跡』、1968年)

Tab. 4 出土遺物観察表

法量()は復原量

番号	器種	法量(cm) (①(3.0)~②(7.2))	色調 (①外表面内面)	胎土	記記	備考
縄文時代後半						
1	深鉢		暗褐色	2~3mmの砂粒を含む		外腹に灰付基
2	浅鉢		黒色	1mmの砂粒を含む		風化著しい
3	浅鉢		黒色	1~2mmの砂粒を含む		外腹各部調整
弥生時代前期						
4	壺		淡褐色	細砂粒を多量に含む	S41.11.16 吉田 第1・第1区	外腹赤色顔料帯か?
5	壺		淡褐色灰色	1~2mmの砂粒を含む		
6	壺		黄褐色	1~2mmの砂粒を含む		口部下端にキザミ
7	壺		淡褐色灰色	2~3mmの砂粒を含む	S41.11.24 吉田 第1 Aゾ2	ヘラ抹き沈線
8	壺		暗褐色	2~3mmの砂粒を含む		ヘラ抹き沈線
9	壺		淡褐色	2~3mmの砂粒を含む		ケズリ出し変形
10	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒をわざかに含む		断面灰白色のつぶない 底面による押圧沈状
11	壺	①淡褐色 ②赤褐色	1~2mmの砂粒を含む		S41.11.17 吉田 第1・2区	断面灰白色のつぶない 底面による押圧沈状
12	壺	①淡赤褐色 ②淡褐色	2~3mmの砂粒を含む		S41.11.17 吉田 第1・2区	断面灰白色のつぶない 底面による押圧沈状
13	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		断面灰白色のつぶない 底面による押圧沈状
14	壺	①褐色 ②淡褐色灰色	1~2mmの砂粒を含む		S41.11.17 吉田 第1	断面灰白色のつぶない 底面による押圧沈状
15	壺	①淡褐色 ②淡褐色灰色	赤色砂粒を含む			断面灰白色のつぶない 底面による押圧沈状
16	壺	①淡褐色 ②淡褐色灰色	1~2mmの砂粒を含む			断面灰白色のつぶく良 底面による押圧沈状
17	壺		淡褐色	2~3mmの砂粒を含む		断面灰白色のつぶく良 底面による押圧沈状
18	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		断面灰白色のつぶく良 底面による押圧沈状
19	壺	①淡褐色 ②土褐色	1~2mmの砂粒を含む			断面灰白色のつぶく良 底面による押圧沈状
20	壺		淡褐色灰色	1~2mmの砂粒を含む		断面灰白色のつぶく良 底面による押圧沈状
21	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		断面灰白色のつぶく良 底面による押圧沈状
22	壺		赤褐色	2~3mmの砂粒を含む		断面灰白色のつぶく良 底面による押圧沈状
23	壺		褐灰色	1~2mmの砂粒を含む	S41.11.17 吉田 第1・3区	断面灰白色のつぶく良 底面による押圧沈状
24	壺		淡褐色灰色	1~2mmの砂粒と赤色 鐵錆を含む	S41.11.17 吉田 第1・3区	風化著しい
25	壺		褐灰色	1~2mmの砂粒を含む		
26	壺		黄褐色	1~3mmの砂粒を含む		板状工具による2条 の押圧沈状
27	壺		赤褐色	2~3mmの砂粒を含む	S41.11.14 吉田 第1	板状工具による4条 以上の押圧沈状
28	壺	①明褐色 ②淡褐色	2~3mmの砂粒を含む			板状工具による2条 の押圧沈状
29	壺		淡赤褐色	3mmの砂粒を含む		板状工具による5条 の押圧沈状
30	壺		赤褐色	1~3mmの砂粒を含む		2条のヘラ抹き沈線
31	壺		淡褐色灰色	2~3mmの砂粒を含む		ヘラ抹き沈線間に列 点文
32	壺		淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		板状工具による5条 以上の押圧沈状
弥生時代中期						
33	垂下口縁壺	①(32.0)	褐灰色	1~2mmの砂粒を含む		口縁部の内面に2条1縫 の突起を貼り付けた
34	垂下口縁壺		①(褐灰色 ②土褐色)	1~2mmの砂粒を含む		33と同一個体か
35	垂下口縁壺		明褐色灰色	1~2mmの砂粒を多量 に含む		風化著しい
36	垂下口縁壺		黄褐色	1~2mmの砂粒を多量 に含む	S41.11.17 吉田 第1・3区	風化著しい
37	細頸壺	①(7.2)	淡褐色	1~2mmの砂粒をわざかに含む		

吉田遺跡第I地区B区の調査

法量()は復原値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③高さ)	色調 (①外面②内面)	胎土	記号	備考
38	盃		淡赤褐色	1~2mmの砂粒を含む		
39	高環		①赤褐色 ②灰褐色	1mm前後の砂粒をわずかに含む		
40	異形土器	底部 ②(14.2)	①褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む		
41	盃		①赤褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む		風化著しい
42	盃		①赤褐色 ②灰白色	1~2mmの砂粒を含む	S41.11.24 吉田 第I・2区	
43	盃		淡黄褐色	1~2mmの砂粒を含む		
44	更		淡褐色	2~3mmの砂粒を含む		風化著しい
45	更		淡赤褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.11.17 吉田 第I・3区	風化著しい
弥生時代土器底部						
46	盃	底部 ③(10.6)	赤褐色	2~3mmの砂粒を多量に含む	S41.11.18 吉田 第I・2区	鏡子の圧痕あり
47	盃	底部 ③(7.4)	灰白色	2~3mmの砂粒を多量に含む		
48	更	底部 ②(6.6)	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む		
49	更	底部 ③(6.4)	淡褐色	2mm前後の砂粒を含む	S41.11.16 吉田 第I地区	
50	更	底部 ③(4.6)	淡赤褐色	1~2mmの砂粒を含む	S41.11.16 吉田 第I・1区	
51	更	底部	淡黄褐色	2~3mmの砂粒を含む		
52	更	底部 ②(4.6)	①赤褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む		2次焼成による変色
53	更	底部 ②(4.8)	①赤褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を含む		
54	更	底部 ②(6.8)	①赤褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む		
弥生時代後期~古墳時代中期						
55	更	①(15.2)	①淡赤褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.11.17 吉田 第I・2区	風化著しい
56	更	①(16.0)	①淡褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を含む		
57	高環	①(24.6)	淡黄褐色	2~3mmの砂粒をわずかに含む	S41.11.15 吉田 第I	風化著しい
58	高環		淡赤褐色	精製粘土	S41.11.16 吉田 第I・第II区	風化著しい
59	高環		淡赤褐色	精製粘土		風化著しい
60	高環		淡褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む		
61	更	底部 ④(1.6)	①赤褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.11.24 吉田 第I・2区 S41.11.18の中	
古墳時代後期~中期						
62	盃	①(7.6)	灰青色	1mm前後の砂粒を含む		
63	盃	①(10.6)	暗青灰色	1mm前後の砂粒を含む		
64	坪壠		青灰色	無砂粒を含む		
65	盃	①(6.0)	灰青色	無砂粒を含む		内面に自然釉付着
66	高環		灰青色	精製粘土		
67	更		明褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	S41.11.24 外表面ハケ	
68	更	①(17.8)	赤褐色	無砂粒を多量に含む 黒苔斑		風化著しい
69	环	①(9.8)	青灰色	精製粘土		
70	壺	①(6.8)	淡赤褐色	精製粘土	S41.11.17 吉田 第I・2区	
71	皿	①(5.2)	灰白色	精製粘土にわずかに 砂粒を含む		赤切り底
72	皿	①(5.4)	淡灰褐色	精製粘土		底面に板状灰痕
73	把手		淡褐色	無砂粒と赤色斑紋を 多量に含む		焦か?
74	石網					滑石製

付篇 III

吉田遺跡第I地区A区出土の弥生時代中期後半の土器について

豆 谷 和 之

1 吉田遺跡第I地区A区出土の弥生時代中期後半の土器

吉田遺跡第I地区A区出土土器の主体を占める弥生時代中期後半の土器は、「第4トレンチ」の註記をもつものが多い。これらの土器片には、「第4トレンチ」と共に「南壁包含層」「弥生包含層」の註記がなされているものがある。この註記をもった土器片の一部が、当時の出土状況写真(PL. 7)に写っている。その写真は、弥生時代中期後半の土器片が集中して出土した状況を写しており、これが「山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報」に記載された「弥生時代中期の土器が充填した不整形のピット」の出土状況写真に相当することは間違いない。

写真に写っていた破片は、接合によってほぼ完形になる北部九州系の広口壺(144)と無頸壺(136)であることが判明した。また、写真には写っていないが、上述の広口壺や無頸壺と同じ地区・日付の註記をもった垂下口縁壺が数点、ある程度まで復元できることも判明した。断片でなく復元できることは単なる包含層出土ではないことを、さらに広口壺や無頸壺と同じ註記をもつことは同一遺構内出土の可能性が高いことを示していた。

未だ、周防独特の垂下口縁壺と北部九州系土器の良好な遺構共伴例ではなく、「不整形のピット」から出土したと考えられる本資料の重要性を痛感した。しかし、付篇IIでも述べたように、吉田遺跡第I地区A区出土土器は過去に混乱しており、無註記のものなど出土地点の不明なものが多数を占めた。資料的価値を与えるためには、操作が必要であった。

2 吉田遺跡出土資料の整理方法

過去の調査で出土し、その出土状況が不明な吉田遺跡出土資料については以下のような方針で整理を行っている。

現在、吉田遺跡出土資料は、W36×D52×H30のコンテナ内に各地点別に袋に仕分けられている。このコンテナには既に、山口大学埋蔵文化財資料館の整理番号がつけられている。第I地区A区は、No100, No101, No104, No107, No108, No161~166の11コンテナがある。コンテナの番号を親番号として、更にコンテナ内に仕分けられた袋についても子番号をつけた(No100-1, No100-2…というように)。整理基準として1つの袋を1つのまとまりと見なし、土器片全てに番号を記入し、徹底した接合を行った。

地点無註記の土器片と地点註記のある土器片を接合させることによって、地点無註記の土器に地点を与えるのである。これによって、その地点無註記の土器片が入っていた袋に収められた、他の地点無註記土器片の出土地点を推測することが可能である。ただし、過去の混乱により、同一袋内には異なる地点註記の土器片が混じっている場合がある。必ずしも一袋=同一地点ではない。しかし、一袋の土器片が何の関連もなくまとめられているとは考えられず、混じりのなかにも主体となる同一地点のまとまりがあるはずである。これは、同一袋内のそれぞれの地点無註記土器片が註記をもつ土器片と数多く接合し、その註記をもつ土器片が同じ地点を示す頻度が高ければ高いほど、その可能性は高くなる。

この基本的な接合作業を生かし、A区第4トレンチ出土中期弥生土器については「不整形のピット」出土の有無を検討する為、更に資料操作を行った。

3 「不整形のピット」出土土器の判定

確実に「不整形のピット」出土と信用できるのは、出土状況写真に写った土器片及びそれと接合する土器片である。これを「不整形のピット」の一次資料とする。一次資料の土器片には「第4トレンチ」「4トレンチ②」「排水溝」「排水溝南壁包含層」「カクラン」などの註記がされていた。本来ならば、これらの土器片と全く同じ註記をもつ土器片が、「不整形のピット」出土と考えられるのであるが、以下の理由により即断には危険が伴った。

ただ漠然と「第4トレンチ」とだけ註記されている破片については、「不整形のピット」以外の第4トレンチ内から出土している可能性がある。また、土器の註記が何回かに分けて行われ、混乱して誤った註記を行っている可能性がある。それを端的に示すのが、内外面に異なる日付の註記が行われているFig.44-137である。

そこで、一次資料を中心とした接合関係から、「不整形のピット」出土土器としてのランク付けを行った。なお、この接合関係についてはTab.5にまとめた、参照されたい。

1次資料………「不整形のピット」出土状況写真に写っている土器及びそれと接合したもの（Fig.79）

2次資料………1次資料と同じ註記をもち、なおかつその接合関係に1次資料と同じ袋番号をもつ破片が含まれているもの（Fig.80上段）

3次資料………1次資料と同じ註記をもつが、その接合関係に1次資料と同じ袋番号の破片を含まないもの（Fig.80下段）

「不整形のピット」出土土器の判定

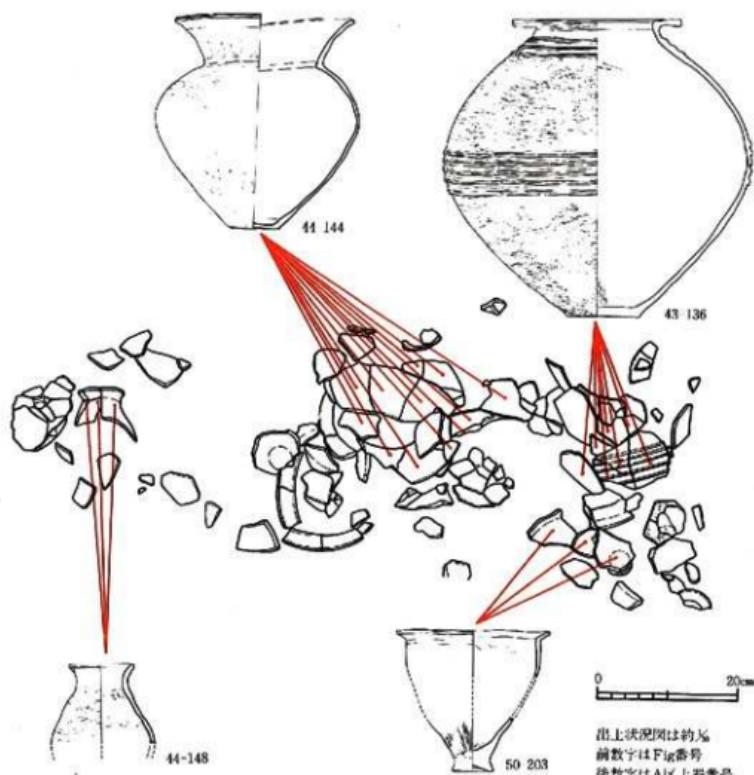


Fig. 79 「不整形のピット」出土状況および1次資料

4次資料……「4トレンチ」のみの註記ではあるが、1次資料と同じ袋番号をもつ破片が含まれているもの (Fig.81上段)

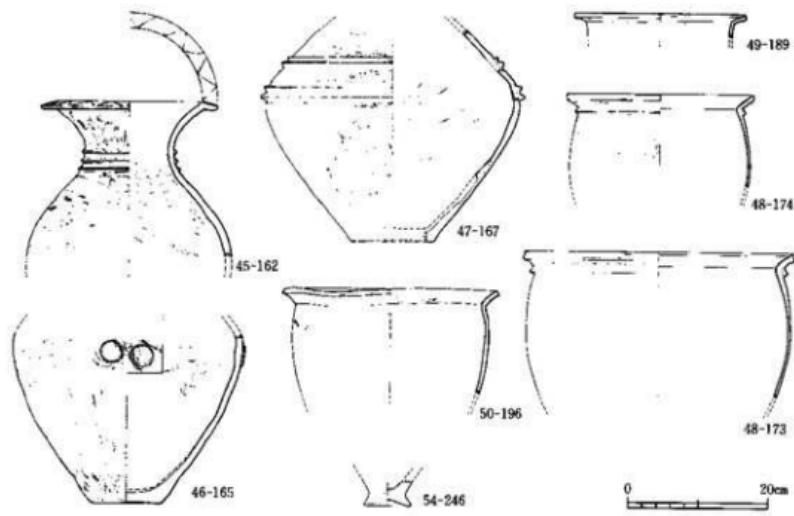
5次資料……「4トレンチ」のみの註記であり、1次資料と同じ袋番号の破片を含まないもの (Fig.81下段)

参考資料……無註記ではあるが、1次資料と同じ袋番号のもの

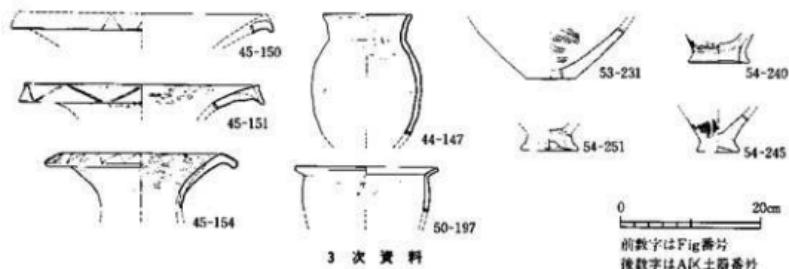
(Fig.44・45・47~54・138・141・146・153・155・157・158・160・161・168・176・182・183・191・194・195・206・207・209・217・220~225・235・238・244)

このうち出土状況写真があり、「不整形のピット」からの出土が確実な1次資料に対して、

吉田遺跡第Ⅰ地区A区出土の弥生時代中期後半の土器について



2 次 資 料



3 次 資 料

前数字はFig番号
後数字はAIK土器番号

Fig. 80 「不整形のピット」出土上器 2・3次資料

2次資料以下にどれだけの「不整形のピット」出土土器として資料価値があるか、という疑問が生じる。2次資料はその破片が註記だけでなく、1次資料の破片と同じ袋に収められていることからも、ほぼ「不整形のピット」からの出土は疑いないといえる。1次資料と同じ袋には収められず、2次資料ほどの資料価値はないが、1次資料と同じ註記をもった3次資料までが「不整形のピット」出土土器の可能性を持つ。

これに対して、4次資料、5次資料は「4トレンチ」のみの註記であり、4トレンチ内

「不整形のピット」出土土器の判定

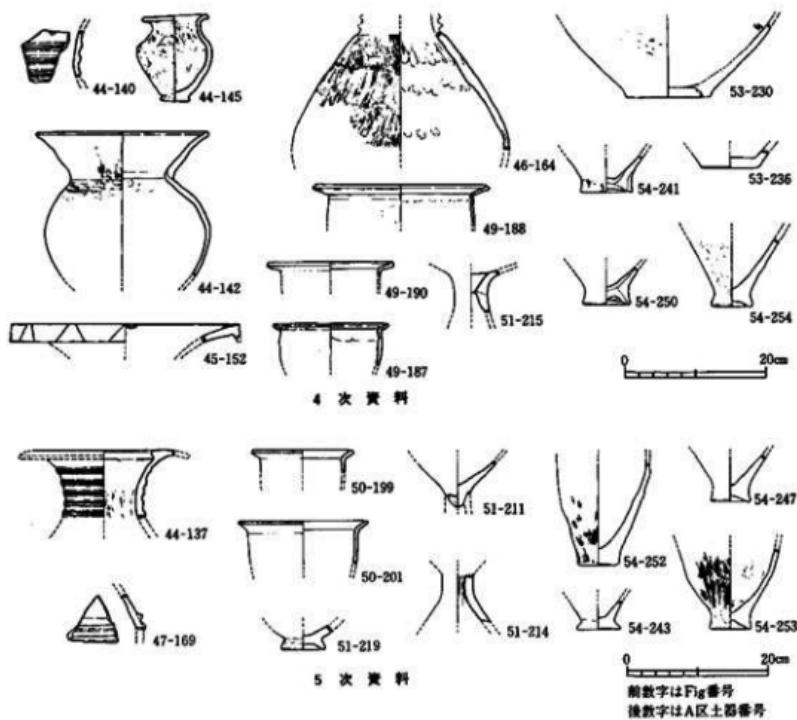


Fig. 81 「不整形のピット」出土土器 4・5次資料

のどの地点から出土したものか不明である。「不整形のピット」出土土器として扱う場合には、慎重な態度が必要である。参考資料は無註記であり、「不整形のピット」出土土器の信憑性は薄く、参考程度にとどめておきたい。

1～3次資料をもって復元された「不整形のピット」出土土器群の内容は多彩である。周防に独特な垂下口縁壺と北部九州系無頸壺・広口壺・壺が共伴していたと考えられる。現在までの山口県下報告例で垂下口縁壺と北部九州系土器が遺構で共伴した例は、坂手沖尻遺跡溝Ⅰ、奥正権寺遺跡SD-1と赤妻遺跡SK-12のみである。これらは、土器内容が限られており、その内容が豊富な吉田遺跡第I地区A区「不整形ピット」出土土器は、山口県と北部九州の平行関係を考えていく上で、重要な土器である。

次に、吉田遺跡第I地区A区「不整形のピット」出土土器の編年的位置を検討する。

4 「不整形のピット」出土土器の編年的位置

土器の編年を組み上げようとする場合、まずは最小単位の地域内で行われることが望ましい。それは、地域の範囲を広げれば土器の変化には時間的要素以外に、地域的要素が入り込むからである。このことからすれば、最も理想的なのは、一遺跡だけで編年が組み上げられることであろう。

吉田遺跡では昭和41年から現在に到るまで、継続的に発掘調査が行われている。昭和53年以降の発掘調査については、既に各年報において報告済みである。それによれば、弥生時代の全期間を通じて、継続的に集落が営まれていたと考えられる。ただし、前期前半と中期前半がやや希薄なようである（今後の吉田遺跡調査団発掘資料の整理によって、補足資料の増加が期待される）。吉田遺跡の資料を用いて、弥生土器の編年を組み立てることはある程度まで可能な段階にきている。しかし、先に述べたような資料的欠如及び筆者の力量不足から、もう少し先に見送ることにしたい。本節では、第Ⅰ地区A区「不整形のピット」出土中期後半土器を中心として、前後の中期から後期初頭の土器変遷を概観してみたい。この検討は、最小単位でなされることが望ましいが、前述したように資料的欠如もあり、欠如した部分は周辺の山口市内、防府市内資料をもって補う。なお、土器変遷の指標として、垂下口縁壺の変化を主軸に据えたい。中期後半において、最も普遍的で、変化を鋭敏に表すと考えられるからである。

(1) 吉田遺跡での変遷

第Ⅰ地区A区「不整形のピット」出土土器は、1～3次資料により、以下のように器種構成が復元された。150・151・154・162・165・167は典型的な垂下口縁壺である。壺はいずれも胴部が張らず、口縁部が強く屈曲する。189は跳ね上げ口縁をもつ。北部九州系の土器には、球体の胴部をもつ無頸壺136、頸部屈曲部に突帯をもつ壺173・174がある。いずれも須恵II式の特徴である。第Ⅰ地区A区「不整形のピット」出土土器は垂下口縁壺の盛行期である。これと同時期と考えられるのが、昭和57年度保存地区第13号土壙出土土器、昭和59年度ラグビー場防球ネットSD-1下層出土土器である。あまり良好な資料ではない。

先述したように、吉田遺跡は中期前半の資料が希薄であり、「不整形のピット」出土土器に先行する遺構一括資料は今のところ見あたらない。

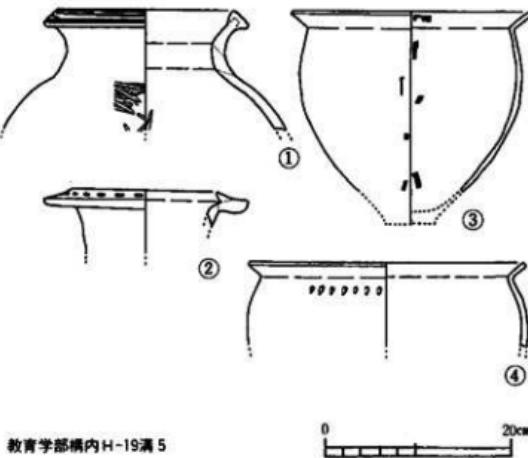
「不整形のピット」出土土器に後出する資料は、昭和56年度教育学部構内H-19区溝5⁷⁾ (Fig.82上段)、昭和57年度保存地区第3号・第9号土壙 (Fig.82下段) 資料である。これらは、既に垂下口縁壺は消失している。

「不整形のピット」の幅年の位置

教育学部構内H-19区溝5資料は、さほど出土量は多くない。①の壺は、口縁部拡張面に3条のヘラ描き沈線による擬凹線を施す。②は複合口縁状であるが、彫形口縁壺の変形と考えられなくもない。③の壺は頸部がしまり、胴部が張る。内面は底部方向からのタテケズリである。④は頸部にヘラ状工具による刺突文をもつ壺である。

保存地区第3号・第9号土壤出土土器の特徴は壺⑦～⑬にある。極めて厚い器壁をもち、口縁端部には沈線による擬凹線が巡らされる。頸胴間のナデが強く、頸部と胴部に明瞭な段がつく。胴部外面には右から左方向へケズリが施され、それをハケあるいはナデによつて消す。

第3号土壤には、複合口縁壺が伴う。



教育学部構内H-19溝5



昭和57年度保存地区第9号土壤

Fig. 82 古遺跡の弥生後期初頭の土器

上述した3遺構出土土器の特徴は山口県後期初頭に位置づけられることを示している。そのうち、教育学部構内H-19区溝5の壺は器壁が薄く、口縁部が強く屈曲しており、中期的様相を残している。保存地区第3号・第9号土壙に先行する可能性がある。しかし、溝5の資料数は少なく、明言は避けたい。これら後期初頭土器群と、「不整形のビット」出土土器群との型式差は著しく、間にもう1型式が入る余地を残している。吉田遺跡にはその資料がなく、「不整形のビット」出土土器群に先行する資料と共に、周辺の遺跡資料に求めなければならない。

(2) 周辺資料による補足

吉田遺跡で欠如した、第Ⅰ地区A区「不整形のビット」に先行する垂下口縁壺出現期の資料として、防府市大崎遺跡SK-23出土土器(Fig.83)が挙げられる。^⑩のように口縁端部が肥厚するものや、^⑪のようにわずかに口縁端部が垂下するものがある。^⑫は、頸部突起下に腹状文を施すものである。^⑬の壺は、口縁端部を丸く收める。壺における垂下部の未発達、突起上の押圧などが、垂下口縁壺出現期の特徴であろう。

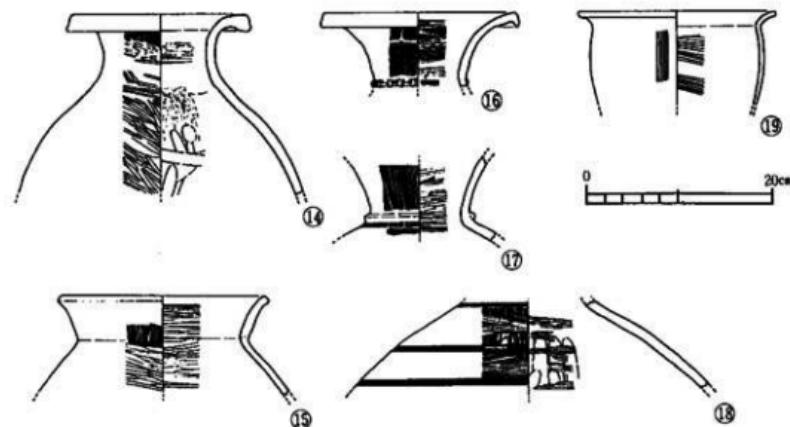
第Ⅰ地区A区「不整形のビット」に後出する垂下口縁壺衰退期の資料として挙げられるのが、防府市井上山B地区SK-5出土土器(Fig.83)、山口市障子岳南遺跡包含層出土土器(Fig.83)の一部である。井上山遺跡B地区SK-5の垂下口縁壺は、^⑭・^⑮のように頸部、口縁垂下部とともに短くなる。また、垂下端部がやや鋭い。この遺構では共伴しないが、井上山遺跡包含層^⑯・^⑰がそれにあたる。山口県島田川流域の岡山遺跡では、第38号土壙で垂下口縁壺と口縁部上面拡張壺が共伴している。口縁部上面拡張壺は、中期垂下口縁壺から後期複合口縁壺への過渡的形態を示すのであろうか。壺は障子岳南遺跡包含層資料、^⑱のように胴部がやや張る。垂下口縁壺の衰退期の特徴として、垂下部が短くなることや、上面の口縁部拡張が挙げられる。

以上のことにより、周防の弥生時代中期後半を代表する垂下口縁壺は、その変遷から三段階に区分することが可能である。

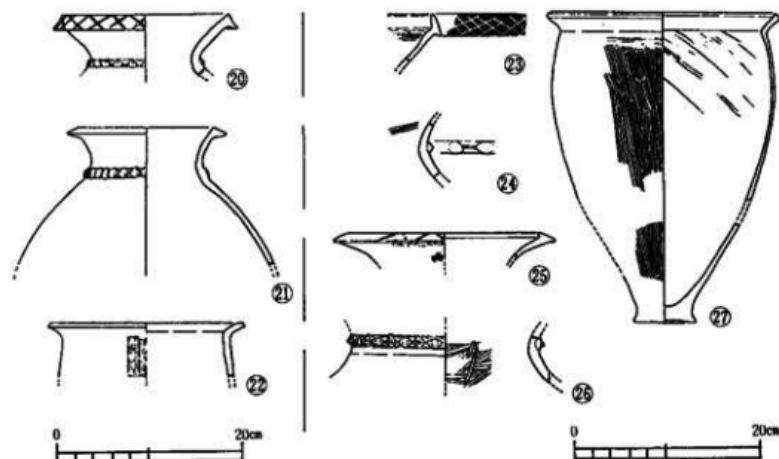
(仮案)　出現期(大崎遺跡SK-23)→盛行期(吉田遺跡第Ⅰ地区A区「不整形のビット」)→衰退期(井上山遺跡B地区SK-5)

さほど明確ではないが、壺も三段階に対応して変化している。また、それぞれの段階に他器種の消長が対応している可能性がある。将来的には、セットによる中期後半の三段階区分が可能となるであろう。

「不整形のピット」の編年的位置



大崎遺跡SK-23



井上山遺跡B地区SK-5

陣子岳南遺跡包含層

Fig. 83 吉田遺跡周辺の弥生中期後半の土器

5 他地域との併行関係

吉田遺跡第Ⅰ地区A区「不整形のピット」からは、垂下口縁壺と共に須玖Ⅱ式の特徴を有する北部九州系土器が伴った。從来言われてきたように、垂下口縁壺の盛行期には須玖Ⅱ式が伴うのである。そして、垂下口縁壺の衰退期にも、須玖Ⅱ式的な北部九州系土器が共伴する可能性がある。ただ、良好な遺構一括資料がなく、遠賀川以東の須玖系土器の細分が進んでいないことがあって、限定することはできない。

これに対して、近年愛媛県では垂下口縁壺などを含んだ、良好な遺構一括資料が増えてきており、山口県の資料と比較することが可能になりつつある。さらには、在地色の強い山口県の土器が愛媛県の土器を介することによって、近畿地方との併行関係を探ることも可能である。

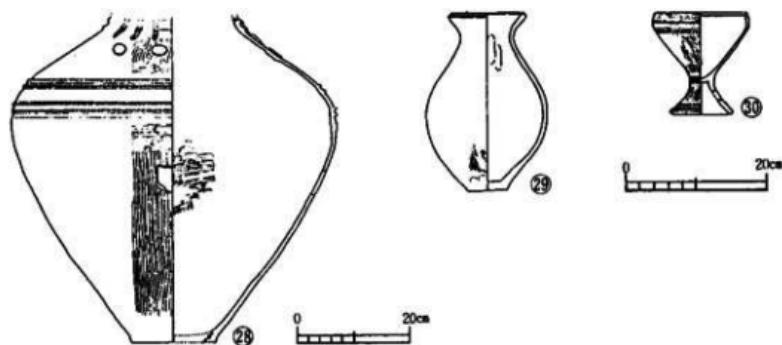
(1) 愛媛県との併行関係

文京遺跡第3次SK-1¹³⁾ (Fig.84) から垂下口縁壺¹⁴⁾が出土している。山口県ではこれと同じ脣部突帯構成をもつ垂下口縁壺が、吉田遺跡第Ⅰ地区A区「不整形のピット」、奥正椎寺遺跡第V地区SD-1・11から出土している。いずれも、垂下口縁壺盛行期に属する。なお、文京遺跡第3次SK-1からは、矢羽形の透かしをもった高壺¹⁵⁾が共伴している。

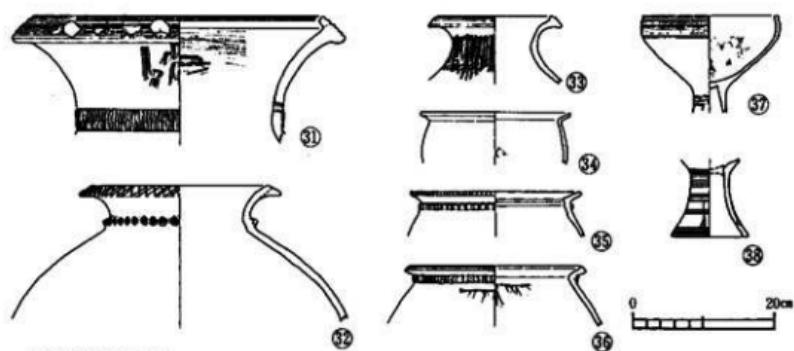
この盛行期の垂下口縁壺に対して、衰退期の垂下口縁壺を伴うのが文京遺跡第10次SX-1出土土器 (Fig.84) である。¹⁶⁾は短く突出した垂下部をもち、その端部は鋭い。頸部突帯には押圧を加える。SX-1は宮本一夫氏によれば、愛媛県の中期でも終末に位置づけられている。

山口県後期初頭に位置づけられる吉田遺跡教育学部構内H-19区溝5から出土した①の壺は、愛媛県で普遍的に見られる広口の短頸壺に系譜が求められよう。その太くなった頸部は、文京遺跡第2次SB-5 (Fig.84) 出土¹⁷⁾に似る。梅木謙一氏は、文京遺跡第2次SB-5を松山平野の後期I式と位置づける。垂下口縁壺衰退期の次につづく編年の順序としては対応したとしても矛盾はない。しかし、吉出遺跡教育学部構内H-19区溝5が資料不足のため、本当に対応するかは定かではない。これに対して、梅木氏が松山平野後期I新～IIに位置づける文京遺跡第10次SX-14 (Fig.85)、松山大学構内遺跡第2次SB-7 (Fig.85) に併行すると考えられるのが吉田遺跡保存地区第3号・第9号土壺である。吉田遺跡保存地区第3号・第9号土壺の壺がもつ厚手の器壁、口縁端部の擬凹線、頸胴間の強いヨコナデによる段、内面のタテケズリは文京遺跡第10次SX-14の⑥壺に類似する。吉田遺跡保存地区第3号土壺には複合口縁壺が伴っており、複合口縁壺が一般

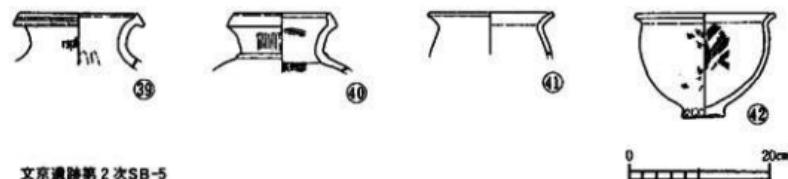
他地域との併行關係



文京遺跡第3次SK-1



文京遺跡第10次SX-1



文京遺跡第2次SB-5

Fig. 84 松山平野の弥生中期後半～後期初頭の土器

化する松山平野の後期Ⅱ式と近い内容をもつ。また、間接的ではあるが、吉田遺跡保存地区第3号・第9号土壙と同じ特徴をもった壺が、徳山市円光寺遺跡第4号土壙から出土している。これに共伴した鉢及び台付鉢はその形態が松山平野後期Ⅱ式の鉢と類似する。

(2) 近畿地方との併行関係

さて、愛媛県資料を介した、山口県と近畿地方との併行関係である。

一つの手がかりは、文京遺跡第3次SK-1から盛行期の垂下口縁壺脛部と共に、矢羽形の透かしをもつ[◎]の高坏であろう。矢羽形の透かしをもつ高坏は、唐古・鏡遺跡第1次の北方砂層で多數検出されている。北方砂層は大和IV様式の河道である。また、高坏の口縁部、脚部に施される凹線も、四線文出現期の大和III様式後半よりも遅らないことを示している。垂下口縁壺盛行期は、間接資料により大和III様式後半以降と考えられる。これは、垂下口縁壺出現期の大崎遺跡SK-21に伴った、脛部に簾状文を施す壺からも肯定することができる。壺の脣部突堤下に、簾状文を巡らす文様構成は、畿内一般では第III様式以降に出現する。このことから、垂下口縁壺出現期が畿内第III様式の少なくとも前半部分と併行することが推定される。出現期が畿内第III様式の範囲内に置かれる以上、垂下口縁壺盛行期は畿内III様式後半以降に位置づけられざるをえない。

垂下口縁壺衰退期は、今のところ近畿地方との併行関係を探る手がかりはない。しかし、確実に押さえることのできる山口県・愛媛県後期初頭の土器と畿内の併行関係から逆算することが可能である。山口県後期初頭の吉田遺跡保存地区第3号・第9号土壙が松山大学構内遺跡SB-7と併行することは先に述べた。梅木氏は松山大学構内遺跡第2次SB-7の[◎]の台付無頸壺を「大阪や奈良の第V-0~1様式にみられる無形壺ないし鉢形土器（中略）に同様なもの（わずかに似る）が見受けられる（後略）」とする。これは、卓見であり、その他にも脚部がラッパ状に広がり、裾部がやや屈曲する[◎]の高坏や、坏部に円孔を有する[◎]の高坏は、大和V様式に特徴的なものである（これらと、同一の特徴を有する土器群は、日本海側では福井県、太平洋側では愛知県にまで達する）。ともかく、山口県後期初頭の土器が松山平野後期Ⅱ式を介して、畿内後期初頭（大和第V様式、河内第V様式0~1）に併行することから、垂下口縁壺衰退期はそれ以前の畿内IV様式に併行すると考えられる。

きわめておまかに、愛媛県を介して山口県と近畿地方との弥生時代中期後半から後期初頭土器の併行関係を検討した。ただし、これらはあくまで概観であって、今後より詳細な検討が必要である。

他地域との併行関係

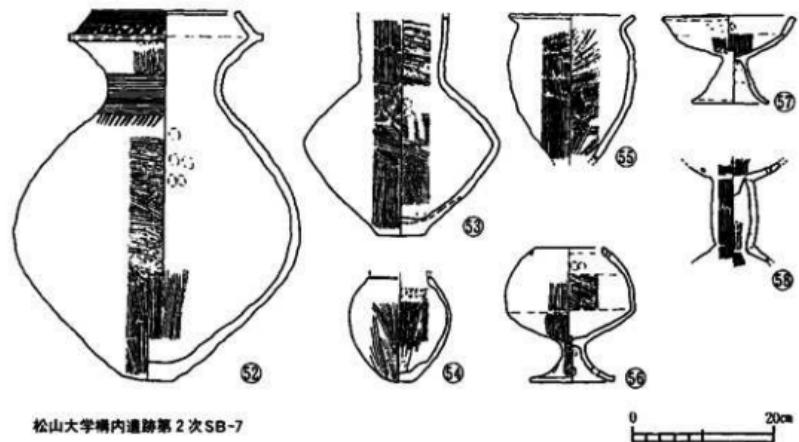
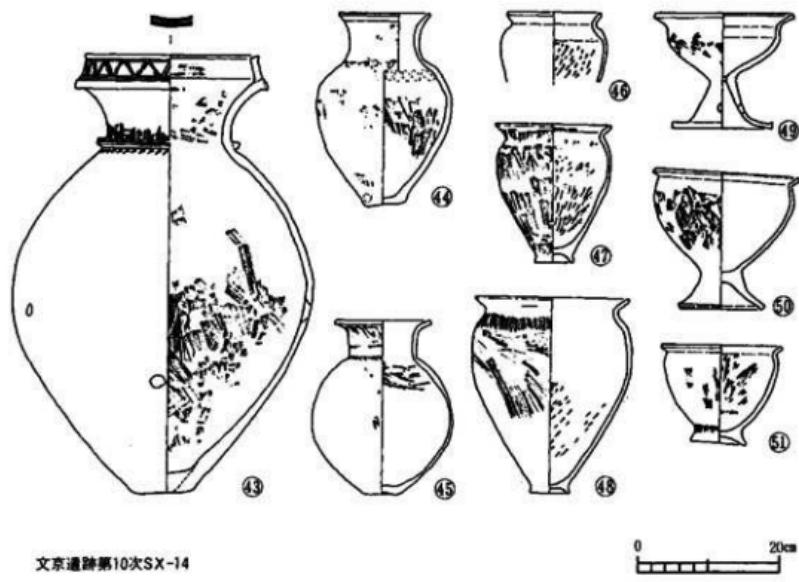


Fig. 85 松山平野の弥生後期初頭の土器

吉田遺跡第Ⅰ地区A区出土の弥生時代中期後半の土器について

Tab. 5 第4トレンチ出土遺物の接合関係表

品 番 号	No100											No101						No104						No107						No108											No161				No162			
	1	2	3	4	5	6	7	8	10	14	不 明	1	6	7	15	17	14	18	19	5	10	11	12	14	16	17	18	23	24	25	27	28	29	不 明	10	20	52	73	4	7	9	25	26	27				
136	25	4		2	1	4	15				2	1	1																						1	6	1	1	4									
144	2	1			12	1	6				1																										3											
148																																																
203	1					1	1		1																														1									
137																																																
138																																																
139							1																																									
140											1																																					
141																																																
142	3		11	2	13						9		13	1																									2	5								
145	1		1																																													
146	1				4																																											
147																																																
150																																																
151																																																
152	1																																															
153	1																																															
154																																																
155		1																																														
157																																																
158																																																
160	1																																															
161						1																																										
162	2		4																																													
164							1																																									
165					5	1																																										
167	1			1	1	4	1	1				3	4			5	2	1	3	1				4	1	2	1	5	2																			
168						1																																										
169																																																
173				4	2																																											
174	1																																															
176																																																
182	1																																															
183	1																																															
187	1																																															
188	2																																															
189					3																																											

Na163															Na164										Na165										Na166			不明		合計	資料種類							
1	7	14	16	25	26	27	28	29	33	37	38	39	42	43	45	46	48	49	1	2	3	4	5	6	12	14	16	17	19	23	30	31	2	3	7	9	15	18	20	21	22	1	2	3	10			
																			1		21	4																		24	18		6	164				
																					6	5																								76	1次資料	
																																															11	
																																															21	
																																															4	5次資料
																																															1	參考資料
																																															1	2次資料
																																															1	4次資料
																																															1	參考資料
																																															9	62
																																															5	4次資料
																																															1	參考資料
																																															16	3次資料
																																															3	3次資料
																																															3	3次資料
																																															1	4次資料
																																															1	參考資料
																																															1	參考資料
																																															1	參考資料
																																															1	參考資料
																																															16	2次資料
																																															3	4次資料
																																															13	2次資料
																																															43	2次資料
																																															1	參考資料
																																															1	5次資料
																																															14	2次資料
																																															7	2次資料
																																															1	參考資料
																																															1	參考資料
																																															4	4次資料
																																															11	4次資料
																																															5	2次資料

吉田遺跡第Ⅰ地区A区出土の弥生時代中期後半の土器について

本稿は、山口大学平成4年度教育研究学内特別經費による研究補助を受けて実施した、「西日本における弥生文化の研究」（代表 近藤喬一）の一部成果を含んでいる。本稿をまとめるにあたっては、石井龍彦・梅木謙一・小田富士雄・田崎博之・中村友博・乗安和二三・藤田三郎・山本一郎の諸氏の御教示・御援助賜わった。深く感謝致します。

[注]

- 1) 山口大学吉田遺跡調査団「山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報」（山口大学、1976年）
- 2) 山口県教育委員会『坂手沖尻遺跡・惣の尻遺跡』（1978年）
- 3) 山口県教育委員会「奥正椎寺遺跡」Ⅱ（『奥正椎寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡』、1985年）
- 4) 山口県教育委員会『赤妻遺跡』（1990年）
- 5) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』V、1986年）
- 6) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』III、1985年）
- 7) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部構内H-19区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』、1982年）
- 8) 山口県教育委員会「大崎遺跡」（『奥正椎寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡』、1985年）
- 9) 井上山遺跡調査団「井上山－山口県防府市寿町所在弥生時代集落遺跡調査報告書」（1979年）
- 10) 山口市教育委員会「障子岳南（山水園）遺跡」（『吉田遺跡・障子岳南（山水園）遺跡』、1991年）
- 11) 山口県教育委員会「岡山遺跡－鳥田川中流域遺跡群の調査－」（1987年）
- 12) 関松山市生涯学習振興財团埋蔵文化財センター『文京遺跡－第2・3・5次調査』（1992年）
- 13) 愛媛大学埋蔵文化財調査室「文京遺跡第10次調査－文京遺跡における弥生時代遺跡の調査－」（1991年）
- 14) 宮本一夫「文京遺跡出土弥生土器の編年」（『文京遺跡第10次調査－文京遺跡における弥生時代遺跡の調査－』、1991年）
- 15) 梅木謙一「松山平野の弥生後期土器」（『松山大学構内遺跡－第2次調査－』、1991年）
- 16) 山口県教育委員会「円光寺遺跡－惣山市大字久米所在の弥生－近世の集落遺跡の調査－」（1987年）
- 17) 小林行雄・末永雅雄・藤岡謙一郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』（『京都帝國大学文学部考古学研究報告』第16冊、1943年）
- 18) 藤田三郎・松本洋明「大和地域」（『弥生土器の様式と編年』－近畿編Ⅰ－、1989年）
- 19) 佐原真「畿内地方」（『弥生式土器集成』本編2、1968年）

山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則

(設置)

第1条 山口大学に山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）を置く。

(資料館の業務)

第2条 資料館は、学内の共同利用施設として、次の各号に掲げる業務を行なう。

- 一 山口大学構内等から出土した埋蔵文化財の収藏・展示および調査研究
- 二 山口大学構内等における埋蔵文化財の発掘調査並びに報告書の刊行
- 三 その他の埋蔵文化財に関する必要な業務

(運営委員会)

第3条 資料館に関する事項を審議するため、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

2 委員会に関する規則は、別に定める。

(館長)

第4条 資料館に館長を置く。館長は委員会の議を経て学長が委嘱する。

2 館長の任期は2年とし、再任を妨げない。

3 館長は、資料館の業務を掌理する。

第5条 資料館には調査員若干名を置く。

2 調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

3 調査員は、資料館の業務を処理する。

(特別調査員)

第6条 埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行なうため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

2 特別調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

(雑則)

第7条 この規則に定めるもののほか、資料館に必要な事項は別に定める。

山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則

(趣旨)

第1条 この規則は、山口大学埋蔵文化財資料館規則（以下「資料館規則」という。）第3条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 委員会は次の事項を審議する。

- 一 山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に関する基本的なこと。
- 二 資料館の管理運営に関すること。
- 三 資料館の整備充実に関すること。
- 四 資料館の運営に要する経費に関すること。
- 五 その他必要な事項

(組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 資料館規則第4条第1項の館長
 - 二 各学部および教養部の教官各1名
 - 三 事務局長
- 2 前項第2号の委員は、それぞれの部局の推薦に基づいて学長が委嘱する。

(任期)

第4条 前条第1項第2号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選とする。

2 委員長は委員会を召集し、その議長となる。

(幹事)

第6条 委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

(委員以外の出席)

第7条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を委員会に出席させることができる。

(事務)

第8条 委員会の事務は、庶務部庶務課において処理する。

(雑則)

第9条 この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

Tab. 6 山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員

(平成3年度)

部局名	氏名	官職	任期	備考
工学部	島 敏 史	教 授	平3.4.1～平5.3.31	委員長
人文学部	近 藤 留一	教 授	平3.6.7～平5.6.6	館 長
人文学部	八 木 充	教 授	平3.5.29～平5.5.28	
教育学部	川 村 博 忠	教 授	平3.4.1～平5.3.31	
経済学部	見 野 貞 夫	教 授	平3.4.1～平5.3.31	
理 学 部	永 尾 隆 志	助 教 授	平3.4.1～平5.3.31	
医 学 部	福 本 哲 夫	教 授	平2.4.1～平4.3.31	
農 学 部	平 尾 重 太 郎	教 授	平3.4.1～平5.3.31	
教 養 部	森 茂 晓	教 授	平3.4.1～平5.3.31	
事 務 局	宗 形 郁 夫	事務局長	平3.4.1～平4.3.31	

(平成4年度)

部局名	氏名	官職	任期	備考
工学部	島 敏 史	教 授	平3.4.1～平5.3.31	委員長
人文学部	近 藤 留一	教 授	平3.6.7～平5.6.6	館 長
人文学部	八 木 充	教 授	平3.5.29～平5.5.28	
教育学部	川 村 博 忠	教 授	平3.4.1～平5.3.31	
経済学部	見 野 貞 夫	教 授	平3.4.1～平5.3.31	
理 学 部	永 尾 隆 志	助 教 授	平3.4.1～平5.3.31	
医 学 部	福 本 哲 夫	教 授	平4.4.1～平6.3.31	
農 学 部	平 尾 重 太 郎	教 授	平3.4.1～平5.3.31	
教 養 部	森 茂 晓	助 教 授	平3.4.1～平5.3.31	
事 務 局	萱 沼 一	事務局長	平4.4.1～	

Tab. 7 山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員

学部等	氏名	官職	専攻等	備考
人文学部	中 村 友 博	助 教 授	日本考古学	平成3・4年度

山口大学校内の主な調査

吉田構内

Tab. 8 山口大学構内の主な調査一覧表

調査年度	調査地区名	構内地図番号	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献 年報 頁
昭和 41年	第 I 地区 A - B 区	L - M - N - 15	1	36?	不整形のピット・柱穴	弥生土器、土器器、 須恵器	事前	調査担当 小野忠郎	
	第 II 地区 家畜病院新館	S - T - 19 R - S - 30	2	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土器器、 瓦質土器、須恵器	*	*	
	第 II 地区	P - Q - 19 - 20	3			弥生土器、土器器	試掘	*	
	第 IV 地区 牛ヶ新宿	S - 10	4	300	弥生溝、土壤、 古墳整穴住居、 中世住居跡、溝	弥生土器、土器器、 須恵器、瓦質土器、 陶磁器	事前	*	
	第 IV 地区	S - T - 9 - 13	5				試掘	*	
昭和 42年	第 III 地区 松川区	E - 20	6	1,000	杭州	弥生土器、土器器、 須恵器、瓦質土器、 火被状木枕	事前	*	
	第 III 地区 南区	G - H - 22 - 23	7			河川跡、柱穴	繩文土器、弥生土器、 木器、石器	*	*
	第 III 地区 北区	I - J - 20 - 21	8	1,400	整穴住居、溝、土壤、 柱穴		*	*	
	第 III 地区 東南区	H - 23 I - J - K - 24	9		弥生整穴住居	弥生土器	*	*	
	第 III 地区 野球場	I - 22 - 23 J - 21 - 22 - 23 K - 22 - 23	10		中世柱穴	瓦質土器	試掘	*	
	第 V 地区 学生食堂	I - J - 19 - 20	11		弥生溝、古墳土壤	弥生土器、土器器	事前	*	
	第 V 地区	H - I - J - K - L - M - N - 18 - 19 - 20	12		河川跡、柱穴、土壤	弥生土器、土器器	試掘	調査担当 山口大学古墳 遺跡調査団	①
	第 I 地区 C 区 大学本部新館	K - L - 14	13	600	整穴住居、溝、土壤	土器器、須恵器、瓦 質土器	事前	*	
	第 V 地区 教育学部				河川跡	弥生土器、土器器、 須恵器	試掘	*	
	第 I 地区 D 区 第 1 地点	K - 13	14		溝	弥生土器、木炭屑	*	*	
昭和 43年	第 I 地区 D 区 第 2 地点	L - 13	15			弥生土器、土器器、 瓦質土器	*	*	
	第 I 地区 D 区 第 3 地点	L - M - 13	16		整穴住居、土壤、 柱穴	土器器	*	*	
	第 I 地区 D 区 第 4 地点	M - N - 13	17		弥生整穴住居、溝、 土壤	弥生土器、土器器、 瓦質土器、石器	*	*	
	第 I 地区 D 区 第 5 地点	L - 13	18		弥生溝	弥生土器	*	*	
	第 I 地区 D 区 第 6 地点	M - 13	19		古墳整穴住居、 弥生溝	弥生土器、土器器、 石器	*	*	
	第 I 地区 D 区 第 7 地点	M - 13	20		溝	弥生土器	*	*	
	第 I 地区 E 区 第 2 学生食堂新館	N - O - 15	21	900	弥生 - 古墳整穴住居、 土壤、溝、柱穴	弥生土器、土器器、 須恵器、瓦質土器、 石器、鉄製品	事前	*	
昭和 50年	第 II 地区					弥生土器	試掘	*	
昭和 51年	第 III 地区				整穴住居	弥生土器、土器器、 須恵器	*	*	

調査年度	調査名	調査地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和 53年	人文学部校舎新築	M・N-21	22	160			試掘	委託担当 近藤南一	年報 X
	教育学部附属附属学校新築	A・B・C・D- 20-24	23	410	唐、土壙	绳文土器 弥生土器	*	山口大学准教授 文化財資料室・ 山口市教育委員会	年報 X
昭和 54年	理学部校舎新堂	O-15-19	24	250			*		年報 X
	農学部農業技術実験施設新堂	P-15-19	25	380			*		年報 X
	本部管理棟新堂	L-14	26	740	唐、土壙、柱穴、 中世井戸、土壤塗、 住居跡	弥生土器、土師器、 石製品	事前		年報 X
昭和 55年	経済学部校舎新堂	K・L-21	27				試掘		
	農学部農業技術実験施設新堂	Q-15	28	50	唐、土壙		事前		
	本部環境整備	E-F-15-16 F-20-21 G-H-12-19	29				立会		年報 X
	農学部地理整備	L-M-12-13 N-O-P- 16-12 P-Q-17-18	30				*		
昭和 56年	教育学部校舎新堂	H-19	31	400	弥生堅穴住居 土壤、唐、柱穴	弥生土器、石製品	事前		
	教育学部音楽棟新堂	H-16	32	100	唐		*		
	教育学部英語学科 技術科実験施設新堂	J-19-20	33	130	旧河川、唐、柱穴	绳文土器、弥生土器、 漆器器、土師器	*		
	正門橋脚新堂	H-11	34				立会		
	時計塔修理改修	I-14	35				*		
	本部構内整理取扱	K-14	36				*		
	教育学部構内整理取扱	I-16-17	37				*	工法等変更	
	構内面環道路舗装	J-K-L-M-15 M-N-16	38				*		
	農学部中庭整備	O-17	39				*		
	理学部施設改修	O-16	40				*	工法等変更	
昭和 57年	学生部文化会草履新堂	L-8	41				*	工法等変更	
	学生部馬場整備	M-N-8-9	42				*		
	財團団体館増築	M-16	43	600	弥生～古墳期、 土壤、柱壙、杭列	弥生土器、土師器、 鐵器器、石器	事前		
	大学会館新堂	M-14-15	44	130	弥生堅穴住居、唐	弥生土器	試掘		
	教育学部財團実験学校ブーア新堂	B-22	45				立会		
	放射性同位元素分析実験室排水溝新堂	O-18	46				*		
	教育部白松木質塗装 井降口新堂	K-L-17	47				*		
昭和 58年	教委部中庭整備	J-K-16	48				*		
	大学会館新堂	M-N-13	49	2,000	古墳井戸、土壤、 柱穴、中世井戸、 櫛立柱跡等	弥生土器、土師器、 鐵器器、輸入陶器器、 圓底陶器、瓦質土器、 繩物陶器、木器、石器	事前		年報 X
	ラグビー場 防球ネット新堂	G-H-19	50	120	弥生唐、弥生～古墳 堅穴住居、土壤	弥生土器、土師器、 石製品	*	堅穴住居は工 法変更により 現地保存	年報 X

調査年度	調査名	構内地区別	地點	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	理学部大学院校会新堂	M - N - 20 O - 19 - 20	51	410			立会		
	正門・南北二輪卓球場 および正門花壇新設	H - I - 23 I - 19 - 13 J - 13	52	180			*		
	学生部アーチェリーキ 場的台・電柱設置	M - 8	53	30			*		
	学生部連合会室	L - 7	54	2			*		
	学生部野球場 敷木移設	J - 21 K - 22	55				*		
	教養部環境整備	I - 16 - 17 J - 17 K - L - 17 - 18	56	80			*		
	学生部テニスコート改修	C - 16, D - 17 K - 16	57	12			*		
	大学会館ケーブル布設	N - 12 - 14	58	160	佛生上塗、柱穴	佛生土器	事前		
	大学会館排水管布設	K - L - 13	59	180	佛生 - 中世遺物包含層、古墳土壤、古代 ～中世土壤、溝、柱穴	佛生土器、土師器、 埴生器、青磁、白磁、 瓦質土器	*		
昭和59年	学生部テニスコート フェンス改修	B - 17 - 18 C - 16 - 17 - 18 - 19 D - 15 - 16 - 17 E - 15 - 16	60	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	試掘		
	新浜学部樹木移植	K - 19 - 20 - 21	61	8			立会		
	大学会館環境整備	L - 14 L - M - N - 15	62	590	佛生 - 中世遺物包含層、佛生壁穴住居、 防護穴、土壤、古代～近世土壤、溝、柱穴	佛文土器、佛生土器、 土師器、埴生器、瓦質土器、輸入磁器、 國產陶磁器、土製品、 石斧、砾石、鐵器、 鐵鑄	試掘		
	経済学部環境整備(樹木移植)	K - 21, L - 20	63	5			立会		
昭和60年	農学部附属農場別科 排水溝改修整備	R - 16 - 19	64	30	古代末～中世河川跡	埴生器、土師器、輸 入陶磁器、鐵口、石 器、鐵淬	*		
	農学部附属農場農道改修	V - 15 - 16	65	325			*		
	教育部附属環境整備(樹木移植)	I - J - 19 - 20	66	430			*		
	中央ボイラー補車止設置	O - P - 16	67	2.5		埴生器	*		
	大学会館環境整備 (樹木移植)	L - M - 15	68	9		佛生土器、土師器、 埴生器、石鍋、砾石、 鐵淬	*		
	文道橋築設	J - 20, N - 14 O - 18	69	3			*		
	農学部新附畜産博物館周辺環境整備 (実験物運動場設置)	P - Q - 17 - 18	70	16			*		
昭和61年	理学部環境整備(樹木移植)	N - 20 - 21	71	4			*		
	農学部附属畜産病院整備	S - T - 19	72	270			*		
	国際父兄会館新堂	N - 22 - 23	73	70	佛生 - 古墳河川跡 中世～近世溝	佛生土器、土師器、 埴生器、瓦質土器、 埴生瓦土器、陶磁器、 鐵口、加工板ある 網片	試掘		
	山口銀行現全自動文書機設置 (電線路埋設)	I - J - 19 - 20	74	11	包含層(河川跡)	佛生土器	立会		

調査年	調査名	境内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和 51年	農学部附属農場農道整備	S-20, U-19	75	165	中世廻、柱穴	土器器、瓦質土器	立会	工法等変更	
	農学部附属農場農道整 交 通 施 工 制 (施設ボル設置)	L-10 Q-15・16	76	2			*		
	正門橋(木田内) 基 礎 改 修	I-10	77	0.25	包壳層		*		
	経済学部環境整備 (樹木移植・記念碑建立)	M-20	78	3			*		
	古田構内交番 改 修	H-23, J-9, P-22, S-20, W-16	79	3		埴輪器	*		
	古道寺町1号線および 同田寺町線の 排水管埋設		80	2,100	古墳・古代廻、古代 河川跡、弥生包含層	弥生土器、土器器、 須恵器(墨書きのある もの含む)瓦質土器、 軽塗土器、石斧、板 石	*	山口市教育委 員会 山口大学總裁 文化財資料館	
	教養部自動販売機埋設 (屋根設置および配管移動)	K-L-18	81	3.5			*		
	教養部身体障害者用 スロープ取設	L-15・16	82	3			*		
	経済学部教水栓取設	L-M-20	83	4			*		
	古田構内水栓ブルール 改 修 等	E-F-16 H-15	84	26.5	包壳層		*		
	農学部附属農場 木道管理設	S-12	85	3			*		
	古田構内污水排水管 等 設 修	M-18 O-15・16	86	15.5		土器質土器	*		
	本部身体障害者用 スロープ取設	L-14	87	12			*		
	経済学部身体障害者用 スロープ取設	K-20 L-18~20	88	66	弥生・古墳柱穴		*	工法等変更	
	附属図書館荷物運搬用 スロープ取設	L-16	89	8		弥生土器	*		
	教養部37番教室改修	K-16	90	1			*		
昭和 52年	教育学部附属教育実験 研究指導センター新堂	K-18	91	240		プランク、耐候、 植物遺体	事前		
	教養部複合棟新堂	J-K-17-18	92	35	埴輪土壙、溝、柱穴	土器器、須恵器、 土器質土器、石斧	試掘		
	教養部環境整備	I-J-16	93	36	唐状遺構	弥生土器	立会		
	教養部複合棟新堂	J-K-17-18	94	900	落し穴、河川跡、堅 穴住居、土壁、漆、 漆戸、粗面土壁、附 立柱遺物跡、谷状遺 構、柱穴	縄文土器、土器器、 須恵器、土器質土器、 須恵質土器、陶器器、 石斧、石斧、木製品	事前		
	丸田川河川改修	B-C-17	95	20			立会	県教委、 山大理工	
	国際交流会館新堂	M-23 N-22-23	96	195			*		
	教育学部附属農場 食料車庫設	B-21	97	45			*		
	農学部附属農場E7構 造水質管理設及び E6構造進入路拡幅	L-N-12	98	45	中世上層墓	弥生土器、土器器、 須恵器、施入白磁、 國產器、散石	*		
	農学部植栽	N-17	99	3			*		
	経済学部集水井取設	K-20	100	0.5			*		

年報
51年報
52

調査 年度	調査 名	構内地区別	地點	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査 区分	備考	文献
昭和 63年	教育部総合体育館に伴う 自転車置場改修	I - 16	101	1	包含層		立会		年報 Ⅱ
	国際交流会館新館に伴う 排水管改修	O - 22	102	35	河川路(溝か)、 包含層	陶生土器、須恵器	*		
	教育部総合体育館に伴う ケーブル埋設	J - 18	103	1			*		
	サッカー・ラグビー場改 修	F - 19, G - 19, H - 19 - 20	104	25	性質不明	陶生土器	*		
	消防用水設置	K - L - M - 22	105	7.5			*		
昭和 元年	水銀灯新設	K - L - 15	106	4	古墳焼状塗柄 柱穴	陶生土器、上部器、 須恵器、六連式製塩 土器	事前		年報 Ⅳ
	越野賽ハイマー設備改修	O - P - 20 - 21	107	25			立会		
	野球場防球ネット新設	I - J - K - 21 H - I - K - 22	108	7	包含層	陶生土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器	*		
	防火水槽配管布設	K - 21 - 22	109	15	柱穴		*		
	吉田寮ハイマー設備改修	L - 8	110	4			*		
	体育施設系給水管改修	G - H - 16	111	50		陶器	*	工法等変更	
	大学会館南記念植樹	M - 13	112	6			*		
	古田寮ハイマー機地下 貯油槽設備改修	L - M - 8	113	45	包含層	土師器、須恵器、上 部器、陶器、石器、 剥片、二次加工のある 剥片	*		
	第2武道場排水渠新設	G - H - 15 - 16	114	2	溝		*		
	室内施設設置	I - 14, L - 18	115	0.5			*		
平成 2年	本部幸庫給水管改修	L - 13	116	0.5		陶生土器	*		年報 Ⅴ
	大学会館南延部基礎整備	L - M - N - 14 - 15	117	35	中空隙		*		
	大学会館南延部環境整備	M - 15	118	2			*		
	第一学生食堂設備改修	J - 19 - 20	119	7			*		
平成 3年	教育学部附属幼稚学校 食堂内設置	E - 20	120	1			*		年報 Ⅵ
	農学部総合医学科新 建	O - P - 17	121	76	縄文河川路	縄文土器、石器	試掘		
	農学部仮設プレハブ食事 室	P - Q - 17	122	21		須恵器	立会		
	農学部微生物実験室その他の 機械器具設備改修	P - 16	123	8			*		
	大学会館南延記念植樹	L - M - 16	124	2			*		
	セクル植新設	R - F - 14	125	1			*		

小串構内

調査 年度	調査 名	調査地区別	地點	面積 (m ²)	遺 情	遺 物	測定 区分	備 考	文獻
昭和 58年	医学部体育館新宮		1	200		土器、瓦質土器、石器	試掘		年報 Ⅲ
	医学部園芸部増築		2				立会		
	医学部体育館新宮		3				*		
昭和 59年	医学部神化棟新宮		4		近世構	土器、瓦質土器、石器	事前		年報 Ⅳ
	医学部体育館新宮		5	65		土器、瓦質土器、石器	*		
	医学部高幹養生館 (特高受安丸設備)		6	28		動物遺体(貝殻)	試掘		
	医学部附属講義棟・ 病理解剖棟新宮		7	38			*		
昭和 60年	医学部外來診療棟新宮		8	409		土器質土器、瓦質土器、陶磁器	*		年報 Ⅴ
	医学部基礎研究棟新宮		9	11		近世陶器	*		
	医学部看護婦宿舍改修		10	25		近世陶磁器	立会		
	医学部看護婦宿舍改修		11	20			*		
	医学部造形室新築 (樹木移植)		12	40			*		
昭和 61年	医学部附属病院外来新宮		13	5			*		年報 Ⅵ
	医学部附属病院外来診療棟 (周辺環境整備等)(雨水調理段)		14	18			*		
昭和 62年	医学部附属病院東駐車場改修		15	6			*		年報 Ⅶ
	医学部附属病院改修新宮		16	104		刮器、ナイフ形石器 細石刃性	試掘		
昭和 63年	医学部附属病院改修新宮		17	300		二次加工のある刮片、 使用痕のある刮片、 剥片、磨石、礫、灰 土器、土器質土器、陶 磁器	立会		年報 Ⅸ
	医学部附属病院運動場整備		18	220			*		
平成 元年	医学部附属病院M.R.I.棟新宮		19	45		刮器、磨石刃、二次 加工のある刮片、剥 片、石核	試掘		年報 Ⅹ
平成 2年	医学部附属病院動物・ R.T.実験棟新宮		20	40		剥片	*		年報 Ⅺ
平成 3年	医学部臨床実験施設新宮 電気工事		21	0.5			立会		年報 Ⅻ

常盤構内

調査年度	調査名	構内地図割	地点	面積 (m ²)	遺 情	遺 物	調査区分	備 考	文献
昭和58年	工学部校舎新築		1	70		瓦器類	試掘		年報Ⅲ
昭和59年	工学部校舎新築増築		2	70			+		
昭和60年	工学部尾山宿舎 排水管改修			20			立会		年報Ⅳ
昭和60年	工学部尾山宿舎 排水管改修			65			+		年報Ⅴ
昭和61年	工学部受水槽改修		3	15			+		
昭和61年	工学部尾山宿舎 排水管改修			6			+		
	工学部身体障害者用 スロープ取設		4	29			+		年報Ⅵ
	情報処理センター (常磐センター) 空調設備取設		5	30			+		
昭和63年	工学部焼却炉上屋新築		6	225			+		年報Ⅷ
平成元年	工学部夜間照明装置 および防球ネット設置		7	2			+		年報Ⅸ
平成2年	工学部記念植樹		8	2.5			+		年報X
平成3年	工学部ガス管改修		9	45			+		年報XI
平成3年	大学祭実物放棄		10	7			+		年報XII

亀山構内

調査年度	調査名	構内地図割	地点	面積 (m ²)	遺 情	遺 物	調査区分	備 考	文献
昭和58年	教育学部附属山口小・幼稚園運動場整備		1	60	古墳暨穴住居、 猪塚遺情	土師器、須恵器、瓦 質土器、瓦、石器品、 木製品	試掘		年報Ⅲ
昭和60年	教育学部附属山口小学校 排水管改修		2	1			立会		
	教育学部附属山口中学校 排水管改修		3	2			+		年報V
	教育学部附属幼稚園 運動場整備(樹木移植)		4	1			+		
昭和61年	教育学部附属山口小学校 排水管改修	幼稚園・小学校 部分 中学校部分	5	57	中世土壤分	陶文土器、燒造土器、 土師器、須恵器、瓦 質土器、土師質土器、 陶器、不明細器品、 石器、利片、被物遺 体	試掘		年報VI
	教育学部附属山口小学校 電柱移設		6	0.5	河川跡小 杭剝		立会		
昭和62年	教育学部附属幼稚園 運動場改修		7	40			+		年報VII
昭和63年	教育学部附属山口中学校 室内消防栓設備改修		8	35	包井場	土師器、罐器、利片	+		年報VIII

調査年度	調査名	境内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成元年	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設		9	260	井戸～古墳断穴柱坑、土壤、溝、柱穴、河川跡	陶文土器、灰生土器、土器器、須恵器、瓦質土器、須恵器陶片、黑色土器、磁器、二次加工のある陶片、使用痕のある陶片、洞片、石核、砾石	事前	立会	年報Ⅱ
	教育学部附属幼稚園・バレーボールコート支柱設置								
	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設								
平成2年	教育学部附属山口中学校汚水排水管布設		12		唐状遺構	陶文土器、灰生土器、土器器、瓦質土器、不明焼製品、石器、鐵石、扁平打製石斧、砾石、削片	事前	立会	年報X

光構内

調査年度	調査名	境内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属光小学校自転車置場移設		1		近世～近代石垣	瓦質土器、陶器器、瓦	試測		年報Ⅲ
昭和59年	教育学部附属光小・中学校施設新築		2				立会		年報Ⅳ
昭和60年	教育学部附属光中学校外灯改修		3	1		土器器	*		年報V
昭和61年	教育学部附属光小学校創立記念事業(ブロンズ像建立)		4	2.5		土器器、須恵器	*		年報VI
昭和62年	教育学部附属光中学校グラウンド防球ネット設置		5	2		灰生土器、土器器、瓦質土器、土器質土器、器、瓦	*	手洗探集	年報Ⅶ
昭和63年	教育学部附属光小学校施設器具移設		6	10		土器器、土器質土器、陶器器	*		年報Ⅷ
	教育学部附属光小学校屋外スピーカー設置								
平成2年	教育学部附属光小学校運動場改修		8	23		陶文土器、土器器、須恵器、瓦質土器、施物陶器、磁器、土器、削片、鉛錠	試測	手洗探集 遺物合心	年報X
	教育学部附属光小学校運動場改修		9	15	土壤	土器器、須恵器、須恵器器皿土器	事前		
平成3年	教育学部附属光小学校式道館新設		10	38	土壤、溝状遺構	土器器、磁器、陶器	試測		年報XI
	教育学部附属光小学校屋外施設設置								
	教育学部附属光小学校バッカネット新設								

その他の構内

調査 年度	調査名	境内地区割	面積 (m ²)	遺 情	遺 物	調査区分	備 考	文献
昭和 59年	学生部ボート艇庫 会 場 研修所監査	宇都宮市大字小野字土井	0.5			立会		年報 IV
	学生部ヨット艇庫 会 場 研修所監査	古河郡秋田町東字中道			*			
昭和 60年	熊野若狭藩機器収蔵	山口市熊野町3-21	7			*		年報 V
昭和 61年	海田宿舎施設改修	山口市瀬戸内温泉東六丁目8-29	35	杭		*		
	経済学部職員宿舎 公 共 下 水 道 切替	山口市旭通り二丁目3 32	1		土師質土器	*	6号宿舎	年報 VI
		山口市水の上町6-9	7	瓦		*	2号宿舎	
昭和 63年	経済学部職員宿舎 公 共 下 水 道 切替	山口市白石二丁目8-7	1		壺形器、土師器、土 師質土器、瓦質土器、 陶磁器	*	7号宿舎 採集	年報 VII 年報 VIII
平成 元年	本部職員宿舎	山口市水の上町6-1	1			*	1号宿舎	
平成 2年	人文・理学部職員宿舎 公 共 下 水 道 切替	山口市石鏡音町1-25	0.5		陶磁器	*	7号宿舎	年報 IX
	経済学部職員宿舎 公 共 下 水 道 切替	山口市香山町3-1				*	3号宿舎	
平成 3年	海田宿舎八棟給配水 そ の 他 改 修	山口市海田温泉6丁目	27			*		年報 X
	経済学部6号職員宿舎 電 杆 収 設 施	山口市旭通り 二丁目1937-1	0.5			*		
	人文・理学部職員宿舎 公 共 下 水 道 切替	山口市天花932-2	1			*		

参考文献① 山口大学吉田遺跡調査団『吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)

参考文献② 昭和41年以降、吉田構内においては、工事に際し隨時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田遺跡調査出の関与した調査については、調査名をすべて把握しているわけではなく注意されたい。

Summary

This volume contains two parts of archaeological research works, one is on salvage excavation carried out in fiscal year 1992, the other is laboratory works to the objects from Yoshida Campus site, already deposited in the Museum. Voluminous appendix might offer a curious appearance, but this was the first trial to examine the unearthed materials by the past excavations in order to substitute the final report.

Ch. I The construction of building was planned on two archaeological sites. For each plan a sounding was carried out.

Ch. II According to a plan for new building of the department of agriculture, sounding with four trenches, parallel three arranged in east-west direction, the other one in north-south direction, was operated in the neighborhood of the mainbuilding since 22 July up to 10 August (Fig.5). Directly under modern debris huge flood deposits were revealed and its riverside was identified at western part of each three trenches. The flood debris contains crushed gravel, carbonized wood besides artifacts. The materials were a few fragments of Jomon potsherds and flakes of stone.

Ch. III Military art gymnasium was planned in Mitarai archaeological site, now in the Hikari Campus. A sounding trenches with 25m. in length and 2m. wide were dug out before its construction from 2 December to 13 (Fig.8-10). Some features like small pits were identifiable (Fig.11-14), but debris contained no artifacts. The materials from successive levels seemed the horizon disturbed. Those were mainly fragments of porcelain in late medieval to recent age (Fig.15).

Ch. IV Examination were executed on 10 spots with few afraid of destructing remains.

Appendix

Ono, then the director of the field and present Emeritus Professor of Geography, contributed the preface in which he retrospected the salvage archaeology, carried out by the Research Organization for Yoshida site. Removal of faculties from dispersed campuses to present Yoshida in an aggregation made remains eroded in the course of construction since 1966 to 1967. Unlike present, so called salvage archaeology was not active systematically at that time for little expectance to cultural properties. But that organization managed to carry out the rescue excavations and succeeded in establishing a common for preservation of ancient rural settlement where pit-dwellings densely unearthed. After the publication of the preliminary report at the end of 1976, the organization let its works dissolved

in due course. According to the topographical numbering, designated numerically by One from Area I to Area VI, the laboratory work started from Area I this year.

Area IA Area I was subdivided into Area IA and IB. Area IA is attributable to a site between present University Hall and the Administration Office. Drainage system under construction happened to reveal the debris and the salvage excavation was carried out in the summer 1966. Sectional drawings, numbering from 2 up to 4, were left, but they were without note for absolute altitude. It is difficult to identify from which trench the finds came.

In compilation they are as follows; early Yayoi (Fig.38-42), middle Yayoi (Fig. 43-54), late Yayoi (Fig.55), early and middle Tumulus age (Fig.56-62), late Tumulus age (Fig.63), Sue and Haji wares in the 8th and 9th C. and fragmental pots of historical age (Fig.65,66), besides stone artifacts (Fig.67-71). Most predominant finds are middle Yayoi wares.

Area IB The original documents were not left without a few photographies. Area IB is attributable to the site between present forecourt and Faculty of Liberal Art. The excavations were carried out in a trench with 2m. wide and 10 m. in length from 15 October to 30 in 1966.

The materials are as follows; a few sherd of latest Jomon ware (Fig.74.1-3), initial Yayoi (Fig.74.4-5), early Yayoi (Fig.74.6-32), middle Yayoi (Fig.75), final Yayoi and initial Tumulus age (Fig.77) and a fragmental finds of late Tumulus age and medieval age (Fig.78). The preliminary report tells a lot of post-holes were found on the natural slope and a photo also indicates the facts. But it is difficult to confirm the post-holes as prehistoric products, for there is no objects marked in ink with notion from post-hole. Exceptional one is a base of jar, characteristic to early Tumulus age.

Consideration of the finds from Area IA In spite of the lack of original documents, noticeably enough an assemblage is reconstructive. It is highly possible that the finds came from a single feature, designated irregular planned pit on its excavation. It is noticeable that the assemblage consists of Suku wares, northern Kyusyu type, and local developed type. Both are in associations.

In Campus site those assemblages would precede the finds from Ditch 5, H19 at the campus of Faculty of Education and the finds from small pits 3 and 9 at so called preservation area. Finds from SK5 at Inoueyama B site, Hofu city, is evidently for its successor, while the finds from SK25 at Ohsaki site in the same city offer its proto-types (Fig.83). Cultural equation to the Ehime, northwestern Shikoku, is now possible for the progress of research in detailed typological sequence.

(MAMETANI Kazuyuki)

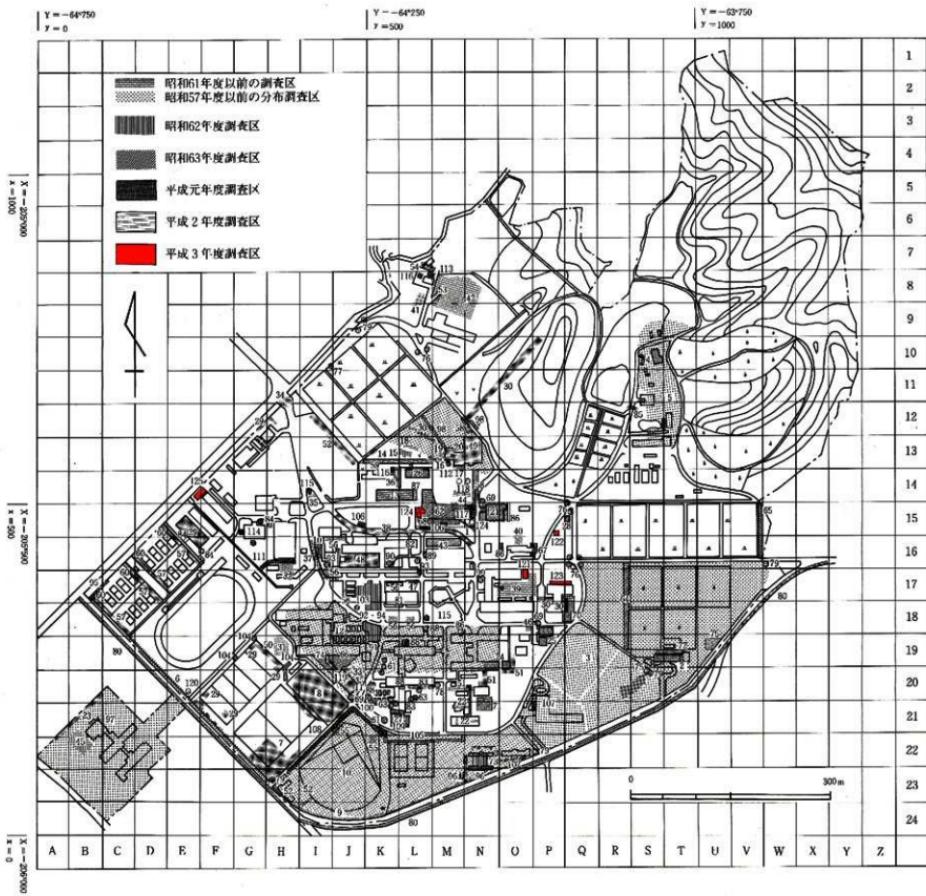


Fig. 66 山口大学吉田構内地区制および調査区位置図

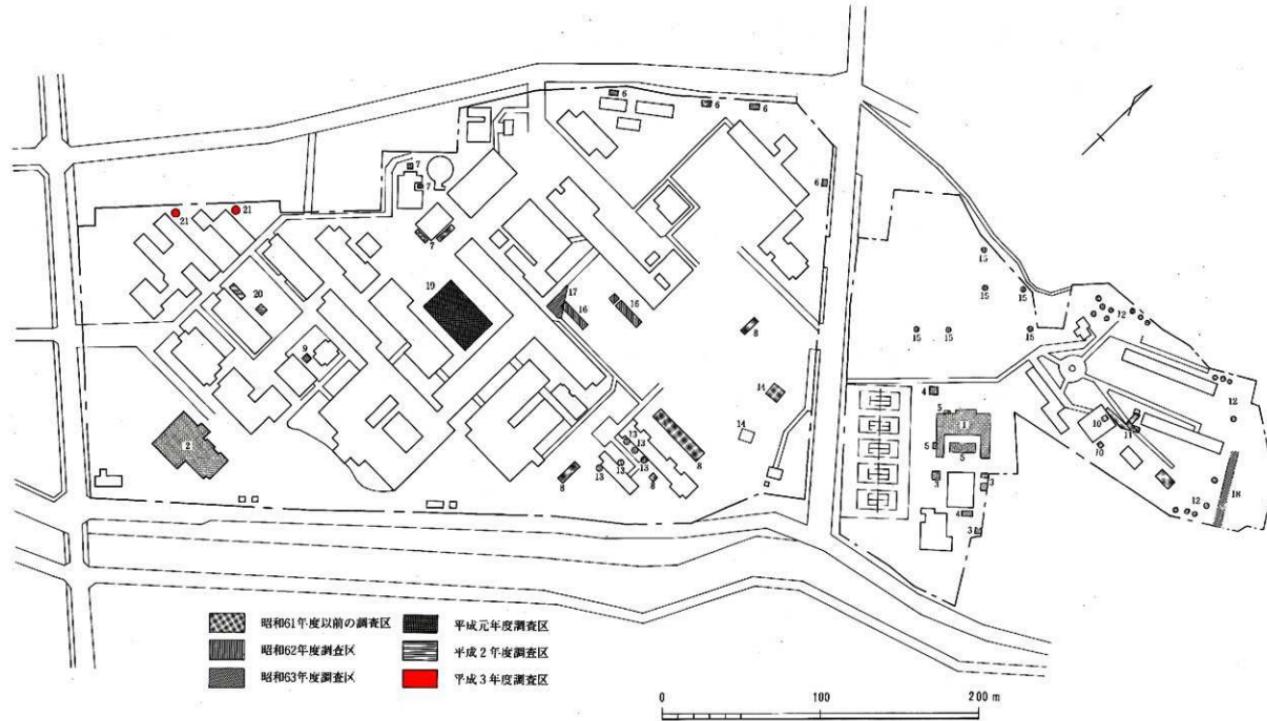


Fig. 87 山口大学小建築内調査区位置図

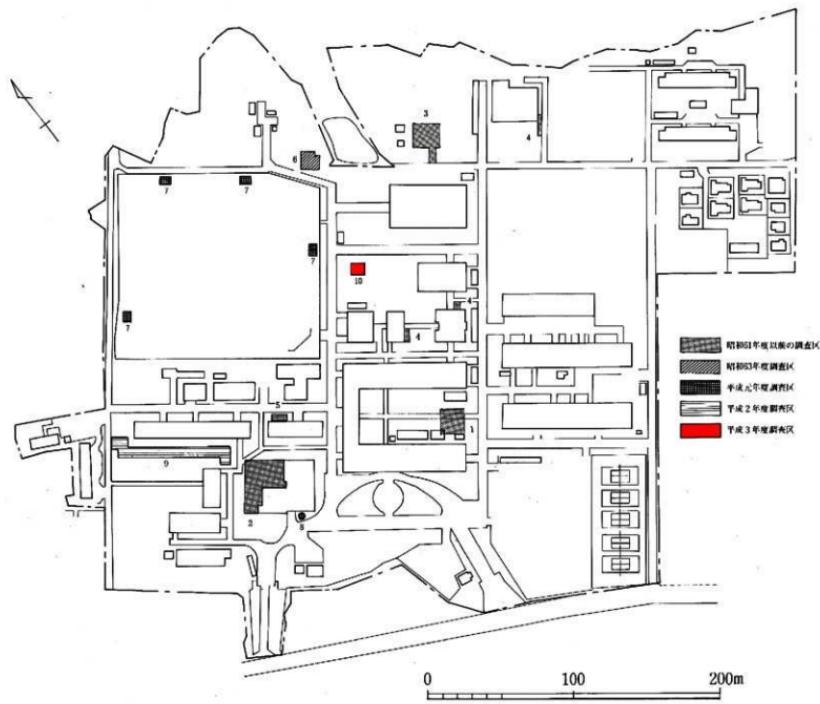


Fig. 88 山口大学各施設内調査区位置図

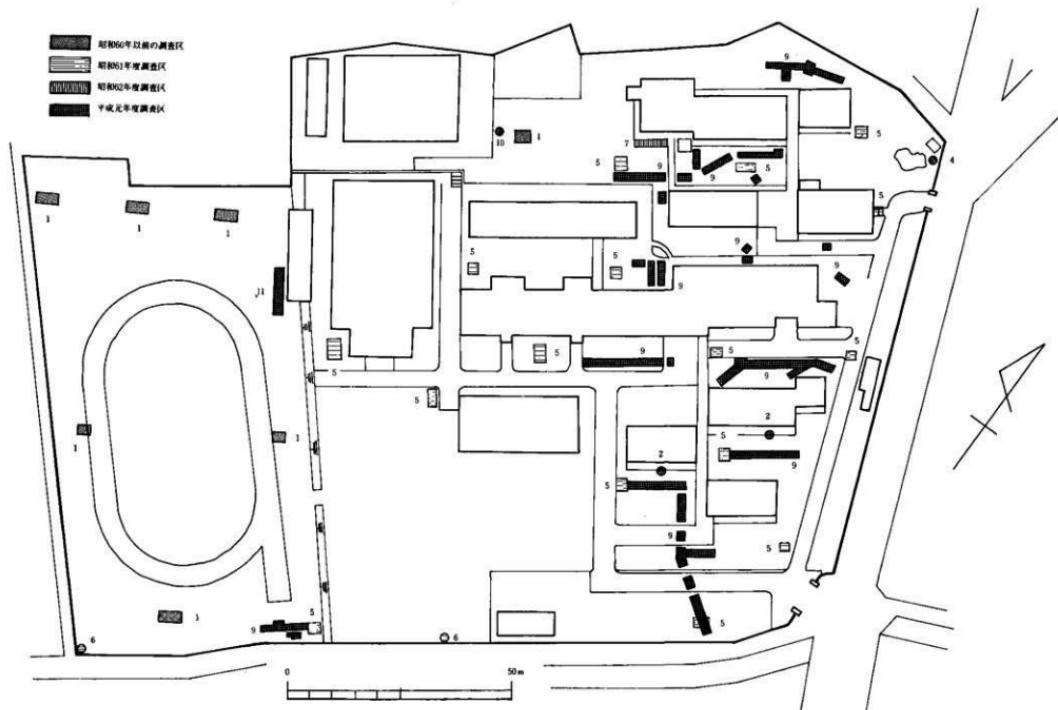


Fig. 89 山口大学亀山校内（幼稚園・小学校）調査区位置図

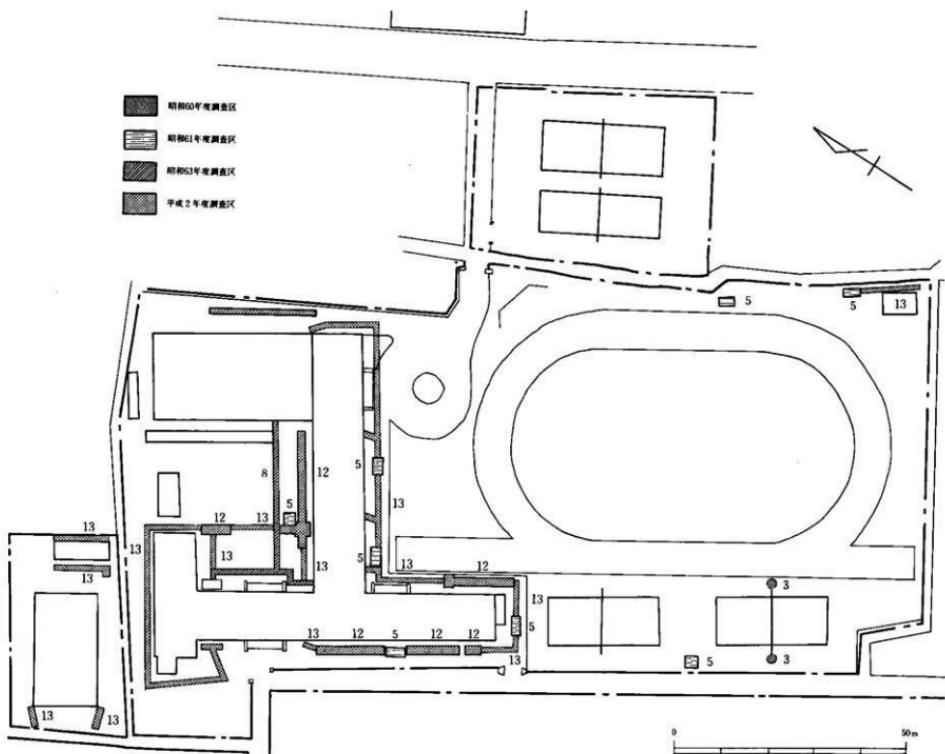


Fig. 90 山口大学亀山構内（中学校）調査区位図

昭和61年度以前の調査区
 昭和62年調査区
 昭和63年調査区
 平成2年調査区
 平成3年調査区

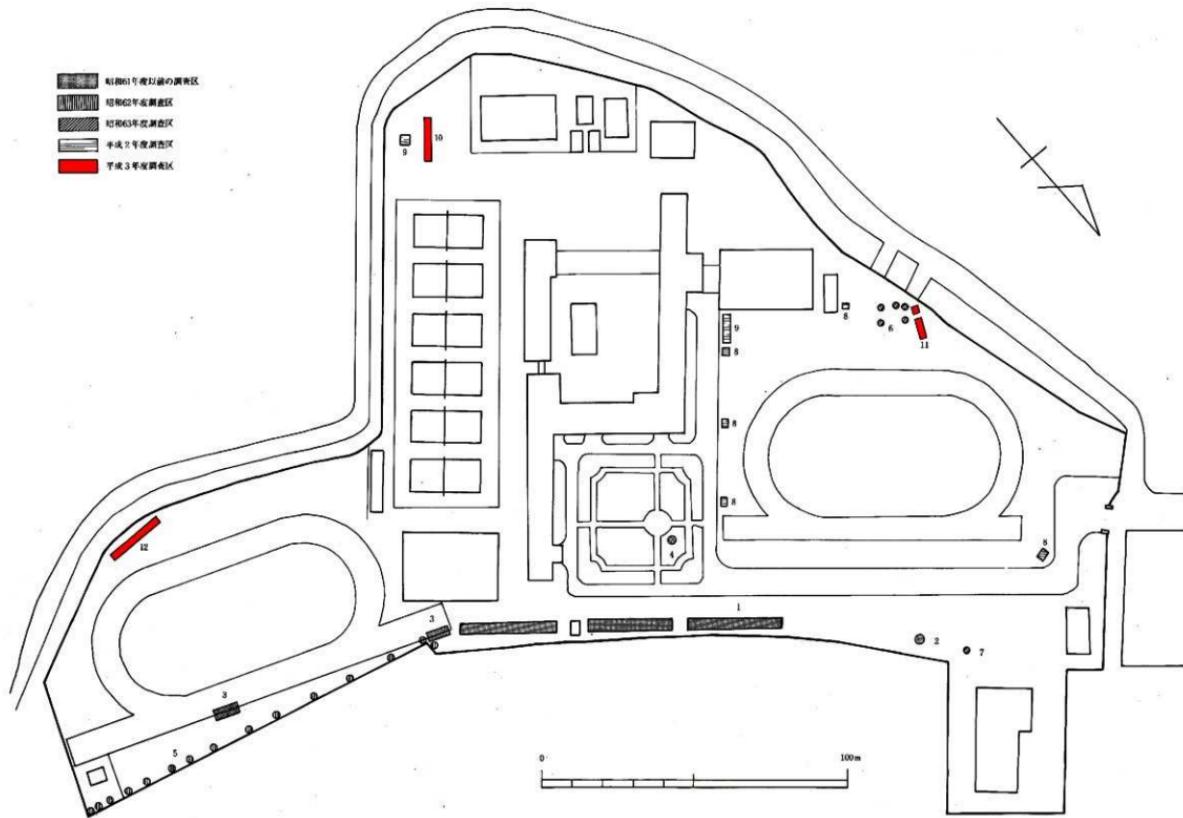
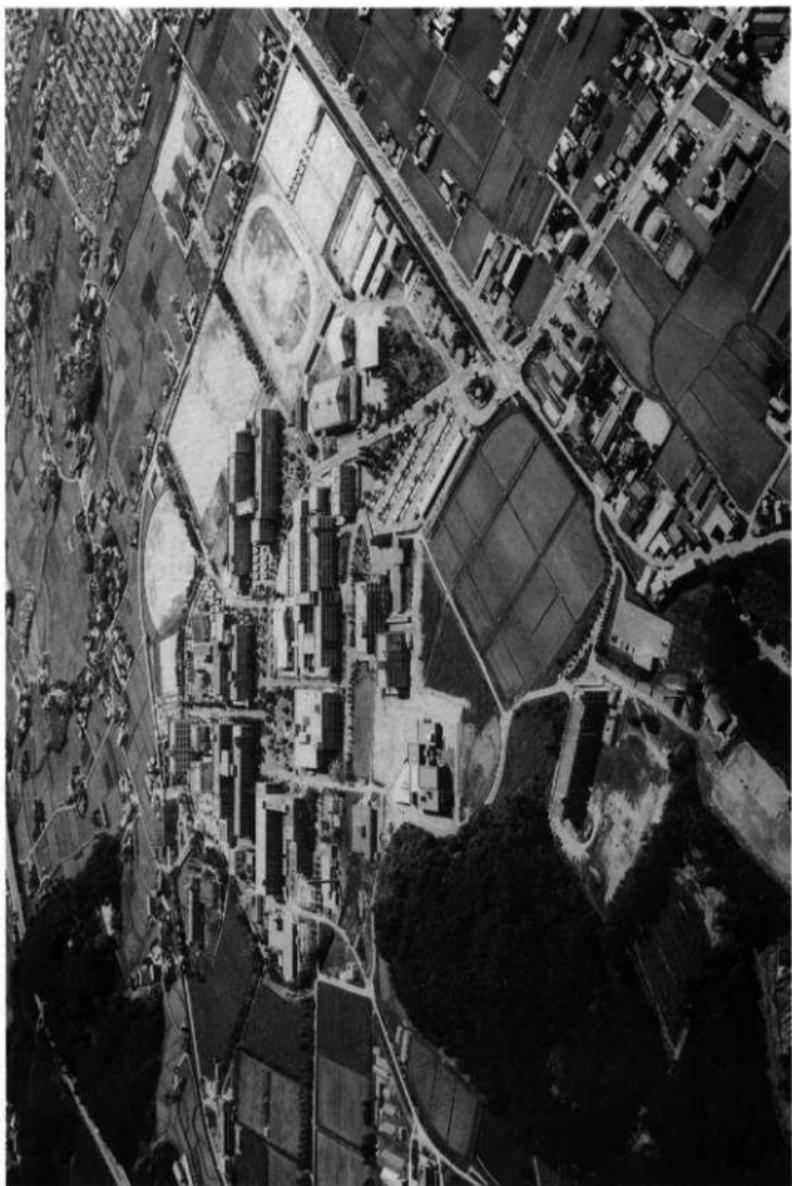


Fig. 91 山口大学光廣内調査区位置図

PLATES

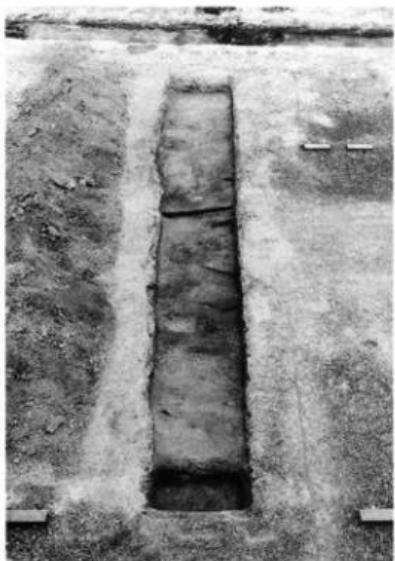


吉田機場内全景(北西から)

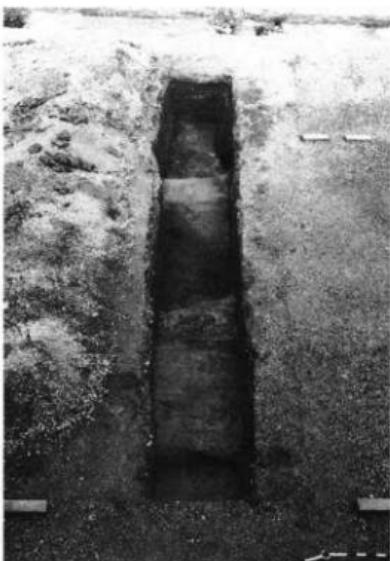
PL. 2

吉田構内農学部連合歎医学科棟新宮に伴う試掘調査

(1)



(1) A レンチ河川跡検出状況(西から)



(2) A レンチ河川跡完掘状況(西から)



(3) C レンチ河川跡検出状況(西から)



(4) D レンチ河川跡検出状況(西から)



(1) Aトレンチ西部河川跡土壌断面(南から)



(2) Aトレンチ中央部河川跡土壌断面(南から)



(3) Aトレンチ東端部河川跡土壌断面(南から)



(4) Bトレンチ南端部河川跡土壌断面(東から)



光構内(教育学部附属光小学校・同光中学校)全景(北東から)



(1) 第4層上面遺構検出状況(北東から)



(2) 第4層上面遺構完掘状況(北東から)

(1)



(3) 掘4層上回深1m十釐(西冬)



(4) 掘4層上回深2m十釐(西冬)

PL. 6

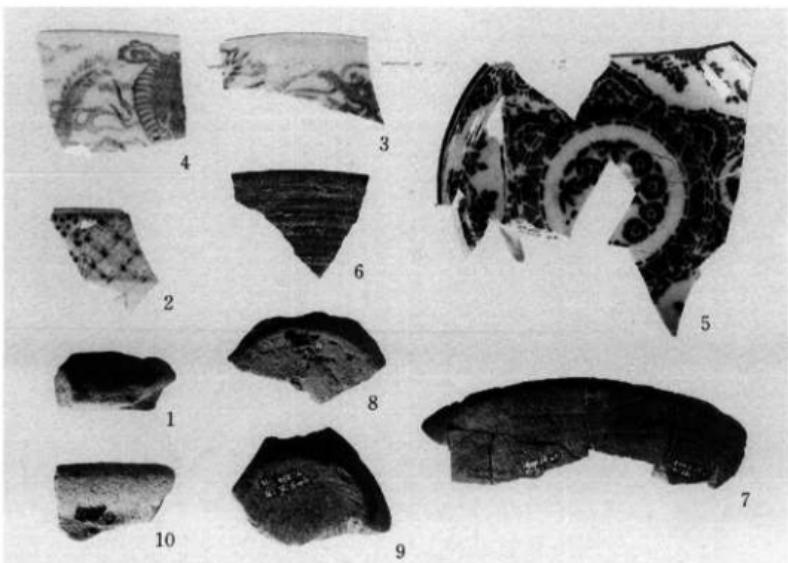
光構内教育学部附属光中学校武道館新營に伴う試掘調査



(1) 第4層上面層長窓瓶(南東から)



(2) ドレンチ中央部北壁土層断面(南東から)



(3) 出土遺物

(1)



(1) 吉田遺跡第一地区A区の全景



(2) A区の「弥生時代中期の土器が充填した不整形のピット」出土状況

PL. 8

吉田遺跡第一地区A区の調査

(2)

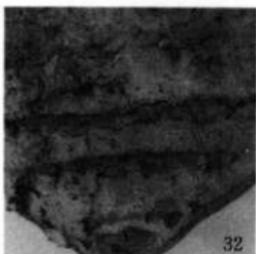


5

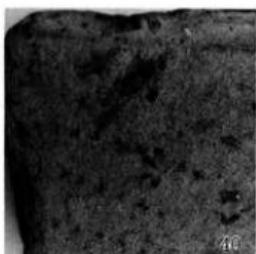


6

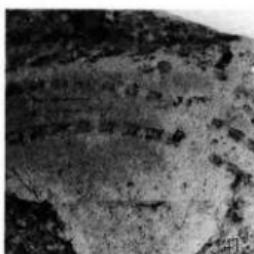
9



32



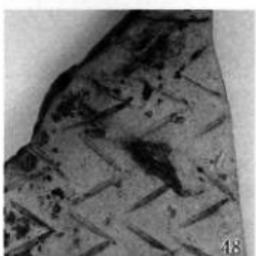
46



60



67



48



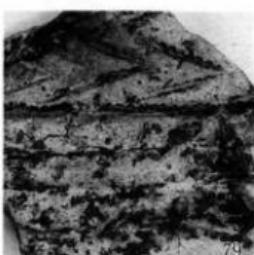
60



69



70



79

出土遺物 (1)

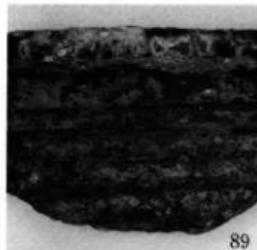


21

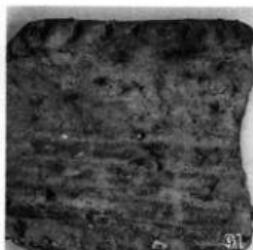


27

(3)



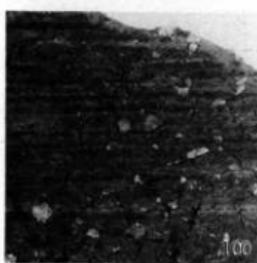
89



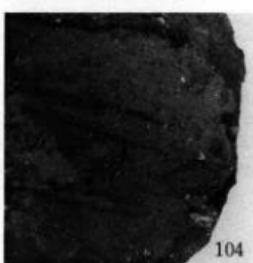
91



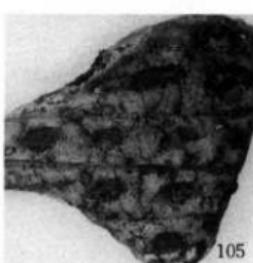
92



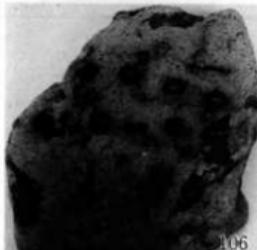
100



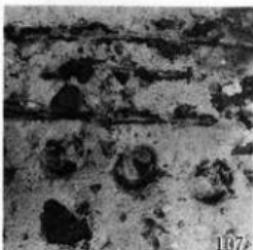
104



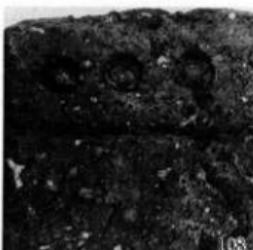
105



106



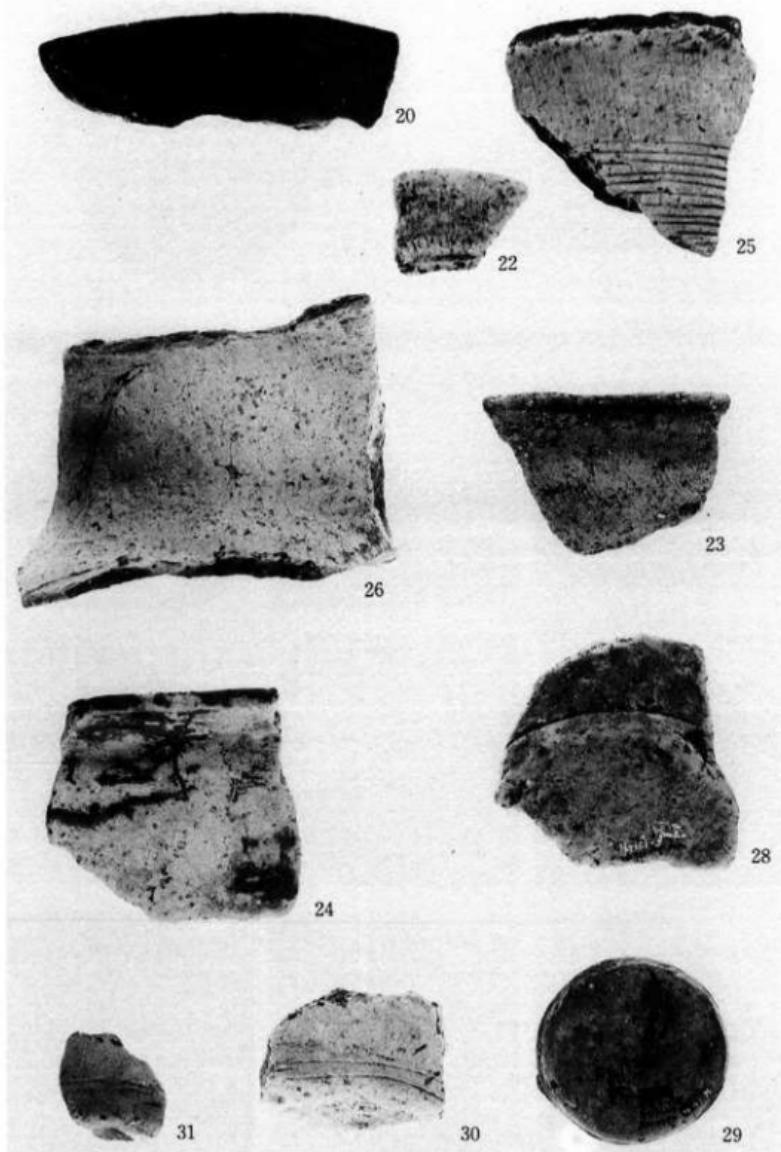
107



108

PL. 10

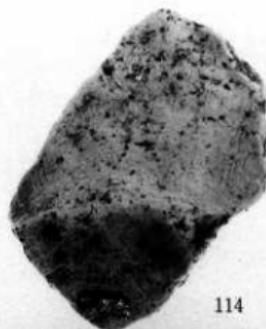
吉田遺跡第1地区A区の調査
(4)



出土遺物 (3)



111



114



115



112



113



116



117



119



118

PL. 12

吉田遺跡第一地区A区の調査

(6)



128



127



132



123



129



133



126



130



134



125



131



135

出土遺物 (5)



136



137



144



142



143



146



145



147

PL. 14

吉田遺跡第一地区A区の調査

(8)



148



162



164



166



167



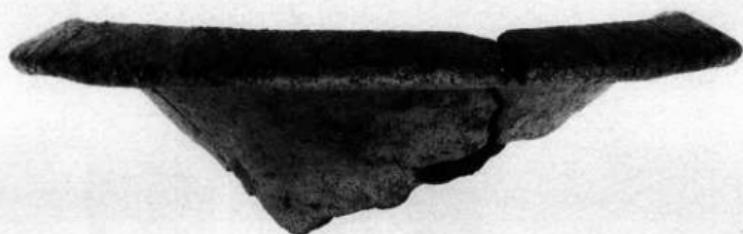
165



163



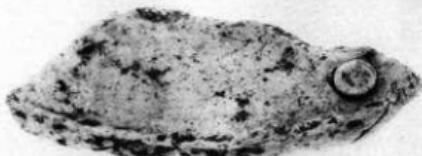
171



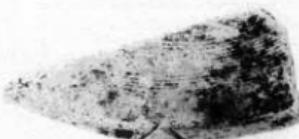
154



151



152



153



149

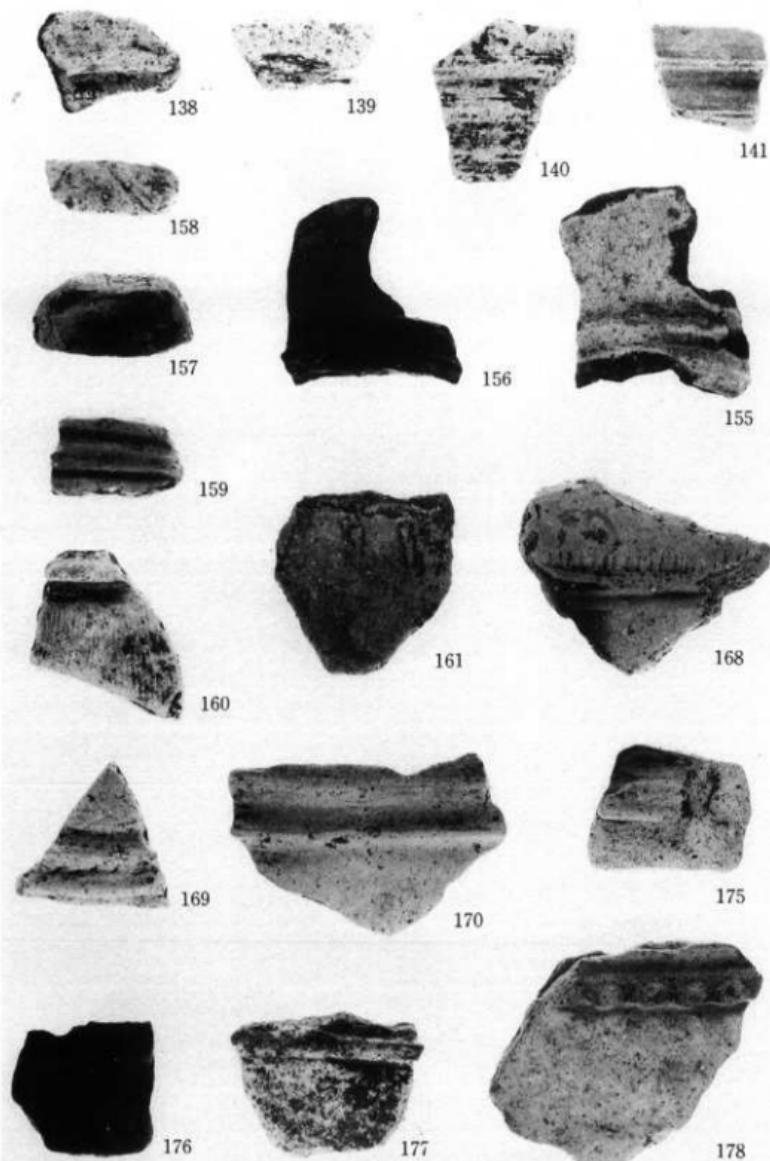


150

PL. 16

吉田遺跡第一
地区 A 区の調査

10





174



173



196



198



172



203



204



PL. 18

吉田遺跡第一地区A区の調査

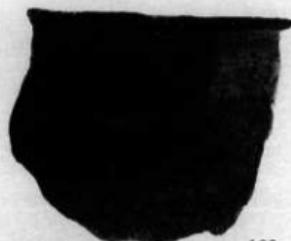
12



179



181



180



187



184



182



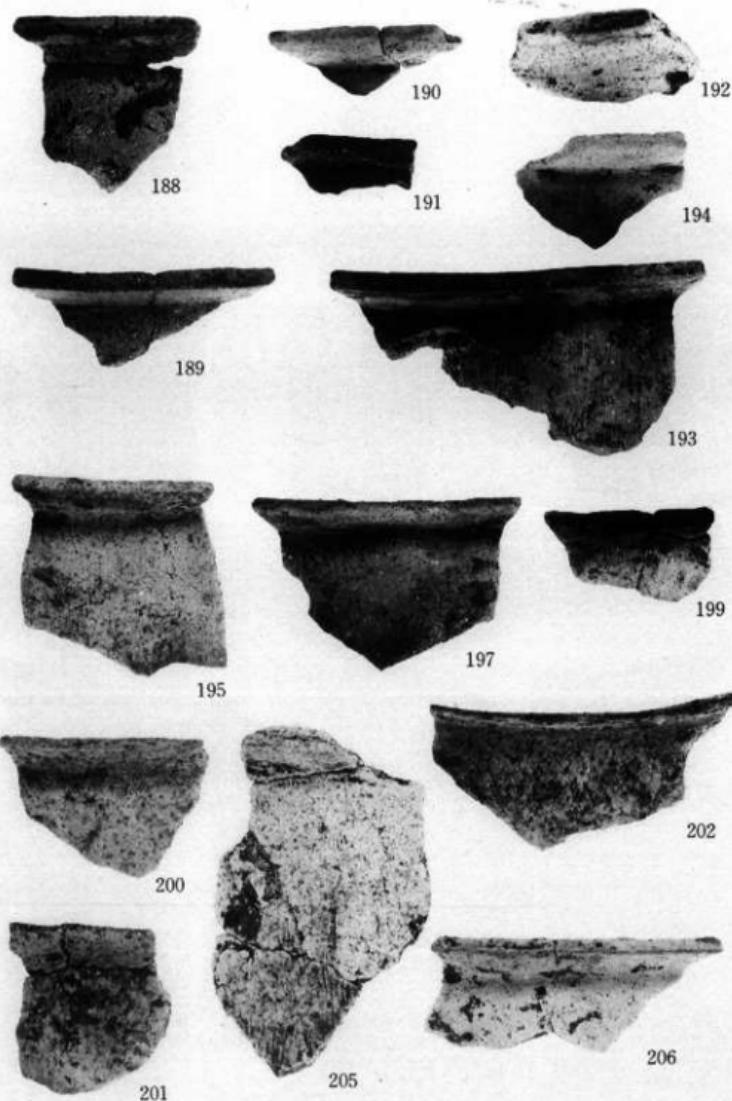
185



183



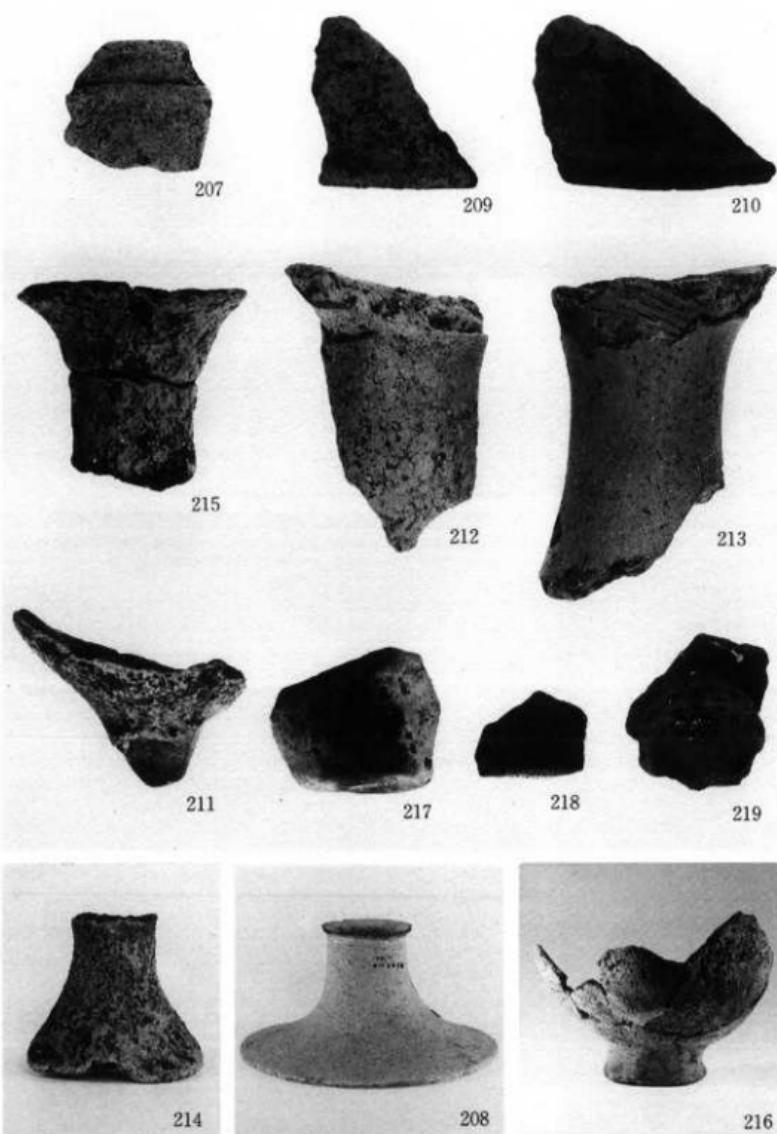
186



PL. 20

吉田遺跡第一地区A区の調査

(14)

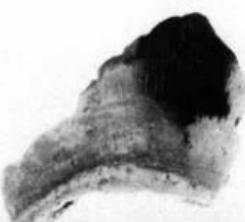




220



221



222



224



235



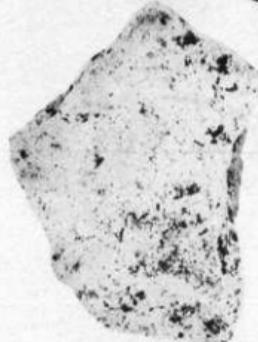
229



226



227



231



232



233

PL. 22

吉田遺跡第一地区 A 区の調査

(16)



240



242



245



250



247



252



253



254



255



259



256



262



258



257



260



261



263



265



264

PL. 24

吉田遺跡第一地区 A区の調査

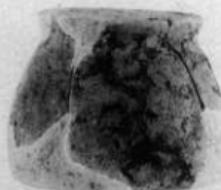
(18)



270



273



271



268



272



276



327



300



302



266



269



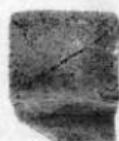
267



274



275



277



278



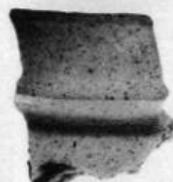
280



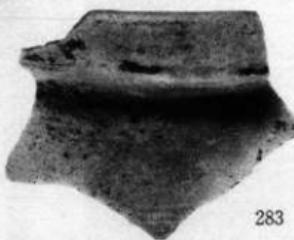
282



279



281



283

PL. 26

吉田遺跡第1地区A区の調査

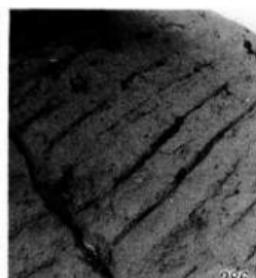
20



284



285



286



288



289



290



291



292



293



295



296



298



303



304



299



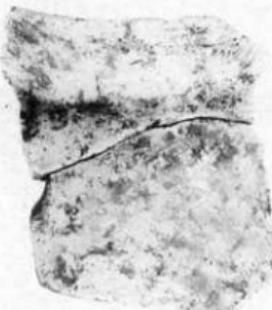
305



301



306



307

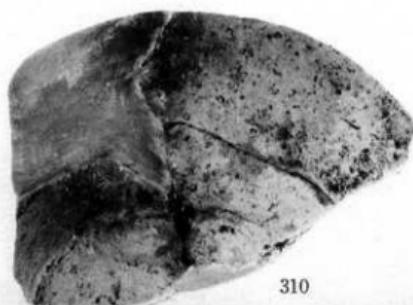


308

PL. 28

吉田遺跡第一地区 A 区の調査

22



310



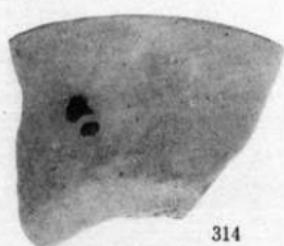
311



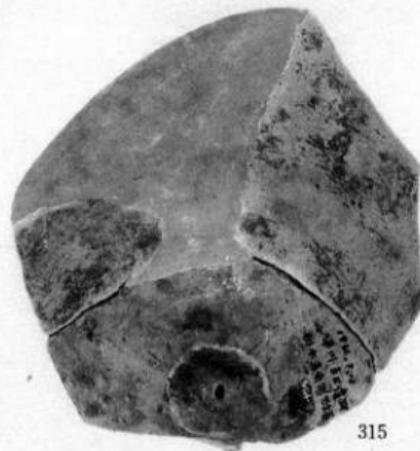
312



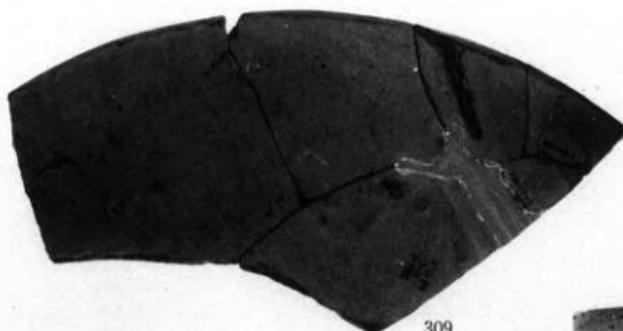
313



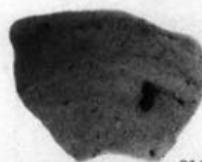
314



315



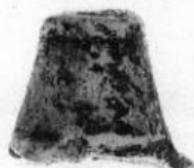
309



316



322



318



321



317



319



325



323



320



326

PL. 30

吉田遺跡第一地区 A 区の調査

(24)



329



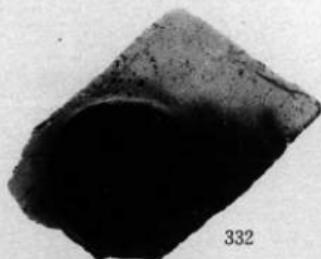
330



328



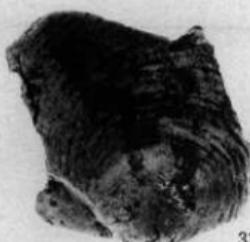
331



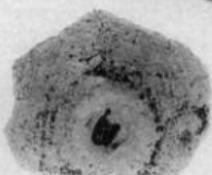
332



333



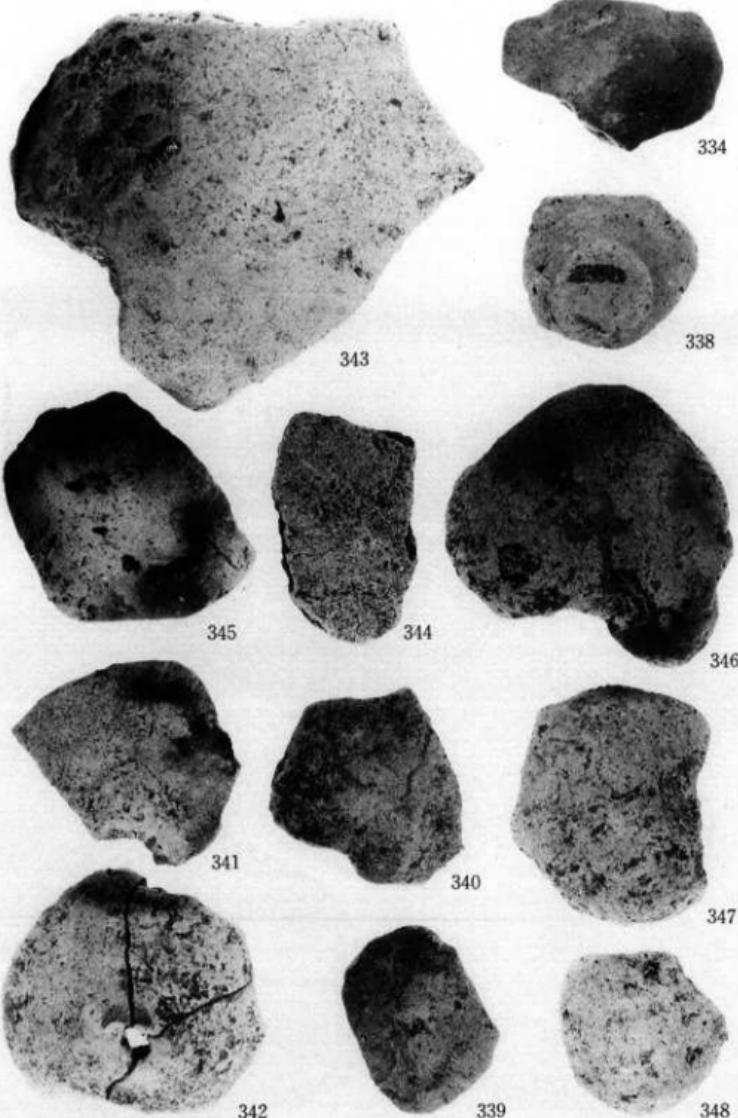
335

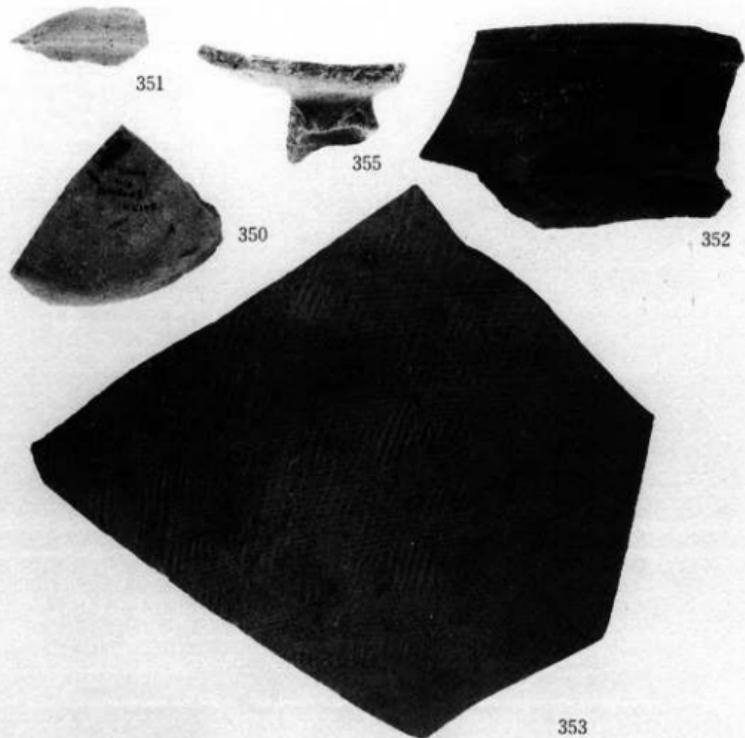


336

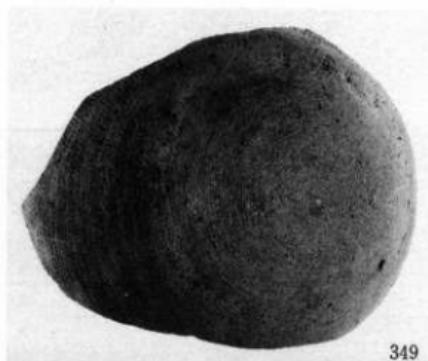


337

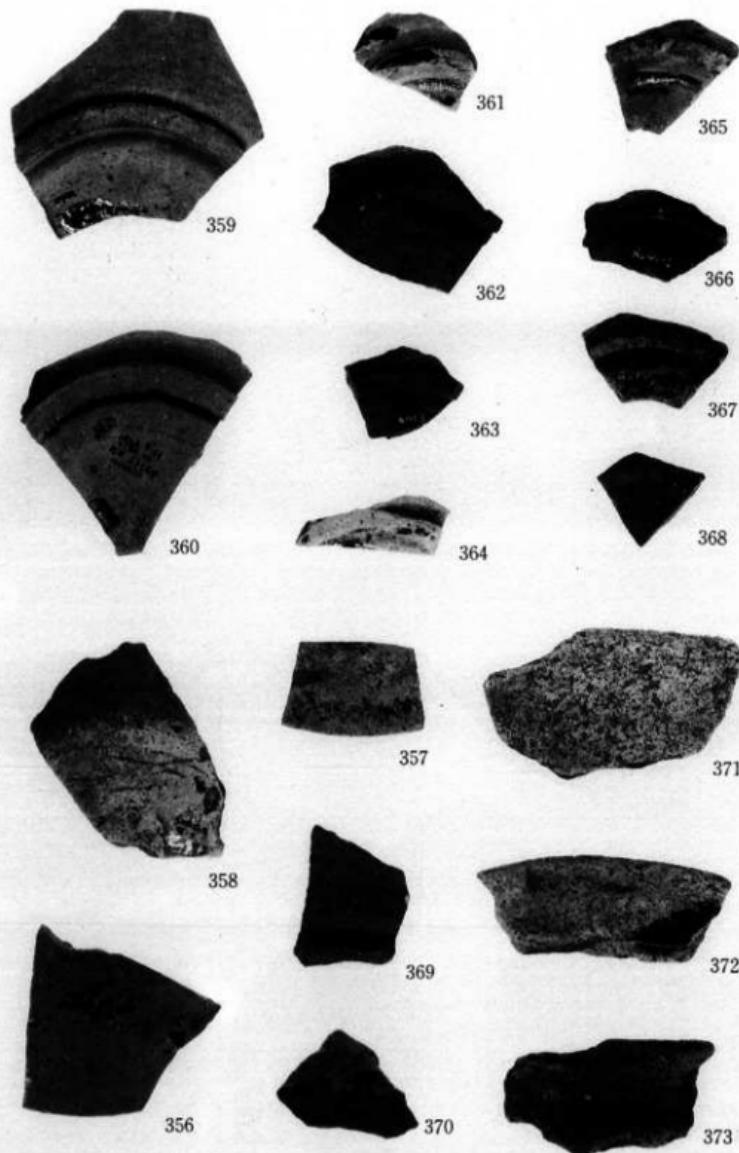




354



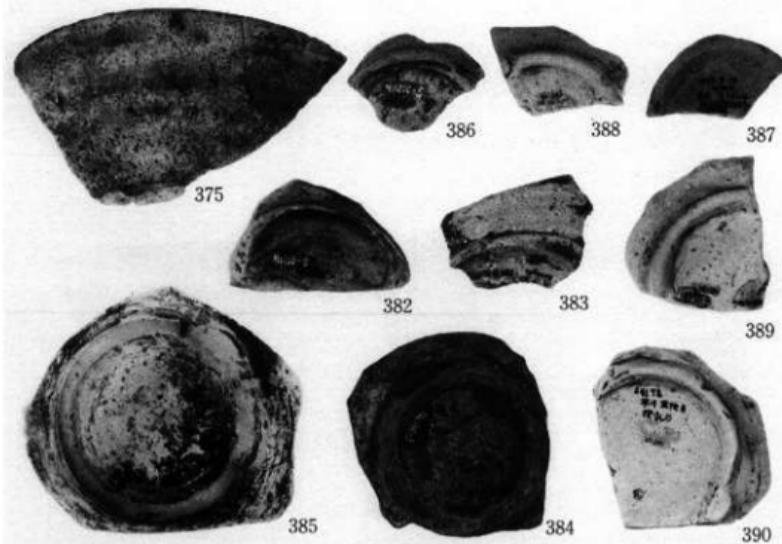
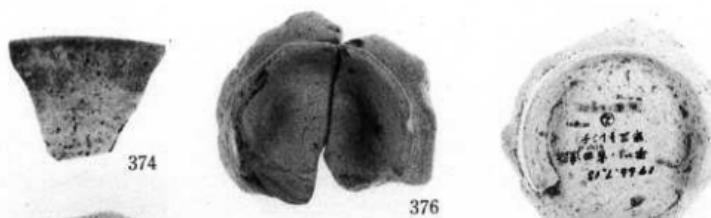
349



PL. 34

吉田遺跡第一地区A区の調査

28

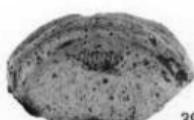




391



394



397



392



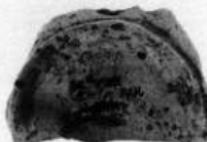
395



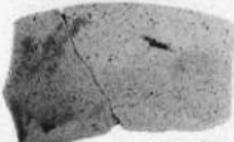
398



393



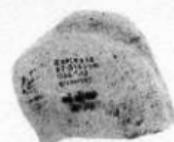
396



399



400



403



406



401



404



402



405

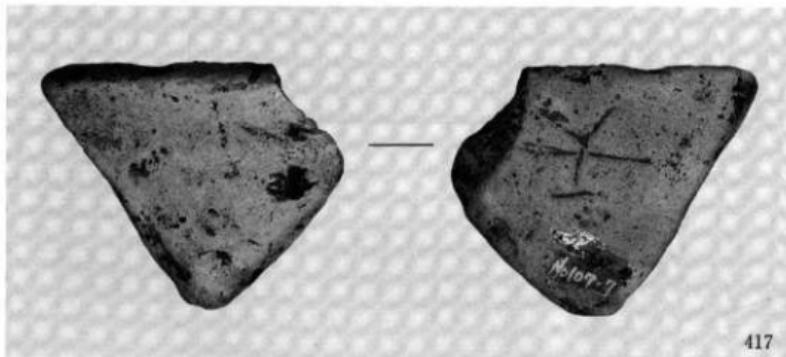
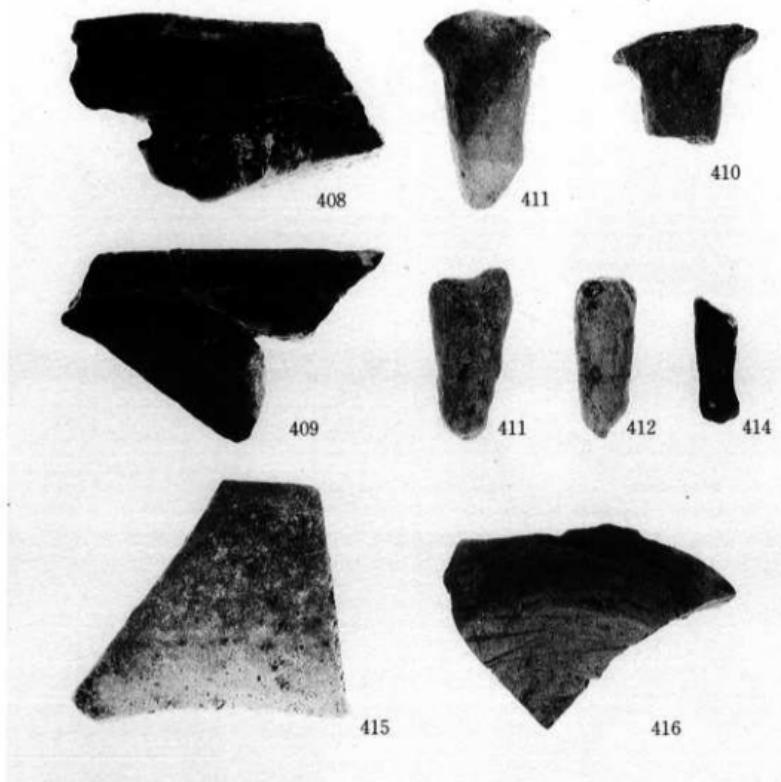


407

PL. 36

吉田遺跡第一地区A区の調査

(30)





418



420



421



419



427



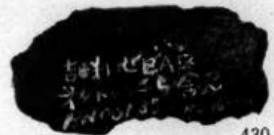
422



428



429



431



432



433



434



435



436

PL. 38

吉田遺跡第一地区A区の調査



437



438



439



440



441



442



443



445



446



447



444



448



449



450



452



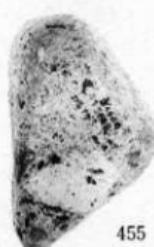
451



453



454



455

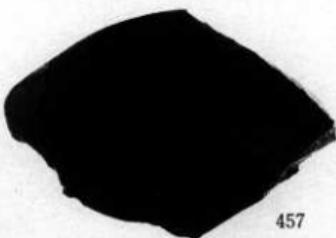
PL. 40

吉田遺跡第一地区A区の調査

34



456



457



459



458



460



461



463



462



464



(1) 吉田遺跡第I地区B区の全景



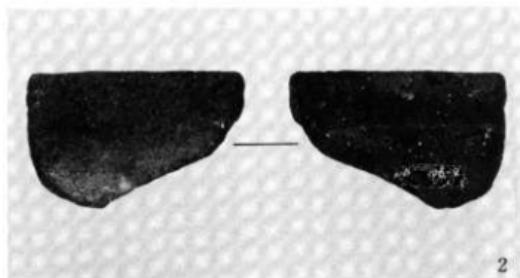
(2) 柱穴検出状況

PL. 42

吉田遺跡第一地区B区の調査



1



2

(2)



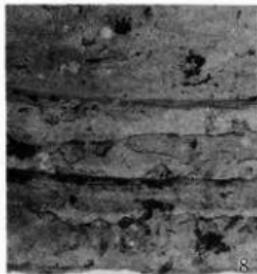
3



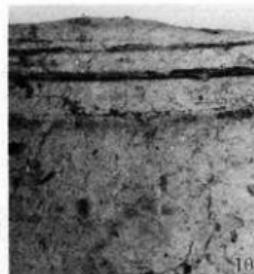
4



5



8



10



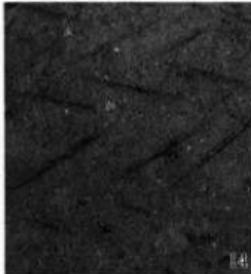
11



12



13



14

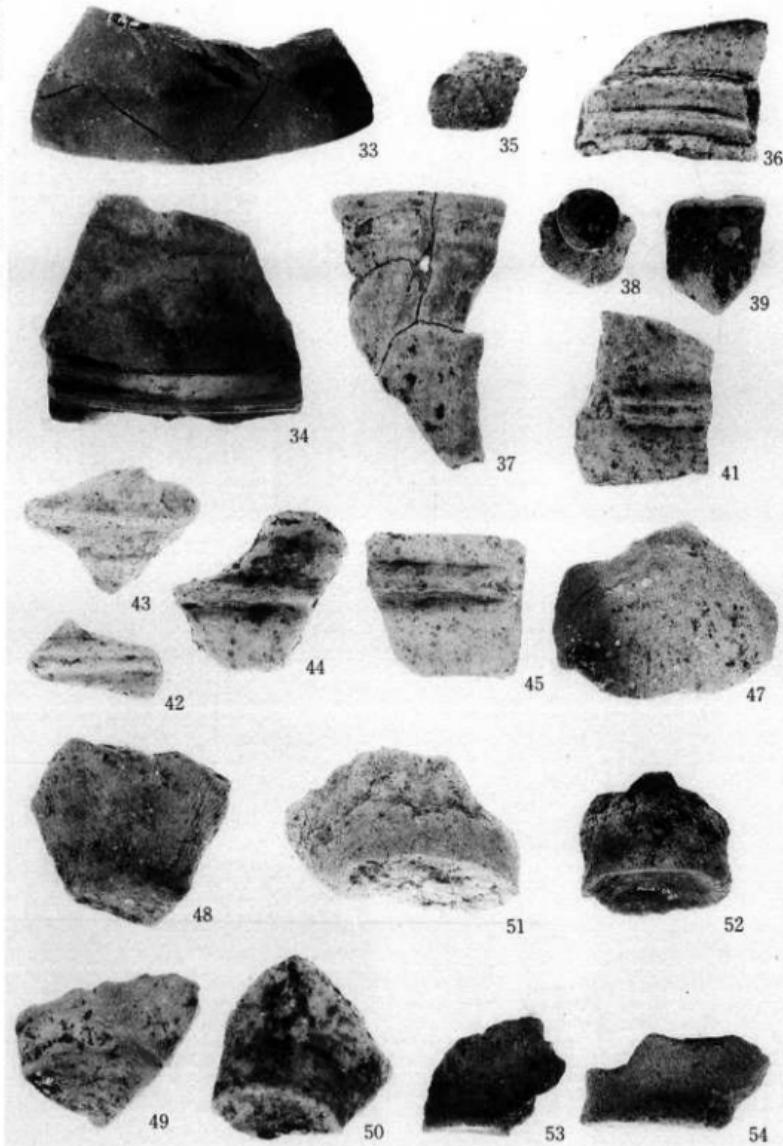
出土遺物 (1)



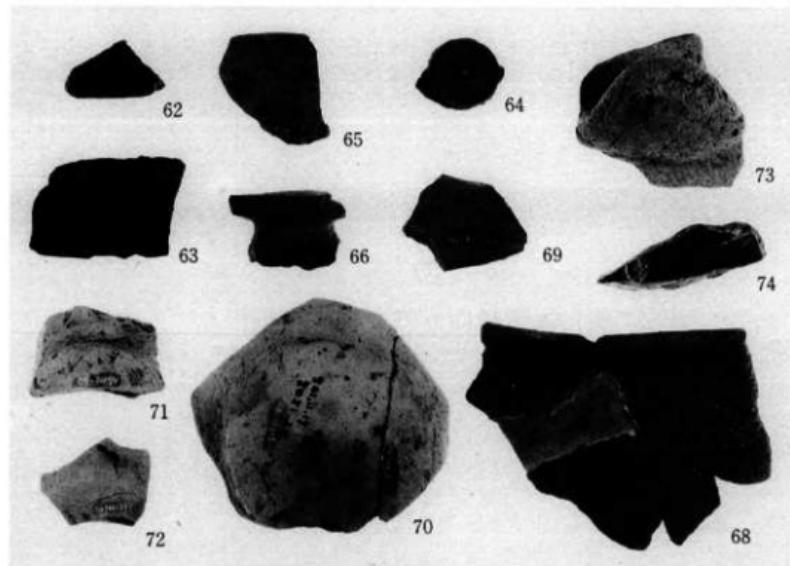
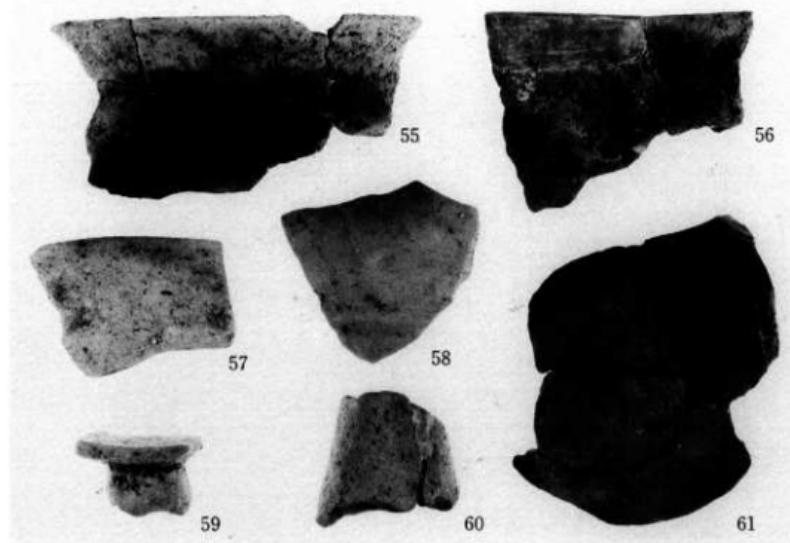
PL. 44

吉田遺跡第一地区B区の調査

(4)



出土遺物 (3)



山口大学構内遺跡調査研究年報XI

平成5年3月

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

発行 山口大学

〒753 山口市大字吉田1677-1

印刷 三共印刷

〒755 宇都市西中町11-11

ARCHAEOLOGICAL RESEARCHES AND STUDIES
AT YAMAGUCHI UNIVERSITY Vol. XI

CONTENTS

Chapter

I	General outline of the project on the Yamaguchi University campus in 1992	1
II	Soundings in relation to the Construction of the Building of leaged postgraduate for veterinary medicine, the department of Agriculture	5
III	Soundings in relation to the Construction of Hall for Military art at the Hikari Junior High School on the Hikari Campus	9
IV	Examination under construction performed on the Yamaguchi University campus	15

Appendix

I	Former research works at Yoshida Sita by ONO Tadahiro ...	27
II	Archaeological research for Area IA	33
II	2 Archaeological research for Area IB	105
III	On the later phase of Middle Yayoi Pottery from Area IA	119

The gist of rescrches and studies at Yamaguchi University

Regulations of Yamaguchi University Archaeological Museum	137
Regulations of Yamaguchi University Archaeological Museum Management Committee	138
List of Researches in Yamaguchi University	140
Summary	149

Published by

Yamaguchi University Archaeological Museum
Yamaguchi, 1993